
あなたのそばですっと～reverse～

しゃーむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのそばですつと reverse

【Nコード】

N3576M

【作者名】

しゃーむ

【あらすじ】

この春、柳ヶ浦高校の生徒になる相田恵。

中学校の時に嫌がらせを受け、地元を離れ、親友とともに柳ヶ浦高校に入学した。

そこである一人の男の子と出会う。

関わり合いになりたくないと思いつつも、だんだんと距離を縮めて行く二人。

そして恋をする。

切なくて苦しくて思い悩んでたどり着いた先には…。

『あなたのそばですつと』 相田恵視点編。

あの時にめぐはどう思っていたのか、どう感じていたのか。

『あなたのそばですつと』と『あなたのそばですつと rever se』を通して柳ヶ浦高校の三年間の話しは完結します。

『あなたのそばですつと』の続編的扱いになりますので『あなたのそばですつと』を読んでからこちらに目を通して頂いた方が世界観などわかりやすいと思います。

「私には誠二くんがないとダメなの！」

「オレ、めぐとの約束のために頑張るから」

めぐだけのエピソードもあり、フランスでの出来事もあり…。

この作品を経て二人の思いが交わります。

柳ヶ浦高校へ（前書き）

こちらの作品のストーリーはほぼ『あなたのそばでずっと』と変わ
りません。でも私自身、こちらの方がおもしろいと思いますので、
ぜひ目を通して下さい。

前作の『あなたのそばでずっと』をおもしろいと感じた方は楽しめ
ると思います。

ただ、完全な自己満足の話しかもしれませんが…。

柳ヶ浦高校へ

「痛っつ…なに!？」

「何これ…。誰が…」

「うっん、人を疑うのは良くないよね。たまたま入っただけかも
しれないし。」

「でも…」

「気にしない! うんっ! それが一番!

「画鋸が上履きの中に転がり込むこともあるはず…だよね!

「あれ…?」

「ない…靴がない…」

「なんで? どうして!？」

「探し物? 恵ちゃん」

「陽子ちゃん! 靴が…! なくなっちゃって…」

「ありえないよ…下駄箱から靴がなくなるなんて…」

「あら、これかしら?」

「えっ…! どうして…!」

「私の靴が…切り刻まれてる…」

「拾ったのよ? そこで。何か恨みでもかってんじゃないの?」

「拾ったなんて…そんなの…」

「陽子ちゃん…。私が陽子ちゃんの代わりにコンクールに出たから

…?

「ありがとう…」

「いいのよ。でもそんなボロ靴履いて帰るの? いっそ裸足の方がい
いんじゃない? あっははは!」

「どうして…こういう事するの…?」

ヒソヒソ…。
みんな見てる…。
私の足元。
恥ずかしい…。

「あっ……………」

私の…楽譜…。

何で？

こんなにくがきされてたら読めないよ…。

「恵！あんた楽譜は？」

「楽譜は…失くしちゃった…かも…」

「はあ！？信じられない！もう帰れば！？」

「そっだよ！そんなやついらない！」

ひどい…。

私は…一生懸命演奏したいただけなのに…。

「帰れ！」

「迷惑よ！あんたみたいなのが居るのは！」

私…。

「……………ひっ……………ひっく……………」

みんな…ひどいよ…。

イヤだ…。

みんな嫌い…。

「相田…さん？泣いてるの？」

！

また何か言われるんだ！

イヤッ！

誰も話しかけないで！

「あっ…待って！あー、行っちゃった」

「見た？恵の顔。いい気味よね」
「ちよつとフルートうまいからって調子に乗ってさ！」
「ちよつとあんたたち！」
「誰？あー…パークツの春日さん」
「相田さんに何かしたの？」
「別に何もー。ねー？」
「やる気がない人には帰ってもらったただだよ」
「やる気がない？相田さんがそんなわけないじゃない！」
「うるさいわねー。ほつときなよ。あんなやつ」
「くっ…」

……………

（帰れば？）

（そんなやついらない！）

「……………うっ……………」

「相田さん！」

ビクッ！

イヤッ！誰？イヤだ…。

タッタッタッタツ…。

「あつ！待つて！一緒に帰ろう！」

え…？

誰？ううん、誰でも同じ。

イヤ！

「はあっ…はあっ…待つて…一緒に帰ろう！」

春日…さん？

確か…パークツの。

「私…家あつちだから」

「えっ…あ…そっか。明日も部活来るよね？」

「……………」

正直、行きたくない。

みんなと演奏したいけど、私は邪魔者なんだ。

「待つてるから！部活おいでね！」

勝手に待つてればいい…。

行っただってまた何か言われる。楽譜だつてないし。

「私、相田さんのフルート好きなんだ！また聞きたいから！部活来てね！」

……………

でも…。

「何？また来たの？」

「邪魔だよ。あんたが居たらめんな迷惑」

ほら…やっぱり…。

私の居場所はここにはないんだ…。

帰ろう。

「あんたたち！何でそういう事言うの！？仲間でしょ！？」

春日さん…。

「何？パークツのあんたが口出さないでよ」

「そっだよ！」

「パートなんか関係ない！みんなが一つにならないと良い演奏なんか出来ない！」

「この人がいなかったら一つよ。私たちとは違うの、一流はね」

「ただのひがみじゃない！」

帰ろう…。

私が居るからいけないんだ。

「あつ…相田さん！帰らないで！」

「もういいよ」

もういい、知らない。

「あんたたち…許さないから…！」

「あー怖い。あんたも帰れば？」

私なんかにかまっていたら、春日さんも同じことされちゃうよ？

「ありがとう…春日さん。もういいから。バイバイ」

「あっ…」

もう辞めよう。

いじめられるのイヤだ。

「待って…！」

「もうかまわないで。一人で大丈夫だから」

「相田さん…」

春日さんはきつと見方なんだ。でもこれ以上はダメだよ。部活頑張ってる。

「それじゃ」

……

何でこんなことになったのかな。

ただ、気持ちよく演奏してただけだったのに。聞いて欲しかっただけなのに。

誰とも話したくない。

でも、それから春日さんは事あるごとに助けてくれた。

かまわないでって言ったのに。

だけど、春日さんになら心許せたんだ。

だんだんいろいろ話すようになって、気が付けばいつでも一緒にいた。お互い名前呼び合うようになった。

「ねえめぐ。みんなこっちの高校行くみたいだけどさ、私たち、隣の柳ヶ浦高校に行かない？吹奏楽部もあるみたいだし」

「私は、誰も知ってる人がいないところがいいからそうしたいな」

紗耶香ちゃんが一緒に柳ヶ浦高校に行こうって言うてくれた。紗耶香ちゃんがいつでも助けてくれたんだ。紗耶香ちゃんだけが友達だよ。

そして春。

私たちの中学からは二人だけ、柳ヶ浦高校に入学した。
紗耶香ちゃんのおかげ。

でも、あんまり人とは関わりたくないな。

クラスも紗耶香ちゃんと離れちゃった。

不安だな。

またいじめられないかな。

誰とも仲良くならなければいい。

紗耶香ちゃんに迷惑はかけたくないし。

「めぐー！吹奏楽部見学しに行こうー！」

「紗耶香ちゃん……。うん！」

フルートも、普通に。淡々と。

……

「相田恵です。フルートの経験ありますのでフルート希望です」

「そう、わかったわ！相田さん、ご両親が有名な方よね。でもそんな事は関係ないから、厳しくいくわよん」

本田先生。クラスの担任で吹奏楽部の顧問。

明るい先生。ちょっと苦手かな。

でも両親のことは関係ないって。私はそれがいい。特別扱いなんていない。

「どれくらい出来る？」

「ある程度は……」

「ちよつと適当にやってみて」

「……はい……」

言われるままにフルートを演奏してみた。

……

「すごいじゃない！即戦力ね！」

「あつ……わ……私は……まだ……」

「期待してるわよー！」

あつ……。

行っちゃった。

あんまり目立ちたくないのに…。

「あなた、フルート経験者なの？」

誰？先輩かな…。

「はい、一応経験者です」

「そつ。私は大野愛理！同じフルートの二年よ。ヨロシクね」

「あ…はい。大野先輩。よろしくお願いします」

「見学期間でも毎日来ていいからね」

いい人…かな。

うまくやれるかな…？

「大野さん、その子は？」

「あつ、先輩！この子…えーと…」

「相田恵です」

「相田さんね。私はフルートのパートリーダーのひだかのぞみ日高希よ。よろし

くね」

「あ…はい」

「ふふふ…緊張してるのかしら？わからないことがあったら何でも

聞いてね」

「…はい…」

キレイな人だな。髪も長い綺麗なストレート。優しそつでお母さ

んみたい。

大野先輩は切れ長の目で…なんか猫みたい。なんとなく攻撃的な

感じ。

「めーぐー！」

あつ、紗耶香ちゃん。

「めぐ、どうする？まだ残ってる？」

「帰ろうか。明日からも来よう」

「うん！じゃあ帰ろう！」

………

紗耶香ちゃんはとうだったのかな？

「紗耶香ちゃん、パーカッション見学したんだよね？」

「うん！理恵先輩とアリサ先輩がパーカツだって！いい人そうだったよ！」

「そっか。よかったな。」

「私も…先輩たちはいいい人そうだった。でも、まだわからないよね」

「めぐ…。私がついてるから大丈夫！」

「紗耶香ちゃん…。うん！」

紗耶香ちゃんと一緒なら大丈夫だよね。

私は相田恵。

柳ヶ浦高校一年生。

椿誠二くん

「あ、相田さん。おはよ」

え？誰？

教室で名前を呼ばれて振り返ると男の子がいた。誰だろう？

なんか挙動不審だな…。かつこいいけど…。

「…誰ですか？」

クラスメートかな？そうだよ、まだ朝だし。

「つ、椿誠二だよ。クラスメートの。この前吹奏楽部見学してたんだけどわからないかな？」

椿くんか。こんな人いたっけ？

「いつですか？私は毎日行っているので…」

「い、いや、相田さん入部したんだよね？」

何？

「入部はしましたけど…どうかしましたか？」

「いや、このクラスでオレと相田さんだけみたいだから」

そうなんだ。だから？

「それがどうかしましたか？」

「い、いや、ははは…。よろしくね」

「はい。よろしくお願ひします」

それで行っちゃった。何だったんだろう。

でも、あんまり関わらない方がいいよね。

お昼休み。

一人でご飯を食べる。いつもは紗耶香ちゃんがいるけど今日は用事があるみたいで。一人でいいんだ。

「相田さん」

え？あつ…。朝の…。

「えーと…た…さきくん？」

「じゃなかったのかな？そんな感じだったよね。」

「つ、椿だよ。相田さん」

「椿くんだったっけ。」

「椿くんでしたね。はい、なんででしょう」

「相田さんはフルートなんだ」

「めぐー！」

「あつ、紗耶香ちゃん」

「もうご飯食べた？つて誰？」

「椿くんが何か言いかけたところに紗耶香ちゃんが来た。もう用事終わったのかな？」

「た…椿くん。クラスメイトで同じ吹奏楽部だよ」

「また言い間違えるところだった。」

「えー…こんな人いたっけ？」

「正式な入部は今日からだから」

「そっか！私は三組の春日紗耶香！めぐの親友よ！そして吹奏楽部！よろしく！」

「オレは椿誠二。よろしく」

「いいなあ紗耶香ちゃんは。普通に話せて。」

「私は…無理。」

「で、椿くんパートは？」

「パート？」

「パートの事わからないってことは未経験者なんだ。」

「楽器だよ、楽器！私はちなみにパーカツ！」

「わからないと思うよ。」

「パーカツ？」

「ほら。」

「うーん、ドラムとか鍵盤の打楽器とか！」

「ふーん、それいいかも…。相田さんはフルートなんだよね？」

「あ…は」

「めぐはすつごくフルートうまいんだよ！」

そんなこと言わなくていいのに…。

あっ！そういえば…。

「紗耶香ちゃん。私、職員室に用事があるら行ってくるね」

忘れるところだった。

「えー！わかったあ。また放課後にね」

急がないと！昼休み終わっちゃう。

放課後。

今日は部活の初日で先輩たちの演奏とパート決めがあるみたい。

経験者は私と紗耶香ちゃんと、後は川口美香さん。それに何故か椿くんも経験者として呼ばれてた。そういう風には見えなかったけどな。

川口さんはヘアピンが特徴のかわいい人。そういえばよく椿くんと歩いてる姿を見た気がする。付き合ってるのかな？

先輩たちの演奏を聞き終わって、これからパート別に分かれて練習。

紗耶香ちゃんはもちろんパーカッション。あれ？椿くんもなんだ。

川口さんは…トランペットの経験者なんだな。

「相田さん」

え？

あ…部長。

部長は村田千秋先輩。三年生。ちょっとかわいらしい。

「相田さんのこと、先生も期待してるから。頑張ってるね！」

「…はい」

期待されたって…私は譜面通りにやるだけ。他の人と一緒。特別に見ないで。

「相田さん、こっちよ」

パートリーダーの日高先輩が呼んでる。

今年の一年生でフルートは私だけなんだ。あとは三年生が日高先輩とあと一人。二年生が大野先輩とあと二人。

多いな…。

「早くおいで。緊張しなくていいから。今日は基礎練習だけよ」

日高先輩が手招きして私を呼んでいた。

今日は天気もいいから外で練習するみたいだった。

吹奏楽部の練習場は木造の旧校舎にあつて直接外から入れられるようになっていた。部室は旧校舎内にあつてそことは別に練習場がある。紗耶香ちゃんたちパーカッションはいつも練習場で練習していた。他の楽器は晴れてたら外で。雨の日は校舎のどこかで練習をする。

「みんな、改めて自己紹介しましょう。私はパートリーダー、日高希よ」

日高先輩。

「私は濱田翔子。三年だ」

濱田先輩。黒髪のアートで美人。厳格な感じで話し方もクールなんだよね。

「大野愛理。一緒に頑張ろうね！」

大野先輩。

「河本みゆき（かわもとみゆき）です。よろしくお願いいたしますね」

河本先輩。前髪をキレイに揃えててすごく優しそうな顔。後輩にも敬語で丁寧に話すんだ。

「田代有紀。…よろしく」

田代先輩。私が言うのもなんだけど近寄り難いな。長い黒髪で目が隠れてて…ちょっと怖い…。

「相田さん」

あつ、私の番か。

「相田恵です。よろしくお願いします」

「期待してるわ。相田さん
また…。」

「出来る限り…頑張ります」
出来る限り…そうなんだ。

自己紹介が終わって基礎練習。基礎は大事。全ての土台だから。
「やっぱり、良い音ね」
えっ…。

途中で日高先輩がそう言った。

「そ、そんな事ないです。私なんかまだまだです」

「十分よ、コンクールも期待出来るわ」

「わ、私はコンクールとか…」

「何？」

「い、いえ…」

出たくないなんて…言えないよね。みんなそのために頑張ってるんだし。でも、私が出たら人数あぶれちゃうってことにも…。そしてらまた…。

「日高先輩！相田さんをコンクールに！？」

ビクッ…！

大野先輩…。

「考えてるだけよ」

怖い…。

「そっですか…」

わ…私…イヤッ…！

「どうしたの？相田さん。具合でも悪いの？」

「い、いえっ。大丈夫です」

「相田。気になることがあれば何でも言うんだぞ？」

濱田先輩が気にしてくれてる。

「はい。ありがとうございます」

「何でも相談していただいて結構ですよ？」

「相談…する…」

河本先輩に田代先輩も…。
これから…大丈夫…だよな。
練習頑張ろう。

「めぐ！ごめん、今日ちょっと用事があるから先に帰るね！」

「うん…また明日ね」

今日の部活が終わって、紗耶香ちゃんは用事で先に帰るみたい。
もう少し、練習しようかな。

「部長、少し練習して帰りたいんですけど…」

「さすが相田さんは練習熱心だね！部室の鍵は明日職員室に返せばいいから。預けておくね！」

そして部長から部室の鍵を預かった。

みんな、早く帰らないかな。

私はみんな帰るまで基礎練習をした。

………

誰もいないかな？

のびのびやるう。

私は誰もいなくなったのを確認してのびのびと練習したんだ。

） ……

気持ちいい…。

やっぱり家でやるのとは違うなあ。誰もいないけど、こつやっつて自分の席で演奏してたらみんなと演奏してる気分になる。本当はみんなと一緒に演奏したいんだ、私も。

へへへ…去年のコンクールの曲やっっちゃおうかな。

） ……

！

誰！？

人の気配を感じて入口の方を振り返った。

あつ…椿くん。

振り返ると椿くんがぼくっと立ってこっちを見ていた。
見られてた…のかな？いつから…？

「ご、ごめん、邪魔しちゃったかな」

「…いえ。椿くん、まだいらっしやっただんですね」

「あ…いや…その…基礎練習の道具…。家でやるつもりで…忘れちゃって…」

そうなんだ。なんか…気まずいな。帰ろうかな。

「私はもうそろそろ帰りますけど、部室の鍵は私が預かってますので…」

「あ、す、すぐ帰るから」

そっか。よかった。

「練習、頑張つて下さいね」

「う、うん。じゃあね」

「はい」

私も帰ろう。

「あ、あの…相田さん」

え？まだ何かあるの？

「何ですか？」

「その…同級生なんだしさ、敬語とかいらなからさ」

私はあんまり関わり合いになりたくないから…。

「誰とでもこんな感じなので…」

「そ、そっか！じゃあまたね！」

椿くんは帰って行った。

ふう…。

なんか慌ててたな…。

椿誠二くんか。

紗耶香ちゃんと同じパートなんだよね。

私も同じクラスか。

仲良く…しないとかな…。

椿くんの自宅 訪問

「来ちゃった…」

「どうも…」

今日はなぜか椿くんの家に遊びに来てるんだ。

「後ろの方たちは？」

椿くと話してるのは部長の村田先輩。

「お邪魔するわよ」

「つじく〜ん、こんちは〜」

「ここが誠二くんの家ね」

「お邪魔します」

紗耶香ちゃんに誘われて来たんだけど、部長とパークッションの理恵先輩とアリサ先輩もいたんだ。

田口理恵先輩。スラツとしててショートの髪できれいな感じのスタイルがいいな。

新居理沙先輩。ツインテールが目立ってて、たれ目でおっとりしてる。なぜか椿くんを”つじくん”って呼んでる。

何で私がいるんだろう？紗耶香ちゃんと一緒ならいいけど…。

「誠二！ちよつと！」

椿くんのお母さんかな。

何かこそ話してる。

いつの間にか紗耶香ちゃんは椿くと仲良くなってたんだ。今日のことは部長が理恵先輩に話しを持ちかけてそれから紗耶香ちゃんに話しが行ったみたい。

「とりあえずどうぞ」

椿くんがみんなを迎え入れる。私もみんなについていったんだ。

椿くんの部屋は二階でそこに案内された。

「そんなに広くないですよ」

あんまり物は置いてないみたい。

とりあえず座ろつ。

お菓子が目意されてた。ちよつと食べたいかも。

「ふーん、ここが誠二の部屋ね」

部長が部屋を見渡してる。

「みんな！」

「……はい！……」

え？え？

「物色タイムよ！」

……え？

物色タイム？

部長の合図で私以外のみんなが椿くんの部屋を一斉に探し出した。何か打ち合わせでも？っていうくらいに息びったり。

「ここらここら！千秋先輩！ベッドの下には何もありません！理恵先輩！ゴミ箱漁らないで！アリサ先輩！ベッドに潜り込まない！紗耶香！引き出しを開けるな！相田さん！」

ビクッ！

わ、私！？

「は、お菓子でも食べてて」

びつくりしたあ。私何もしてないもん。

みんなすごいなあ。

……お菓子食べよう。

「やめてくれー！……！」

このお菓子はやめられないよ。

すごくおいしい。

……

「おかしいわね。男の子の部屋にあるはずのものが無いわ」

「何にもないですよ！ゲームするんでしょ！準備しますからおとなしくして下さい！」

何もなかったんだ。それはそれで少し残念かも。

あれ？

紗耶香ちゃん？

「先輩！わたくし小学生の卒業文集発見いたしましたあ！」

「なっ……！」

「でかしたわ！紗耶香ちゃん！アリサ！」

「りよ〜かい〜」

ガシツ！

「ちよっ、アリサ先輩離して！」

アリサ先輩が椿くんを捕まえてる。

私も手伝った方がいいのかな？

「あつたわ！誠二くんによ！」

「や、やめて！」

「おとなしくしなさい誠二。めぐー！」

あ……ちよつと見たい。

「あー！あー！あー！あー！」

「うるさいわよ！めぐー！」

見ちゃお。

「椿くん、失礼します」

「うわわわ……！」

すごく慌ててる。そんなに見られたくないのかな。

「えーと、なにになに？」

部長が読んでいくみたい。

「僕の将来の夢は子供をたくさん作ることです。そのためには夜に
いっぱい体力があるみたいなので……体を鍛えたいです？」

「……」

「な、何を教わってきたのかしら？」

「くっ……」

かわいい夢。

「かわいい夢ですね」

「んー！めぐっ！かわいいー！」

「ありがとう……相田さん」

え？え？

お礼されちゃった。かわいがられたいのかな？

「誠二ー！何を一人で楽しんでやがる！」

あつ、堀川勇介くん。椿くんとよく一緒にいる人。かつこいい方だと思っただけど、紗耶香ちゃんから関わるなって言われてる。

「勇介、出来るなら代わってもらいたいよ」

「先輩！こいつの部屋なんかより夢と希望がいっぱいのオレの部屋はどうっすか？」

「男の子の夢と希望ね」

「そんな部屋に女の子呼ぼうなんて最低」

「気持ち悪い」

「へんた〜い」

???

「夢と希望は多い方がいいですよ？」
だよね。

「勇介、前言撤回だ。お前とは代わりたくない」

「うわー！ー！ーん！！」

あつ、堀川くん行っちゃった。

泣いてたような…？

「先輩！今日はなんなんですか？」

あれ、川口さんも来ちゃった。そういえば幼馴染なんだよね。

「あら、美香ちゃん。もしかして休みの日はいつも誠二くんの家に？」

そうなのかな？

「いえ、勇介が泣いて出て行くのが見えたんで」

そうなんだ。

ヒソヒソ…。

「ね、美香ちゃんのも載ってるんじゃない？」

「そうですね…」

部長と理恵先輩がこそこそ話してる。

「美香はクラス違ったから載ってませんよ」
椿くんに聞こえてたみたい。

「えー！つまんないのー」

「つまんないです！ゲームするんでしょ！」

「はい…」

理恵先輩すごく残念そう。川口さんからみたがるよね。

その後、みんな椿くんとゲームしてた。私はよくわからなかったから見てただけだけど。アリサ先輩に椿くんが勝てないらしくてすごく悔しがってた。その様子が少し可笑しかったな。

「そろそろ帰りましょうか。明日からテストだし」

あっ、そういえば。

「テストオオオオ!?!」

椿くん驚いてる。忘れてたの？私もだけど。

「なんでみんなそんな余裕なんですか！」

「だって、みんな優秀だから」

そうなの？

「えっ…紗耶香も？」

「どっいう意味よ、悪い？ちなみにめぐは中学ではずっとトップよ」
言わなくていいのに…。

「そうなの？」

「一応そうでした」

「アリサ先輩は？」

「しつれ〜、わたしは学年トップ〜」

椿くんが驚愕の顔をしてる。

勉強してないのかな？

「さっ、帰りましょう。誠二はこの後大変みたいだし」
頑張ってね、椿くん。

「めぐー！楽しかったね！」

「うん」

紗耶香ちゃんと一緒に帰ってる。少し楽しかったかな。

「めぐ、男の子の部屋初めてだったんじゃないの？」

「うん、みんなといるのは…楽しいね」

「…めぐ、みんないい人たちだからさ、もっといろいろ話してみれば？」

「うん…」

確かに仲良く出来そうな気がするな…。

「でも、誠二には気をつけてね」

「え？どうして椿くん？」

「あのー…うん。めぐはめぐでいいよ。はっきりわからないし…。

美香ちゃんが…」

なんだろう？

「なーに？」

「いいのいいの！それよりテスト終わったらコンクールの準備に入るね！頑張らなくちゃ！」

コンクールか…。

どうなるんだろう。

課題曲と自由曲の二曲を演奏するんだ。どっちの楽譜ももらってる。

夏のコンクールで上位四校に入賞したらもう一つ大きいコンクールに行ける。そこでいい成績残せたら全国。

みんな気合い入ってる。

正直出たいけど、出たらまた…。だから出たくない。

出たいけど出たくない。

「めぐ、大丈夫だよ。私が守ってあげるから」

あっ…。

顔に出ちゃってたかな。

「紗耶香ちゃん、ありがとう」

でもやっぱり不安だな…。

その不安は的中したんだ。
でも。

私はこれで救われた。

優しさ

椿くんの家に遊びに行った翌日からテストだった。

椿くんはものすごくやつれた顔で登校してきた。きっとテスト勉強頑張ったんだね。

テスト期間中は原則部活禁止だからテストが終わったら家に帰って勉強してた。紗耶香ちゃんも同じ。

そしてテストは難なく終わった。

これからコンクールに向けて頑張っていくんだ。

「相田さん、コンクールAパートお願い出来るかしら？」

「えっ……」

いきなりだったんだ。

テスト期間が明けて部活が再開した日、パート練習中にパートリーダーの日高先輩からそう言われたんだ。

「君にやってもらうのが一番いい」

濱田先輩まで……。

Aパートなんて……フルートでの要。いきなりそんな……。

「先輩！本気ですか！？」

大野先輩が驚いて言った。……聞いてないんだ。

フルートのパートで必要なのは四人。だから二人余るんだ。だから……。

「大野さんと田代さんには申し訳ないけど、それが一番だわ。相田さん、お願いね」

「あの……わ……私……」

そんなの……。

「私たちより……あなたが……出た方が……いい」

田代先輩…。

「…はい…」

いいの…かな…。まだ一年生の私が…。

「すみません…体調悪いので失礼します…」

あつ…大野先輩…行っちゃった。

「相田さん、気にしないでいいのよ。あの子も頑張ってるんだけど、あなたの力が必要なのよ」

「……………」

「お気になさらずに。わたくしからも言っておきますので」

河本先輩…。

「君はコンクールに向けて頑張ってくればいい。それが部のためにもなる」

「はい…」

でも、やっぱり気になる。

もうあんな思いしたくない。

「少し…悔しい…。でも…部のため…。頑張つて…」

大丈夫…なのかな？

「頑張ります」

「お願いするわね」

期待に答えられるかわからないけれど、頑張ろう。

「めぐ、今日誠二がさ、コンクールに出たくないなんて言ったから説教しちゃった」

「えっ…」

「ごめん、紗耶香ちゃん。私も最初そう思ってた。

「それでさ…誠二に…」

「???」

「なーに？」

「い、いや、何でもない！コンクール頑張ろうね！」

「ふふ…変な紗耶香ちゃん」

今思えば、紗耶香ちゃんのおかげだったのかな。

……

それから数日経った日だった。

「あれ？確かにここに…」

持って帰ったかな？でもそれなら忘れないはず…。

私の楽譜がない…。

「めぐ、探し物？」

「あつ、紗耶香ちゃん。楽譜がなくて」

「どこかに忘れてきたんじゃないの？」

「いつもここにしまつてて…」

「しょうがないなあ。一緒に探したげる」

「うん、ありがとう」

「どうしよう…。

……

まさか…ね。

「どういうこと…あつたよね…。

「紗耶香！パート練習するつてよ！」

椿くんだ。紗耶香ちゃんを呼びに来たらしい。

「めぐの楽譜探してんの！もう少ししたら行くから！そう伝えてて

「！」

「手伝おうか？」

「あんたは練習しなさい！」

「わ、わかつたよ」

紗耶香ちゃん、もういいよ…。

もしかしたら…やっぱり…。

「紗耶香！」

「なによ！あとで行くつてば…！」

「いいから…！」

「な、なによ……」

椿くんが紗耶香ちゃんを呼んだ。

どうしたんだろう……。

「椿くん、どうかしましたか？」

「めぐっ……！何でもないよ！楽譜さ、やっぱりどっか忘れて来たんじゃない？めぐ頭いいけどどっか抜けてるし……」

そうなのかなあ。

「そうかもね。私おっちょこちよいだし」

「と、とりあえず基礎練習でいいんじゃない？」

椿くん、何か隠してる？

「そうですね……そうします」

やっぱり……私の楽譜……。

……

「すみません。遅くなりました」

「あら、相田さん、楽譜は？」

「……すみません、忘れて来たみたいで。今日は基礎練習をしておきます」

「珍しいわね。譜面は覚えてる？」

「はい、一応」

「なら問題ないわ。十六小節からいい？」

「先輩！いいんですか？こんな大事な時に楽譜忘れるなんて！やる気のない人がいたら迷惑です！」

大野先輩……。

怖い……。

「やる気のない部員なんかいないわ」

「その通りよ！」

！

理恵先輩？

大野先輩が日高先輩に抗議している時、パーカッションのみんなが来た。

「田口さん、どうしたの？」

「練習中失礼します、日高先輩。ちょっと愛理と話しがあるんですけど」

大野先輩に…？

「…だそつよ。大野さん」

「…なに？」

大野さんは理恵先輩を睨みつけて言った。

「分かってるんじゃない？ここじゃなんだからこっちに来て」

そう言つて理恵先輩たちが大野先輩を連れて行つてしまった。

何か…あつたんだ…。

紗耶香ちゃんも一緒だった。やっぱり私の楽譜…。

「相田さん、気にしないで練習しましょう」

「はい…」

…また…こうなるんだ…。

やっぱり私なんか居たら…。

私がいるからこんなことがあつてみんながケンカとかして…。

「君は必要だ。コンクールに集中してくれ」

濱田先輩…。

「はい」

そつだ、集中しよう。余計なことは考えないで。

その日、大野先輩は戻つて来なかった。

私の楽譜は紗耶香ちゃんが見つけて水浸しにしてしまったらしいんだけど…。

とりあえず楽譜は新しいのを日高先輩からもらった。

紗耶香ちゃんが謝つてたけど、その濡れた楽譜を私は見ていない。

確信はないけれど…きつとボロボロにされてたんだろつな。

また…繰り返しなのかな。

部活が終わつた後、新しい楽譜に注意点を書き写していた。

「相田さん」

…椿くん、まだ居たんだ。
なにか困った表情で私を見ていた。

「どうしました？」

「あ…あの…相田さんの中学の時のこと、紗耶香から聞いたんだ」

……

「……そうですか」

どう思ったんだろう。かわいそうとか、同情かな。慰めてでもくれるの？

「ここではそういうことないから！もし…そんなことになってもオレを守るから！」

「…え？」

何言ってるの？

私は自分の耳を疑った。

私を守る？そう言ったの？どうして…？そんなこと…。

「いや…その…紗耶香もいるしさ！みんな相田さんのこと頼りにしてるんだよ！」

……ああ、そっか。

優しいんだ。紗耶香ちゃんも椿くんも。紗耶香ちゃんが私を守って言ってくれたように、椿くんも私を守って言ってくれてるんだな…。

「……ありがとう」

自然に笑顔になれた。

紗耶香ちゃんと同じなんだ…。

あれ？

「椿くん」

「……………」

あれれ？

「椿くん！」

「えっ！な、なに？」

「クスクス…どうしたの？ぼくとして。顔真っ赤だよ？」

あれ…私…普通に話してる？

「な、なんでもないよ！」

クスクス…変なの。

「相田さん、お願いがあるんだけど」

お願い？

「なに？」

「フルーツ…聞かせて欲しいんだ。あの時みたいな」

あの時…？ 椿くんが忘れ物取りに来た時の演奏か…。私の自然な
かたち。

「…うん」

聞いてもらおう。

）　）　…

パチパチパチパチ！

「すごいよ、相田さん！」

「えへへ…ありがとう。なんか照れくさいな…」
でも、よかった。

「みんなの前でも今みたいにやりなよ」

「え…でも…」

「大丈夫！…だから、ね？」

椿くん…。

「…うん！」

なんだろう。安心出来る。椿くんの…優しい笑顔。きっと大丈夫
なんだ。

「じ、じゃあ行くね！コンクール頑張ろうね！」

あっ…行っちゃった。

慌ててた？

椿くん…。

「めぐ」

「あっ、紗耶香ちゃん」

「フルーツの音が聞こえたから」

「うん、椿くんが聞かせてって…」

「…よかったね」

紗耶香ちゃん…。

「うん。仲良く出来そう。椿くんの言葉、安心出来たんだ。みんな

の前でも普通に出来そうな気がする」

「そっか！ね…帰ろう！」

「うん！」

久しぶりにホントに笑えた気がする。

椿誠二くん…。

なんだろう。

この気持ち…。

ふわふわ…。

安心してる…。

もっと…お話したいな。

…ううん！

コンクールに集中しないと！

私は私らしく、ありのままに演奏しよう。

それをみんなに聞いてもらおう。

ありがとう。

椿くんのおかげで私らしくいられる気がする。

「紗耶香ちゃん！コンクール、頑張ろうね！」

「う、うん。眩しい…眩しすぎる！」

「私、また笑えるよ！」

「ふふ…誠二に少し感謝しないとかな」

「え？なに？」

「ううん、本当によかった」

「えへへ…紗耶香ちゃんも、ありがとう！」

「え？」

紗耶香ちゃんが隠してくれたこと、わかってる。

最高の友達だよ！

それから…。

私はだんだんみんなと話せるようになっていったんだ。言い方が違うかな。自分を出せるようになってきたのかな。前みたいになんなど笑って話したり…。

フルートだって…。

「相田さん、すごい…。私、感動しちゃった…」

そう言ってくれたのは大野先輩。何があつたのかはわからないけれど、優しくしてくれるようになった。

「私たちも相田さんに負けないように頑張りましょう！」

みんな、認めてくれる。

私はここに居ていいんだ！

「相田さん、その調子だよ！」

椿くん…私を救ってくれた人。

導いてくれた人

また暗闇の中に埋もれてしまいそうな私に、手を差し伸べてくれた人。

もっと…椿くんのこと知りたい。

椿くんに触れてみたい。

時間が経つにつれてそう思うようになった。

これが何の感情かわからないけれど、椿くんは私にとって特別な存在になったんだ。

「ありがとう。椿くんも頑張つてね！」

椿くんの前だと笑顔になれる。

それが、恋だと気が付いたのはもう少し後の話し。

ハプニング

夏休みに入つて、吹奏楽コンクールが間近に迫っていた。部員のみんなも一生懸命練習してる。私も頑張らなきゃ。

あつ…。

「椿くん、れ、練習の方はどう？」

椿くんと話す時、少し恥ずかしい…。戸惑ってる私がいる。

「それがさあ、なかなか…。一人だけ置いていかれてる感じがしてさ…。一生懸命やつてるつもりなんだけど」

椿くん、悩んでる。

「わ、私でよかつたら…相談…乗るよ？」

これが精一杯。

「…じゃあ…」

うんうん…。

「やっぱりパーカッションのことだから紗耶香や理恵先輩に頼ってみるよ。ありがとう」

えっ…。

「あつ…うん、そっだよね！」

行っちゃった…。

はあ…。

ちよつとだけ、紗耶香ちゃんが羨ましいいな。

夏休みだから教室には行かないし。椿くんとお話し出来るのも部

活のちよつとの間だけ。

「相田さん、日高先輩がまだかつてー！」

あつ！いけない！忘れてた！

「いつ、今行きます！」

練習場にメトロノーム取りに来ただけだったのに。

えーつと…。

あれれ？どこに置いてあつたっけ？

「相田さん、何してるの？」

ま、また椿くん！

「あ、あのっ、メトロポリス！」

「メトロポリス？」

めっ…？あ、や、やだ…。

「メ、メトロノーム！…探して…」

「ああ、メトロノームね。あっちにあるよ」

「あ、ありがとう！」

うっ…恥ずかしい…！

私は逃げ出したくなつて急いで指差された方へ走った。

「あっ！相田さんそっちは…！」

ガンツ！

「きゃっ！」

痛た…。

何…？ぶつかつて転んじやった…。

「そっちのドアは今日締め切りだった…うわっ！ごめん！」

えっ…？

！！

ババツ！

「…見た？」

パンツ見えてた…。

「み、見てない！見てないよ！」

この慌てよう…。

「嘘だ！絶対見た！うわー！ーん！」

恥ずかしさのあまりここから走って逃げ出しちゃった。

「あっ！相田さ…」

うっ…！！

…

「はあっ…はあっ…」

「あら相田さん、走って来なくてもいいのに。メトロノームは？」

あっ…。

「す、すみません！行ってきます！」

もう、私のバカバカ！

…はあっ…はあっ…。

「あ、相田さん」

ま、またまた椿くん…！

「はい、メトロノーム」

あ…。

椿くんはやれやれといった感じで渡してくれた。

「あ、ありがとう…」

「あの…さっきは見てないからね？」

うっ…。

「うわー…！ーん…！」

「あっ！ちよつと…」

やだやだやだやだ！もうやだあ！

「あら、早かったわね」

「はあっ…！はあっ…！」

「どうした相田？顔真つ赤だぞ？」

う…。

「うわー…！ーん…！」

「あっ！こら待て！練習しろー！」

「うっ…グスン…」

ああ…このまま帰りたいよお…。

「めぐ！どうしたの！？」

紗耶香ちゃん…。

「紗耶香ちゃん！っ、椿くんにつ…！」

「誠二？誠二に何かされたのね？待ってて、制裁を与えてくるわ」

えっ？

「さ、紗耶香ちゃん！ちがつ……」

「誠……」

ああ……どうしよう……。

紗耶香ちゃんは勢い良く走って行っちゃった。

…

……

……

「あ、あいだ……ひゃん……」

うわー……。

「……ごめんなさい！」

椿くんは私のせいで紗耶香ちゃんにボロボロにされちゃった。

でも椿くんは笑って許してくれたんだ。

やっぱり椿くんって優しい！……ってダメ？

お父さん お母さん

「あ~~~~」

「めぐのせいじゃないよ。私が話し聞かなかったから」

学校から帰宅中のバスの中。私も紗耶香ちゃんも隣町の緑ヶ丘町から柳ヶ浦高校に通ってるからバス通学。

「でも……」

椿くんは笑って許してくれたけど、あの後倒れてしまった。

「でもさ、めぐも全校生徒の前で下着姿さらしたわけじゃないんだから、ちよつと大げさだったね」

だって……。

「だって椿くんに見られたんだよ！……椿くん……」

「え……めぐ……？まさか……」

『次は緑ヶ丘団地前、緑ヶ丘団地前』

あ……。

「またね、紗耶香ちゃん」

「あ……。うん、また明日ね、めぐ」

緑ヶ丘団地。

私の家があるところ。

バス停から少し歩いたところに私の家がある。

帰りにスーパーに寄って……と。今日の晩御飯のお買い物しなきゃ。

「あら恵ちゃん。今日も暑いねえ。いいお肉が入ってるよ？」

柳ヶ浦高校に通い出して、バス停からの帰り道にいつも寄ってるからもう顔馴染み。

中学の時にいじめられてた私を誰も知らない。高校入学当初、私が私でいれる場所でもあった。

「じゃあそのお肉もおうかな」

「はいよ」

おばさんに袋に詰めてもらう。

「恵ちゃん、最近生き生きしてるねえ」
え？

「そ、そうかな？……ね、おばさん、私、変わった？」

「恵ちゃんは、自分でそう思うのかい？」

私は…。

「私は…変わってない。昔のまんまだよ！」
いじめられる前に戻っただけなんだ。

「良い顔だね。変わったよ、恵ちゃん。きっと学校に信頼出来る人がいるんだろうねえ」

信頼出来る…人…。

「…うん！」

それは…きっと椿くんなんだろうな。

「ありがとう！おばさん！」

「またおいでね〜」

信頼か…。

私は信頼されてるのかな？

紗耶香ちゃんに。椿くんに。みんなに。

……そんなのわかんないや。

椿くんはいつか私に頼ってくれるかな？

…あれ？

誰がいる…？

考え事して歩いていたらいつの間にか家の前だった。

うそ…空き巣？

玄関のドアが開いていた。今年の夏は私以外には誰もいないはず

…。

そつと…玄関のドアを開ける…。

キィ…カチャ…。

「恵！おかえり！」

「ひゃあっ！」

ドアをそろそろと閉めようとしてたらいきなり声を掛けられてびっくりした！

「すまない、驚かすつもりはなかったんだが」
え？

「お父さん！今年の夏は帰って来れないんじゃないの！？」
お父さんとお母さんはいつも国内、海外を飛び回る有名な音楽家。だからいつも家にいない。

「急に時間が空いたんだ。お母さんもいるぞ」
お母さん…。

「お母さん！」
バタバタ…。

「めぐちゃん！おかえりなさい」
えへへ、ただいま

お父さんとお母さん。会つの久しぶりなんだ。嬉しいな。
「いつまでいるの？」

「ごめんなさい、二日だけなの」
なんだ…。

「そっか…」
「学校はどう？」

「…楽しいよ！」
お母さんは少し驚いた顔をした。

「そう…。よかったわ」
そして安心したような優しい顔をしてくれた。

「恵。その…なんだ…彼氏とかいるのか？」
彼氏？

「いないよ、そんなの」
「そ、そっか！ならいいんだ！」

ほっとしてる。心配してるのかな？
「あなた、めぐちゃんももう子供じゃないんだから」

「いや、しかしだな…うん…まあそうなんだが…」

「めぐちゃん、心配してたのよ。高校でうまくやれてるかなって
お母さん……。中学生のときのことがあるから……。」

「大丈夫だよ！椿くんがいるし！」

「椿くん？め、恵！男か！？」

あっ……。

「あなた！……めぐちゃん、いいお友達に出会えたみたいね」

お友達……。お友達かあ……。

「うん……すごく優しくくてね、助けてくれたの」

お友達……。なんだろう、モヤモヤする。

「そう……。会ってみたいわ、お母さんも」

「いつか紹介するね！」

「ふふふ……楽しみだわ」

「うう……めぐみ……」

「お父さんには紹介してあげない！」

絶対変なこと言いそうだもん！

「なっ……！め、恵、そういうのはまずお父さんにだな……」

「あなた！……」

……はい……」

ふふふ……。

「そうだ！今日いいお肉買って来たから今から晩御飯の支度するね
」！」

「一緒にやりましょうね」

「うん！」

「お、お父さんも一緒に……」

「あなたはいいわ」

「お父さんはいいよ」

「そ、そうか……」

そう言っリビングに戻っていくお父さんの背中が寂しそうだったな。

トントントン……。

「久しぶりね、こつやつてめぐちゃんとお料理するのモ」

「うん！私また上手になつたんだよ！」

「あらあら、めぐちゃんに追い越されちゃつわね」

「お母さんみたいになりたいの！」

「うふふ…めぐちゃんならすぐよ」

「えへへ…」

頭撫でてもらっちゃつた。

大好きなお母さん。

またすぐに行つてしまふなんて、寂しいな。

「お鍋、嘖きこぼれちゃつわよ」

あつ！

慌てて火を弱める。

「ふふ…まだまだね、めぐちゃん」

「うっ…」

「ふふふ…」

「…えへへ」

お母さん…一緒に暮らしたいな…。

それが、思わぬかたちで叶うことになるなんて…。

私が前から望んでたこと。

でも、望まなかつたかたち。

ずっとそばにいれると思つてた。

私はあの時、選べたのかもしれない。

…ううん、最後は自分で決めたんだ…。

吹奏楽コンクール

「男子ー！気合い入れて頑張ってー！」

部長が男子に声を掛けてる。

今日は吹奏楽コンクール。

朝、学校で楽器を会場に持っていくためにみんながトラックに運んでる。楽器の中でも椿くんたちのパーカッションは大きくて重い楽器あるから、男子が一生懸命運んでた。

「椿くん、何かお手伝いすることないかな？」

「めーぐー、いいのいいの！力仕事は男子に任せて、か弱い私たちは待ってようよ」

「…うん」

でも…。

「か弱い？紗耶香が？」

「……誠二」

紗耶香ちゃん？

「お、おう！任せろ！」

すごい…椿くんと紗耶香ちゃん、信頼関係が出来てるのかな。

「行こつ、めぐ」

「う、うん」

紗耶香ちゃんに聞いてみよう。

「紗耶香ちゃん、どうやって椿くんと信頼関係結んだの？」

「信頼関係？」

「だって、何も言わなくても椿くんわかってくれたから
そうだよね？」

「…あつははははは！」

え？え？

「私、何かおもしろいこと言ったかな？」

「ううん、めぐ…よく聞いてね」

「うん」

真剣だ…。

「信頼…すなわちそれはしつけ。調教よ」

「調教？」

「うん、よく言う事を聞く犬がいるよね。あれは飼い主と犬の信頼関係が成り立ってるよね？」

「うん…そうだね」

「でもそこに至るには厳しいしつけが必要なの。わかるよね？」

「調教しないとと言う事を聞かない…。言う事を聞かないなら調教する…。」

「うん！」

「だから誠二を調教してるの。まだ途中だけど」

そっかあ。

「じゃあ私も椿くんを調教すれば信頼関係築けるかなあ？」

「めっ、めぐ…ぷっ…くく…ふう…。うん！きつと築けるよ！」

紗耶香ちゃん、笑ってる？

「紗耶香ちゃん？」

「な、なに？」

「どうやって調教するの？」

「えっ！そ、それは…そう！その人のやり方で！めぐはめぐのやり方で」

私のやり方…。

「頑張ってみるね！」

「う、うん…。その笑顔に罪の意識感じるな」

「え？」

「な、何でもないよ。む、無理して信頼関係なんか出来るものじゃないからね？」

そっか、そうだよね！

「ありがとう！紗耶香ちゃん」

「う、うん!…あはは…」

そんなことを話していたら楽器を運び終えたみたいだった。
私たちは楽器とは別にバスで会場まで移動するんだ。

「椿くん、お疲れ様」

「ありがとう」

あ、汗かいてる。タオル…。

「はい、誠二。お疲れ様」

「お、美香。サンキュ」

あ…。

美香ちゃんが椿くん先にタオルを渡しちゃった…。

「……………」

「めぐー!バス出るよー!」

「あっ!う、うん!」

みんなもう乗り込んで。行かなきゃ。

美香ちゃんと椿くんは幼馴染って聞いている。もうお互いのことなんて何でもわかってるよね。

私は…二人の間には入れないな。

「ぐ!めぐ!」

!

「な、なに?」

「どうしたの?ぼーっとして。大丈夫?」

「う、うん。ちょっと緊張してるのかも」

「緊張?めぐが?一人でも音楽コンクールに出たことのあるめぐが?」

な、なに?

「隠し事が下手だなあめぐは。悩み事があるなら何でも言ってよ」
紗耶香ちゃんにはわかっちゃっか…。

…え?

「ね、紗耶香ちゃん。私と紗耶香ちゃんって信頼し合ってるよね?」

「当たり前だよ!めぐ」

「じゃあ、私はどうやって紗耶香ちゃんに調教されたの？」
「覚えがないな…。」

「や、やだなあ。私がめぐを調教なんてするわけないよ！ほ、ほら！めぐとは時間で信頼し合ったんだよ！」
「時間かあ。」

「それも一つの方法だよ！」

「そうだよね！」

「紗耶香、相田さんを調教してたのか」

「椿くんはバスの中で後の席にいたんだ。」

「バカ言わないで！こ、言葉のアヤよ」

「調教が言葉のアヤって…」

「椿くんは調教中なんだって」

「め、めぐ!？」

「え？」

「紗耶香ちゃん、誠二を調教してるの？」

「み、美香ちゃん。いや、あのね…」

「オレは紗耶香の思い通りにはならん！」

「椿くん…。」

「紗耶香ちゃん、もっと調教しないとダメみたいだよ？」

「…あ…あは…は…。ごめん…私が悪かったわ」

「???」

「お前は何を相田さんに吹き込んだんだ」

「全部…」

「ん？」

「あんたのせいよ!!」

「な、なぜ!??ぐがべっ！」

「椿くん痛そう…。」

もう見慣れちゃったかも。紗耶香ちゃんが椿くんを殴る光景。

「椿くんの傷の数だけ、紗耶香ちゃんと椿くんの信頼の強さなんだ

ね」

「あ、相田さん！それはちがっはあ！」
ガスツ！

「黙りなさい！」

「みんな緊張感なさ過ぎ」

アリサ先輩だ。ため息まじりに言う。

「いいじゃないアリサ。気負いするより全然いいよ」

理恵先輩は笑って見てた。

このコンクールでパークッションは大事な役目を担ってる。プレッシャーがないわけないよね。

そして会場に着いた。

「めぐう、緊張してきちゃった」

「いつも通りにやればいいよ」

「それはそうなんだけど……」

やっぱり、みんな緊張してるよね。

「みんな！少し時間があるから食事を済ませたりして舞台裏に集合よ！遅れないようにね！」

本田先生の指示でみんな散って行った。

私は……

「めぐ、ご飯食べよう」

紗耶香ちゃんと。

「うん」

紗耶香ちゃんとお昼を済ませて会場に。まだ時間があるから他の高校を見てた。会場で私はフルートの先輩たちと、紗耶香ちゃんはパークッションの人たちと見ていた。

次は豊ヶ峰高校。毎年、地域代表常連校みたい。

「相田さん、よく見てて」

「はい」

そして演奏が始まった。

……

すごいな。

完成されてる。

「あれが毎年代表になる高校の実力だ」

濱田先輩……。普段とは違う。悔しそう……。

「濱田先輩。まだ始まってないですよ。私たちなら大丈夫です」

そう言ったら濱田先輩は目を丸くして驚いた。

「ははは！まさか相田に励まされるなんてな。……すまない。私たちがしっかりしないとな」

「そうね、ありがとう。相田さん」

そんな……。

「相田さんも……頑張る……」

「そう！私と有紀の分までね！」

田代先輩、大野先輩……。

「わたくしたちはわたくし達に出来ることをやりましょう。他の高校は関係ありませんよ」

そうだよ。

「いつも通りにやりましょう！」

「ま……まぶ……しい……」

え？田代先輩？

「有紀には相田さんの笑顔が眩し過ぎるのよ」

そんな……闇の住人みたいに……。

「そろそろ行きましょう」

もうすぐか……。

準備しないとな。

舞台裏に移動して楽器の準備とチューニングをする。

あつ……。

椿くんを見つけた。けど、緊張してるみたい、ガチガチだ。無理もないよね、初めてのコンクールでパーカッションは責任重大だし。

「椿くん」

「あ、相田さん。緊張しちゃうよね」

「力が入り過ぎてるよ。」大丈夫”…だから」

椿くんは私に大丈夫って言うてくれた。守ってくれるって。今度は私が…。

「ありがとう、相田さん」

「誠二！気合い入れるわよ！」

バシッ！

「いってー！」

紗耶香ちゃんが椿くんの背中を思いつき叩いた。

「やり過ぎだ！バカ力！」

「なんですってー！」

ふふふ…、紗耶香ちゃんなりに緊張解いてあげてるんだよね。

「みんな！いつも通りに！会場の人たちに私たちの演奏聞いてもらおう！」

部長がみんなに声を掛ける。

「村田さんの言う通り！いい演奏お願いするわね！」

本田先生もみんなに気合いを入れる。

『次のプログラムは柳ヶ浦高校です』

「さあ！行くわよ！」

そしてステージへ。

それぞれ所定の位置に着く。

本田先生に合わせて軽いチューニング。

コンクールで演奏する二曲のうち、最初に演奏するのは課題曲。

パークッションがソロで演奏する箇所がある。

椿くん…頑張つて！

そして。

本田先生の指揮棒が振り下ろされた。

初めは静かに…。

私のフルート。

た！あとは会場で結果を待ちましょう」

ふう…。

「相田さん、お疲れ様」

「日高先輩…。お疲れ様でした。いい結果が聞けるといいですね」

「私たちはやれるだけやったから、結果がどうあれ悔いはないわ」

「そうだ、やれるだけやった。」

「相田のおかげだ。いい演奏が出来た」

「濱田先輩もにこやかに笑ってる。」

「そ、そんなこと…」

「ないよ。」

「ふふ…。ともあれ良い演奏だったことは間違いありません。結果を待ちましょう」

「感動したよ！相田さん！」

「結果…たの…しみ…」

結果…。金賞、銀賞、銅賞で評価されて金賞を取った高校の中から四校だけ地域代表になれる。代表になれなかったら三年生の先輩たちはこのコンクールが最後。

日高先輩、濱田先輩。私を必要としてくれた。

もう少し、一緒に頑張りたいな。

「ただ今より、表彰と代表校の発表に移らせていただきます」
来た…！

部長がステージに立ってる。すごく緊張してるだろうな。

私も…緊張してきた…。

『 高校、金賞』

「きゃあああああー！！」

金賞と評価された高校の吹奏楽部員は歓喜の声を上げる。

『 高校、金賞』

「きゃあああああー！！」

また…。結構金賞って多いのかな？

『 高校、銅賞』

パチパチパチパチ…。

落ち込んでる…。いい評価は欲しいもんね。

『 高校、銀賞 』

「きゃあああああああ!!」

去年は銅賞だったんだろうな。

『 豊ヶ峰高校、金賞 』

「きゃああああああ!!」

当然だよな。あの完成度。代表も間違いないと思う。

次々に他の高校の名前が呼ばれていく。

そして…。

『 柳ヶ浦高校、金賞 』

「きゃああああああ!!」

…よかった。…とりあえず…。

「ほら!相田!もつと喜べ!」

濱田先輩…。

「はい!」

「ま…まぶ…しい…」

あ…また…。

「でも…よかつ…た…」

笑ってるの?田代先輩。口元しか見えないから…怖い…。

あとは代表校の発表。

正直、豊ヶ峰高校には勝ってないと思う。

あとの三校はわからない。

『 続いて、代表校の発表に移ります 』

ここ…、どうなの?

『 高校 』

「きゃああああああ!!」

次…。

『 高校 』

「きゃああああああ!!」

うん。

『豊ヶ峰高校』

「きゃあああああ！」

間違いないよね。

最後の一枚…。

どうなの？

……………！

『高校』

「きゃあああああ！」

あ…………。

『以上が代表校に決定いたしました』

そう…なんだ…。

部長…。先輩…。

笑顔だけど…辛いよね。

「先輩…」

「悔いはないわ。やれるだけやったもの。最高の演奏だったわ」

「そうだぞ相田。それに君は本当によくやってくれた。私たちは満

足だ。短い間だったが、こんな私たちについてきてくれてありがとう

っ」

日高先輩…濱田先輩…。そんな事言ったら…私…私…。

「……………うっ……………えぐっ……………」

「…また…来年頑張れ…」

濱田先輩に頭を撫でられながら泣いてた。

「……………うっ……………はい……………グスン……………」

…私が泣いてどうするの。

「さ、行きましょう」

そして帰りのバスにみんなが集合した。

そこで部長から一言。

「みんな！今日はお疲れ様！本当にいい演奏だったよ！代表になれなかったのは残念だったけど、後輩のみんなはまた来年、頑張っ

ね！私たちはもう…終わり…だけ…ど…グスン…」
部長…。

「みんなと過ごした…吹奏楽…ひっ…部の…思い出…は…グスン…。へへ…本当に宝物です！」

パチパチパチパチ！！

「へへ…本当にみんな…ありがとうございました！」

部長も先輩たちも、お疲れ様でした。

「村田さんありがとう。じゃあみんな、学校へ帰るわよ！」

そして帰りのバスの中、私たちの演奏が録音されたテープが流れる。

……

悪くなかった。

うっん、最高の演奏だった。

悔しいな…。

「めぐ…何が足りなかったのかな…」

紗耶香ちゃん…。

隣に座る紗耶香ちゃんが呟く。

「私は最高の演奏したよ…わ…私…は…ひぐっ…」

「うん…最高の演奏だったよ。紗耶香ちゃん、また来年頑張ろう」

「…うん…ひぐっ…。先輩たちと…代表…なりたかった…」

「…うん…」

紗耶香ちゃんは中学の最後のコンクールですごく悔しい思いしてるから…人一倍コンクールにかける思いが強かったんだ。

「…うっ…うっ…」

こういう時、なんて言えばいいんだろう。

私は…。

「元気…出して？」

「めぐ…。…グスン…うん…」

紗耶香ちゃんは笑ってくれた。言葉は…関係ないのかな。

重苦しい空気の中、学校に戻ってきた。

「みんな！今日は本当にお疲れ様！三年生とは今日が最後になるけど、一週間後に送別会…というかちよつとしたパーティーをしましょ。部活もその後に再開。いいかしら？詳細は追って連絡するわ。それでは今日は解散！」

本田先生のあいさつで終わった。

今年の吹奏楽コンクールは終わったんだ。

一週間後に送別会。その後に部活再開。

じゃあ、それまで椿くんには会えないのか…。

夏休み…前は楽しみだったんだけどな。

椿くんは何して過ごすんだろ。

「…ぐ。めぐ！」

！

「さ、紗耶香ちゃん、どうしたの？」

「みんなと連絡先交換しとこうよ。部活がない日だって遊びに行くかもしれないし」

えっ…うん、そうだよな。

じゃあ…椿くんとも…？

「誠二。私とめぐに連絡先を進呈しなさい。遊びに誘ってあげなくもないわよ」

紗耶香ちゃん、そんな言い方…。

「なんだよ、その言い方。そんななら交換しないよ」

あつ、あつ…。ダメ…！

「つ、椿くん！教えて？」

「めぐ？」

知りたい…！

「めぐがこう言ってるのよ。さつさと教えないと…」

「わかった！わかったよ！じゃあ赤外線でもいい？」

「いいわ、めぐー」

「う、うん！」

そして赤外線機能を使って誠二くんと番号交換しちゃったんだ！

やった！わーい！

「名前は犬で登録するわよ？」

「ふざけんな！」

椿誠二…。電話帳に名前がある。

えへへ…。

「しつかり私とめぐの登録しときなさい。喉が乾いたら連絡するから」

「…ようするにヒマなんだな、紗耶香」

「わ、私も！暇な時とかはメールとか…していい？」

「あ…ああ、いいよ。もちろん」

えへへ…。

メールよかあんまり得意じゃないけど、頑張ってみよう。

「じゃあ、またね。相田さん、紗耶香」

「う、うん。またね」

椿くんは帰って行った。

…嬉しいな。連絡先、交換しちゃった。

「めぐ、嬉しそうだね」

あつ…あわわ…！

「そ、そんなことないよ！お友達の名前なんて、そんなに入ってるから…」

「めぐ…」

あ、あれ、紗耶香ちゃんが悲しそうな顔してる。失敗したかな。

「これからいつぱい増えるよ！」

「う、うん！あはは…」

ご、誤魔化したのかな。

「帰ろう！めぐ」

「うん！」

それからいつものようにバスで帰ったんだ。

携帯の電話帳を何度も見た。

何度見ても椿くんの名前がある。

「えへへ……」

私…椿くんのこと、好きなんだろうな。

椿…誠二くん。

モヤモヤしてた気持ちがあっさりしてきた。

自然に椿くんのことばかり考えてたし、携帯の名前見るだけでモドキドキして嬉しい。

私を救ってくれた人。

そばにいたいな…。

………

コンクールが終わったばかりなのにこんなことを考えて。ダメだな私。コンクールが終わった今…だからこそ、思うのかな。

「めぐ、着いたよ？」

「あっ！えっ！？ごめん、またね！紗耶香ちゃん」

いつの間にか着いちゃってた。紗耶香ちゃんと何話してたかもわからないや。

帰ったら…メールしてみようかな…。

でも、交換したその日にいきなりメールするなんて…。

あーん！どうしょー！

………

結局、その日は何もしなかったんだ。

メールだけは作ったんだけど、どうしても送信ボタンが押せなくて…。

まだいいんだ。

今は携帯に椿くんの名前があることが嬉しい。

海

コンクールから一週間後。

部長たち三年生の先輩を送る送別会が、部長の実家が経営するレストランであつたんだ。

本田先生はお酒で酔っぱらうし、椿くんは理恵先輩にからまれてた。理恵先輩の胸に顔を押し当てられてたけど…。ハチャメチャだつたな。私はあんなの無理。椿くん、なんとなく嬉しそうだったけど…。美香ちゃんはその様子を見て怒つてた。私もちよつとヤキモチやいちゃつた。

日高先輩と濱田先輩に今までのお礼をしたら逆にお礼をされてしまった。私は何もしてないのに。

最後は部長が挨拶してた。また泣いちゃつてたな。それだけ吹奏楽部が、部員みんなが好きだつたんだよね。

そして次期部長が発表された。

次の部長はパーカッションの理恵先輩。驚いてたから聞かされてなかつたみたい。理恵先輩でよかった。理恵先輩はフルートの私でもよくしてくれるから。紗耶香ちゃんがパーカッションっていうのもあるけどね。

その日はそれで終わったんだ。

そしてそれから二日後。

すごくびっくりしたの！

椿くんからメールが来たんだ！

連絡先を交換してから結局一度も何もしてなかつた。そのメールを開ける時、少し指先が震えちゃつた。

内容は…。

”よかつたら海に遊びに行かない？
だつて！”

すぐに紗耶香ちゃんに連絡して一緒に行こうって誘つた。紗耶香

ちゃんにも連絡は来てたみたいで一緒に行ってくれるって。

その日に慌てて水着を買いに行っちゃった。水色のワンピース。ビキニにしようかなって思ったんだけど、やっぱりそこまで大胆にはなれなかった。

泳げないから浮き輪も持参で。これは昔から持ってたやつ。

海に行くのは明後日。椿くんと堀川くんと美香ちゃんと紗耶香ちゃんの五人で行くって連絡来たんだ。

今から楽しみ！

そして

海にやって来た！

今は水着に着替えてるところ。

「めぐ…ち、ちょっと目立ちすぎじゃない？」
えっ…。

「恵ちゃん、すごいね」

や、やだ…。

一緒に着替えてた紗耶香ちゃんと美香ちゃんが私の水着姿を見て言った。

「そ、そうかな…」

これだとビキニなんて着てたらなんて言われたことか…。

美香ちゃんは白いビキニでバランスのいいスタイル。紗耶香ちゃんは赤いビキニでスラッとしてる。私はワンピースなんだけど…それでも胸が…。

「そ、そんなに見ないで…」

！

「めぐ、こっちが恥ずかしくなるよ」

「一瞬恵ちゃんに心奪われそうだったよ」

いろいろ言わないで…。

今さら恥ずかしくなつてきちゃった。

「と、とにかく行くところ。紗耶香ちゃん、恵ちゃん
ちよ、ちよつと待って！」

「うっ……」

モジモジ……。

「ほらっ！めぐー！」

「えっ！ちよっ……！」

紗耶香ちゃんに無理矢理連れて行かれる。

あ~~~~~ん！恥ずかしいよお！

…

……

……

「お待たせ」

「「おお……」」

椿くんに堀川くん……。

こっち見てる。

椿くんになら見られてもいいんだけど、堀川くんの目ってやらしい。
い。

「ちよつと！なにめぐばっかりじろじろ見てんのよ！」

！

「は、恥ずかしい……」

もつやだあ。

「誠二、じろじろ見過ぎじゃない？」

「美香、大人になったな」

「なーにが大人になったなよ！恵ちゃんばっかりじろじろ見ちゃつてさー！」

私はそんなに堂々と出来ないよ。

「そんなことないぞ。ほら、美香もよく見せてくれ」

「えっ……そんな……誠二……」

あつ、やっぱり恥ずかしいんだ。

「うーん…」

ぞっ…ぞっ…。

え？え？

美香ちゃんの水着姿をじっくりと見たあとに椿くんがこっちに歩み寄って来る。

ひゃっ！

手をとられた…。ふ、触れちゃった…。

「相田さんの勝ちだ！」

へ？

私の勝ちだつて…。もしかして…胸？

「誠…！…！」

「うわわわわ…！」

美香ちゃんが怒って椿くんを追いかけて行く。

楽しそう…。

…

椿くん、元陸上部なんだよね。砂浜でも速いな。美香ちゃん追いつけないよ。

あっ…椿くん転んだ。

もうダメだな、捕まっちゃうな。

あれっ。

美香ちゃんも転んだ。

砂浜だから走りにくいもんね。

「う…うわ…！…！」

あっ、美香ちゃん泣いちゃった。

椿くんは頭をかきながら寄って行く。なんとも困った様子だ。

あれ、美香ちゃんに捕まえられた。

嘘泣きだったんだ。悪い子だね、美香ちゃん。

「紗耶香ちゃん！」

美香ちゃんが紗耶香ちゃんを呼んだ。

「誠二が暴れてるのね。めぐも行く？」

「わ、私はいいよ」

椿くんを捕まえるなんて出来ないよ。

「じゃあ行つてくるね」

紗耶香ちゃんも行つちゃった。

…堀川くんと二人。なんかイヤだな。

「勇介ー！」

「呼ばれた。ちょっと行つてくるね」

「うん」

堀川くんも行つちゃった。

あう…一人。

わ、私も行こうかな…。

でもなんか激しく抵抗してるし、私なんか行つたって…。

「あんたも埋まりなさい！」

あれ、堀川くんが紗耶香ちゃんにやられちゃった。

そしてまた椿くん逃げちゃった。

あ、あれ？

堀川くんが砂浜に埋められてる…。

………

「ちよつとすつきりしたね！美香ちゃん」

「うん！誠二呼び戻さない」と

「な、何があつたの？」

満足そうに戻つて来た二人に聞いてみる。

「勇介に手伝つてもらおうと呼んだんだけど、変なこと言うから埋

めちゃった。誠二には逃げられたし」

「そうなんだ」

いいのかな？でも…ちよつと安心。

「誠二ー！もういいからみんなで遊ぼうよー！」

美香ちゃんが椿くんを呼んだ。みんなの中に堀川くんは入ってないんだね。

「美香ちゃん、誠二が戻つて来たら私が一発」

「うん」

え？え？

椿くんが戻って来た。

「いやー、悪い悪いぎゃー！」

紗耶香ちゃんの一発。

回し蹴りなんてどこで覚えたの？

「な、何をする！」

「どさくさにまぎれていろいろ触ったバツよ」

それは仕方がないね。

「あれは不可抗力だろ！」

「なに？」

「な、何でもないっす」

椿くんと紗耶香ちゃんの信頼関係。

それからビーチバレーをしたんだ。ここの海水浴場にはネットがいくつか張ってあった。

私と紗耶香ちゃんばペアで美香ちゃんと椿くんがペア。

仕方がないかな。

私はトスを上げるばかりで紗耶香ちゃんがレシーブとアタックしてた。私が動けないから。

美香ちゃんも上手だった。椿くんは動きは速いんだけどボールにうまく合わせられないみたい。

「誠二！ちゃんとボール受けてよ！」

「無茶言つな。あいつのボールには常人には取れない回転がかけてる…はず」

仲間割れかな。じゃあ下手な者同士私が椿くんと…。

「じゃあ私が受けるからトス上げてよね」

「お、おう」

ならないよね…。

……

バシンッ！

「はい！誠二！」

「そりゃ！トース！ぺぎゃ！」

椿くんがスカして頭でボール受けちゃった。

「あっははは！ダッサーイ！」

「誠二、かつこ悪い」

「う……」

二人ともひどいよ！

椿くん！大丈夫！？

私は椿くんに駆け寄った。

「誰だつて苦手なことあるんだから。二人ともそんな事言ったらダメだよ！……椿くん、大丈夫？」

何か椿くん泣きそう。

「ああ、相田さん。天使だ……。オレは今日天使に出会ってしまった」
天使？

「すごいな！私も会ってみたい！」

「えっ……」

「どんな天使だったの？」

「いや、あ、あのね……」

「ぷっ……くく……」

「くっ……ふふ……くくくっ……」

あれ？二人とも笑ってる？天使に会ったつてすごいのに。

「くくっ……せ、誠二、どんな天使だったか私にも教えてちょうだい」
「い」

「二人の悪魔に説教をしてくれる優しい天使だよ」

「……埋めるわよ？」

「悪魔め！」

え？え？

わけわからない。

ぐう~~~~。……。

あつ、お腹の虫が……。普段体なんか動かさないから。

「紗耶香ちゃんお腹空いちやった」

「そうだね、そんな時間かな。誠二、売店行ってらっしゃい」

「なんで自然にそうなるんだよ」

「誠二、一緒に行こう」

「美香、人間だったんだな」

「…埋めるよ？」

「……オレは優しい美香が好きだな」

「えっ…。は、早く行こ！」

「わ、私も！」

「いいのいいの！めぐ。二人に任せて休もうよ」

「…うん」

いいなあ美香ちゃん。

それから紗耶香ちゃんとはばらく話してたら二人が戻ってきてご飯を食べたんだ。堀川くんには顔の前にご飯を置いてあげてた。どうやって食べるのかはわからないけど。

「海行こう！」

紗耶香ちゃんがいきなり言った。

まだ浮き輪準備してないよ。

ゴソゴソ…。

「ふーっ、ふーっ」

はあっ、はあっ！

大変…。

「膨らませそうか？」

椿くん。でも私が口つけた後だから…。

「私がやるわよ。貸してめぐ」

「う、うん。ありがとう」

……惜しい。もうちょっとで間接…。

「ふー…ふー…っ！」

うわあ。すごい、あつという間に膨れた。

「はい！めぐ！行こう！」

「うん！」

紗耶香ちゃんが我先にと海に走って行く。

私もー！

そして海に…。

…ふわふわ。

浮いてるだけだけど気持ちいい。

ぶるる…！

海に入ってお腹冷えたかな…。おトイレ行きたくなくなってきた…。

…紗耶香ちゃんたち遊んでるからサツと行って来よう。

この時、一声かけてればよかつたんだけど…。

私は海を出てトイレに向かった。

「確かこっちに…」

どこだったかな…？

「あれ？恵ちゃん？」

えっ、誰？

「この海水浴場に来てたんだね」

あっ、理恵先輩だ。

「こんにちは。先輩も遊びに来てたんですか？」

「ううん。近くにおばさんがやってる民宿があつてさ。その手伝い。

アリサもいるよ」

へー、そうなんだ。

「アイスでも食べない？すぐ近くだからさ」

アイス…食べたい。でも…。

「みんなに何も言ってきてないから…」

「誠二くんたちでしょ？私も誘われたんだけど手伝いがあったから

さ。アリサに呼びに行ってもらおうからおいでよ」

うーん…。

「じゃあ行こうかな。紗耶香ちゃんたちは海で遊んでいます」

「わかった。こっちだよ」

そうやって理恵先輩に連れて行かれた民宿はホントにすぐ近くだ

った。

「アリサー！」

着くとすぐに理恵先輩はアリサ先輩を呼んだ。

「はい。あゝ、めぐめぐだゝ」

二人とも同じ服を着ていた。民宿の制服なんだろうな。

「こんにちは。アリサ先輩」

「めぐめぐゝ、おっぱいゝ大きいゝ」

そう言いながら私の胸を触ってきた。

「きゃっ！く、くすぐりたいです！」

「ほわほわゝ」

もうっ！

「恵ちゃんには勝てないな…。そ、それよりアリサ、誠二くんたち呼んで来てくれない？海で遊んでるらしいから」

「わかったゝ」

アリサ先輩は紗耶香ちゃんたちを呼びに行った。

「こっちだよ」

「はい」

そして民宿の裏側の庭に案内されたんだ。

「はい、アイス。今日は誰が来てるの？」

「ありがとうございます。今日は紗耶香ちゃんと美香ちゃんと椿ちゃんと堀川くんです」

「変態もいるんだ。変なことされてない？」

「変態？」

「勇介くんだよ」

「埋められています」

「えっ…。どこ」

「理恵ー！ー！」

たぶんおばさんだろう。理恵先輩を呼ぶ声がする。

「ごめんね、ちょっと行ってくるね」

「はい」

アイス、おいし…。

「恵ちゃん！」

え？私？

理恵先輩が呼んでる。なんだろう。

私は呼ばれた入口の方まで行ってみた。

あつ。

そこには椿くんが立っていた。早かったな。みんなは？

「椿くん、みんな」

「相田さん！どうして何も言わずに行っちゃったの！！みんなすく心配してたんだよ！！」

ビクッ…！

あつ……つ、椿くん…。

「せ、誠二くん？」

「…みんなを呼んでくる」

「あつ！ちよつと誠二くん！……行っちゃった」

椿くん…怒ってた…。

ああ…！

「どうしよう…。嫌われちゃったら…私…」

「え…め、恵ちゃん？」

「…どうしよう…」

椿くん…！椿くん…！

「誠二くんは本当に心配してたからあんなに怒鳴ってたんだよ。大丈夫だよ」

理恵先輩は頭をよしよしと撫でて慰めてくれた。

私は半分泣きかけてた。

「で、でも…グス…」

「アリサとすれ違いになったんだよ、きつと。話しくらい聞いてくれてもいいのにな」

…ううん、私が黙ってみんなの元を離れちゃったから。

「アイス食べてなよ。アリサがみんな連れて来るからさ」

「…はい…」

そしてまた庭の方に行つた。

椿くん…。嫌われたくないよ…。

アイス…。おいしくない。

ちゃんと謝らないと…。

一人落ち込んだ。

「相田さん」

そんな時、後ろから椿くんと呼ばれた。

一瞬振り向くのを躊躇してしまう。

ぐつと勇気を出して振り返つた。

「椿くん…ごめんなさ」

「ごめん！」

え？

「何にも話し聞かないで一方的に怒鳴っちゃって…ごめんね」

「そんな…。私が何も言わないで行っちゃったから。悪いのは私だよ。

ごめんなさい」

「そんなことないよ」

「椿くん…。もう怒ってない？」

「怒るだなんて、いくら謝っても足りないくらいだよ」

怒ってないんだ。そっか。

「よかつたあ…」

「うわっ…」

「え？」

椿くんが何やら顔を真っ赤にさせていた。

「どうしたの？」

「い、いや…。もうみんな来てるからさ、行くっか」

「うん！」

そしてみんなのところに向かった。

「あっ、誠二くん。ごめんね、近くで恵ちゃんに会ったから。こんな騒ぎになると思ってなくて」

理恵先輩も謝ってる。

「いいですよ。オレの早とちりだったんだし」

「それでもごめんね」

二人とも優しいな。

「理恵ー！今日はもういいから遊んでらっしゃーい！」

「ありがとうー！おばさーん！……と、いうことで」

それから理恵先輩とアリサ先輩を混ぜて遊んだんだ。

…

……

「あー！遊んだ遊んだ！」

あれからまた海で遊んで、今はもう帰ってるところ。

「あー！勇介忘れてきた！」

あっ、そういえば。

「オレはここにいる！」

うわっ！びつくりした！

いきなり飛び出して来るんだもん。

「お前、どうやって…」

「見回りの人に助けてもらった。もちろん大切な友人に埋められたなんて言っていない」

堀川くんも優しいな、みんなを庇って。

「かくれんぼだと言っておいた」

かくれんぼ…。

私でもそれは無理があるとわかるよ。

……もうすぐ別れちゃうな。その前に言わないと。

「ねえ、椿くん」

「ん、何？」

たまたま耳に入ってたんだ。

…頑張れ私！

「明日…柳ヶ浦町の夏祭りなんだよね？よ、よかったら…一緒に行かない？」

「うん、いいよ」

えっ！ホント！？

やった！やったあ！

心の中で舞い踊りながら喜んだ。思わず叫んでしまいそうだったけど。

「美香も行くだろうし、紗耶香も誘ってみんなで行こう」

あっ…。

「う、うん！そうだね！みんなで行こう！」

……はあ…。

現実ってそうだよな。

二人で行きたいなんて贅沢なのかな…。

でも、二人だと喋れないかも。これで…よかったのかな。

夏祭り

海へ行つた翌日。

柳ヶ浦町の夏祭り。

私は家の掃除とかしないといけなかったから紗耶香ちゃんだけ先に行つたんだ。

「ふうつ、片付いた」

今日はちゃんと浴衣を来て行くんだ。

水色の浴衣。水色が好きなの。透き通るような水色。神秘的でさわやか。

「よいつしょ」

一人じゃ厳しいけど…なんとか…。

浴衣に着替えた。

似あうかな？髪も上げていこう。前にうなじがポイントって聞いたから。

んー、こんな感じかな？

いや、こうかな？

やっぱり普通に…。

ううん、ダメ。ポイントはきちんと押さえとかないと。

うーん…。

それからいろいろ髪型を試していた。

けど…。

やっぱり普通に上げるだけにしよう。

！

もうこんな時間！急がないと！

気が付くともう夕方前だった。急いで支度してバス停に向かった。なんとか次のバスに間に合つて柳ヶ浦町に向かった。

バスの中には私と同じように浴衣を着て夏祭りに向かう人の姿もあつた。

あんな感じで着るんだ…なんて観察しながらバスに揺られていた。待ち合わせは椿くんの家。

紗耶香ちゃん何してるんだらう。

椿くんと二人つきりなんだよね…。

羨ましいな。

い、いやらしいこととかしてないよね？

まさか紗耶香ちゃんに限って…。

…何考えてるんだらう、私。

『柳ヶ浦一丁目、お降りのお客様いらっしやいませんか？』

！

「はい！はい！降ります！」

ボタン押してなかった…。

恥ずかしい。

バスを降りて椿くんの家に向かう。

……………

ピンポーン

「あら、また女の子のお客さんね」

あ、お母さんだ。

「あ…こ、こんにちは。誠二くんいらっしやいますか」

「ちよつと待つててね。誠二ー！お客さんよー！女の子ー！」

なんかこういうのって照れるな…。

この少しだけでも待つてる間がなんとも…。

「うちの誠二とはどんな関係なの？」

「えっ！あ、お、お友達で…ク、クラスメイトで、お、同じ部活です」

椿くん早く！な、なんかものすごいプレッシャーが…！

「上がってもらってー！」

椿くんの声だ。

「どうぞ。二階にいるからね」

「はい。お邪魔します」

…ふうつ。

一気に疲れた…。

そして椿くんの部屋へ…。

「こんにちは、椿くん。どう？に、似合うかな？」

中に入ると紗耶香ちゃんと美香ちゃんがいた。どうやらトランプをしてたみたい。

「すごく似合うよ！かわいい！」

えへへ…。ちよつと恥ずかしいけどよかったな。

「きゃー！めぐかわいい！」

「…わ、私も！」

美香ちゃん？

「そろそろ行くから急げよー」

美香ちゃんは急いで出て行った。

「何しに行ったの？」

「浴衣に着替えに行ったんだと思うよ」

わざわざ？

「相田さんがあまりにもかわいかったから自分もって思ったんじゃない？」

またかわいって。嬉しい！

「さっきまで紗耶香と美香とトランプしてたから相田さんもやる？」

「うん！」

それから三人でトランプしてたんだ。

「あはは！椿くんよわーい！」

「うぐぐ…こんなはずじゃ…」

「それにしても美香ちゃん遅いわね」

女の子なんだからおめかししたいもんね。

「確かに遅いな。呼びに行く？美香の家、会場に行く途中だし」

「そうね、行きましょ」

美香ちゃんの家か。幼馴染だから近所なんだよね。

ピンポン

「あら、誠二くん。美香はもう少ししかかるみたいよ。上がって待ってる?」

美香ちゃんのお母さんだ。すごく優しいそう。

お母さん…か。

「いえ、ここで待ちますよ」

「そう。ところで誠二くん。美香とはいつ結婚するの?」

「「け、結婚!?!」」

「おばさん、そんな昔の話しは…」

「あら、誠二くんならいつでもいいのよ?ふふ…美香の様子見て来るわね」

美香ちゃんのお母さんはそう言って行ってしまった。

結婚…。

「椿くん…結婚しちゃうの?」

「さっきのは子供の時の話だよ。…どうしたの?」

「な、なんでもないよ」

顔に出ちゃってたかな?

でも結婚なんて親も認めてるってことだよね…。
いいな…。

少し待っていたら美香ちゃんが出て来た。

「お待たせ。ど、どうかかな?」

かわいい…。いつものヘアピンは外して髪を上げてる。ポイントは押さえてるんだね。

「似合ってる。かわいいよ、美香」

「へへ…ありがとう」

ズキッ…。

ちよつと嫉妬しちゃうな…。

「あーん!私も浴衣着てくればよかったあ!」

「紗耶香は似合いそうにな…」

「誠二？」

「み、見たかったなあ！紗耶香の浴衣姿！」

ふふ…いつもの二人だね。

「じゃあ、行くか！」

あれ、堀川くんは？

「堀川くんは？」

「ああ、あいつはいつも出店の手伝いをしてるんだ」

へー、そうなんだ。じゃあもう会場にいるんだな。

夏祭りの会場は海の近くの広場なんだって。三人で歩いて会場まで向かったんだ。

……

それからしばらく歩いたら会場に着いた。

この夏の夜の空気はけっこう好き。なんか匂いが違うんだ。”夏は夜”…ってよく言ったもんだよね。そしてこの会場の雰囲気。人多いな”。

さすがに年に一度の夏祭りだもんね。

「はぐれないようにね」

椿くんが注意する。

この辺あんまりわからないから本当にはぐれないようにしないと。所狭しと並んだ屋台が祭りの雰囲気を実際立たせてる。狭い通路を人が窮屈そうに歩いてたんだ。

「誠二！金魚掬いで勝負よ！」

「ほほう、オレに金魚掬いで勝負を挑むとは。愚かな」

紗耶香ちゃんと椿くんの勝負。

二人とも自身たっぷりだ。得意なんだろうな。

「おじさん！二人！」

「はいよ！」

二人の金魚掬い対決が始まった。

「はいっ！はいっ！」

「えいつ！そりゃっ！」

「うわぁー、二人とも上手ー。次々に掬い上げてる。」

「うりゃあああああああー！」

「そりゃあああああああー！」

「ざわざわ…ざわざわ…。」

「ギ、ギャラリーが…。」

「は、恥ずかしいね、恵ちゃん」

「う、うん」

「向こう行こうか」

「そうだね」

ギャラリーの多さに耐え切れず美香ちゃんとその場から逃げ出しちゃった。

あんまり離れないように近くの出店で一休み。

「わたがし食べよっか」

「うん！わたがしー！」

出店でわたがしを買って食べる。これも夏祭りの風物詩だよね。

「はあっ…はあっ…」

あっ、紗耶香ちゃんと椿くん。

「で、勝負の行方は？」

「勝った！私が勝ったよ！」

「ううー…オレは負けたんだ。しかも公衆の面前で」

椿くん、負けちゃったんだ。ドンマイ！

でもすごい落ち込みよう。

「たかが金魚掬いでしょ」

「たかが金魚掬い、されど金魚掬いなんだよ」

「そ、そう」

「すぐく悔しそう。」

「それはそうと勇介の出店でも行こうか。焼きそば作ってるから
ふーん、焼きそばの出店出してるんだ。」

それから堀川くんの焼きそば屋に。椿くんが四人分買ってくるか

ら待っててだつて。

…何か話してるな。

「美香！相田さん！ちょっと来てー！」
ん？何だろう？

「呼ばれたね」

「うん、なんだろうね」

私と美香ちゃんは呼ばれた方へ。

「何？誠？」

「勇介、どうだ？」

「うむ、実にいい」

え？え？

「もういいよ」

…一体何なの？

「なっ！もうちよつとこうさあ、かわいい？とか似合ってる？とかあるだろ！？」

「見ただけで満足しろ。じゃあな」

私と美香ちゃんを堀川くんに見せたかったの？

「誠。なに？」

「勇介がぜひとも二人の浴衣姿を見たいって言ったからな。焼きそばタダでくれたし」

「私たちをダシに使ったね？」

「い、いいじゃないか。タダでくれたんだし。美香と相田さんのおかげだよ。かわいい二人の」

「そ、そんな…椿くん」

「恵ちゃん、騙されちゃダメだよ」

???

「もういいだろ、焼きそば食べよう」

そして少し落ち着いた場所で焼きそば食べたんだ。

「ふうっ、なかなかうまいだろ？」

「そうね、変態焼きそば、なかなかね」

そんな言い方したら食べたくなくなっちゃうよ、紗耶香ちゃん。

「あつちに花火がよく見えて人が少ない穴場があるからそこに行くうか」

「あそこの丘だよ。行こう」

美香ちゃんは知ってるみたいだった。

誠二くんのあとに続いてその穴場に向かう。

花火の時間が近づいてきたからか、人がさらに多くなってきた。

「な…なんだ？やけに人が多いな」

「今日は有名人が来てるみたいだよ。誠二知らなかったの？」

「知らなかった。二人ともはぐれないようについてきて」

「う、うん！」

そう言うけれど、すごい、人の波が…！

真っ直ぐ向かえない！

ドンッ！

「きゃっ！あっ！っ、椿くん！」

人にぶつかっちゃった！はぐれちゃう！ちょっと待って！

「椿くん！」

声が届かない…。どうしよう！はぐれちゃった！

どうしよう…どうしよう…！

道がわからないよ！

どこ？どこに行けばいいの…！？

椿くん…！

ドンッ！

「痛えな！気をつけろ！」

ひっ…！

怖い…。

椿くん助けて…！

…とりあえず人ごみは避けないと…。

ドンッ！

「いったいわねー！」

「す、すみません！」

……うつ……グスン……

どこに……。怖いよ……

ドンツッ！

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

早く抜きたい……！

それからも人に何度もぶつかり何度も謝りながら進んだ。

とにかく人ごみを抜きたい、ただそれだけだった。

あつ……。やっと……。

人ごみを抜けて少し離れたところに座り込む。

「……ひっ……グスン……」

みんな……どこに行ったの……？

一人ぼっちだよ……。

「相田さん！」

えっ？

あつ……っ、椿くん……！

呼ばれた方を見ると椿くんが息を切らして立っていた。

「椿くん！」

「うわっ！あ、相田さん！？」

私は何も考えられずに椿くんの胸に飛び込んだ。

「うわー！ーん！怖かったよー！」

「相田さん……ごめんね。しっかり見てれば……」

「……ひっ……グスン……」

椿くんが頭を撫でて落ち着かせてくれる。

椿くんの胸の中……。

このまま……。

「……」

椿くんの匂い……。落ち着くな……。

「あ……、相田さん、みんなが見てるから……」

スッ……。

「ごめんなさい。もう大丈夫」
困らせちゃった…。

もつと椿くんを感じていたかった。
私を二回も助けてくれた。

私のヒーロー。」

椿誠二くん。

私…。私…！

「あの…私…椿くんのこと　　！」

『ドーーーーーン！！』

あつ…花火…。

「きれい…」

まだ、思いを告げるのは早いつてこと？

「相田さん、みんな心配してるから行こうか？」

「…もう少しだけこのままでいたいな…。いい？誠二くん」

「え？う、うん」

このくらいのがまま…許してくれるかな。

ねえ、誠二くん…。

せめてそう呼んでもいいよね。

誠二くん…。

しばらくそのまま花火を眺めていた。

お互い交わす言葉はないけれど、私はこのままでよかった。

夜空に咲く花火はきれいだった。でも、私の目には花火を見上げる誠二くんの姿しか映っていなかった。

水中花火に変わって丘の方がよく見えるからと、みんなの方に向かった。

「めぐー！大丈夫だった？」

「うん、誠二くんが見つけてくれたから」

「えっ…？」

美香ちゃんが少し驚いた顔をした。そして少しだけ悲しそうな顔だった。どうしてだろう。

「美香、悪かったな。相田さん見つけてから」

「誠二」

「うん？」

「花火だよ」

『ドーーーーー！』

「めぐ、ご機嫌だね」

「そうかな…、そうかも！」

美香ちゃんの気持ちを知らずにはもう少し後だった。

私が決意するのも。

少しだけ、誠二くんが近づいた気がした。

人がいない丘の上は、私たちだけが花火の光に照らされている様に思えた。

いろんな思いが交錯する中、夏祭りは終わりを迎えた。

体育祭

夏休みの間、みんなとは二、三回遊んだ。夏休み後半になると、誠二くんが宿題に追われて一緒に遊べなかった。

” 誠二くん ”

そう呼ぶようになってから、違和感もなくなってきていた。

夏休みが終わって新学期。

最初の大きな学校行事が体育祭。

三学年のクラス別に分かれて組になるんだ。学年で五クラスあるから全部で五組出来る。美香ちゃんと紗耶香ちゃんとはクラスが違うから敵同士なんだよね。

「よし！みんな頑張るぞ！」

三年生の先輩がみんなに気合を入れる。

「誠二くん、頑張ろうね」

「うん」

私は運動オンチだから走るのとかは苦手。出場種目は二人三脚だけなんだ。

でもね、誠二くんとなの！

それだけが楽しみなんだ。昔っから運動会とかイヤだったから。

誠二くんは二人三脚と百メートル走と借り物競走。

「相田さん大丈夫？」

私が運動オンチなことわかってるから心配してくれてる。

「練習した方がいいかな」

「じゃあ練習しようか。向こうでやろう」

そして組のテントから少し離れたところで。

「じゃあ練習するよ。肩貸して」

そう言って誠二くん腕を回された。

「ひゃあっ！」

「うわっ！びびびっくりしたあ」

「う、ごめんなさい」

「こ、これは練習どころじゃないかも。緊張してきた…。」

「誠二……！！！」

え？紗耶香ちゃん？

「めぐに変なことしてたでしょ！」

ど、どんな嗅覚してるんだろう。確かにちよつと声出しちゃったけどそれに反応するなんて。私って愛されてる！？

「二人三脚の練習してただけだ」

「そんなの本番だけでいいでしょうが！めぐから離れなさい！ねっ、めぐ」

えー…っ。

せつかく誠二くんと練習なんだもん。

「練習…したいな」

「うー、めぐがそう言うなら。誠二！なるべくめぐから離れて練習しなさい！」

そんなの無理だよ、さすがに。

言うだけ言って紗耶香ちゃんが行っちゃった。

「じゃあ練習しようか。大丈夫？」

「うん、大丈夫。続きしよう」

そして練習再開。

お互いの肩に腕を回す。

ドキドキ…。

…近い。

大丈夫かな？私、汗臭くないかな？

「いくよ。オレは左足、相田さんは右足からね」

「う、うん」

いけないいけない。練習するんだ。えーと、右足から…。

「いくよ。いっちに、いっちに、いっちに、いっちに…」

うまくやれてる…。

「いい感じだね。じゃあペースアップしようか」

ペースアップか、ついていけるかな？

「うん、す、少しずつだよ？」

「うん、じゃあいくよ」

「いっちに、いっちに、いっちに、いっちに……」

「ペースあげるよー」

「いっちに！いっちに！いっちに！いっちに！いっちに！

あっ……ダメッ！

「ちよっ……まっ……誠二くん……！きゃっ！」

ドスン……

「あたたた……！！」

「いたた……相田さん、だいじょ……」

誠二くん、固まってる……

「せ、誠二くん……手……」

私の胸を思いつきり掴んでるんだけど……

「じゅじゅじゅめん！」

すぐに手をどけた。

「……………」

「……………」

初めて男の人に触られちゃった……。びっくりしたけど何故か冷静。

「えっち……」

「い、いや、あのね！決してわざとじゃないんだよ！わざとじゃ！」

クスツ……。あたふたしながら焦ってる誠二くんが可笑的い。

「手、すぐにどけなかつたよね？」

「少しからかつちゃおう。」

「そ、それはさ！ほら！びっくりして！お、大きいとか思ってたわ

けじゃないから！」

「カアア……！」

誠二くんの言葉に思わず顔が真っ赤になるのを感じた。

「……………」

「あ、あの、ごめんね？」

誠二くんではよかった。他の人だったら泣いちゃってたかも。

「誠二くんにつき、許してあげる」

「え？ホント！？よかった！」

「でも」

「えっ……」

「次はもつとゆっくりね？」

「あっ……うん！」

それからまた練習再開。

「いっちに！いっちに！いっちに！いっちに！いっちに！いっちに！……！」

「い、いいよ。ペース上げて？」

「じゃあもう少し早くいくよ」

「いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！……！」

「せ、誠二くんストップ！」

「やっぱりキツイ……！」

「大丈夫？」

「はあっ……はあっ……うん……ちょっと休憩……」

「うん、いいよ」

「次のプログラムは二人三脚です！」

「えっ！も、もう！？」

「相田さん行かなきゃ！」

「う、うん……！」

大丈夫かな……。不安……。迷惑かけたくないよ。

そしてグラウンドへ集合した。

ドキドキするな……。

「緊張してるの？」

「誠二くん……」。

「少しだけ。体育祭とか苦手だから」

「ははっ、コンクールと立場逆だね。オレも一緒に走るんだから大

丈夫だよ」

「そっだよ、誠二くんと一緒になら。」

そして本番。

『位置について……』

ドキドキ……。

『よい……』

ドキドキ……。

パンツ！

！

いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！

ちに……！

もうすぐ……！

いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！いちに！

ゴール……！

「はあっ……はあっ……」

順位は！？周りなんて見えなかった。

「やった！間さん一着だよ！」

えっ……！やった！

「きゃー！やった！誠二くん！」

「うわっ！あ、相田さん！みんなの前で……！」

「やった……」

よかった！誠二くんのおかげだ！

「ず、ずいぶん仲良しだね……！」

あれ？美香ちゃん？

「恵ちゃん、みんなの前だよ。誠二も迷惑してるから離れて」

え？

！

「じじっ、ごめんなさい！」

一着取った嬉しさで思わず抱きついちゃってた。

「ふん！」

あれ？美香ちゃん行っちゃった。なんか怒ってた？

「美香ちゃん、何か怒ってた？私たちが一着だったから？」

「さ、さあ…。ははは…」

変なの…。

それからいくつかプログラムが進んで借り物競走。

誠二くんが出場したんだけど、紙を見て美香ちゃんを連れて行った。

何の借り物？

一着だったみたいだけど、違う組の美香ちゃんが上機嫌で誠二くんとこつちに戻って来たんだ。美香ちゃんは違う組に来たことに気付いて恥ずかしそうに戻って行ったけど。

仲直りしたみたいだった。

「よかったね。美香ちゃんと仲直り出来たみたいで」

「う、うん。そうだね」

誠二くんは少し引きつった笑顔だったけど、なんだったんだろう。

私はその後応援だけ。

誠二くんと一緒なら競技に出てもいいかなあ。

ずっと応援だったけど、みんな盛り上がって楽しかった。

誠二くんは百メートル走も借り物競走も二人三脚も全部一着だったんだ。誠二くんすごい！

全部のプログラムが終わって優勝は紗耶香ちゃんがいる組だったんだ。

紗耶香ちゃんは誠二くんに対して勝ち誇ってた。何か言い争っていたけど楽しそうだったな。

「紗耶香ちゃん優勝おめでとう！」

「めぐも一着おめでとう！」

誠二くと取った一着

体育祭、楽しかったな。

文化祭

「そこはもつとゆったり。お願いしますね」

「…了解…」

「恵ちゃんはずごいね！もう完璧！」

「そんなことないですよ」

今は部活中。

文化祭で吹奏楽部の公演があるからその曲を練習してるんだ。

「少し休憩しましょうか」

三年生が抜けてから、パートリーダーは河本先輩が務めてる。一番しっかりしてそうだもんね。

「みなさん、クラスの準備は進んでいますか？」

河本先輩だけ違うクラスで大野先輩と田代先輩は同じクラス。今聞いているのは文化祭でのクラスの出し物のこと。

「私たちのところは順調だよ！ね、有紀」

「うん…順調…」

「何をなさるんですか？」

「巨大ぬり絵。文化祭二日間でみんな塗れるかなあ」

ど、どれだけ大きいんだろう。

「しかも塗る時使うのは色鉛筆のみだからなあ」

何人がかり？

「来てくれた人たちに塗ってもらうんだ」

色がバラバラになるんじゃない？

「…みゆきは？」

「わたくしたちは貼り絵です。みなさん頑張ってますよ」

私たち吹奏楽部は文化祭公演があるから放課後のクラス準備にはあんまり参加しないんだ。

「…相田さんの…とは？」

「私たちはお化け屋敷です。私はみんなが気を使ってくれて受付な

「なんですけど」

「恵ちゃんじゃ可愛すぎてみんな驚かないからじゃない？」

「ふふふ、きつとそうですね」

む…。

「そんなことないですよ！私だって驚かせることくらい出来ます！」

「…やって…みて…」

へ？やってみてって…。

「い、いや…あの…」

「いきなりやねって言われても無理ですよ」

「そっつ！無理！」

「…ちっぱり…でき…ない…」

う…。

「出来ます…！」

「じゃあ…」

「はいはい！もういいよ。当日のお楽しみね。みゆき、練習再開し

よう」

「そうですね」

「相田さんは受付だよ」

うー…ちっぱり。

クラスの人に役割変えられるか尋ねたら私は受付だった。

「あっ、相田さん今から部活だよな？椿くんに伝えて欲しいことがあるんだけど…」

「うん、なに？」

「お化け屋敷の最後の最後で絶叫して驚かせてって伝えてくれる？決定事項だからって」

「わかったあ」

伝えればいいんだよね。

そして部活へ。

誠二くんは…っと。

あっ、いた。

「誠二くん」

「ああ、相田さん。どうしたの？」

「お化け屋敷でね、誠二くんは最後に絶叫して驚かせて欲しいんだ
って」

「絶叫？」

「私は受付。きっと私たちが忙しいから気を使ってくれたんだね」

誠二くんはわけわからないって顔してる。絶叫するだけだよ？頑
張って叫んでね。でも一人で叫んで相手が驚かなかったら虚しいよ
ね。

「相田さんはもう曲出来るようになった？」

「うん。大丈夫だよ」

文化祭でやる曲は、吹奏楽曲三曲と閉会式で生徒会の人たちが歌
うJ・POP一曲の合計四曲。練習期間はそんなに長いわけじゃな
いから結構大変なんだ。

「さすがだね、相田さん」

だって…。

「私にはフルートしかないから…」

…そうだよな。

「そんな」

え？

「そんなこと言うなよ。オレだって紗耶香だってみんないるんだし
さ。寂しいこと言わないでよ。何かあれば…その…守るしさ」

誠二くん…。いつまでも前のこと引きずってたらダメだよな。

「…ありがとう…。私のヒーロー誠二くん…」

「えっ？なに？」

「ううん、練習頑張ってるね！」

そして文化祭当日。

「があああああああー!!」

「きゃああー!!」

ふふ…誠二くん順調そうだな。

「最後のは反則だよー」

「うんうん、あれ誰でもびっくりするってー」

さっき入って行った人たちだ。感想話してる。

私も驚かせたいなあ。

今日の私は着物を着て、髪で顔を隠すようにしてワックスで濡れ髪を演出してるんだ。

今日の私は怖いよ?

あっ、紗耶香ちゃん。

「きゃー!めぐ、かわいい!」

か、かわいい!?

「さ、紗耶香ちゃん、怖いでしょ?」

「えーっ、誰が?」

「私!私だよ!」

「めぐが怖いわけないじゃん。誠二は?」

そんなあ…。

「誠二くんは…最後…」

しゅん…。

「ありがとう!一人入るね!」

怖さが足りないのかなあ。

「があああああああー!!」

「きゃああー!!」

「げはあー!!」

????

紗耶香ちゃん…と、誠二くんの叫び声?

…え?

「あー!すっきりした!またね!めぐ」

「あつ、うん」

すつきり？お化け屋敷で？

「いたたた…」

あつ、誠二くん。

お腹押さえてる。どうしたの？

「紗耶香ちゃん来たでしょ？」

「ああ来たよ。一発殴られた。明らかにオレを狙って来てたよ。暗いし被り物してるからオレだってわからないはずなのに」

誠二くんはフランケンシュタインの被り物を頭に被ってる。

「ねえ誠二くん。私、怖いでしょ？」

「相田さんが怖い？はははっ！全然」

せつ、誠二くんまで…！

「むしろかわいいよ」

えっ…。や、やだ…。

「じゃあオレは戻るから受付よろしくね」

「う、うん！」

かわいいって言われちゃった。へへ…嬉しいな。

あつ、お客さんだ。

「いらっしやませー」

「ず、随分にこやかなお化け屋敷だね」

「…ま…まぶ…しい」

大野先輩に田代先輩。

「お二人ですね！どうぞ」

「お化け屋敷なのにそんなに明るく送り出されてもなあ」

「…は…早く…暗闇に…」

「行ってらっしやませー」

誠二くんにかわいいって言われたんだ。そりゃあ嬉しいよう。はっ…。いけないいけない。怖い私でいなきゃならないのに。

「があああああああ…！」

「きゃあああ…！」

この叫び声は大野先輩…。やっぱり驚くのは大野先輩だけか。田代先輩は喜びそうだもん。

「あーびつくりした。あれ誰？」

二人が出て来た。

「誠二くんです」

「椿くんか、有紀をここまでさせるなんてたいしたものだな」

え？

「……ブツブツ……ブツブツ……」

「ひっ…！」

び、びつくりした！

普段見えない田代先輩の目が大きく見開かれて何かブツブツ言ってる。髪の毛逆立ってるし。

「この子、相当びつくりしてたから」

「そ、そうですか」

「…ブツブツ…の…呪って…やる…ブツブツ…」

「ひっ…！」

こ、怖い…。

そ、そうか！田代先輩を見習おう！

「じゃあまたねー！」

「はい！」

よーし！次は頑張るぞー！

「相田さん、休憩いいよ。代わるね」

あれ、今からって時だったのになあ。

「じゃあお願いしておくね」

クラスの子に代わってもらって他のクラスを見に行ったんだ。どこに行こうかな。

…とりあえず隣に。美香ちゃんのクラス。

確か…コスプレ喫茶だったっけ。

ガララ…。

「いらっしやいま…あれ？誰かこんな格好の人いたかな？まあいい

や、手伝って！」

「えっ！ちよっ！私は…！」

「こ、こんな格好してるからだ！」

「そこでコーヒー作って！」

え？え？

「早く！」

「はっ、はい！」

なっ、なんで私が…？

「ちよっと！まだ！？」

そんな急かされてもどこにコーヒーなんて…。

「オレンジジュース一つお願い…あれ？誰？」

あっ、み、美香ちゃん…！

「美香ちゃん！」

「めっ、恵ちゃん！？何してるの！？」

「あのね…」

……………。

「そ、そうなんだ。ごめんね。とりあえずこっちの席に座りなよ」

「うん」

美香ちゃんに事情を説明して席に案内されたんだ。

それにしても…。

美香ちゃんはメイドの格好しててそれがすごく似合ってる。

私なんか…。

……………

「恵ちゃん、何にする？」

「か、かわいい…」

「え？」

美香ちゃんかわいい。羨ましいな。

ん？

な、なにあれ？あれってもしかして某有名ゲームの一番最初に出て来る青いプルプルしたモンスター？さすがに私でもわかる。

見た目はかわいいけど…動きが気持ち悪い。大きいし、ピョンピョン跳ねて…。

「こ、こっちに来る…!？」

「来ないで!」

ドカツ!

あつ…蹴っちゃった。

「……………!」

転がってる。…喋れないの?

「ゆ、勇介!」

え?堀川くん!?

「ご、ごめんね!堀川くん!」

私は慌てて寄っていく。

「……………!」

何か訴えてるように見えるけど…。

「ごめんね、堀川くん。わかんないや」

だってふるふる震えてるだけなんだもん。

「美香ちゃん、じゃあね」

「あつ、うん。ごめんね、働かせちゃって」

「何にもしてないよ。…ねえ美香ちゃん」

「なに?」

「こ、今度私も着てみたいな…そ、それ」

「えっ!？」

だってメイドさん可愛いんだもん!

「恵ちゃんこういう趣味が…」

「ちっ、違うの!ただ美香ちゃんがかawaiiからだ、だから!じ

ゃ、じゃあね!」

うー、恥ずかしい!

言わなきゃよかった。

早々に教室を飛び出して今度は紗耶香ちゃんの教室へ。

焼きそば作ってるんだよね。

ガララ…。

「あつ、めぐ。いらっしやい！」

「紗耶香ちゃん。少しお腹空いちゃって」

「いいよ。すぐ用意するね」

「楽しみだなあ。」

「紗耶香ちゃん料理上手なんだよなあ。」

「はい！お待たせ！」

「うわあ！おいしそう！」

「ふふ…めぐみたいには上手じゃないけどね」

「そんなことはないよ。いただきます」

「もぐもぐ…。」

「うん！おいしい！」

「おいしいよ！」

「ふふ…ありがとう。めぐはいつも料理自分でしてるから少し緊張したんだ」

「人間だって料理だって人それぞれだよ。紗耶香ちゃんには紗耶香ちゃんの味があるよ」

「紗耶香ちゃんはきよとんとしてる。」

「ふふ…あつははは！まさかめぐがそんな事言うなんて！
な、なんで!？」

「……変ったね、めぐ。誠二のおかげかな
誠二くん…。」

「そつだよ、紗耶香ちゃん。誠二くんが変えてくれた。」

「自然と顔がほころぶ。」

「クスツ…。ほんつと、みんな誠二のどこがいいんだか
え？みんな？」

「さ、紗耶香ちゃ」

「あつ、私行かなきゃ。ゴメンね」

「みんな…って言ったよね。」

「美香ちゃんや理恵先輩？」

うっん、一言で良いつて言ってもいろんな意味があるから…。
でも…。

あーん！考えるのやめた！
もう戻らないといけないし。
受付しつかりしないと。

あれっ、誠二くん。

「あっ、相田さん。休憩終わり？」

「うん、誠二くんは今から？」

「そうだよ。ちよつと美香と紗耶香のとこ行ってみようと思つて
私と一緒にだ。美香ちゃんかわいかったからなあ。

「せ、誠二くん！私にメイド服、に、似合つと思つ？」

「へ？あ、ああ。相田さんならばうちりじゃない？」

「い、いや違つ。こういう事言いたいんじゃないよ…。」

「相田さんならどんな格好でもかわいいよ」

「カアア…！」

「も、もう、誠二くんつたら…。あ…ありがとう」

「そんなに照れたらこつちまで恥ずかしくなるな…。」

「カアア…！ま、また…。」

「い、行つてらっしやい！」

「ん、うん」

「私、何やつてんだろ。」

「ま…かわいいつて言つてくれたから、よし！

…あれ？

「お化け屋敷は？」

「閉められてる…。」

「ああ、誠二くんの代わりを出来る人いなくつて。なんか最後だけ
つて感じだからさ」

「そうなんだ。…じゃあ。」

「わ、私がやる！」

「えー、相田さんがやってもさあ」

私だつて驚かせることくらい出来るもん！

「ぜつつつたい出来る！」

「う…じゃ、じゃあ任せるよ」

「任せて！」

やってやるんだから！

つて、いざ持ち場に就いたら緊張してきた。

叫ぶだけ、叫ぶだけ…。

驚いてくれなかつたら？

そ、それは恥ずかしい。それだけは避けないと。寂しすぎるよね。

コツ…コツ…。

だっ、誰か来た！

よ、よし！やってやるんだ！叫ぶだけ…叫ぶだけ…！

来た…！

わっ…！

「わあああああああああ！！」

「あら、かわいいお化けですね」

か…河本先輩…。

「相田さんですよ。こんにちは」

そ、そんな笑顔で挨拶されても…。私…。

「うわ…！…！…！」

「あっ、相田さん…！んもう、びっくりしましたわ」

……………

「ね、無理だつたでしょ？」

クラスメートに慰めされてる。

さ、さっきのは河本先輩だったから！

「つ、次は大丈夫！」

「まだやるの？」

絶対驚かせてみせるもん！

そしてまた持ち場に…。

今度こそ…！

ん…誰か来た。…二人？
ようし…。

「わあああああああ！！」

「あら、相田さん」

「相田、君が脅かし役じゃ無理があるだろ」

日高先輩…、濱田先輩…。

「あ…あは…はは…う…うわーん！」

「お、おい、相田!？」

「相田さん!？」

もうイヤ!もうダメだあ!

「ちよつと翔子。言い過ぎたんじゃないの?」

「い、いや、私は事実をだな…」

事実…。どうせ…どうせ出来ないもん!

「あ、相田さん泣かないで。頑張ってたのはわかるから」

「そ、そうだぞ。君は立派だ!」

慰められてる…。

「君は君の出来ることをやればいいじゃないか」

「だって…誠二くんいないから…」

「椿くん?さつき受付にいたわよ?」

えっ…?

うそっ!?!?

「ご、ごめんなさい!」

「あつ、こらっ!」

先輩たちをほつといて教室を出た。

「せ…誠二くん。な、何してるの?」

ホントに受付してる…。

「ああ、相田さん、オレの代わりに中に入ったって聞いたからオレ

はここに…って…えっ?」

「う…うわーん!」

「なっ!なにになになに!?!どうしたの!?!」

「誠二くんのばかぁー！うわー！ーん！ー！」

.....

そんなこんなで文化祭の一日目が終わったんだ。

文化祭は二日間あって吹奏楽部の公演は二日目の午後から。午前中は一日目と同じように行われる。

文化祭二日目。

「がああああああー！」

「うわぁ！」

「きゃあ！」

誠二くんすごいな。今日も順調みたい。

昨日、私なんか…。

いやっ！思い出したくない！恥ずかしくて死にそう！誠二くんに泣きついちゃったし。

あっ、理恵先輩とアリサ先輩。

「恵ちゃんこんにちは。誠二くんは？」

「めぐめぐ〜濡れ女〜」

ぬ、濡れ女…。ま、間違いじゃないけど。

「誠二くんは最後にいますよ」

「わかったー。ありがとうー」

「さんきゅ〜」

どうなるかな？

あれ？

「部長」

「もう！部長じゃないっいたら！理恵ちゃんが部長でしょ
いまだに言い間違えるんだよなあ。

「誠二は？」

「最後にいますよ」

何度目だろう。この質問。みんな誠二くん。ライバル多いな。い、いや、みんな恋愛対象として見てるわけじゃないだろうし…。

「誠二くん愛でちゃおっ！」

！

「だっ、ダメですよ！そんなこと！」

「びっ、びっくりしたなあ！でも、その熱の入れよう…。はっはーん、恵ちゃん、誠二のこと好きなんだ？」

「え？そっ、そういう問題じゃなくてですね！えっと…。あの…。」「隠さなくてもいいってー。誠二かわいいもんねえ。でも、そうとわかつちやったら余計可愛がりたくなっちゃうなあ」

村田先輩が意地悪そうにやりとしながら言う。

「す、好きにしたらいいじゃないですか」

「いいのお？じゃあキスしちゃおっ」と

キッ…！？

「そ、それはやっぱり恋人同士じゃないといけないんじゃないかなあ？」

「あああ、そんなことないよ。大人のキスでとろけさせちゃおうかしら」

おっ、大人のキッ…キス…！？

誠二くんと…キス…！

カァァ…！

「そっ、そういうのはですね、や、やはり双方の合意の元に、きちり男女の恋愛感情が成り立っていることが、ぜ、前提としてですね、精神理論上…」

「め、恵ちゃん？ひ、一人入るよ！」

「……ですから人間道徳的にもやはり誠二くんとキスというのは…つてあれ？村田先輩？」

ど、どこ？

「がああああああああ！！」

も、もつ中に！？

誠二くん…！

大丈夫かな…。

何かへんなことされてないかな？

「理恵ちゃん、さつきはよくも言ってくれたわねー」
で、出て来た…！」

「だって私の方が大人な胸ですよ」

な、何の話し!？

「つじくんめ〜」

あ、アリサ先輩怒ってる？

「な、何があつたんですか？」

「ああ、誠二くんが自らアリサの胸に飛び込んだんだよ」

誠二くんが自ら!？

「そ。私と理恵ちゃんどっちの胸に来る? って聞いたら」
む、胸？

「そしたらアリサの方に行つてね。アリサはそういうの嫌いだから
誠二くん殴つちやつた」

え? アリサ先輩が殴つた? おつとりアリサ先輩が?

「あーん、私だったら可愛がつてあげたのにい」

「誠二くんは私の胸が好きなんですよ!」

む、胸だつたら私も!

「まっ、負けませんよ!」

ぐいっ!

ど、どうだ!

胸を突き出してみた。

「「「……………」」」

あつ…。

「恵ちゃんは顔と体がアンバランスなんだよねえ」

「そうそう、顔は幼いのに体だけは大人で」

「めぐめぐ〜おつきい〜。めぐめぐの勝ちい〜」

……ダメだ。私がダメになる…。

そつだ! 誠二くん! 誠二くんは大丈夫なのかな?

「誠二くん!」

「あ、相田さん…」

誠二くんの状態を確かめてみる。

「うわあ、痛そう…」

「あ、アリサ先輩を怒らせない方がいいよ…」

「う、うん」

震えてる。そ、そんなに怖いんだ。

「じゃあみんな、公演楽しみにしてるからね」

村田先輩がそう言って帰って行った。

そうそう、午後からは公演が控えてるんだった。三年生に聞いて

もらう初めての機会なんだからしつかりしないと！

「相田さん、お化け屋敷の中身教えたらダメだよ」

「えっ、誠二くんは？って聞かれたから…」

中身じゃないよね、誠二くんの居場所だよね？

「オレの居場所言ったら中身言うのも同じだからね。今度から聞か

れても黙っててね？」

「うん。わかった！」

よし、もう言わない。

でも、その後は誠二くんのこと聞いてくる人なんていなかったんだ。

そして午後。

昼休みにみんな片付けするんだけど、私たちは公演の準備にとりかかっている。

みんな、ごめんなさい。

「恵ちゃーん！楽譜持ってきてくれる？」

「はいー！」

うんしょっ…。

う…持てないかも…。楽器も譜面台も持たないといけないから。

「貸して」

誠二くん。

「ありがとう」

いちいち優しいな。

少し誠二くんとおしゃべりしながら体育館へ向かった。

「今日は先輩も保護者の人も見てるからしっかりやるうね！」

理恵先輩が声をかけてる。

日高先輩と濱田先輩もいるんだから、ちゃんと見ててもらおう。

そして吹奏楽部の公演が始まった。

何事もなく過ぎていったけど、変化が起きたのは三曲目。

「シャーーーーーン!!!!」

ビクッ…!

せ、誠二くん？

シンバル担当の誠二くんがすごく大きな音を鳴らした。

この曲はあんなに大きい音は必要なかったはず…。私でさえびっくりしたんだから。

どうしたの？

紗耶香ちゃんも理恵先輩も怒ってる。やっぱり誠二くんの独断なんだ。

そして私たちの公演が終わって生徒会の人々が閉会式の準備をしている。最後に生徒会の人たちが歌うから私たちは伴奏でそのまま待機。理恵先輩が誠二くんと何か話してる。後で紗耶香ちゃんに聞いてみよう。

それから閉会式が行われて文化祭は幕を閉じたんだ。

私たちはそのまま楽器を片付けに。

「紗耶香ちゃん、さっきの誠二くん…」

「あああれでしょ。なんか私たちの演奏で寝てる人がいたのが気にいらなかったみたいだよ。仕方ないのにな」

興味がない人には子守唄だもんね。

「でも…」

え？

「寝てる人がいて怒るだけ吹奏楽が好きなんだよ。周りを見る余裕も出来てるみたいだし」

そっか……。誠二くん……。

「でもあとできっちりバツを与えないとね！」

これも仕方ないね。誠二くん。

私たちは楽器を片付けて教室へ戻る。

「みんな！二日間お疲れ様！この後生徒会による後夜祭が予定されてるけど、参加は自由だから、行く人は行く！帰る人は帰る！はいっ！解散！」

本田先生の適当な言葉で今日の終わりを迎えた。

後夜祭……か。

誠二くん行くのかな？聞いてみよう。

「あ、あの……誠二く……」

「めぐー！後夜祭りこー！」

あ……。

「さ、紗耶香ちゃん。でも……」

「はーやーくー！行こー！」

「う、うん」

誠二くん……。

行くのかな？帰っちゃうのかな？

半ば強引に紗耶香ちゃんに連れられて後夜祭会場のグラウンドにやってきた。

「うわー、カップルばっか！」

ホントだ……。誠二くと二人で来たらカップルだって思われたのかな。

「ねーねー、生徒会が何かやるみたいだよ！」

「……うん……」

「めぐ、どうしたの？元気ないね」

「……」

「ねえめぐ。めぐは誠二のこと好きなの？」

「……っ！」

「……」

「あははっ！かわいい！顔真っ赤にしちゃって」

うっ…でも、紗耶香ちゃんなら。

「うん。…そうなんだ。私、誠二くんのこと好きなんだ」

「うん」

「誠二くんは私の中学のときのこと聞いても普通に接してくれた。

うっん、それどころか助けてもらった。今私が笑ってられるのも誠

二くんのおかげだと思うし…」

「うん…」

「それに守るって言うてくれた。誠二くんの声聞いてたら安心するんだ。ああ、大丈夫なんだな。か、かつこいいし…！」

「めぐ…最後のは納得出来ないけど私はめぐを応援するよ！美香ちゃんには悪いけど」

「えっ！」

美香ちゃん…やっぱり…。

「多分…、うっん、絶対美香ちゃんも誠二のことが好きだよ」

「…そっか…」

「ライバルだね！美香ちゃんと」

私は…。

「美香ちゃんが誠二くんを好きなら私は…」

「めぐ…、たとえ美香ちゃんも傷つけたとしても自分の気持ちは大切にしないと」

「でも…美香ちゃんとは仲良くしていきたいし…」

「誠二はめぐか美香ちゃん、どっちか一人しか選ばないよ。どっちでもないかも知れないし。傷つくか傷つけるかどっちかしかないよ」

「それなら私は…」

「自分の気持ちは大事にしなきゃ。一生後悔するよ？」

紗耶香ちゃん…。

「うん。そうだね。ダメだったとしても自分の気持ちはちゃんと伝えないとね！」

「そう！その意気だよ！」

ふふ…ありがとう、紗耶香ちゃん。ちょっと勇気出たよ。

「めぐ、今からフォークダンスだって。なんか場違いだね。帰っちゃおう?」

「うん、帰ろう」

来年は…誠二さんとフォークダンス踊りたいな。

紗耶香ちゃんから勇気をもらった。この先、美香ちゃんを傷つけるかもしれない。美香ちゃんと仲良くしていきたい。でも、想いを伝えるんだ。

いつか…。

ライバルだね…美香ちゃん。

でも、友達だよ。

みんなとも、ずっと仲良くしていきたい。

椿誠二くん。

私はあなたが好きです…。

クリスマス

もう、肌に当たる風が冷たくて痛みさえ感じてしまうほどの季節。今日は雪。

そしてクリスマス。

ホワイトクリスマスだ。

朝、寒さで目が覚めた。

まだちらほらと雪が降り始めたがかりだったけど、このままいけば積もるんだろうな。

今日は学校の近くの養護施設のクリスマスパーティーで演奏をして、午後からは吹奏楽部のクリスマスパーティーがあるんだ。

誠二くんへのプレゼントはもちろん用意してある。手袋を編んだんだ。使ってくれるかな？その前にちゃんと渡せるかな、私…。

その時のことを考えると少し緊張してしまう。
ぶるる…。

うっ…寒い！

温かいものでも飲もう。

吹奏楽部のクリスマスパーティーは村田先輩のレストランであるんだ。

今年は賑やかなクリスマスになりそうだな。いつも紗耶香ちゃんと二人だったもんな。

街中もクリスマス一色。カップルや家族連れで賑わいを見せる。いつもそんなみんなが羨ましかった。お父さんとお母さんからはいつもプレゼントが届いてたけど、私はただ一緒に過ごしたかったんだ。

いけない、しんみりしちゃう。

準備しないと。

いつものように鏡の前で髪を梳かしてリップクリームを塗る。パーティーの前には一度帰って来るからプレゼントは置いたまま。

さ、行かないと。

……。

とりあえず学校に集合してから養護施設へ。

演奏するのはクリスマスソング。施設の人たちには滅多にない機会だから楽しんでもらえたみたい。

滞りなく施設での演奏が終わってから今度は吹奏楽部のクリスマスパーティーのために解散。

一度帰ってから準備する。

ちよつとはオシヤレしないかね。

普段あんまりスカートはかないんだけど……。この日は白を基調としたコーディネート。少しだけ丈の短いスカートと白いコート。

誠二くんってどんな服装が好みなんだろう。

ピンポーン

あつ、紗耶香ちゃんかな。もう来たんだ。

急いで支度そして玄関へ。

ガチャツツ。

「めぐー、行くよー」

「うん、ごめんね。待たせちゃって」

「うわっ、めぐかわいい！似合ってるよ！ん？それって誠二にプレゼント？」

私が手に持っている袋を見て聞いてきた。

「うん。今日渡そうと思って」

「めぐはいざという時ダメだからなあ。ちゃんと渡せるの？」

「だ、大丈夫だよ！ちゃんと渡せる！」

「ふふ…わかったよ。そんなムキにならないで。行こう」

もうー、紗耶香ちゃんつてば。

村田先輩のとのレストランはバスを降りてバス停からすぐ近く。そんなに寒空の中を歩かないでも着く距離にあるんだ。

「二人ともいらっしやい。今日は先生が大人の事情で来れないから

私がまとめるよ」

村田先輩がそう言う。三年生は村田先輩だけなんだ。まあ、自分のとこのレストランだしね。

誠二くんはまだ来てないのかな？来ててもいきなりプレゼントあげるのもなんだかね…。

そんなことを思っていたら誠二くんがやってきた。だけど一人じやなくて美香ちゃんと堀川くんと一緒。一人にならないかな…。

「みんな集まったかなー？今日は楽しんでいてね！メリークリスマス！乾杯ー！」

村田先輩が挨拶をしてパーティーが始まった。

「メリークリスマス。恵ちゃん」

「メリー…クリスマス…」

「大野先輩、田代先輩。メリークリスマスです」

やっぱり二人ともオシャレしてる。クリスマスなんだしね。でも田代先輩黒い…。私と全く逆だ。

「んー？それは何かなー？」

大野先輩が私が持っている紙袋を見て言う。

「えっ、あ、あの…これは…」

「ふーん…誰にあげるのかなあ？」

「いえっ…あの…」

「…愛理…やめる…」

「わかったよお。ふふ…頑張つてねえ」

はあー…目立つちゃうのかなあ、これ。早く渡したいな。

「めぐめぐ〜」

「恵ちゃん、メリークリスマス」

「アリサ先輩、理恵先輩。メリークリスマスです」

「誰に〜プレゼント〜？」

や、やだ、また…。

「誠二くんでしょー？私も誠二くんにプレゼントあるよー」
えっ！

「きつと誠二くん私にメロメロになるんだろうなあ」

「そ、そんなにいいもの？ちよつと気になる…。」

「な、何をあげるんですか？」

「それは秘密だよ！。私の魅力がいっぱい詰まったものだよ」

「理恵先輩の魅力…。」

「む、胸にこだわってるからな、この人…。」

「私は…これ…」

「え？」

「そつやつてアリサ先輩に一冊の本を渡された。

…な、何これ？」

『女体大全集』

「ア、アリサ先輩、これ何ですか？」

「見た…まんま…」

「これは誠二くん喜びそうね」

「え？え？」

「つじくん…えつちい…だから…」

「さ、渡して来ようー」

「誠二くん…。あんなの好きなんだ…。お、男の子だもんね！」

「や、やつぱり私もあんなのをあげた方が誠二くん喜びのかな？」

「…ダメ、ダメだよ、恵。うちの先輩は見習っちゃダメなの。で

も…む、胸だったら…ねえ…私も…。」

「めぐ」

「ひゃあっ！」

「な、なに？」

「あつ、さ、紗耶香ちゃん」

「変なこと考えてた、私…。」

「いきなり声かけたらびつくりするよお」

「ごめんごめん。これおいしいよ。はい、めぐの」

「なんて、いたらぬことを考えてたから驚いたなんていくら紗耶香ちゃんでも言えないな…。」

「ありがとう」

紗耶香ちゃんから料理を受け取った。

「んー？まだ渡してないみたいだね」

「うん…。誠二くん一人じゃなかったし、今も理恵先輩たちが行っちゃったから」

「ふーん…誠二呼んで来てあげようか？」

「えっ、いや、いいよ」

「ホントに？」

「うーん…。」

「や、やっぱりお願いしようかな…」

「任せて！呼んで来てあげるけどちゃんと渡すんだよ？」

「う、うん」

そして紗耶香ちゃんが誠二くんを呼びに行ってくれた。

「どうしよう、すぐ来るかな？」

緊張しちゃう…。」

「相田さん」

「ビクッ…！」

「あ、せ、誠二くん。メ、メリークリスマス」

「メリークリスマス。紗耶香から探してたって聞いたけど？」

「あ、あう…。」

「相田さん？」

「渡すんだ！」

「あ、あの！…これ…クリスマスプレゼント…」

「持っていた紙袋を差し出す。」

「えっ！？ホントに！？ありがとう！…」

「喜んでくれるかな…？」

「開けていい？」

「う、うん」

「どうかな…？」

「ガサガサ…。」

「手袋…」

「う、うん。誠二くん持ってないみたいだったから。頑張って編んだんだ」

「しかも手編みなんて…。やっとまともなプレゼントだ…！ありがとう！大事に使わせてもらうよ！」

よ、よかったあ。喜んでくれて。やっとまともなプレゼントって言ったけど…やっぱり理恵先輩たちのは変なやつだったんだ。

「でも…」

え？

し、失敗しちゃってたかな？

「オレ、何も相田さんに用意してきてないよ」

なんだ…。そんなのいいのに。

「何か…」

考え込んでる。逆に困らせちゃったのかな？でも、喜んでくれてたし…。

……誠二くんが欲しいなんて、バカなこと言えないよね。

…そうだ。

「じゃあさ…」

「うん」

「今度一日付き合ってくれない？」

いい…かな？

「あ…ああいいよ！そんなんでよければ」

「ホント！？絶対だよ！」

「う、うん！」

やったあ！わーい！！

「ありがとう誠二くん！」

「こっちこそ。大事に使うからね」

「うん！」

そこまでで私は誠二くんの前から走り去った。もう嬉しくて嬉しくて…！でも誠二くんはどうしたんだ？って顔で見てたからすぐに

逃げちゃった。

紗耶香ちゃんにお礼言わなきゃ！

紗耶香ちゃんは…。

居た！

「あつ、めぐ。どうだった？」

「渡せたよ！ありがとう！紗耶香ちゃん！」

「ふふ…よかったね」

「うん！デートの約束もしたし」

「デート！？」

「うん！楽しみだなあ」

「めぐ…意外にやるね」

えへへ… たった一日だけど誠二くんを独り占め。

顔のにやけが止まらないよお。

「やっぱりね！」

む、村田先輩…！聞いてたの！？

「あ、あの…」

「照れなくてもいいから。誠二かわいいからね。みんな誠二が好き

だよ」

「私はそれほども…」

「紗耶香ちゃんだってー。ホントは好きなくせにい。ほら、好きな

人はいいイジメてしまっつてあるじゃない？素直になれなくてさ」

紗耶香ちゃん…そしかしてそうなのかな。だとしたら私は紗耶香

ちゃんにひどいことを…。

「めぐが勘違いするようなと言わないで下さい！誠二はただのお

もちゃですよ！」

お、おもちゃ…。

「おもちゃを取り上げられたら泣いちゃうでしょ？」

「村田先輩…！」

「あはは…！冗談だよ。恵ちゃん頑張つてねー！」

行っちゃった。からかいに来ただけなのかな。

「めぐ、勘違いしないでね？誠二のことなんか何とも思っていないからね？」

「誠二くんのこと好きなの？」

「紗耶香ちゃん…。」

「だーかーらー、違うよー！私はもっと大人な感じの人がいいから」「そっか」

安心しちゃった。紗耶香ちゃんとは競いたくないから。

「はい！今日はもうそろそろお開きにするよー！こっちもクリスマスは稼ぎ時だからね！みんな良いお年をー！」

村田先輩の挨拶？でクリスマスパーティーはお開きになった。

「村田先輩めー。しれっとしてるなー」

紗耶香ちゃんは恨めしそうに村田先輩を睨んでた。

「紗耶香ちゃん、恵ちゃん」

え？

「美香ちゃん、どうしたの？」

「初詣はいつもどうしてるの？私たちはいつもみんなで行ってるんだけど、二人も一緒に行かない？」

初詣か…。みんなって誠二くんもいるんだよね。

「行く。紗耶香ちゃんも行くよね？」

「えー、私は」

「行くよね？」

「め、めぐ？うん、い、行こうかな」

「じゃあ決まりだね！また連絡するねー！」

「うん、ばいばい。美香ちゃん」

しばらく手を振って見送っていた。

「ねえ、めぐ…。」

「やっぱり、心細いから…。」

「そういうことだね。ふう…わかったよ」

「ゴメンね？」

「どうせ寝正月になるんだし、いいよ！めぐも一緒なんだし」

「ありがとう」

「それよりもデート、しっかりね！」
そうだった！

「どどっ、どうしよう！紗耶香ちゃん！」

「今さらー？ホントめぐはかわいいな！。ふふ…」

「な、何したらいい？」

「そんなの知らないよー」

そんな話しをしながらその日は帰った。

メリークリスマス、誠二くん。

帰り道では、こっそりめぐ雪だるまと誠二雪だるまを作ったりしてたんだ。

デート

ゴソゴソ…。

これ…。

…

うっん、やっぱりこっち。

…

でも…。

今日何来て行こう…。

「あーん！どうしよー！」

今日は誠二さんとデート！そう思ってるのは私だけだろうけど。

待ち合わせは午前十一時に誠二くんが住む柳ヶ浦町のアーケードの公園の噴水前。

緊張してあんまり眠れなかったんだ。

「やっぱりお気に入りの服にしよう」

少しメイクもして…っと。

…

こんなもんかな…。

まだ十時…。

少し早いけど行って待つてようかな。早く会いたいし。

よしっ！行こうっ！

バス停に向かって歩いて行く。

その足は自然に急ぎ足になった。

あっ！

バスが停まってる！

柳ヶ浦町通るみたい、急いで！

「乗りまーす！」

乗り口のドアを叩いて乗せてもらった。

「はあっ…はあっ…」

いい具合に体温まったな。

今日は何しようかな。一日付き合ってたって約束したけど…、こう
いう時ってどうしたらいいんだろ。お昼食べたりはもちろんだろ
うけど…。

映画？今何が上映されてるかなんてわからないしな。ショッピング
…。欲しい物とかないし。

『次は柳ヶ浦町アーケード、柳ヶ浦町アーケード』
着いちゃったか…。

運賃を払ってバスを降りる。

待ち合わせの公園はすぐ近く。

待ってる間に考えよう。私が誘ったんだし。

公園の噴水…。

あ、あれ？

「誠二くん！」

誠二くんはもう待っていた。

「相田さん、早いね」

「誠二くんこそ。私は、は、早く会いたかったから…」

「え？早く会いたかった？」

「あ、あの…。早く遊びたくて！約束は一日だし」

「ああ、そういうことが」

誠二くん、今日もかっこいい。

ジーンズにジャケット。細身の体によく似合ってる。

「今日はどこに付き合えばいいの？」

どこに…どこ？結局決めてない。元々こっちのこと知らないしな。

「特に決めてないよ」

正直に言おう。

「え？そうなんだ」

どうしよう…。私は会えただけでも嬉しいんだけど…。

「誠二くん、少し街をブラブラしよう？」

「あ、ああいいよ」

そしてアーケードの法に向かったんだ。

「えへへ…」

自然に顔がほころんじゃうな。隣に誠二くん。一緒に並んで歩いてる。学校以外で。

嬉しい…。

でもこれが恋人同士なら手を繋いだり腕を組んだりして歩くんだろうな。

誠二くんと腕組んで歩いたら…。

きゃー！どうしよう！

あつ…。

誠二くんが何？って顔で見てた。一人でトリップしちゃった。

「せ、政治くん。あそこの雑貨屋寄っていい？」

「ん？ああいいよ」

誤魔化し成功…かな？

誠二くんと雑貨屋に。

「いらつしゃいませー」

うふふ…周りから見たらカップルに見えるのかな？一緒に店に入ったりしたら。

しばらく店内を見て回る。

あつ…。

相性占いの本…。

誠二くんととの相性は…これ、誕生日占いか。

「誠二くん、誕生日いつ？」

「え？六月二十二日だけど？」

六月二十二日…。

相性…八十五パーセントか。いいんじゃない？

「相田さんの誕生日は？」

「私は七月十七日だよ」

誠二くんも見るのかな？

あつ！その本…！

「相性いいね。オレたち」

それ、体の相性占いなのに…。

「え、えっちだね。誠二くん」

「え？えっち？…うわっ！」

わざとじゃなかったんだ…。誠二くんはえっちって聞いてるからな。

相性いいんだ、誠二くと…。キスしたり…あんなことが…。
ぼ…。

誠二くとキス…誠二くとキス…誠二くと…。

「あの…相田さん？」

「私たち、相性いいんだあー？」

誠二くと…誠二くと…。

「あ、あの！お腹空かない？」

え？お腹？

はっ…！私、何考えてたんだろ。誠二くと二人っきりのときに…。

カアア…！

「お、お腹、空いたかも」

「じゃあ少し早いけどお昼にしようか」

「うん」

誤魔化せたかな？顔赤くなってなかったかな！？でも早起きしたからお腹空いたっていうのも本当なんだよね。

「相田さん、何食べたい？」

店を出て何を食べようか話す。

「誠二くんが好きなものでいいよ！」

へへ…これで誠二くんの好みがわかるかも。

「困ったなあ。オレ、好き嫌い激しいよ？」

そうなんだ。

「たとえば？」

「野菜、魚介、なまもの全般！」

……かわいい。

「誠二くんって案外お子様なんだね！」

誠二くんは少し驚いた顔をした。

「誠二くんのお嫁さんになる人は大変だね！」

私なら…嫌いなものでも食べやすいように調理して…。誠二くんの健康管理もしつかり…。

「相田さん」

「え？」

「あそこのファミレスでいい？」

「あつ、うん！」

最近、妄想癖ついてきたかも…。

ファミレスに移動して席に着いた。中はカップルや家族連れで賑わっていて、おいしそうな匂いが漂っていた。

「相田さん、メニュー」

「ありがとう」

うわぁ、どれもおいしそう…。

誠二くんは食べられるもの限定されるんだよね。

「決まった？」

「誠二くんと同じものでいいよ！」

「うーん…」

また困らせたかな？

「じゃあハンバーグ定食でいい？」

「うん！」

ベルで店員さん呼んで誠二くんが注文した。

「この後どうするの？」

「誠二くんは何かしたいこととかないの？」

「今日は間さんに付き合ってるんだから、相田さんがしたいことしていいんだよ？」

でも…。

「それじゃあ誠二くんつまらないでしょ？何かあったら言ってね」

「お待たせしました。ハンバーグ定食お二つですね」
しばらく誠二さんと話してたら料理が来た。

「いただきます」

モグモグ…。

ん、おいしい。

なんか…男の子の前で食べるのって恥ずかしいな…。
ん？

「せ、誠二くん。あんまり食べてるとこ見ないですよ」
なんか見られてたな。

ん？

ガッツポーズ？

「どうしたの？」

「な、何でもないよ」

変なの…。

あーっ！

「もう、誠二くんったら。私が食べてあげる」

誠二くんは添えてある野菜とかには一切手をつけていなかったんだ。
だ。

「あ、ありがとう」

ふふっ…少し照れてる。かわいいな。

食事を済ませて外に。

食事代は誠二くんが払ってくれた。いって言ったんだけど経は
私が主役だからって。

「ふうー、食べた食べた！」

ふふ…満足そう。今度私も何かご馳走しないと。わ、私の手料
理なんかどうかな！？

それから街中をブラブラしたりちよつと買い物したりしてた。

私は何かしたいとかじゃなくて、こつやっつて肩並べて歩けるだけ
で満足なんだ。

この場所…誠二くんの隣を私だけの場所にしたい…なんて、わが

ままかな？

「相田さん」

「なに？」

「あそこ寄ろうか。ゲームセンター」
ゲームセンターか。私ゲーム苦手だけど…。

「うん」

そしてゲームセンターの中には入った。
あんまりこういうところ来たことないんだよなあ。
あれもこれも、こういうゲームなんだろう。
あつ！あれつて…うん、そうだ。

「誠二くん、あれやつて？」

「え？」

確か…太鼓の鉄人、だったかな。

「一緒にやる？」

「ううん、見てるよ」

出来ないもん。

そして誠二くんがプレイする。

………

「誠二くんすごい！」

完璧だった！

「ふふ…。相田さんもやってみなよ」

えー…。

「ねっ」

うっ…そんな顔で見られたら…。

「じゃあ一回だけ」

パークッションのつもりで。

ドンツカツ、カカカツドンツ…。

うわわ…！難しい…！

パークッションってすごいんだ。誠二くんってすごいんだ。

「うー…だめー…出来ないよお」

「ははっ、いい感じだったよ」

誠二くんが笑ってくれてるんならいつか！

「じゃあ次あれやるっか」

レースゲーム…。

私は何も出来ないよう。

誠二くんはホントにゲーム好きなんだな。

それからレースゲーム、エアホッケー、コインゲームなんかをして遊んだ。

コインゲームおもしろかったな。誠二くんの隣に座って遊べたし。

「かわいい〜！」

クレインゲームの景品にカエルのぬいぐるみがある。目がすごくかわいい。

「カエル好きなの？」

「そんなわけじゃないけどメがかわいいなって」

「待っててね」

あっ、誠二くん取れるのかな？

ウィーン…。

「誠二くん、得意なの？」

「多分、大丈夫」

あっ、アームがかかった！あれ？隣のぬいぐるみにも…。

すごい！二つ持ち上げた！

そのまま…そのまま…。

ゴットン…。

「はい、相田さん」

「すごい！いっぺんに二つも取っちゃった！」

「ふふ…」

もうひとつ取れたぬいぐるみはおたまじゃくしのぬいぐるみ。これは誠二くんに。

「はい、これは誠二くんに」

「あ、ありがとう」

初デートの記念だな。

そうだ！

「今日の記念だね」

「うん」

「記念ついでにさ、誠二くん。あれ…一緒に撮らない？」

「え？」

私が指差した方を見て政治くんが驚いた顔をしてる。

「プ、プリクラ撮るの？」

「やっぱり…私なんかとはイヤなのかな？お願いしよう。」

「誠二くん、ダメ？」

「甘えてみよう。」

「うっ…。い、イヤじゃないけど…。あんまり撮ったことないからわからないよ？」

「私が全部するから！ねっ！行こう！」

半ば強引に誠二くんをプリクラに。

「やっぱり…この空間がなあ。なんというか、照れくさいんだよな

あ

「そんなこと言ったら私も照れくさくなっちゃう。」

「頑張れ…私！」

「お金入れて…背景はこれとこれ。明るさは普通でいいかな。」

「誠二くん、あのレンズ見ててね」

「うん。…って相田さん！？」

「プリクラではこのポーズが当たり前だよ？」

「誠二くんと腕を組んで寄り添う形。ちょっと勇気を出してみた。」

「そうなんだ…」

「ゴメンね。私のわがまま聞いてね、誠二くん。」

「パシヤッ。」

「今度はアップだね」

「うわわっ…！」

「レンズの前に二人で肩を寄せて…。」

パシヤツ。

「もう一枚!」

パシヤツ。

「また腕組んで?」

「う、うん」

パシヤツ。

終わり…かな。

誠二くんは…ふふ…疲れた顔してる。

「終わりだよ。お疲れ様!らくがきは私がするから誠二くん座っていいよ!」

「うん、ありがとう。そうしようかな」

さーて、らくがきらくがき…。

今日の日付と…あとは…。

えーい!書きちゃえ!

初デート…めぐみ…せいじ…私の大好きな人…。
…………。

み、見せられない…。

これはあんまりだよな。勢いでかいちゃったけど。やっぱり日付と名前くらいにしよう。全部に書きちゃったから消さないと…。

『らくがき終了だよ。しばらく待っててね』

えっ…ええっ!?!?

ちよっと早くない!?

どうしよう!?!?どうしよう!?!?

…見せる?

ううん、無理無理!

『出来上がりだよ』

出来た…。

……………

あー…………。

見事なもんだあ…。

写りが悪かったことにしよう…。

「ごめんなさい、誠二くん。」

「お待たせ」

「あっ、出来たんだ。見せて?」

「うっ…。」

「ダ、ダメ…」

「え?なんで?」

「う、写りが悪かったから見られたくないんだ」

「誠二くんの反応、ど、どうかな?」

「女の子だからね。仕方ないかな」

「やっぱり優しい誠二くん。」

「ごめんなさい。罪悪感でいっぱいです。誠二くん頑張ってくれてたのにな。」

「いつか…見せることの出来る日が来たら。」

「もう暗くなってきたし、そろそろ帰ろうか?」

「もうそんな時間」

「イヤだな…。」

「相田さんの親も心配するだろうし」

「え…わ、私は…」

「うっん、いいや。家には私一人なんて。私がホントに帰りたくなくなっちゃう。」

「バス停まで送るよ。バスの時間合わなかったらバスが来るまで待つてるよ」

「誠二くん…。」

「ありがとう。でも…。」

「ここでもいいよ!今日はありがとう!」

「え?あ、相田さん!?待って…」

「引き止めないで…」

「これ以上は…帰りたくなっちゃうから…」

「え?」

「な、何でもないので！じゃあ、またね！」

私は誠二くんの前から走り去った。

名残惜しいけど…。

…誠二くん…。

振り向いちゃダメ…！

……。

誠二くん…！

私は立ち止まって振り向いた。

あ…。

誠二くんが手を振ってくれてる。

ブンブンツ…！

私も手を振り返す。そしてまた振り向き走り出した。

えへへ…誠二くん…。

今日は楽しかったな。

「はあ…はあ…………はあー………」

バス停までたどり着いた。

プリクラ…。

ふふっ…誠二くん、顔赤いな。かわいい。そんなに照れてたのかな。

私の宝物にしよう。

今日はありがとう、誠二くん。

大好き…。

空気は冷たくて、今まで隣に居た人の暖かさがわかる。

もうすぐ年が明ける。十二月の寒空の中だったんだ。

初詣

「明けましておめでとう。紗耶香ちゃん」

「めぐ、明けましておめでとう。さ、行こう」

「お邪魔します」

「明けましておめでとう。恵ちゃん」

「明けましておめでとうございます」

今日は元旦。

朝の五時前。

美香ちゃんたちとの初詣の約束をしたから、紗耶香ちゃんのお父さんに送ってもらってる。まだバスは動いてないから。

「めぐー、誠二とのデートはどうだったのー？」

「うん…楽しかったよ。そして、私…決めたよ」

「何を？」

「誠二さんに告白するー！」

「ええ！？今日！？」

あのデートの後、すごく寂しかった。やっぱり誠二さんの隣にいたいと思った。

「ううん、まだ。美香ちゃんに話してから」

「美香ちゃんに…に？どうしてわざわざ」

「仲良くしたいから。それにフェアにいきたいんだ」

「でも…」

「美香ちゃん、多分ずっと誠二くんのこと好きだったんだと思う。

だから…。美香ちゃんと分かり合ってるから」

「はあー…バカ正直だねー、めぐも。早いもの勝ちなんじゃないの？」

「もしそれで誠二ちゃんと付き合っても不安なの。ただ告白したから、とかじゃ」

「そういえば、誠二は告白とかそういう話しはしたくないって言う」

てた」

「えっ…どうして？」

「分からない。美香ちゃんは何か知ってるみたいだったけど…。確かに美香ちゃんは誠二のことずっと好きだったみたいだからね。でも何か告白出来ない理由があったのかもしれないね」

「誠二くん…。美香ちゃんしか知らない何か？」

「そういう意味では美香ちゃんに話した方がいいかもね」

「私はそんなんじゃない」

「誠二くんを探るような真似はしたくない。」

「分かってるよ。めぐはめぐの気持ちを大事にして」

「紗耶香ちゃん…。うん！」

「いやー、青春ー青春！」

「お父さん、茶化すんなら殴るわよ？」

「恵ちゃん、頑張りなさい」

「え？は、はあ…」

…美香ちゃん。

さっきの話しが気にならないって言えば嘘になる。けど…それが想いを伝えられない理由になるとは思えない。

何も分からないけど、私はそう思う。

キキッ。

「着いたよ。帰りはバスで帰ってくるんだろ？」

「うん、ありがとう。お父さん」

「ありがとうございました」

「恵ちゃん。ぜひ、後で話しをぐぎゃー！」

「黙ってー！」

「さ、紗耶香ちゃん！」

お父さんを殴るなんて！

「いたた…いや、いいんだよ。いつものことだから」

いつも…？

「余計なことは言わなくていい！行こう！めぐー！」

「う、うん。あの、ありがとうございました」

「ははは、頑張ってたね」

紗耶香ちゃんのお父さんは帰って行った。

「ごめんね、めぐ」

「ううん、全然」

むしろ緊張がほぐれたかな。

そして神社の階段を上がって行く。

あっ。

「明けましておめでとう。相田さん。紗耶香」

誠二くん…。

「明けましておめでとう」

「二人とも、明けましておめでとう」

美香ちゃん…。今日話すんだ。

「明けましておめでとう」

「さて、参拝済ませよう」

もう境内は人が多かった。

チャリーン

お賽銭を入れてお願い事を。

願いはもちろん…。

……

みんな、何をお願いしてるんだろう。

誠二くんは…？

みんな参拝が終わっておみくじを引こつてことだ。

今年最初の運試し。

お願い…！

カランカラン…。

中身は…？

大吉！やったあ！

「みんな、どうだった？」

紗耶香ちゃんがみんなに聞く。

「「大吉!」」

私と紗耶香ちゃんと美香ちゃんは大吉。誠二くんは?

「オレは中吉!」

「ぷっ、そんなもんよね」

「うるさいなあ。勇介、お前は?」

堀川くん、居たんだ。

「聞くな…わかるだろ?」

「凶…か?」

「……………」

「ぷっ……………」

「笑いたきや笑え。誠二」

「ぶはっ…!はははははは!」

「てめえー!誠二ー!」

「はっははは……………」

「待ちやがれー!」

誠二くんが逃げて堀川くんが追いかけて行っちゃった。

「もうー、新年早々あの二人は……………」

…今は私と紗耶香ちゃんと美香ちゃんだけ。

ゴクツ……………」

「み、美香ちゃん。ちよつといい?」

「ん?なーに?」

「あっ!めぐ、知り合いがいたからちよつと行ってくるね!」

「あっ……………」

ありがとう。紗耶香ちゃん。

「あ、あの!美香ちゃん!」

「な、なーに?」

「美香ちゃんは……………」

「ん?」

「美香ちゃんは誠二くんのこと…好きなの?」

「……………ふえ?…えええええ!」

間違いないな。

「なっ、なんで私がつ、せつ、誠二なんか！」

美香ちゃん…。

「私は好き…」

「……え？」

「私は誠二くんが好き！大好き！」

「め、恵ちゃん？」

美香ちゃんは…。

「美香ちゃんは？好き…なんでしょ？」

「わ、私は……」

「……」

「…うん…好き…だよ。ずっと好きだった。でも、どうして？」

「……」

「私、誠二くんに告白する」

「えっ……」

美香ちゃんは困惑の表情。突然こんなこと…びっくりするよね。

「美香ちゃんは？」

「え？」

「美香ちゃんは…どうして想いを伝えないの？ずっと前から好きだっ

たのならなおさら」

「…ダメだったから」

え？

「誠二を傷つけたくなかったから」

どうして？想いを伝えたら誠二くんが傷つくの？

「誠二は…前に付き合ってた子がいたんだ。優花って子が」

それが…なに？

「誠二はね、優しいの」

「そんなことわかってるよ。私を助けてくれた」

「…そして臆病なの。ううん、臆病だった」

えっ…。

「どっぴいっ…」

「前にその優花って子を誠二がひどく傷つけたんだ。たまたまその子が誠二に告白してなんとなく付き合ってたんだって」

「……………」

「でもね、誠二はその子を好きになることはなかったんだ。そして別れを告げてその子を傷つけたの。泣かせたの。中途半端なことをしてしまったから」

「だからって…」

「それから誠二は誰とも付き合っていない。告白されても。相手を傷つけたくないから」

……………。

「誠二は前に言ってた。自分が好きにならないと無理だって。その時は自分から告白するって」

「……………」

「誠二は告白されるたびに言ってた。また傷つけたって。そんな誠二を見てたら、とてもじゃないけど自分の気持ちは言えなかった。

それに、私はただの幼馴染。それが多分、誠二が見てる私」

「…………それは違うと思う」

「え？」

「誠二くんは美香ちゃんをただの幼馴染なんて思ってないと思う。誠二くんは美香ちゃんと話す時は違うの。心を許してるというか…とにかく違うの」

「そ、それは幼馴染だから…」

「そうかもしれないけど、ただの幼馴染じゃない。うまく言えないけど、そう思うの」

「恵ちゃん…」

「私は美香ちゃんが羨ましい」

「え？」

「誠二くんが一番近くにいるから」

「そ、そんなことないよ」

「私は誠二さんの隣にいたい。一番近くにいたい。私、やっぱり誠二さんに告白する」

「恵ちゃん。でも、誠二は…」

「私は自分の気持ちを大切にしたい！誠二さんを好きな気持ちは本物だから！私は…逃げない…！」

「恵ちゃん…」

「美香ちゃんは誠二さんとこのままでいいの？誠二さんを傷つけないなんて、優しさでも何でもないとと思う。ただ逃げてるだけ…」

「そ、それは…」

「私は決めた。ううん、決めてた。私の気持ちは変わらない」

「……ふふっ…まいったなあ。それなら…私も負けてらんないのかな」

「美香ちゃん…」

「恵ちゃんと誠二は…。ううん…。誠二は今、前に進もうとしてたんだ。優花ちゃんていう過去の幻影と、誠二はケリをつけたばかりなんだ」

「え？」

「だから今なのかもしれないかなに？」

「私、負けないよ。恵ちゃん」

「あっ…。うん。私も負けない。私…バレンタインデーに告白する」

「じゃあ、私もその時に」

えっ…。

「美香ちゃん…。ふふっ、ライバルだね」

「そうだね。強敵だなあ」

「そ、そっちこそ！」

「恵ちゃん…ふふふ…あははっ…」

「……あはっ……へへ…」

ライバル宣言、しっちゃったな。

.....

「ねえ、美香ちゃん」

「ん？」

「私は、結果がどうなるかと……美香ちゃんと仲良くしてたいんだ。……わがままかなあ？」

「……うん。わがままなんかじゃない。私たちはライバルだけど、ずっと友達だよ！私からもお願いしたいな」

「ずっと……友達……」

「……えへ……」

「ふふつ、敵わないなあ。恵ちゃんの笑顔には」

「たとえ誠二くんがどっちかを選んでも……」

「うん……私たちは友達だよ」

「美香ちゃん……」

「恵ちゃん……」

「「負けないよ！」」

.....

「……はあっ……はあっ……。あれ？紗耶香は？」

誠二くんが息を切らして戻って来た。

私と美香ちゃんはお互いに見合っただけ笑い合った。

「紗耶香ちゃんは知り合いを見かけたみたいで挨拶に行ってるよ」

「ふーん……」

「みんな！明けましておめでとう！」

「あけ〜おめ〜」

そこに理恵先輩とアリサ先輩がやってきた。

「明けましておめでとうございます」

「みんなもうお参りは済ませたの？」

「はい。みんな済ませましたよ。紗耶香もいます」

「そう。じゃあ私たちも済ませて来るからみんなで遊ぼうよ……」

「オレはいいですけど……」

どうせバスはまだ出てないし誠二くんがいるなら。

「私も。紗耶香ちゃんも大丈夫だよ」

「私もいいよ！」

「じゃあ決まりだね。待っててね！」

理恵先輩とアリサ先輩はお参りを済ませに行った。

「めぐ…」

あつ、紗耶香ちゃんが戻って来た。

「ありがとう。紗耶香ちゃん」

「ううん。美香ちゃん…」

紗耶香ちゃんが美香ちゃんを見ると、美香ちゃんは笑顔でそれを返した。紗耶香ちゃんも安心したように笑ってた。

「この後、理恵先輩とアリサ先輩を入れて遊ぶんだけどいいよね？」

「バスはまだだしね。どうするの？」

「お待たせー！さあ、誠二くんの家に行こう！」

理恵先輩が戻って来て、誠二くんの家について話し。

「えー！何でオレの家？」

「ん？近いから！行こう！」

「はい…」

その後、誠二くんの家で遊んだんだ。思えばみんなで遊んだのなんて、これが最後だったのかもしれない。

二人の戦い

年も明けて寒さにも慣れてしまった頃、三学期が始まった。

「めぐ、誠二にはいつ？」

「バレンタインデーに告白するよ。美香ちゃんも同じ日に」

「そっかあ……。頑張るんだよ」

「うん！」

登校中とか紗耶香ちゃんと二人で居る時はそんな話しばかりしてた。紗耶香ちゃんは心配してくれて、応援してくれてた。

あつ……。

「おはよ。恵ちゃん」

「おはよう」

美香ちゃん……。じゃあ誠二くんも……。

「おはよう。相田さん」

「お、おはよう。誠二くん」

いいなあ、美香ちゃん。いつも登下校は一緒だもんな。なんか、悔しいな。

「じゃあね、誠二」

そつだ……。私は同じクラス。負けてないよね。

教室の前で紗耶香ちゃんと美香ちゃんと別れて誠二くんと二人で教室に入る。

教室の中では私の独壇場！ふふふ……。

……

キーンコーン……。

「……………」

も、もう昼休み。ひ、人が多くて誠二くんと話せない……。そう考えれば誠二くんと二人になる時間なんてないんだ……。

美香ちゃんは登下校中に堀川くんがいるとしても、気兼ねなく話せるだろうし……。

むむう〜…。

「せ、誠二くん。お、お弁当一緒に食べない？」

頑張り！私！

「ごめん相田さん。美香と屋上で食べる約束しててさ」

なっ…！さ、さすが美香ちゃん。本気なんだね。負けないもん！

「お、屋上なんて、さ、寒いんじゃないかなあ？」

「うーん、今日は天気もいいし。そうだ、相田さんも行く？」

ふふ…。

「せっかくだしー、行こうかな！」

学校でまで二人になるうなんて…欲張りさんだなあ、美香ちゃん。

ふふふ…。

それから誠二くんに連れられて屋上に。

「あつ、誠二。…と、恵ちゃん…」

「ふふふ…お邪魔するね。美香ちゃん」

「あ、あれ？屋上は寒いよ？教室の方があつたかいと思うけどなあ」

「じゃあ美香ちゃん戻ってみる？私は誠二くんと！ここで食べるか

ら

「や、やだなあ。私は寒くないよ。恵ちゃん寒くないのかなって」

「大丈夫だよ…ふふふ…」

「そ、そう。…うふふふ…」

ひきつった笑いを見せる私たち。

「な、なんか怖いぞ。二人とも」

「そ、そんなことないよ！ねー恵ちゃん」

「そ、そうだよ！変なこと言わないでよー。誠二くん」

「そ、そう？じゃあ食べようか」

…

もぐもぐ…。

そのまま三人でお弁当を食べてたんだ。三人で三角形の形で座っている。

「やっぱり天気が良くっても寒いな」

「じゃあ、はい。誠二、あつたかいお茶」
むっ…！

「サンキュー、気が利くな。美香」

「屋上なんだから。これくらいは準備するよー。ね、恵ちゃん」
むむむ…。

「ね、ねえ誠二くん。やつぱり少し寒いな。近くに寄っていい？」

「あ、ああいいよ。こっちが風当たらないから」

そして誠二くんに寄り添うように風下に。

美香ちゃんはその様子をわなわなと驚いて見ていた。

「ちよっ…相田さん、近いよ」

「あ、あらあ恵ちゃん。誠二がお弁当食べにくそうだよお？」

「誠二くん。離れた方がいい？」

私は甘えて上目使いで言ってみた。

「い、いや、大丈夫…だけど…」

顔真っ赤だな、誠二くん。

ふふ…。

「だって！美香ちゃん！」

「そ、そう。よかったね……………うふふ…」

「ありがとう。美香ちゃん……………ふふ…」

「うふふふ…」

「あははは…」

「な、何がおかしいの？二人とも」

この場は私の勝ちだね。美香ちゃん。

「あつ、いた！誠二くん！先生が呼んでるよー！」

クラスメートの人が誠二くんを探しに来た。

「いけねっ！プリント出さないといけないんだっ！二人ともゴメン！」

「あつ…！」

誠二くんは急いで行っちゃった。美香ちゃんと二人取り残される。
……………」

「……………」
「き、気まずい…。」

「け、結構やるね。大胆だったんだね、恵ちゃん
むっ…。」

「い、美香ちゃんこそ。登下校だけじゃなくて学校でも二人になる
うなんて、欲張りさんなんだね」

「…うふふ…」

「…あはは…」

「顔は笑ってるけど…。」

「ま、負けないよ！」

「美香ちゃんが立ちあがりながら言う。」

「わ、私も！」

「負けない！」

「ひゅおおおお…。」

「風…。」

「さ、寒いね…」

「う、うん、戻ろうか」

「決戦は二月十四日。」

「それまで美香ちゃんと激しい戦いが続くことになる。」

「…かも。」

「誠二くん図書室行くつよ」

「誠二、ちよつと部屋に……………」

「……………」

「うふふふ…」

「あはは…」

「……………」

「……………」

「な、なんなんだよー！」

バレンタインデー

「美香ちゃん…ついに今日だね」

「うん…。私は帰り道に告白する」

「私は、部室で。校門で待っていてくれる？」

「うん」

「恨みっこなしだね」

「うん。お互い頑張ろう」

「うん…」

今日はバレンタインデー。

昨日は学校から帰って手作りチョコを作った。

眠れなかった。

今も少し震えてる。緊張してる、私。告白なんてしたことないから。中学の時はみんなからいじめられててこんなことなんてもちろんなかったし。人を好きになるなんて…。

初めはあんまり関わらないようにして思ってたのに。今は誠二くんがいないとダメになった。

その想いを伝えるんだ。今日。

こんな時ほど時間が過ぎるのが早く感じる。

もう、放課後。

昼休みなんかは女の子がチョコを渡す姿がちらほら目についた。

独特の雰囲気の中で時間が流れていた。

その様子を笑って見てる余裕なんてなかった。チョコを渡す姿を自分に置き換えると心臓が爆発しそうだった。私も勇気を出して渡すんだ。言うんだ。

「めぐ」

「ひゃっ…！」

「さ、紗耶香ちゃん。びっくりしたあ」

後ろから声かけるんだもん。

「部活、行こう」

「う、うん」

紗耶香ちゃんと二人で部室までの廊下を歩いて行く。

「もう誠二に何て言うか考えてるの？」

「…ううん。こういう時、何て伝えたらいいのかわからない。」

誠二くんを想う気持ちを素直に言うよ

「それが一番だよ。言葉を飾る必要なんてないんだから、めぐはめぐらしくていいんだよ」

「うん…」

「…めぐ…」

紗耶香ちゃんは震える私の肩を、そつと後ろから押さえてくれた。

「…ありがとう」

「怖い？」

「…少しだけ」

「めぐを傷つけるような事言ったら誠二なんかぶつとばしてあげるから！」

「…ふふっ、心強いな」

そして部室へ。

あれ…？

部室へと続く道の途中、柱に背中を預けて立っている美香ちゃん
がいた。

「恵ちゃん、ちょっといい？」

「う、うん」

「私はパートのとう行くよ」

「ゴメンね」

紗耶香ちゃんは行っちゃった。急に心細くなる。

「美香ちゃん？」

「あの、恵ちゃん。誠二からの返事なんだけど、一ヶ月後に聞くよ
うにしない？」

「え？どうして？」

「誠二は多分、すぐに答えは出せないと思うんだ。それに違う場所で告白するし」

「そ、そっか。」

「でも、一ヶ月も？」

「自惚れじゃないんだけど、誠二にとって今までが一番悩む時だと思っただ。優しいから、どっちかを選ぶなんて一番酷なことだと思う。どっちもダメかもしれないけど。それでも多分、傷つけることに躊躇するよ」

「やっぱり…美香ちゃんが一番誠二くんのことわかってる。」

「私たちも辛い時間だけど、誠二にはそれでも短い時間かもしれないんだ…だから…」

「うん、わかったよ。ホワイトデー…だね」

「恵ちゃん…うん。ありがとう」

「お礼なんて…」

「どうしよう…美香ちゃんの誠二くんを想う気持ち、すごく伝わる。いつでもまずは誠二くんの事考えてるんだね。」

「じゃあ…」

「うん…」

「私の想いは…」

「ううん、弱気になっちゃダメ！想いの強さなんて人それぞれ。私は私の想いを伝える！」

「誠二くん…！」

「…」

「……」

「……」

「……」

「じゃあ恵ちゃん！またね！」

「はい！お疲れ様でした！」

「部活も終わりを迎えてた。誠二くんを呼ぶ。まずそこから。」

「人が少なくなるまで紗耶香ちゃんが誠二くんを引きとめてくれて」

る。

「めぐ、そろそろいいよ」

ドクッ…!

「私はバス停で待ってるね」

「あっ…さ、紗耶香ちゃん…!」

「私はここまで。あとはめぐ次第だよ」

「う、うん…!」

「じゃあ、頑張ってるね!めぐ!」

紗耶香ちゃんが行ってしまった後すごく不安になった。なかなか足が進まない。

行くの!行かなきゃ…!

動かなかった体に言い聞かせて誠二くんがいるパーカッションのところに向かった。

誠二くん…いた…。

まだ周りには少し人がいるけれど、もう帰ろうとしている。勇気出して…!

ドクンッ…ドクンッ…!

「せ、誠二くん!」

「ああ、相田さん」

「ちよつと…いいかな?」

「うん」

「ここじゃちよつと…!」

私は誠二くんを連れてみんなが楽器をしまう部屋に。もうここには誰も来ない。

ドクンッ…ドクンッ…。

「せ、誠二くん。これ、バレンタインチョコ。手作りだよ」

「ホント!?ありがとう!相田さん!」

……………

言っの…。

「…本命だから…」

「…え？」

「誠二くん…私…私…！」

「あ、相田さん？」

ドクンツ…ドクンツ…。

私…！

「私…誠二くんが好き…！…大好き！」

「えっ、あ、相田さん!？」

「誠二くんは…私を助けてくれた…！私を叱ってくれた。誠二くんは私を…私を守るって言ってくれた！」

「……………」

「ずっと守って欲しい。ずっと支えていて欲しい。ずっと…誠二くんに甘えていきたいの…」

「…うん…うん…」

「もう…誠二くんがいないとダメなんだ。誠二くんの声が、笑顔が私を救ってくれる。誠二くんがいるから、今私は笑っていられる。

いつの間にか好きになってた。誠二くんが私の中にいた。誠二くんばかりを見てた。私は…誠二くんのそばに…一番近くにいたい…！」

「……………」

「だから…」

「……………」

「私を彼女にして下さい…。私を…誠二くんの隣にいさせて下さい

「…！」

「……………」

……………

「じ、ごめんなさい。いきなりこんなこと…」

「い…いせ…」

「あの…返事は…一ヶ月後の今日、ホワイトデーに下さい」

「えっ……………」

「じ、じゃあ私はこれで帰るね。どんな答えでも…私は受け入れる

から。それと…もし、私を選んでくれたとしても…後悔…ないよ
にね」

「え？選ぶ？」

「じゃあね、誠二くん。美香ちゃんが待ってるよ…」

「え？あつ！ちよっ…」

私は逃げるように誠二くんの前から走り去った。もう泣いてしま
いそうだったから…。

タッタッタッタツツ…。

「はあっ…はあっ…グスン…はあっ…」

走り続けた。そして校門までやってきた。

「恵ちゃん…」

「はあっ…はあっ…グス…美香…ちゃん…」

「……………」

美香ちゃんは何も言わずにゆっくり頷いた。

「……………」

コクリ…。

私も…同じように。

そして美香ちゃんの前を走り去った。

私は…自分の気持ちは伝えた。どれだけ伝わったのかなんて分か
らないけど…確かに伝えたんだ。

「誠二くん…！」

思わず名前を口にしてしまう。

私の初めての告白だったんだ…。

「めぐ…」

紗耶香ちゃん…！

「……………っ！」

思わずバス停で待っていてくれた紗耶香ちゃんの胸に飛び込んだ。

「めぐ…頑張ったね」

紗耶香ちゃんはそれだけ言って頭を撫でてくれた。

それから紗耶香ちゃんに返事は一ヶ月後にもらうことを話した。

「一ヶ月後か…。めぐ、辛くない？」

「覚悟は…してる…」

うまくいくななんて思ってなかった。ただ、淡い期待だけはしてたんだ。少しだけ、隣にいる誠二くんを想像してた。

一ヶ月間、卒業式

誠二くんが告白した翌日。

朝、美香ちゃんと会った。美香ちゃんは一人で登校して来ていた。

「お、おはよう」

「おはよ。恵ちゃん」

美香ちゃんが誠二くんは何て告白したかなんてわからないし、聞きたくはなかった。

「眠れた？」

「うん…」

嘘…ホントは眠れなかった。家に帰って一人になるとすごく不安になった。フラれることじゃなくて、今まで通りの日常があるのか不安になったんだ。

「美香ちゃん、誠二は？」

紗耶香ちゃんが聞く。私が聞きたいことは紗耶香ちゃんが聞いてくれる。

「なんか気まずくて…」

…私が美香ちゃんの、みんなの日常を壊してしまったのかもかもしれない。

私が顔をうつむかせると美香ちゃんは言った。

「気にしないでね、恵ちゃん。恵ちゃんも優しいから…」

泣きそうになる。昨日の今日なのに。

「うん…」

そう答えるしかなかった。

「じゃあ…」

美香ちゃんと別れる。

「めぐ…。仕方ないよ」

「…うん…」

こんなに告白するなんて重いものだったんだ。私だけじゃない。

周りの人を巻き込んで…。

教室に入る。

ガタン…。

自分の席に着いてしばらくぼーっとしていた。

あっ…。

誠二くんが教室に入って来た。

ドキドキ…。

「お、おはよう。誠二くん」

「あ…お、おはよう」

会話はそれだけ。

美香ちゃんもこんな感じで一緒に来れなかったのかな…。一ヶ月

…長いな。

「はい！席に着いてー！SHRよー！」

同じように周りの時間は流れていく。他の誰も普段と変わらない。

もうすでに今までが恋しくなってくる。

もしフラレたらどうするの？その後普通に話せるの？

…わからない。

ずっと誠二くんこのままだったら…。

そう考えると怖い。怖いよ…。

フラれることも覚悟してるのに。ううん、フラれることなんて大

した問題じゃないのかもしれない。

日常…。

いじめられていた私にとって日常はすごく大事なものだ。こんな

時、改めて気付くなんて…。

「相田さん…。相田恵さん！」

！

「は、はい！」

本田先生に呼ばれていた。気が付かなかった。

「ぼーっとしない！今日、日直だから後で日誌取りに来てね」

「あっ…はい…」

クスクス…。

周りから微笑が漏れる。

う…恥ずかしい。

誠二くんは笑ってなかった。やっぱりいつも通りなんていかないよね…。

誠二くんのあの笑顔が、また私に向けられることなんてあるのかな？

また笑って話せるのかな…。

誠二くん…。

それからの毎日と同じだった。誠二くと話す時は用事がある時とか挨拶くらい。

辛かった…。

美香ちゃんも同じようで、ライバルなのにお互いを慰め合ったりしてた。誠二くんを好きなことは同じだもんね。

紗耶香ちゃんも支えてくれた。話しもよく聞いてくれたし、紗耶香ちゃんの前なら涙も流せたんだ。

誠二くんもやっぱり悩んでるみたいだった。紗耶香ちゃんは相談を受けたらしいけど、答えることは出来なかったみたい。中立の立場じゃないしね。

「誠二が何を考えてるのは分からないな。多分、自分で答えを出すはずだよ。悩んでた」

紗耶香ちゃんが話してくれた。

私…やっぱり誠二くんを傷つけちゃてるのかな。

「恵ちゃん、最近元気ないね。どうしたの？」

大野先輩…。

「ちよつと…」

「何でもお姉さんに相談しなさい！恋をしてるのかな？」

いきなり核心を…。

「はい…。好きな人に告白したんです。返事はまだなんですけどいつも通りに話せなくなってる。悩ませて、傷つけてるんじゃないかっ

て…」

「そうだねえ。椿くんああ見えて繊細そうだしねー」

「ふえっ…!?!?」

な、なんで?

「バレバレだつて。最近の三人見てたら」

三人…なら美香ちゃんもか。

「恋愛なんてそんなもんだよ。いっぱい悩むの。だからこそ好きな人と一緒になつた時の幸せがあるんじゃないかな?」

「そうですけど」

「告白したこと後悔してるの?」

後悔か…。

「後悔はありません」

「ならいいんじゃない?これが恋愛なんだよ。いっぱい悩んで、傷ついて成長していくの」

やけに悟つたように…。

「先輩もいろんな経験を?」

「え!?!?さ、さあ?どうだろうね!ははっ…」

「先輩の話聞きたいです」

「あつ!私、理恵に用事があつたんだつた!じゃあね!」

逃げた…。

恋愛なんてこんなもの…か。いっぱい悩んで…。そうかも。好きだから悩むんだよね。

「愛理…強い。いっぱい…傷ついた…。笑つて…話してる…けど…」

田代先輩…。

「人を好きになるなんて素晴らしいことですよ。その気持ちは大切にして下さい」

河本先輩…。

「はい。ありがとうございます」

気持ちを大切に…。うん、私は誠二くんが好きなんだ。

ごめんなさい、誠二くん。たくさん悩ませてるかもしれないけど、

私の気持ちなんです。

「そういえばそろそろ卒業式ですね。相田さんもいらっしやいますか？」

卒業式は三月一日に行われる。卒業式は三年生だけ。私たち在校生は基本的にお休みなんだ。でも、卒業生を送りに学校へ出て来る人が多いみたい。

「私も送りに来ます。先輩たちにはお世話になりましたから」

「そうですね。みなさんで送り出しましょう。この部だけの卒業式もありますけど」

そうなんだ。

卒業か…。

私たちはまだまだ先だけ…いずれやってくるんだよね。誠二くと離れ離れになるのかな…。イヤだな…。

「さ、練習再開しますよ。大野さんは後でお置きです」

あ…。私が余計なこと聞いたから…。大野先輩ごめんなさい。

そして三月一日。

三年生の卒業式。

告白してからちようど半月経った。誠二くんとは相変わらず。美香ちゃんも一人で登校してる。

「恵ちゃん、大丈夫？」

「美香ちゃんこそ…」

「……………」

「……………」

互いに互いを心配してる。同じ境遇にあるからこそ。誠二くんも来てるみたいだけど、私たちからは距離を置いてる。

あ…。

「日高先輩、濱田先輩。ご卒業おめでとうございます」

校舎から出て来た先輩たちに声をかける。

「ありがとう。今まで楽しかったわ」

「私もだ。相田、君とは良い思いでが作れた。君の音色は忘れないだろう」

「先輩…寂しいです…」

「今度はあなたたちが後輩を引っ張って行くのよ。しっかりね」

「そうだぞ。そんないかにも悩んでそうな顔は止めるんだ」

「えっ…！」

顔に出たのかな…。こんな時まで…私…。

「何かあれば聞くわよ？」

「…いえ、大丈夫です。最後までありがとうございます」

「遠慮しなくてもいいぞ？ 私たちはまだ君の先輩なんだ」

先輩…ありがとうございます。

「いえ…ホントに大丈夫です」

もう待つしかないんだ…。今は悩んでるっていうより不安になってるだけ。日が経つにつれて不安は大きくなってる。

「恵ちゃん」

えっ…、あっ…。

「村田先輩、ご卒業おめでとございます」

「ありがとう。恵ちゃん…頑張ってるね。恋は激しく燃え上がるものだよ！」

「ふえ？」

「ふふん、元部長は何でもわかるんだなあ、これが」

「元部長…怖いです」

「誠二くんの今の気持ちはねえ…」

！

「き、気持ちは？」

「ど、どうなの？」

「それはねえ…」

うんうん…。

「この私だよ！」

「……………」

「ふふん…！」

自慢気に鼻を鳴らしてる。

「…ご卒業、おめでとーございます…」

「あつ！ちよつと恵ちゃーん！」

はあー…。

実際、どうなんだろ。誰か好きな人とかいるのかな？

…ううん、待つだけ。

あち半月。

長いなあ。誠二くんが近くに居る分だけ余計に長く感じる。

毎日顔合わせるもんな。

誠二くんは何を考えてるんだらう。

あれからあんまり笑ってる顔も見えてないし。

卒業生の先輩たちはそれで帰って行った。吹奏楽部での卒業式は

十六日。ホワイトデーの二日後にあるんだ。

もしかしたら、誠二くんは私か美香ちゃんと付き合ってるかもし

れない。

「めぐ、帰ろうか」

「あつ、うん」

今日は誠二くんと話してない。見てたら先輩たちともあんまり話してないみたいだった。

「紗耶香ちゃん、誠二くんの部活での様子はどんな感じなの？」

「相変わらず。悩んでるみたいだよ」

「…そっか」

まだ答えは出てないか…。美香ちゃんはやっぱり誠二くんのことよく分かってるんだな。

「あと半月、待つしかないんじゃない？」

「うん…」

どうなるかなんてわからない。

美香ちゃんだつて不安になつてる。もし私が選ばれたら、私はどんな顔で美香ちゃんに会えばいいんだろう。

逆でも、笑つて会えるかな…？

その時にならないとわからないか…。

待ち遠しいけど、その日が来て欲しくない気持ちもある。

でも、確実にその日は近づいてるんだ…。

ホワイトデー

「恵ちゃん」

「あつ、美香ちゃん」

「ついに明日だね」

「うん…」

「誠二には伝えたよ」

「うん、私は教室で…」

「私は部室で…誠二を待つ」

美香ちゃんとの話し合いで、私と美香ちゃんが別々の場所で誠二くんを待つて、誠二くんが来た方が誠二くんの彼女になる。そういう方法にしたんだ。

「じゃあまた明日、ね」

「うん…」

明日…ついにホワイトデーがやって来る。

今日は…眠れないな…。

ある時から誠二くんの様子が変わった。悩んでた様子から笑顔を見せるようになったんだ。誠二くんの中では確実に答えは出てる。

………

怖い…。

怖いよ…覚悟はしてるのに…。

誠二くん…。

あなたの答えは…？

ダメだったとしてもまた笑い合いたい。わがままかな…。友達だと割り切れるかな…。

考えたくない…。でも考えちゃう。

家に帰っても明日のことばかり。

「今日は食欲ないや…」

買ってきた食材にも手をつけずにお風呂に入る。バスタブの中で

も明日のことばかり。ぼーっと考える。
部屋でベッドに横になると余計に…。
…誠二くん。

「めぐ…」

「大丈夫だよ。紗耶香ちゃん」

翌日、朝から紗耶香ちゃんが心配してくれてる。

ホントは大丈夫じゃない。結局眠れなかったし、フラれるイメージしか頭の中に浮かんで来なかった。

フラれたその後のことばかり考えてる。

その日も時間は止まることなく流れて、あっという間に放課後になった。授業の内容なんて覚えてない。なんの授業だったのかもわからない。誰と話したのかも覚えてない。

放課後、いつも通りに部活をこなしている。…つもりだった。

「相田さん…相田さん！」

「は、はい！」

呼ばれることには気が付かない。曲の練習途中で演奏を止めてしまつ…とか、集中していない様がひどかった。

それでもなんとか部活をこなして…ついに訪れる。

「恵ちゃん」

「うん」

それぞれの場所で誠二くんを待とう。

ドクン…ドクン…ドクン…ドクン…。

やっぱり怖い…。

胸の鼓動が高鳴る。

もう、その時はすぐ近くまで迫ってる。

教室に行かなきゃ…。来て…くれるかな…。

ゆっくり進む。目の前から強風が吹き荒れて、それに抗うように。

足取りが重い。出来れば逃げ出したい。

そんなバカなことを想いながらも教室にたどり着いた。

ガララ…。

もう誰もいなくなった教室のドアを開ける。

誰もいない教室は、もう春がやってくる季節なのにやたらと寒かった。

ガタン…。

自分の席に座る。

………

「はぁー…」

誰もいない空間。そこに私のため息だけが響き渡る。

ドクン…ドクン…。

胸の高鳴りは収まらない。期待と希望から来る胸の高鳴りじゃなくて、間違いなく不安からだった。

いつまで待てばいいんだろう。

時間が経つにつれて不安が大きくなっていく。

やっぱり美香ちゃんのこと…。

何度もそう思う。

もう部活が終わってから三十分が経ってる…。

もう少しだけ待とう…。

………

まだ泣いちゃダメ。

でも…諦めてしまえそう。

あと少しだけ、希望は捨てないで…。

タッタッタッタ

足音が…近づいてくる。

誠二くん…？

あ…。

その足音の主は教室の前を通り過ぎて行った。

ドクンッ…ドクンッ…！

「はぁーっ…心臓に悪いよお…」

さっきの足音の主に恨めしそうに呟いた。

ドクンツドクンツ！

鼓動がさらに速くなった。

苦しい…もう耐えきれないよ…！

タツタツタツタツ

ま、また…！

心を落ち着かせるようにと自分に言い聞かせる。

足音が近づいて来る…！

ガララ！

！

あっ…！

教室のドアを開けて入ってきたのは息を切らしていた誠二くんだった。

私は駆け寄りたい気持ちを抑えて口を開いた。

「誠二くん…もう来ないと思ってた…」

誠二くんは肩で息をして呼吸を整えてる。

「…美香に…会って来たんだ…」

ドクンツ！

その言葉に心臓が跳ね上がるのがわかった。

「…そっか…そうなんだ…」

じゃあ、ここに来たのは私に謝るために…？

「謝るために…」

「……………」

やっぱり…。

やっぱりそうなんだ。私なんかじゃ…誠二くんの彼女になんてな

れないんだ…。

もう…泣いてもいいかな…。

最後だけ…一度だけでいいから、抱き締めて欲しい…な。

「どうしても美香に謝りたかったから…。ここで相田さんに会う前に。今までのことや…今回のこと」

「……………え？」

私に謝りに来たんじゃないの？
何？

何を言ってるの？

「相田さん…オレは…君が好きだ。初めて会った時から惹かれてたのかもしれない。こんなオレでよかったら、隣に居てくれないかな？守らせてくれないかな？甘えて…くれないかな？」

……………。

「…え？…え？」

誠二くんが私のことを…好き？

そう言ったの？そう言ってるの？

もう一度…。

「もう一度言っよ。今なら自信持って言えるから。オレは相田さんが好きだ…好きなんだ」

！

ああ…！

「せ、誠二くん…！」

私は涙をこらえることが出来なかった。

何度、夢に見ただろう。

決して叶うことがないと思ってたこの気持ち。

「相田さん…」

誠二くんは私の流れる涙を優しく拭ってくれた。

夢じゃ…夢じゃないんだ。

「誠二くん…！私…怖かったの！本当はすごく怖かったの！」

「うん…」

「今日までがすごく不安で、覚悟してたけど怖くて…。怖かったよお…」

「もう安心していいよ。オレは相田さんの隣にいるから。どこにも行かないから」

誠二くん…！

「ふ…ふえ…ふえー…ん…ん…！」

私は泣きながら誠二くんの胸に飛び込んだ。誠二くんは優しく包み込んでくれたんだ。

ずっと欲しかった…。

このぬくもり…。

こんなに近くに誠二くんを感じてる。

「誠二くん、あったかい…」

「相田さんも。あったかいよ」

まだ冷える教室では誠二くんの暖かさが心地よかった。

「オレは相田さんの笑顔が好きなんだ。その笑顔の近くに居たいと思った。守りたいって思った。…だから、いつまでも笑っていようね？」

誠二くん…。

「うん！」

私は出来るだけの笑顔を作って答えた。

「そうそう、その笑顔。かわいいよ、相田さん」

「えへへ…。ねえ誠二くん」

「ん？」

「私は誠二くんの彼女なんだよね？」

「そうだね、そうなるよね」

じゃあ。

「じ、じゃあさ、私のこと」相田さん”じゃなくて名前ですんで？”

うふふ…。

「名前か…。恵って…呼べばいい？」

恵か…。誠二くんは美香ちゃんのこと、紗耶香ちゃんのこと、呼び捨てだし…。

「めぐ”って呼んで欲しいな」

特別がいいから…。

「めぐ…」

あはっ！なんか照れくさそう。かわいい！

「えへへ…よろしい！」

私の初めての恋。

苦しかった…。辛かった…。でも今はすごく幸せなんだ。なんだろう、この気持ち。

とにかくすごく愛おしい。

ギュッ…。

「あつ…誠二くん…」

また抱き締めてくれた。

「みんなとうまくやっていけるかなあ」

誠二くんが不意に呟いた。

「後悔してない？」

思わず聞いてしまったんだ。

「後悔なんてことは絶対ないよ。オレはめぐが好きだよ。ただ、みんなと今まで通りやっていけるかなって」

私と同じこと考えてたんだ…。でも、一番気になるのは…。

「美香ちゃん…だね」

「それだけじゃないけど…」

「みんな、いい人たちだよ」

私も不安はある。紗耶香ちゃんも応援してくれてたけど、今まで通りに接してくれるかわからないし。

何よりも美香ちゃん。恨みつこなしだって言っても…。実際こうなってしまって、残された方はすごく辛いよね…。こんなに私は幸せを感じてる。これが真逆になっちゃったら…なんて、考えたくない。私は耐えられないかもしれない。

「めぐ、もう帰らないと遅くなるよ？帰ろうか」

もう…そんな時間か。外は真っ暗。外灯からの光だけが私と誠二くんを照らしていた。

「うん…帰ろうか…」

それから校門まで一緒に歩いた。あまり会話はなかった。一安心出来たけど、明日からのことを考えると少し不安で…。

校門で誠二くと別れてバス停に…。

「……こんな時間まで待つてくれたんだ……」

「めぐ……」

紗耶香ちゃんはまだバス停にいた。そして心配そうに私を呼んだ。にこっ。

私はそれを満面の笑顔で返した。すると紗耶香ちゃんが抱き締めてきた。

「めぐ……！よかったね……！ホントによかったね！」

「紗耶香ちゃん……。心配かけてゴメンね。誠二さんと付き合っことになったよ……」

「うん……。おめでとう……」

「ありがとう、紗耶香ちゃん」

ホントにありがとう。こんなに喜んでくれる友達がいるなんて、私は幸せ者だな……。

「あーあ、でも誠二にめぐ取られちゃったなー」

「取られたなんて……」

「いや、きつとめぐのことだから誠二にべったりになるに決まってるよ！」

「そんなこと……。そうかも……」

「寂しくなるなあ」

「そんなこと言わないで？紗耶香ちゃんは私の一番のお友達だよ」

「ふふ……そうだね。彼氏にやきもち焼いても仕方ないかあ」

彼氏……。ふふふ……。私は誠二くんの彼女なんだ。

「……うふふ……」

「おーい、戻っておいでー」

「えっ！あっ、ごめんなさいー！」

「ほらねえ」

「てへへ……」

「めぐ……。でも美香ちゃんとは？」

そう、そこなんだよな……。

「わからない……。けど、きちんとケジメつけないと思って思うよ」

「うん…そうだね…」

美香ちゃんがいて紗耶香ちゃんがいて、先輩たちがいたから誠二くんとうなれた。そんな気がするんだ。

「明日話してみる…」

「大丈夫？」

「…うん。誠二さんと二人で…。話さなきゃいけないことだと思う。ちゃんと話して、今までみたいに話せるように。」

「なんか、大人になったんじゃない？めぐ」

「そんなことないよ…ホントに大人になっていくのはこれからだから」

「…めぐ、いつの間にか誠二の影響でエッチになったんじゃない？」

エッチ？

「え？何言って…。。。そそそつ、そんな意味で言ったんじゃないよ！？」

「クスッ、冗談だよ。でも今想像したでしょ？」

「もうー、紗耶香ちゃん！」

「あはは、ゴメンゴメン」

もう…。でも、今までしなかったこんな話題も増えていくんだろ
うな。

また、新しい出来事が増えるんだ。誠二さんの思い出が増えていく。

誠二くんが私の彼氏として。

誠二さんと私と美香ちゃん

誠二さんに告白の返事をもらって付き合おうようになった翌日。今日は土曜日。

昨日は自分でもびっくりするくらい安らかに眠れたんだ。

土曜日だから午前中だけ部活があるんだ。部活が終わってから美香ちゃんと話したいと思ってる。だから誠二さんにその事を伝えなくちゃ。

ガララ…。

練習場のドアを開ける。

あっ、いた。紗耶香ちゃんも先輩たちもいるけど。

「誠二くん」

「きゃー！ー！恵ちゃん！」

な、なに？

「ちょっとおいでよー！」

「な、なんですか！？」

「いいからいいから」

「一緒に来る〜」

私は半ば強引に、理恵先輩とアリサ先輩に別室に連れて行かれた。

誠二くんがきつと話したんだろうな。

「ねえねえ、もうキスした？」

キッ…キス！？

「そ、そんな…！まだ昨日のことですよ！？」

「そんなの関係ないってえ」

「そうだ〜関係ない〜」

そ、そうなのかな？

「時には女の子の方からでも積極的に行かなくちゃ」

「でも〜つじくん〜えっちいだから〜めぐめぐ〜危険〜」

「た、確かにエッチですね」

「えっ！？なにになに？何かあったの！？」

「占いおの本見て、身体の相性いいねって…」

「う、うわぁ。誠二くんって大胆なんだねー。それなら恵ちゃんも心の準備はしておいた方がいいかもね」

「用意〜周到〜間違いくなし〜」

「えっ、な、なんのですか？」

「決まってるじゃない〜、恵ちゃんがお・と・な・の女になる準備だよー」

「カアア…！」

「そ、そそそつ、それはさ、さすがに、は、早いんじゃないです
か？」

「最初はムードとかも大事だけど、やっぱり勢いだよー！」

「いきおい〜」

「も、もうやだぁ〜！」

もうダメ！逃げる！

「あん！…ふふふ。恵ちゃんかわいい！」

もう死ぬほど恥ずかしかったから逃げ出しちゃった。

う〜〜〜〜。

「せ、誠二くん！」

「ど、どうしたの？」

「い、勢いなんてやだよ？」

「はぁ？」

「カア…！」

ダメツ、誠二くんの顔を見れない…！

う〜〜〜〜。

「あっ！ちよつとめぐ！なに…」

誠二くんの制止も振り切って逃げ出した。

私はそのままフルートのパート練習の場所まで戻って来てた。

「あれ、恵ちゃん。そんなに慌ててどうしたの？」

「な、なんでもないです」

大人の女になる話しなんて言えないよ。

「ところでさ、椿くんとはどうなったの？」

「大野さん。練習中ですよ？」

「いいじゃん、みゆき。少しくらいさ。ねえ有紀」

「…聞きたい…」

「まあ、わたくしも少し興味がありますね」

うっ…。

な、なんだろう。この三人からの期待の眼差しは…。

「お、おあげさまで、誠二くんとはお付き合いすることになりました」

イヤな予感が…。

「きゃー！それでそれで？どこまでいったの？」

「…キス？…」

「余計な詮索は無用ですよ。でも、わたくしも興味があります」

や、やつぱり。この人たちは…。

「何もありません！そんなことより練習しましょう！」

「ちえっ、けちー」

「…けち…」

「まあ…けちですね…」

お、大野先輩と田代先輩はわかるけど河本先輩まで。私って実はいじられ役だったの？

それからもいろいろ聞かれながら練習してたから全然練習にならなかった。

「今日はここまでです。お疲れ様でした」

終わった。まだ誠二くん美香ちゃんのところに行こうって話してないから早く行かなきゃ。

「そんなに急いで。デートかにゃ？」

「そんなんじゃないです。…：けじめなんです」

「あっ…」

私が真面目に話すものだから大野先輩も戸惑ってる。

「み、美香…」

「美香ちゃん…」

「誠二…。恵ちゃん」

美香ちゃんが私たちに気付いてこっちを見たけど…。泣いたんだろ…？ いっぱい…。それがわかるくらいに目が腫れてる。

「あ、あの…」

言葉が出て来ない。

ケジメって言ったって…私はどうしたかったんだろ。何を言えはいいんだろ。

「恵ちゃん」

え？

「誠二が恵ちゃんを泣かせるようなことしたら言うてね！私がぶつとばしてあげるから！それと…私の分まで、誠二のこと大切にしてあげてね？」

「あつ…み、美香ちゃん…」

美香ちゃんはすごい笑顔で言うてくれた。私はその言葉に思わず涙が溢れてきてしまった。

「美香…」

「誠二も！恵ちゃんを傷つけたりしたら私が許さないからね！」

「お、おう！」

美香ちゃん…すごく強い…。

「…う…うえ…美香ちゃん…」

「美香”でいいよ。私たちはずっと友達でしょ？だから私も”めぐ”って呼んでいい？」

美香ちゃん…。

「うん！」

私も笑顔で返さなきゃ。

「ふふ…眩しいなあ、めぐは。前に進めてよかったね、誠二。誠二もずっと友達だよ」

「おう！これからもよろしくな」

「こつちこそ」

美香ちゃんはやっぱりすごく強い。同じ人を好きになったからわかる。私ならこんなに笑えてたのかな…。

でも、なにより仲良く出来そうでよかった。

それから部室をあとにして誠二くんがバス停まで送ってくれた。

何も用事がない時はいつも送ってくれるんだって。

えへへ…カップルって感じかな？

紗耶香ちゃんには悪いけど…。でも紗耶香ちゃんは笑って了承してくれたんだ。登校する時は一緒だからねって。

やっぱりみんないい人たちばかりなんだ。

この柳ヶ浦高校に来て良かった。

すごくいい友達が出来て。いじめられることもなくて。みんなが私を認めてくれて。誠二くんい出会って…。

もうすぐ、私たちが先輩になる番なんだな。

初デート

翌日の日曜日に吹奏楽部だけの卒業式が行われたんだ。卒業証書の代わりに今まで演奏してきた曲のMDが渡される。良いい出しの物になるんだろうな。

卒業生から一言ずつ挨拶があつて、感謝の言葉を言ったりしてた。そして卒業式が終わってからの帰り際。

「誠二ー！私と帰ろうよー！」

これは村田先輩。

「だ、だめですよ！誠二くんを返して下さい！」

「最後までいいいいじゃない」

村田先輩が誠二くんの腕を引っ張って連れて行くこととする。

「だーめーでーすー！」

私も負けじと誠二くんの腕を掴んで引っ張る。

「痛い痛い痛い痛い！」

あつ…。

誠二くんが痛がつてたから離れたんだけど…。

「うわっ！」

「やんっ！」

…二人とも倒れて誠二くんが村田先輩の上に…。

「あーん！誠二つたら大胆ー！」

「もがつ！千秋つ、先輩！はな…してっ！」

あ…あ…あ…あ…。

誠二くんが…誠二くんが…。

「うわー！ー！ー！ーん！」

「あつ！めぐう！ー！ー！ー！」

結局八チャメチャな卒業式だったんだ。

卒業式のあとの部活もない初めての休日。

今日は誠二さんと付き合うようになってからの初デート！また街デートなんだけど今度は彼氏彼女として歩けるんだ！

待ち合わせはこの前の噴水で朝の従事。また少し早目に到着！したんだけど…。

誠二くんはもう噴水のところに居たんだ。でも何か噴水の周りをぐるぐる回ってる。何してるんだろう。

しばらく眺めてようかな。

………

五分経った。

もういいかな。ぐるぐる回ってるだけだし。

「誠二くん」

「うわっ！」

「おはよう。さっきから何してたの？」

「さっきからって…どれくらい前？」

「五分くらいかな。何か観察してたの？」

「観察？いや、少し緊張…。何でもないよ！」

変なの！。

「それにしても…。めぐ、かわいいよ」

えっ…。いきなりそんな…。

「せ、誠二くんも、か、かっこいいよ！」

黒いジャケットが良く似合ってる。

「照れるな…。少し早いけど行くっか」

「うん」

そう言っただけで誠二くんは先に歩き出した。

「あっ、あの…誠二くん…」

「ん？」

モジモジ…。

「手…繋ぎたいな…」

「え？あ、ああ」

そうやって左手を差し出してくれた。恐る恐るも私は誠二くんの手を握る。誠二くんも照れくさそう。だけど…。

「えへへ…」

嬉しいな。

この前とは違う。誠二くん彼女として隣に立ってる。ホントにこのまま手を繋いで歩いてるだけでいいな。

誠二くんもまんざらじゃなさそう。同じ気持ちでいてくれたらいいな。

そのまましばらく歩いていたら、この前寄った雑貨屋が見えてきた。

「誠二くん、あそこまた寄らない？」

「ああいいよ」

そして雑貨屋の中に。

しばらく一緒に中を眺めてたら…。

「あっ…」

この前見た占いの本だ。

「オレたち相性良かったんだよね」

確かに。でもどっちのこと言ってるの？恋愛？か、身体？

「ど、どっちの？」

誠二くんエッチだからな。

「え？どっちって何が？」

「えっ！いや…その…」

「もちろん恋人としてだけど、他になにが？」

う、うそ…！

「えっと…その…」

「めぐー、よくわかるように教えてよー」

意地悪そうな顔！絶対わかってて言ってる！

「もっ！知らない！」

誠二くんの意地悪！ふんっ！私だって怒っちゃうんだからね！

私は誠二くんを残して一人で店内を眺めに行った。

誠二くんのバカ…。

でも…もし誠二くんが探しに来てくれなかったらどうしよう。

……

やっぱり私から謝りに…。うん！私は悪くないもん！

…でもなあ。最初のデートだし…。

「めぐ！」

ひゃっ！

後ろから声掛けないでよお。でもよかったあ。来たくれた。

はっ…ダメ。私は今怒ってるんだから！

「怒ってる？」

「……………」

怒ってるもん！

「悪かったよ。どうしたら許してくれる？」

えー…どうしようかな。怒ってるって言っても怒ってるわけでも

なくて…。

…そうだ。

「私のお願い聞いてくれたら許したげる！」

「お願い？いいよ。だから許してくれよ」

「じゃあいいよ！」

えへへ…。

「よかったー。でもめぐが怒った顔初めて見たけど可愛かったなあ」

む……。

「そ、そんな事言っても誤魔化されないからね！」

可愛いだって。まいちやうなあ。

「それで、お願いって？」

「またプリクラ撮ろう」

「うっ…。プリクラか…。うん、じゃあまたあとでゲーセン行こう

な」

えへへ…お願いなんかじゃなくても撮るつもりだったけどね。

それに今日のために持って来たものがあるんだ。あとで誠二くんに見せてあげないと。

あつ…。

かわいいストラップ発見！誠二くんとお揃いのもの欲しいと思っ
てたんだよね…。これなんかぴつたりだよね。

「誠二くん見て。このストラップかわいいと思わない？」

「ん？ああ、かわいいね」

「ねえ、このストラップお揃いでつけようよ」

「もちろんいい…あつ…」

誠二くんが何かに気付いたように声を上げた。そして携帯を取り出した。

「このストラップさ、クリスマスに美香からもらったもので、大切にしたいんだよね。だから…」

美香ちゃんからもらったものなんだ…。

「いいよ…。美香ちゃんは私にとっても大切なお友達だもん。お揃いは別のものでいいや」

「めぐ。ごめんな…」

「ううん。大切にしないとね」

ホントはイヤなんだけど。そこまでわがままは言えないかな。

「何か別のものでも探そうか？」

「うん！」

それからしばらく店に並べてあるものを見ていたけれど、これと
いって何もなかったんだ。

「めぐは漫画とか見るの？」

それから近くの本屋さんに来た。

「私はいくらも見ないかな」

あつ、お料理の本見たいな…。

「誠二くん、ちょっとあつち見てきてもいい？」

「いいよ。オレはもう少しここ見てるね」

誠二くんはゲームの本を眺めてた。

今度誠二くんにお料理作ってあげたいからな。

そして誠二くんが嫌いなものでも食べれるように工夫して…少しでも健康に過ごせるように…って何考えてるんだろ。

気が早いでしょ、私。そんなのって、も、もし、け、結婚…した時の話しでしょ。

「めぐ」

「ひゃっ！」

バンツ！

思わず見ていた本を勢いよく閉じてしまった。

「そ、そんなに慌てて。何の本ー？」

「た、ただのお料理の本だよ」

「ふーん」

疑いの目で見る。

「お料理の本見てたらお腹空いてきちゃった。ご飯食べに行かない？」

「そうだね、そろそろいいかな」

け、結婚のこと考えてたなんて…バカにされちゃうよ。

そして近くの Pasta 屋さんに。

私はシーフードパスタ。誠二くんはペペロンチーノ。誠二くんは好き嫌が多いから食べれるものが少ないんだ。

「こんなおいしいもの食べれないなんて人生の半分は損してるよ」

「今まで何度も聞いたよ…そのセリフ。でも、めぐと出会えたことでそんな問題帳消しだな」

え？そんな…。

「何かうまいこと言ってない？」

「だってそうじゃないか」

「うーん…そうだね」

無理に納得させられたみたいだけど…。

そしてパスタを食べ終えて店を出た。食事代は誠二くんが出してくれたんだ。私も払うつもりだったんだけど、こういうのって男の

子のプライドがあるんだよね。…って聞いた。

「誠二くんデザートは？」

「デザート？うーん…結構有名なケーキ屋があるんだけど行く？行った事ないんだけど」

「うん！ケーキ！…でも誠二くん甘いものとか大丈夫なの？男の人って甘いもの苦手なイメージがあるんだけど」

「甘いものは好きだよ。コーヒーも甘いじゃないと飲めないしよかったー」。

「じゃあ行こう！」

また誠二くんと手を繋いでケーキ屋さんに。うわあ。

さすがに有名なだけあって人が多いなー。

でも席は空いてたみたいですぐに案内された。

メニューを広げる。

ショートケーキにモンブラン、チーズケーキ。どれもこれもおいしそう…。これはオリジナルケーキかー。うーん……ん？

パフェだ…。巨大パフェ…。二十分以内に食べれたらタダ…。これだ！

「誠二くん決まった？」

「うん。めくは？」

「私も決まったよ！すいませーん！」
店員さんと呼ぶ。

「えーと、ティラミスとコーヒーを」

「私は…これをお願いします」

私はメニューを差して言う。

「えっ、こちらの巨大パフェですか？」
聞き直してる。珍しいのかな？

「はい。お願いします」

「か、かいこまりました」

そんなに慌てなくても…。

「ケーキが食べたいんじゃないの？」

「気になっちゃって。だつてほら……」

「ん？二十分以内に食べたならタダ……？じゃなかったら四千円！？だ、大丈夫なの？」

大丈夫だと思っけどなあ。

少し待つてたら誠二くんのティラミスとコーヒーが先にきた。

「お先にどうぞ。誠二くん」

「じゃあ、お先にいただきます」

誠二くんが食べ始めた。おいしそうだなあ。私のも早く来ないかなあ。

「どう？誠二くん」

「うん、さすがに有名なだけあつておいしいよ」

そうなんだあ。ますます早く食べたい！

パフェを待つている間に誠二くんはティラミスを食べ終わってしまった。早くパフェ来ないかなあ。

あつ！あれかな？店員さんが必死で持つて来てる。

「お、お待たせいたしました」

わあ！確かにおつきい！向かいに座つてる誠二くんが見えなくなつちやつた。

「めぐ、こ、これどうするの？」

「え？食べるよ？」

誠二くんはパフェの横に身を乗り出して聞いてきた。何言つてるんだろう。普通のパフェの十倍くらいはあるけど大丈夫だよ。

「それではただ今より二十分です。よーい……スタート！」

よーし、まざ一口。パクッ。

うーん！美味しい！どんどんいけそう！すごい！メニューのほとんどのケーキが乗つてる！

パクパク……モグモグ……。

「こ、五分経過です」

え？まだ五分？もう半分なくなつちやつたけど……。

パクパク…モグモグ…。ん…ちよつと食べにくいかも…。
「十分経過です」

あと時間半分か…。パフェはもう少しだし…、ゆっくり食べよう。
ちよつと味に飽きてきたし。
ん？

誠二くんが頑張れみたいな顔で見てる。ふふふ…大丈夫だよ。
さーで、最後の方食べよう。…んもう、フレークばかり。

サクサク…バリバリ…。うー、アイス欲しいな！。喉乾いてき
ちやうし。

でももうちよつと！頑張つて食べて誠二くんを安心させないと。

サクサク…サクサク…。

「ふあー！美味しかったー！満足！」
食べたー！

「じゅ、十五分で完食です…！」

「やったあ！」

誠二くん！私やったよー！

「す、すごいね、めぐ。その小さい体のどこに入るの？」

「甘いものは胃袋と別腹なんだよー？誠二くん知らないの？」

「いやー、実際には…。いや、めぐにつき別なのかもね」

「何それー」

「そんなに食べてよく太らないなあ」

「いつもこんなに食べてるわけじゃないよお」

「あの…」

え？店員さんが何かあるみたい。

「見事完食なのでパフェ代はもちろん頂かないんですけど、よろし
かったら空の器と一緒に記念写真をお願い出来ませんか？」

「おー、いいじゃん。撮ってもらいなよ」

い、いやだ。恥ずかしいよ。いっぱい食べる子なんて思われたく
ないもん。

「は、恥ずかしいから…。ごめんなさい」

「そうですね…」

店員さんは残念そうに奥に戻って行った。

「めぐ、今さら恥ずかしくたってもさ。ほら…」

誠二くんがそう言っただけで周囲を見てみると目で訴える。

「あ…」

みんな…私の方を見てる…。

「せ、誠二くん、早く出よ！」

ううう、恥ずかしい！

誠二くんのケーキ代をレジで支払う時もみんなが私とパフェの器を交互に見ていた。

そ、そんなに珍しいの？

「あー…」

「ははっ、みんなの注目の的だったなあ」

むう……。

「誠二くん、プリクラ行くよ！」

「うっ…。ついに…。この前のゲームセンターでいいよね？」

「うん！」

気を取り直して、いってみよう！

そしてこの前のゲームセンターのプリクラブースに。

「やっぱりこの閉鎖的空間がなあ」

まだ言ってる。二人っきりの空間を楽しまなきゃ！

お金入れて…。背景は…もう恋人だからこれでいいよね。明るさは普通で。

「撮るよ、誠二くん。ポーズは…もう恋人同士なんだから…」

私は誠二くんの後ろに立って両肩から腕を回して抱き締めた。

これで一枚。

パシャッ！

「今度は誠二くんがして？」

「え、えっと…どう？」

誠二くんが恥ずかしがりながらも同じようにしてくれる。

誠二くん…すぐドキドキしてる…。

ドキドキドキドキ…。

や、やだ…私も…。

「誠二くん、すぐドキドキしてるね…」

「だ、だつてさ…」

「でも…私もおんなじなんだよ？…誠二くん」

私は振り返って誠二くんを見た…。こんなに…誠二くんの顔が近い。向かい合って抱き合ってるみたい…。

「誠二くん…」

自然だったんだ。私は自然に目を瞑ってた。

「めぐ…」

「んっ…」

そつと…誠二くんの唇が私の唇に触れた…。

私の…ファーストキス…。

パシヤッ！

「誠二くん…！…好き…！」

「めぐ…」

抱きしめ合った。

ただただ抱きしめ合った。

そして二回目のキス…。

……

誠二くん…。あなたが大好き…。

「めぐの唇、柔らかい…」

え……。

「な、なんかエッチだよ？誠二くん」

カアッ…！

あはっ！真っ赤になってる。

「そ、そうだ！プリクラは？」

『らくがきコーナーに移動してね！らくがきコーナーに…』

「終わっちゃったね。また私かららくがきするね！」

誠二くんはベンチで休んで私がつらさがき。

あつ…。

撮れてた二つはキスしてるやつだ。てへへ…。

今日の日付：初デート…。相合い傘の絵には…合わないな。は、初キス！書きちゃえ！今度は誠二くんにも見せられるから。

私のファーストキスはプリクラにも思い出にも残ったんだ。うーん、出来上がりっ

誠二くんに渡そう。

「誠二くん、お待たせ」

「あ、うん」

「はい。これ誠二くんの分だよ！」

「ああ、ありがとう。…って、うわ！」

うふふ…びっくりしてる。私も少しびっくりしたもんな。

でも、もう一つ…。

私はこの時のために持ってきたものを渡した。

「あつ…これって…」

まだ片思いの時にらくがきに書いてしまった、あの時に見せられなかったプリクラ。

「今なら見せられるから」

うん。今なら…。

「ふふ…めぐはかわいいな」

えへへ…。

それからまた誠二くんといろんなゲームをして遊んだ。

今度は一緒に太鼓のゲームもした。クイズゲームは私の圧勝！クレーンゲームでは取れなくて誠二くんがムキになってたな…。

………

もう外が暗い…。アーケードのイルミネーションの光がきれいにわかる時間。

「めぐ…もう…」

ダメ！言わないで！

「誠二くん！……少し歩こうか」

「あ…うん…」

誠二くんもこの空気を感じてるみたいだった。

寂しい…。今日のデートも終わりを迎えようとしてる…。

誠二くんと手を繋いで…。会話はあんまりなかった。今までの時間があまりにも素敵過ぎたから…。余計に…。

いつの間にか最初の待ち合わせ場所の公演まで来てた。もう、バス停は近い。

離れたくないよ…誠二くん…。いつまでも一緒に居たい。

公演のベンチに腰かける。

「少し…寒いな」

「じゃあ…」

誠二くんはそう言うと、私の肩に腕を回して抱き寄せてくれた。

「えへへ…あつたかい…」

帰りたくないよ…。

「めぐ…親が心配するんじゃないの？」

誠二くん…。

「私…親いないんだ…」

「えっ…。ご、ごめん…」

「正確に言うと、家に居ないの。両親は二人とも結構有名な音楽家だから、あちこち飛び回ってて」

そう、家には私一人…。

「めぐ、寂しかったんだな」

えっ…そんな顔してたかな…。

「これからはオレがいるから」

「誠二くん…！…うん！えへへ…」

そうなんだ。誠二くんがいるから寂しくない。誠二くんは、私の全て。

「誠二くんの親は心配しないの？」

「うちはあんまり…」

「じゃあ…もう少しこうしていい？」

「うん」

あんまり会話はなかったけれど、こうしてるだけでもいい。

あっ…。

「誠二くん。プリクラ携帯に貼って？それでお揃いにしようよ」

「ああ、いいよ」

「あはっ、嬉しいな」

お揃いだ。誠二くんと同じ。

「そろそろ送るよ。めぐがバス降りてからが心配になるからさ」

「…うん…」

ついに終わりか…。最後に…。

「誠二くん！」

「ん？」

うー…モジモジ…。

「キス…して？」

「ぐっはあー！」

え？

「じ、じゃあ目を瞑って」

ん……。

「んっ……。えへへ…」

今日はこのくらいで勘弁しといてあげよう！

「誠二くん、今日は楽しかった！またね！大好きだよ！」

「オレも。楽しかった！オレもめぐが大好きだよ！」

誠二くん…。また好きになった。

どんどん膨らむこの気持ち。

出来れば…誠二くんとずっと一緒に過ごしたかった。

もうすぐ二年生。

新学年

四月。

桜が見事に咲き乱れて、見てるだけでも幸せな気持ちになる。そんな春。

私たちは二年生になった。

クラスは誠二さんと紗耶香ちゃんと同じ。誠二さんと同じだっていうだけでも嬉しかったのに、紗耶香ちゃんまで一緒なんだ。この一年間、楽しくなりそうだな。

「めぐ、おはよう」

「あつ、誠二くん。おはよう」

「また同じクラスでよかったよ」

「私も！それだけが心配だったんだあ」

「ちよつと二人とも。今年は私もいるんだからね」

「わかってるよ、紗耶香。一年間よろしくな」

「うん。紗耶香ちゃん、よろしくね」

「な、なんか私が入り込めない空気があるわ…」

今年、私たちは先輩になるんだ。どんな新生が入学して来るんだろう。

入学式が終わって、初々しい顔立ちの新生が校内に見られるようになった。

ふふふ、まだ一年前のことなのに懐かしいな。

知りありは紗耶香ちゃんしかいなくて不安だったなあ。

「めぐ、部活行こうか」

誠二くん。

「うん！」

今日から一週間は新生の部活動見学期間なんだ。

「どんな新生が来るんだろうな」

「後輩に手出したらダメだよ？誠二くん」

「そんなことするわけないじゃないか。オレが好きなのは後にも先にもめぐだけさ」

「や、やだあ。誠二くんったら」

「嬉しいこと言ってくれるな」。

「いつでもどこでもイチャイチャするのはどうかと思うけど？」

「さ、紗耶香ちゃん…！」

「あ、あはは…」

「めぐが全然かまってくれなくなっちゃったー！誠二のせいだからね！」

「ごめんね。紗耶香ちゃん」

「めぐは悪くないんだよ。悪いのは全部誠二なんだから」

でも私が誠二くんにべつたりだから…。

「でもな紗耶香。オレとめぐは愛し合ってるんだ」

「や、やだっ！」

「誠二くん！」

「それを止めるって言うてるの！あーあ…私も誰かい人いないかなあ」

えっ、紗耶香ちゃんがそんなこと言うなんて…。

「いい奴を紹介するぞ？」

え？誠二くん誰か知ってるのかな？

「勇介とか言ったらぶつとばすわよ？」

「……………」

そうなんだ。

「誠二、覚悟はいいわね？」

「め、めぐう！」

あはっ！誠二くんが甘えて助けを求めている！

「誠二くんかわいい！紗耶香ちゃん、止めてあげて？」

「あー、もう。付き合ってるらないわよ」

紗耶香ちゃんはそう言って先に部室に行っちゃった。

私と誠二くんもあとを追うように部室に向かったんだ。そして誠

二くと別れてフルートの練習場所へ。

「相田さん、今日は新入生のために一曲演奏するみたいですよ」

「あっ、はい」

去年、私たちも先輩の演奏聞いたもんな。

「新入生を恵ちゃんの色で虜にしちゃいなよ！」

そんな…。どこまでは無理だよ。

「魅了…する…」

「相田さんの音色は恋をしてさらに豊かになりましたからね」

「そ、そんな…」

「みゆきの言う通りだよ。恵ちゃんの気持ち伝わって来るみたい
な」

「私には…ツライ…」

田代先輩…あはは…。

「そろそろですね。行きましようか」

河本先輩がそう言って練習場へ。新入生がちらほら集まっていた。
「さあ！今日は見学に来てる子たちにいい演奏聞かせてあげてね！」

そして去年のコンクールの曲を演奏した。演奏が終わると新入生
の拍手が響き渡った。

ふうっ…。

興味持ってくれたかな？

「このあと各パートに分かれて練習するから、新入生は興味がある
パートがあるならどんどん見に行つてね！」

さーて、フルートには来るかな？

それからまたフルートの練習場所に戻ったんだけど…。

………

え？

「先輩！感動しました！」

「フルート教えて下さい！」

「すっごく素敵でした！」

「先輩かわいいー！」

何これ？私に向けて言ってるの？新入生が続々と詰め寄ってくる。

「あらあら、もう相田さんのファンがたくさんですね」

「順番だよー！押さないでねー！」

「大野先輩、ち、ちよつと待って下さい」

「なーに言ってるの！恵ちゃん！みんな恵ちゃんに憧れてるんだよ！ほらほらー！」

ひ、ひえ〜。

それから新入生に質問責めにあったり、フルートの吹き方を教えたり大変だった。握手とか求められたけどどうしたらいいかわかんなかったし。

とにかく休む暇がないくらい引っ張りダコだったんだ。

嬉しいけど恥ずかしかった。

.....

つ、疲れたー...。

今日の部活はこれで終わり。

「ふふふ、お疲れ様でした。相田さん」

「あ、お疲れさまでした」

「恵ちゃんすごいね！これなら私たちが抜けても安心だね！」

「こ、困りますよー。私には後輩を教えることなんて...」

無理だよー。恥ずかしかったし。引っ張っていけそうにないし。

「自然に向こうがついてきますよ。自信持って下さい」

「はあ...」

私、やれるのかなー。

とりあえず、今日は帰ろう。

誠二くんはまだ練習場かな？行ってみよう。

「誠二くん...」

私は練習場のドアを開ける。

「あ、めぐー！今日ね、誠二のこと大好きっていう子が来たんだよ...」

「紗耶香！何でわざわざ...」

「えっ、そうなの…?」

誠二くんを大好きな子って…。

「め、めぐ? 中学の時に告白されただけだからさ。心配しなくても大丈夫だから」

でも…。ううん、誠二くんが大丈夫って言ったら大丈夫!

「私は誠二くんを信じてるよ!」

「めぐ…。オレはめぐが大好きだよ」

「うん! さ、帰ろう。誠二くん」

……

「ちよつとお! 私もいるんだからねー!」

……

ん? 何か聞こえたような…。

さつきはああ言ったけど、やっぱり気になるな。

「誠二くん。さつき言ってた子って…」

「ああ…。亜美っていつて、元気で明るくて良い子だよ」

「そっか…」

やっぱり聞くんじゃないかな…。良い子なんて…誠二くんが言わないなら別に気にならないのに。

「めぐ!」

「え? ……んっ!?!」

せ、誠二くんがいきなりキスしてきた!

「不安にならなくてもいいから」

私を安心させるためのキスなんだね。でも…。

「いきなりだからびっくりしちゃうよ」

「こんな事だって、好きって言うのだってめぐにだけだから」

ふふ…。

「ありがと。でも、今度は私がいきなりしちゃうからね。覚悟するんだよー」

やっぱり誠二くん大好き!

いつも気を使ってくれて、優しく…。いつも見てくれる。

「ははっ、覚悟じゃなくていつでも待ってるよ」

また一年間よろしくね。誠二くん。

これからもっとお互いのことわかっていくんだろっな。

「誠二くん、手、繋ごう」

イヤなことかも見えてくるかもしれないけど、誠二くんとならいつまででも一緒にいたいよ。

新入部員

部活の見学期間が終わって、正式入部した後輩たちが今日から本格的な部活動に入る。

誠二くんのが好きっていう亜美ちゃんはパークッションになつてた。

フルートには二人。

一人は川添舞ちゃん。かわぞえまい

私よりも小さくて百五十センチも身長はないかも。気が弱そうな話し方でいつも少しオドオドしてる。真っ黒い髪を目の上と方できれいに揃えてた。

二人目は吉田梓ちゃん。よしだあずさ

私と同じくらいの身長で茶色いミディアムヘア。人懐っこい性格で舞ちゃんとは対照的。どうやら亜美ちゃんと仲が良いみたい。

二人ともフルートは未経験。頑張って教えなきゃ。

「相田さんに一任しますから」

河本先輩がそんなことを言ってた。あれだよ、一種の職務放棄だよ。

「二人とも恵ちゃんに憧れてるみたいだから、しっかり先輩として頑張つてね!」

大野先輩は他人事のように言ってた。

「光の…生徒が…また二人…」

田代先輩はわけわかんない。

「めぐ先輩!」

今、私を呼んだのが梓ちゃん。亜美ちゃんが私のことをそう呼んでるみたいで真似してるらしい。

「今日もよろしくお願いします!」

「う、うん」

ちよっとこの勢いに気おされ気味な私。

「ごご、こんにちは。相田先輩…」
「今のが舞ちゃん。」

「こんにちは。今日も練習頑張ろうね」

「はっ、はい」

私は舞ちゃんの方が気が合いそうだなあ。

「あ、相田先輩…た、高い音が出ません」

「息のはやさを早く試してみて」

「……………」

「そうそう、そんな感じだよ」

「は、はい！」

かわいい！なんて素敵な笑顔。赤面しちゃいそうなくらい。

「めぐ先輩、家でも出来る練習ってありますか？」

二人ともやる気ばっちり！

「大事に扱っんなら学校の楽器持って帰ってもいいけど、ペットボトルで練習も出来るよ。中に水を入れて飲み口から吹いて、うまく音が出るように練習するの」

「楽器壊しちゃったら困るからそうしようかな。ありがとうござい
ます！」

「うん」

二人ともいい子だなあ。

「あ、相田先輩…」

「うんうん…」

……………

「めぐ先輩！これは？」

「えっとね…」

……………

「相田先輩」

「めぐ先輩」

「は、はいはい…」

……………

「相田先輩こっちに…」

「めぐ先輩！こっち！」

「ち、ちよつと休憩しようか」

「つ、疲れる…。自分の練習出来ないや。」

「早くめぐ先輩みたいになりたいです！」

「わ、私も…相田先輩みたいに…」

「あ、あはは…」

「尊敬してくれるのは嬉しいんだけど急いでもね…。」

「頑張ってるかなー？二人ともー！」

「大野先輩だ。様子でも見に来たのかな？」

「はい！」

「は、はい…」

「うーん、やっぱり二人は対照的。」

「二人とも恋はしてるかなー？」

「大野先輩…何をいきなり…。」

「してないですよ？」

「わ、私は相田先輩が…」

「えっ…えっ！？」

「そっかあ」

「大野先輩、舞ちゃんのはスルーでいいんですか？」

「恵ちゃんみたくなりたかったらまず恋をすることだねー」

「お、大野先輩、何を…？」

「恋、ですか？」

「わ、私は相田先輩が…」

「二人とも乗ってきた！？」

「そう！恵ちゃんの音色は恋の音色なんだよ」

「大野先輩は両手を胸の前に組んでうつとりしながら話してる。」

「誠二先輩と付き合ってるんですよね？」

「えっ…？」

「亜美から聞いてますよ。めぐ先輩はライバルだって」

「うふふ…。じゃあねー！恵ちゃん！」

「えっ！ちよつと大野先輩！」

大野先輩はニヤリと笑みを浮かべて戻って行った。
…狙いは恋話か。

「いつから付き合ってるんですか？」

「あ、相田先輩…聞きたいです…」

大野先輩の思惑通り…。

「さ、三月からだよ」

「告白はどつちからですか？」

「わ、私から…」

「ききつ…キスは…し、しましたか？」

「…うん」

何を素直に答えてるんだろ。

「じゃあ…初…」

！

「そ、それはまだ！」

まだ初体験は…。

「え？初デートまだなんですか？」

「は、初デート？」

や、やだっ…！

「あ、相田先輩…ま、まさか…」

！

「は、初デートだよね！初デートは街デートだったよ！」

「ご、誤魔化さないで。」

「むう…」

な、何をそんなに悔しがってるのかな？舞ちゃん。

「誠二先輩のどこが好きなんですか？」

「ど」？

かっこいいし、かわいいし。優しいし。いつも私のこと考えてくれるし。

「全部かな。やさしい声も好き。笑顔も好き。性格も好き。私のヒーローなんだよ。一緒にいると自然に笑えるんだ」

あ、あれ？

二人とも呆けてる。

「めぐ先輩、眩し過ぎます」

「す、好きです」

「でも、亜美が誠二先輩を振り向かせるって躍起になってますよ？」
うっ…。

「だ、大丈夫だよ！誠二さんと私は切っても切れない仲だから！信じ合ってるんだから！」

「今も亜美はきつと猛アプローチを…」

うっ…。

「だっ、大丈夫だったら大丈夫！」

「あ、梓ちゃん。あ、相田先輩をいじめないで」

ああー、舞ちゃん！何て良い子なんだろう！

「あっ、噂をすれば…」

亜美ちゃんがやってきた。亜美ちゃんは小柄で茶色いウェーブがかかったセミロングの髪。梓ちゃんと似て元気な子。かわいくて大きな目をしてる。

「めーぐせーんぱーい！」

わ、私に用事？

「亜美ちゃん、何か用事？」

「今度の休みに誠二先輩を貸してもらえませんか？」

「……………はい？」

な、何言ってるの？

「誠二先輩を休みに貸してください！」

「えーと……………ダメ」

普通そうだよな。一応恋敵だよ！

「えーっ！いいじゃないですかー！亜美と誠二先輩を共有しましょ
うっよー！」

誠二くんを共有って…。

「亜美ちゃん。誠二くんは私の彼氏なんだよ?」

「知ってます」

うん、知ってるよね。

「めぐ先輩だけズルイですう!」

「いやいや、ズルイも何もないでしょ?」

「ズルイったらズルイですう!一日くらいいいじゃないですか!」

「ダメ」

「お願いします!」

頭まで下げて頼まれてるけど…。

「絶対ダメ」

「うう、めぐ先輩のけち!うわあん!梓!めぐ先輩がいじめるよお!」

えっ!?私が悪者!?

「亜美、かわいそうに…。めぐ先輩、一日くらいどうですか?」

え?え?話が見えないんですけど…。私が悪いの?

「あ、相田先輩が、な、泣かせた…」

がーん…。舞ちゃんまで。

「あ、あのね…」

とりあえず話しを…。

「うわあああああん!」

聞いてももらえないの?

だんだん訳わからなくなってきたよー!

えっと、泣いてるのが亜美ちゃんです。私が泣かせて…。誠二くんを

一日貸すと泣き止んでくれるわけで…。

「あ、亜美ちゃん!じゃあ一日…」

ニヤリ…。

亜美ちゃんの口元がそう微笑んだのを私は見逃さなかった。

「…だけでもダメ!」

「ひっ、ひどおい!めぐ先輩フェイントですよ!大人なかけ引きす

るんですね!？」

あー、もう面倒くさいや。

「ダメったらダメー……!……!……!」

もうこれ以上いろいろ言うとな怒っちゃうんだからね!

「め、めぐ。どうした?」

ふ!?!せ、誠二くん!?

誠二くんまで来ちゃった。

「な、何でもないよ……」

「そ、そっか。亜美!いつまでサボってんだ!戻るぞ!」

どうやら亜美ちゃんを連れ戻しに来たみたいだ。

「誠二先輩!。めぐ先輩がケチなんですよ!」

「一体何の話だ。めぐはケチじゃないぞ!」

「だって誠二先輩は自分の彼氏だから一日でも貸せないって!」

うんうん、当たり前!

「そりゃそうだろ!」

だよね!私間違っていないよね!

「ぶうー、たった一日なのに……」

亜美ちゃんはそっぽ向いて拗ねてしまった。

「めぐがイヤがることはしないって言っただろ?」

「だからこうやってめぐ先輩の許可をもらいに来たんじゃないですか!」

「か!」

そういうことだったんだ。

「そういう問題じゃないだろ。オレだってめぐが誰かからそんなこ

とされたらイヤだし、絶対許さないね!」

誠二くん……。

「誠二くん。私は誠二くんしか見えないよ!」

「オレもだよ。めぐだけしか見えない!」

誠二くん……好き。

「けっ!こんなところでラブラブするなです!」

ふふふ……ちよっと意地悪しちゃおうかな。

「ねえ誠二くん。二人で休憩しない？」

誠二くんの胸元で甘えて…。首に腕回して…。

「ななっ！はっ、離れてください！」

ふふふ…。

「め、めぐ。どうしたんだ？」

「わたしい、誠二くんとちゅーしたいなー」

なんて…。

「こ、ここで？」

「そっだよお」

見せ付けてあげる。私って悪い子だな。

「み、みんな見てるしさ…」

そっ、みんな見てるから…こ…そ…そ…？

…あっ…。

「め、恵ちゃん。早くしちやいなよ」

「相田さん。練習中には感心出来ませんが…どうぞ…」

「…さあ…さあ…！」

………

「せ、先輩！ち、違っんです！」

ひえええ。梓ちゃんと舞ちゃんは顔真っ赤で呆けてるし。先輩た

ちは興味津々だし。

「誠二くん！亜美ちゃん！いつまでサボってんの！」

り、理恵先輩ー！

「……ちっ！」「……」

ええー…みんな舌打ち？

「じ、じゃあまた後でな。めぐ」

「う、うん。あはは…」

「めぐ先輩…勝負はお預けです」

いや、意味わかんないから。

二人が連れ戻されたあとも…。

いろいろ大変でした。

初めての…

今日は土曜日で部活は午前中まで。

今日はなんと！誠二くんのお母さんにご挨拶に行くんだ！誠二くんのお母さんが是非私に会いたいみたいで…。

「めぐ、あとをつけられてるな」

「そうみたいだね」

誠二くんの家に向かっているんだけど、後ろから亜美ちゃんと理恵先輩とアリサ先輩がついてきてる。

「街デートって言ったのに。あの人たちは…」

誠二くんに亜美ちゃんが今日の予定を聞いたみたいで、ただの街デートって話したみたいなんだけど…。

「このまま行けば誠二くんの家に着いちゃうね」

「……撒まごうか」

「…うん」

家に行ったなんて、絶対にまたいろいろ聞かれちゃって面倒だしね。

そして誠二くんの家とは逆方向に…。

やっぱりまだついてくる…。

「めぐ、こつち」

誠二くんが誘導する方に。

「走って！」

曲がり角を曲がったところから猛ダッシュ！ぐるりと回って逆に三人の後ろに。

「せ、先輩！見失いました！」

「手分けして探すのよ！見つけたら携帯に！」

うわぁー。そこまでしなくてもいいのに。

「こつちから見つからないと思うから」

そう言われて少し遠回りしながら誠二くんの家に向かう。

「なんか必死だったね」

「だよなー。そつとしておいて欲しいよ。そんなに珍しいかな？」

「うちの部活男子少ないから余計に、じゃないかな」

「そういえばこの前は亜美がごめんな」

「誠二くんのせいじゃないよー」

そんなことを話しながら歩いてたんだけど…。

「もう少ししたら着くよ」

もう少しかー。誠二くんのお母さんにちゃんとご挨拶出来るかな

あ？

「誠二くんのお母さんってどんな人？」

前は少しだけしか話してないし、彼女として会うのは初めてだし

…。

「…よく喋るよ。…めぐ、頑張れ」

「えっ？頑張れって何？」

「うん、いろいろと…」

そ、そんな事言ったら緊張しちゃうよ！も、もしかしてすごく怖

いのかな？ううん！誠二くんを産んだお母さんだし、優しいはず！

「わ、私、大丈夫かな？」

「うん…多分…」

た、多分って何！？

「だ、大丈夫だよね！？」

「多分…」

せ、誠二くんが助けしてくれない？そ、そんなに強敵なのかな。

「……………」

「だ、大丈夫だよ！めぐ」

へ、下手なことしちゃったらどうしよう。

今さら大丈夫って言われても…。

い、いざって時は誠二くんが助けしてくれるはず！

い、いざって時って？

だ、ダメ。いろいろ考えないで…普通に笑って挨拶すればいいん

だから…。

「そ、そうだよね！普通にしていれば…。」

「めぐ、着いたよ」

「はっ、ひゃいっ！」

「どどどっ、どうしよう！もう着いたの！？ま、まだ心の準備が…！」

「ただいまー」

「せ、誠二くん！？待ってよ！」

「ドタドタドタドタ…！」

「あわわわ…。お、お母様だ！」

「勢い良く走って来てる。家の中は走っちゃダメです！」

「おかえり誠二。その子ね」

「ひゃっ！」

「あ、挨拶！」

「あっ、相田っ、めっ、恵です！ふ、ふつつ、ふつつか者ですが、どっ、どうぞよろしくっ、お、お願いします！」

「最敬礼ー！」

「め、めぐ？」

「え？やっちゃった？私やっちゃった！？」

「恵ちゃんね。こちらこそ愚息ですけどよろしくお願いします」

「お母様はそう言っつて膝をついて私に頭を下げた。」

「ひゃああ！お、お母さん！頭を上げて下さい！」

「お母さん…。そう呼んでもらっていいわ。さ、どうぞ上がって」

「は、はい！」

「な…なんだこの流れは…」

「そして誠二くんのお母さんに居間に通されたんだ。ダイニングテーブルに誠二くんと並んで座る。」

「お茶がいいかしら？コーヒー？」

「どどどっ、どうぞおかまいなく！」

「お茶でいいよ」

「誠二くんが相槌を入れてくれた。そして私と誠二くんの前にお茶

が出された。

「どうぞ。恵ちゃん」

「はっ、はい！」

お茶を一口。

「おいしいです！」

「そんなに緊張しなくてもいいのよ。楽しんでね」

「や、優しいお母さんだ。心配して損したな。」

「誠二と仲良くしてくれてありがとうね」

「そ、そんな！私が誠二くんに助けってもらってばかりで！」

「誠二とは確か……」

「今……ちようど一ヶ月くらいです」

「そっ……じゃあ……」

「か、母さん？」

え？何？

「キスは済ませてるわね」

「えっ!?!」

ふ、不意打ち！こ、声裏返っちゃった。

「ちよつと母さん！」

「あんたは黙ってなさい！恵ちゃんと話してるのよ！」

「あ、あのー……えっとー」

「いいのよ、遠慮しなくて」

「……し、しました……」

あっ……。彼氏のお母さんにこんなこと言うなんて……。頑張れっ

て……いつのこと？

「いつ？どこでしたの？」

あわわ……！

「は、初デートのときに……プ、プリクラで……」

「プリクラで……。今の子たちらしいわね」

「は……は……」

「それじゃあ……」

ま、まだ？まだなの？ひい！お母さんすごく楽しそうだし。

「そのキスの後……」

「母さん！めぐ、もついいから部屋に行こう！」

「で、でも……」

「いいの！」

強引に……！

「しっ、失礼します！」

誠二くんは強引に二階の部屋に連れて来られた。

しんどかったよお。

でもなあ……。

「誠二ー！お茶とお菓子鳥に来なさいー！」

「ちえっ……」

誠二くんは呼ばれて渋谷下を下りて行った。

私のこと何か言われてないかな？変な子だって思われてないかな？嫌われてないかな？

あっ、戻ってきた。

「せ、誠二くん。私、変な子だって思われてないかな？」

「大丈夫だよ。母さんも変だから」

「そ、そっか。私もお母さんも変ならいいよね」

「な、納得するんだ……」

え？やっぱり変？

「お、お母さんは何も言っでなかった？」

「大丈夫だよ。今買い物に出掛けたし」

そ、そっか。

……え？じゃあ……。

「じゃあ二人つきり？」

「そ、そうだね。二人つきりだよ」

「……」

「……」

き、気まずいな。思えば完全に一人つきりなんて始めてだもんね。

誠二くん何か顔赤いし…。

な、何か話さなきゃ。

「そ、そういえば誠二くんの家に最初に来たのも同じくらいの時期だったよね！」

「あ、ああそうだね。あの時は大変だったなあ。物色タイムとか言ってたさ」

「わ、私はあの時何もしてないよ？」

まだ、自分の中にもってる時だったしな…。

「お菓子食べてたっけ。あの時からしたらめぐはホント変わったよな」

…それは…。

「誠二くんのおかげだよ」

「そんなことないってー」

「そっだよ！誠二くんがいてくれたから…」

「めぐ…」

「誠二くんが救ってくれなかったら、私はいつまでもあんなだった。みんなとも友達になれなかった」

そっなんだよ。間違いないよ。

「誠二くんは私の全てなの。私にはもう…誠二くんがいないとダメなの。誠二くんの声が、笑顔が私の全て…」

「めぐ…」

「誠二くん…」

そして、キスしたんだ。

だけど、今までとは違う…。甘くてとろけそうな深いキス。頭が真っ白で何も考えられなかった。

「あっ…んっ…んっ…んっ…」

すごい…！好きっ！誠二くん好き！

誠二くんの吐息がかかる。

どれだけの間キスしてるのかわからない。

「…はっ…はっ…はっ…誠二くん…」

「んっ……はあっ……めぐ……」

終わった……。でももつと……もつと誠二さんとキスしたい！

「誠二くん！わ、私……！」

そしてまた深いキス……。

なんだろうっ……身体が熱い……！

止まんないよ！

誠二くん……！誠二くん……！誠二くん……！

「んっ……はあっ……んっ……めぐ……！」

ガバツ！

え？

誠二さんに突き放されちゃった。キス……イヤだったのかな……。

「こ、これ以上は……オレ……我慢出来なくなる」

我慢……？

ああ……そっか……。

にこっ。

私もそうかも

そして私はまた深いキスをしたんだ。

……わかってくれるよね？

「……んんっ……あっ……」

「んっ……？……めぐ……？」

いいよ……。

「んんっ……！？」

誠二くんの手が私の胸にそつと触れた……。

一瞬考えたけれど……。

「んっ……はっ……」

もう私も止まらない。

私は誠二さんと一つになりたい……。

誠二くんとなら……。

「……めぐ……」

「……うん……」

私にはっこり微笑んで…。それから誠二くんを身を委ねたんだ…。

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

「クスツ… やっぱり誠二くんってエッチだったんだね」

初体験… しちゃったんだ。私の初めてを誠二くんにあげた。誠二くんと一つになれた。

今はまだ服も着らずに抱き合ってる。

「い、いやあ… まあ…」

「ちゃっかり準備してたしねえ」

誠二くんはちゃんとアレを持ってた。ゴムで出来たやつ。

「あ、あれは母さんがさ…」

「言い訳しなくてよろしい。お母さんがそんなの息子にあげるわけないよお」

そう、お母さんがあげるなんて… 待って、誠二くんのお母さんにつきありえるかも。

「い、痛くなかった？」

「少し、ジンジンするかな…」

「だ、大丈夫？」

クスツ…。

「大丈夫だよ。私、誠二くんとかうなれて嬉しい」

「…めぐ…」

「誠二くん、あったかい」

まだ、お互いの肌が直接触れ合って体温が直に伝わってくる。

「めぐも、あったかいよ」

「誠二くんは後悔してない？私とこんなことになって」

「するわけないよ。その…またしよう？」

「…もう。エッチ！」

本当に嬉しかった。誠二くんに包まれて。全身で誠二くんを感じて。

誠二くん。

私、今すごく幸せだよ。

すごく固い二人の絆が繋がった気がする。

今日という日は忘れない。

「誠二くん…。大好きだよ…」

心から…。

「オレも。めぐが大好きだ」

えへっ…。

このままずっと抱き合ってたいな…。

ねえ、誠二くん。

「めぐ、そろそろ送るよ」

「はうっ…！？」

ああ、現実…。

「な、何？」

「う、ううん。何でもないの。あはは…もうそんな時間なんだ…？」

「もう母さん帰って来ると思うからさ」

えっ！それは困る！なんていうか、今は顔合わせ切れないよ。

「う、うん！」

急いで服を着て外に出た。誠二くんのお母さんはまだ帰って来ないみたい。今会ったら普通にいられないかも。

………

い、痛くて歩きづらい。腰も痛いし。

「めぐ大丈夫？歩き方変だぞ？」

せ、誠二くんのせいだからね。

「だ、大丈夫！平気！」

これは愛の痛さよ！耐えて！恵！

それからバス停まで時折休みながら送ってもらった。
今日は忘れられない一日になったなあ。

後輩と

「めぐ先輩、たまには休みの日に私たちと遊びに行きませんか？」
「え？」

部活中に突然梓ちゃんがそんなことを言った。

「コクコクコクコク…」

舞ちゃんはひたすら頷いてる。

かわいいよ、その仕事。

「えっと…どうしたのかな？いきなり」

「ただ、めぐ先輩と遊びたいだけですよー！いつも誠二先輩と一緒に居るから。たまには女同士で遊びましょーよー」

「コクコク…」

そうだなあ…。

「誠二くんに聞いてからね」

「ここで誠二先輩は関係ないですよー！たまにはいいじゃないですかー！」

えー、休みの日は誠二くんと一緒に過ごすって決めてるし。

「せ、先輩は、せ、誠二先輩がいないと、な、何も、決められないんですか？」

むむっ、舞ちゃんがそんなことを言うとは。

「そっ、そんなことないよ？誠二くんが寂しがるかなって思ってるだけで」

きつとそうだもん！

「一日くらい大丈夫ですよ！」

「その一日が貴重なんだよ？」

「わ、私たちなんて、ど、どうでも、いいんですね
うっ…そんなに潤んだ目で見ないで…。」

……

そしてその日の帰り道。

「…と、いうわけで誠二くん。今度の休みは三人で遊びに行ってくるね」

「うん、わかったよ」

あ、あっさりだ！

「もも、もっとごうさあ…ああ、めぐ寂しいよ！…とか、行かないで！…とか…」

「後輩と遊ぶだけだろ？行っておいでよ。オレもたまには勇介の相手でもするからさ」

せ、誠二くん、もうめぐ離れを…？

い、いいもんいいもん！思いつきり楽しんで来るんだから！

「ぷんっ！」

「お、おい、めぐ。そうふくれるなよー。もう…」
チュツ。

誠二くんがキスしてくれた。
にへっ…。

あー、ダメダメ。

「そ、それくらいじゃ…」

チラリ…。

誠二くんをチラ見。

「こっち…」

誠二くんに物陰に連れて行かれて…。

「んっ…」

熱い抱擁とキス。

「えへへ…」

「ふふっ、めぐはかわいいな」

「やーん」

誠二くん好きだよお。

「いつでもどこでも人の目はあるものよ、二人とも
ビクッ…！」

「さ、紗耶香ちゃん。脅かさないでよー」

見られた…かな。

「めぐー！私のかわいいめぐが汚れていくわー！」

「紗耶香、もう遅い。オレとめぐはこの間…」

せせせつ、誠二くん！？

「あー！忘れ物しちゃった！誠二くん！行くよ！」

言わせない！引きずってでも！

「うわっ！ちよっ、めぐ！…紗耶香！オレとめぐは愛の契りをー

…」

と、いうことで。

「今日は何をするのかな？」

休みの日。

誠二くんが「行くな！」って泣きついてきたのを振り払って、梓ちゃん、舞ちゃんの二人と遊びに来てる。

ホ、ホントだもん！

「な、何しましょう」

「決めてないです！」

むう…私は誠二くんとの貴重な一日を割いて来たのに！

二人とも柳ヶ浦町に住んでるから今日はアーケードに来てる。誠二くんとデートした場所。

「とりあえずブラブラしましょうよー！」

私は誠二くんとラブラブしたいよ。

「あ、相田先輩。い、行きましょう？」

「めぐ先輩！せつかくなんだから楽しみましょうよ！」

…そっか。そうだね！私を見捨てた誠二くんなんかほっというて楽しもう！

わ、私が泣きついたんじゃないもん！

(誠二くんも一緒に行こうよー！ねー、誠二くん)

(たまには女同士で遊んで来なってー)

ふ…ふふ…誠二くんがいなくなったって平気だもん！

「さー！遊ぶよ！二人とも！」

「あ、相田先輩…激変…」

「遊ぶぞー！」

っっていうてもまずは街をブラブラ…。

女同士でここを歩くのなんて初めてだな。いつも誠二くんと一緒にだったからなあ。

「めぐ先輩！あそこ寄りましょう！」

「なーにー？」

「わ、私は無理かもです」

えー、コスプレ専門店…。こんなところあったっけ？

なんか寄りにくそうな雰囲気なんだけど…。

「つい二日前にオープンしたらしいんですよ！面白そうじゃないです？」

私はそういう趣味は…。

！

メ、メイド！文化祭の時に美香ちゃんが着てた！誠二くんが私なら絶対似合っつて言ってくれた！

「行くよ。舞ちゃん」

「えっ！？い、いやです」

「梓ちゃん」

「はい。めぐ先輩」

ガシッと、舞ちゃんを捕まえて…。

「なっ！い、イヤです！無理です！ダメです！」

舞ちゃんの声をこんなにはつきり聞いたの初めてだ…。そんなにいやなのかな？

「行ってみようよお。舞ちゃん」

「は、恥ずかしいです…」

キュンッ…！

か、かわいい…。私にも前はこんな恥じらいがあったはず。なのに今は…。

「あ、梓ちゃん。私もやっぱり恥ずかしいな…」

「めぐ先輩。今さらですよ。無理があります」

ムツキヤー！

もういいよ！

「舞ちゃん。観念してね」

「ひっ…ぐすん…」

ここは心を鬼にして…。

ご来店ー

…

う、うわぁ…。

中に入るとメイド服はもちろん、ナース服やスチユワーデスやチャイナ服とかいろいろあった。あとはよくわからないけれど、多分アニメのコスチュームも並んでたかな。着ぐるみなんかもあった。

「すごいね。梓ちゃん」

「はい…。あつ、めぐ先輩。試着出来るみたいですよ」

試着…してみようかな。もちろんメイド服を。

「めぐ先輩、目が輝いてますけど」

「えっ、や、やだなあ。試着はさすがに恥ずかしいよー」

…着てみたい。出来ることから誠二くんに見てもらいたい。

(誠二くん。どう？似合う？かわいい？)

(す、すごく似合ってるよ！かわいい！ああ！めぐ、大好きだ！めぐー！)

ぐー！)

(あーん！)

…なんちゃって。

えへへ…にへへへ…。

「め、めぐ先輩？ニヤニヤして気持ち悪いですよ？」

はうっ！わ、私ったらなんてことを想像して…。いや、妄想して…。

誤魔化す！

「ま、舞ちゃん！舞ちゃんは！？」

「舞ならあそこに……」

舞ちゃんは着ぐるみをじーっと見ていた。

「舞ちゃん、これ気に入ったの？」

「か、かわいいです！」

そう言っただけで見ていたのはペンギンの着ぐるみだった。

店員さんは……いた！

「すみません、あれ試着したいんですけど……」

「はい、かしこまりました。ではあちらの試着室へどうぞ」

うふっ。

「舞ちゃん、おいでー」

「えっ、な、何ですか？」

「やっぱりせっかく来たんだから、試着くらいするべきだと思うん

だ。ねー梓ちゃん」

「そ、そうだよ！舞。身も心もペンギンになってみないと」

「い、意図がつかめません」

「わかってるくせにい。さー、これ着てみよう！店員さんには話したからさ」

「いっ、イヤですイヤです！こっ、こんなの着るなんて、い、一生の恥です！」

後ずさりしながら必死に抵抗の意を示す舞ちゃん。

「梓ちゃん！」

「はい！」

「いっ、いやあああっ！」

二人がかりで無理矢理にでも着せてあげる！

……って、先輩たちの影響かな。私って意地悪になってる。でも……

面白い！

そして……。

「か、かわいい……」

「舞、かわいすぎるよ」

ふわふわのペンギンの着ぐるみから顔だけ出してよたよた歩いてる。

「み、見ないでください!」

そう言っぺペンギンの羽で顔を隠す。その仕草がまたかわいいの…。

パシャッ!

「とりあえず一枚ね。舞ちゃん」

携帯のカメラでコスプレショット!

「ひっ、ひどいですう!」

「ひどいだなんて…。ほら、鏡で見てごらん。素敵な自分に出会えるから」

「えっ…」

そうやって舞ペンギンを鏡の前に立たせた。

「あっ……」

「ね?かわいいでしょ?」

これでひどいなんて言われないよね。

「こ、こんなのイヤだあ!」

あ、あれ?

「うわああああん!」

「ご、ごめんね、舞ちゃん。もう脱いでいいからさ」

おかしいな!。気に入ると思っただけだな!。

そして元の服に着替えて試着室から舞ちゃんが出てきた。

「ひっ…ぐす…か、顔から血が出るほど、は、恥ずかしかったです血って…。そ、それは相当恥ずかしかったみたいだね。」

「あ、相田先輩と、あ、梓ちゃんは?」

「え?」

「な、何か着てください。わ、私だけなんて、ひ、ひどいです」

実は待ってました!その言葉!

「し、しょうがないよね。梓ちゃん何着る?私は…そうだなあ…あ

れかな」

私はメイド服を指差した。

「似合いそうですね。私は何にしよう…」

「私が選んであげようか？」

梓ちゃんに似合いそうなのは…。

「え、遠慮しておきます！変なものになりそうですから」

えーっ、あのアニメのキャラクターっぽいやつ似合いそうなのに。

まあいいか。とりあえず私はメイドに

試着室へ…。

ゴソゴソ…。

メイドカチューシャも付けて…。

……………

こ、これ胸元開き過ぎじゃ…。うん、これくらいが刺激的で…。

下手したら全部見えそう…。

よ、よし！

シャアア…！

「完成！どう？」

似合ってるでしょ？

「うわあ。めぐ先輩かわいい…。でも…」

うん？

「す、すごいです。でも…え、えっちです」

「そ、それはねえ、ほらっ、大人の魅力？二人ともあと一年すれば

私みたいに」

やっぱり胸元のせいだね。

「その胸、何が入ってるんですか？」

「さ、触らせて下さい」

そして二人が歩み寄って来る。

「えっ！だ、ダメダメ！もう着替える！」

ゴソゴソ…。

もっと普通なのないのかなあ？

衣装返さなきゃ。

「あ、あの、ありがとうございました」

「すごくお似合いでしたよ。恋人がいらっしやったら大変お喜びになるでしょうね」

「……………」

「……………」

「あれ？めぐ先輩、その荷物は何ですか？」

「か、買ったやつだ」

「だってー、誠二さんに喜んで欲しいんだもん。」

「い、いくらしたんですか？」

「……………二万円」

「ち、ちよつと痛いけど、誠二くんのために。」

「高っ！もつと安いのがあったでしょ？」

「あ、あつたけど……………」

「店員さんにいくつも見せてもらったけど、これが一番魅力的だつて言われたもん。」

「大体なんに使う……………」

「そ、そんなことより梓ちゃんは？」

「え？めぐ先輩待つてたんですよ。今から着替えて来ます」

「ご、ごめんね。行ってらっしゃい」

「何のコスプレするんだろー？」

「舞ちゃんもせつかくだから何か買ったちゃおうよ」

「か、買いません！いりません！」

「さっきのペンギンとかさー……………」

「お待たせしましたあ」

「梓ちゃん！あつ……………ナース服か……………」

「ど、どうですか？」

「すごく似合ってるよ！将来は決まったね！」

「これで将来を決められるのもどうかと……………」

「ナース服か……………」

(どこかお身体の具合が悪いんですか？)

(オレは病気なんです…)

(それでは診察しましょうね)

(恋の…恋の病なんです！オレは君が好きだ！めぐー！！)

(あーん！)

…うふふふ。そういうのもありだね。

「め、めぐ先輩？さっきから変ですよ？」

「ふえ？あつ、似合ってるねー！梓ちゃん！」

「さっきも聞きました！もう行きましよう。舞も出たがってますし」

「コクコク…」

「そうだね、じゃあそのまま行こうか」

「着替えます！」

・・・

そして次はご飯を食べることに。

「じゃあナクドマルドに」

ハンバーガーのファーストフード。

「いいよ」

「わ、私もそこでいいです」

そして店に入って注文。

チーズバーガーとポテトとオレンジジュース！

さー、食べるぞー。

「私、めぐ先輩のイメージが変わりました」

「わ、私もです」

私が一人で。梓ちゃんと舞ちゃんが隣同士に座ってる。

「どういう意味？」

「いや、結構他の先輩たちと似てるんだなって」

「コクコク…」

と、言うത്？

「もっとおとなしい人だと思ってました」

「コクコク…」

それはね…。

「前はそんな感じだったよ。殻に閉じこもってた。それを誠二くんが変えてくれたんだ」。誠二くんは私のヒーローなんだよ!」

「ヒーロー…ですか」

「そう。実は私、中学の時いじめられてたんだ。それから塞ぎ込んでた時期があつて、柳ヶ浦高校に来たのも地元が嫌だったからなの。ちよつと苦笑いしながらだけど話せるかな。

「高校でも誰とも関わらないようにしようって思ってた。いじめの原因がフルートだったから部活でも遠慮して演奏してたんだ。実際に今の吹奏楽部でもちよつとあつただけど、誠二くんが助けてくれたんだよ。そして、守つてあげるから自分をもつと出して言つてくれたんだ」

懐かしいな…。

「じゃあその時から付き合つてるんですか?」

「ううん。それがちよつと一年前くらいのこと。その時は誠二くんのただの優しさだったのかもしれないけど、私にとってはまさに闇の底に射した光だったんだ」

「なんか、素敵な話ですね」

「それから私が誠二くんに惹かれていつつたんだ。いろいろあつて二月のバレンタインデーに私から告白したんだよ。まさか私を選んでくれるなんて思わなかつたけど」

「え?選んで?」

あつ…。これは言つちやいけないかな。

「ううん!とにかく今の私がいるのは誠二くんのおかげ!…つてなんかノロケ話しになつちやつたね」

いいお話しだよね…。

「そして明るくなつたため先輩が他の先輩たちに毒されていったんですね」

「コクコク…」

あ、あれれ?今のは私にとって結構いい話しだったんだけどな

あ。

「は、早く食べよ！」
きつと伝え方がいけなかったんだよね！私なら涙してしまいそう
な話なのに。

.....

「食後の運動をしましょう！」
食べ終わって外に出たところで梓ちゃんがいきなり言った。

「運動？」

「な、なにをするの？」

「ずばりボウリングです！少し歩いたところにボウリング場があり
ます！」

そつえば見たことあるな。

ボウリングかあ。スポーツ全般苦手なんだよなあ。あんまり乗り
気じゃないなあ。

「あ、相田先輩。い、行きますよ」

えっ！舞ちゃんからは私と同じ匂いを感じてたのに。やる気満々
だ！

…まあ、たまにはいいかな。

「そんなに長くは出来ないよ？」

それでもいいからとボウリング場に連れて来られ…。

「めぐ先輩、靴のサイズはこれでいいんですか？」

「うん」

梓ちゃんは何でもテキパキこなすなあ。

「よ、よいしょ」

「大丈夫？舞ちゃん」

重そうにボールを運んで来た。

「へ、平気です。お、重さはこのボールで、よ、よかったですか？」

「うん。ありがとう」

私も何かしないと…。年下にはすっかり働かせてちゃダメだよな。

うーん…。

飲み物でも奢ってあげようかな。

「梓ちゃん。舞ちゃん。何飲む？」

「あっ、私いらないます」

「わ、私も」

.....

「二人とも喉渴いてるよね？何飲む？」

「いいですよ」

「コクコク...」

.....

「二人とも...。何...飲むのかなあ？」

ニコツ。

「お、お茶が飲みたいです！」

「コクコクコクコク...！」

ふふふ...

「うん！わかった！買って来るねー！」

もう、二人とも素直じゃないんだからー。

「はい、お茶だよ」

私は自動販売機でお茶を買って来て二人に渡した。

「さ、投げよー。梓ちゃんからね」

「は、はい！」

ん、素直でよろしい。

「あつれー！どうしたんですか？三人で！」

この声は...

振り向くと一応恋敵の亜美ちゃんが立っていた。

「亜美ちゃんこそ何してるの？ポウリング場に一人で」

「通りがかっただけですよ」

ポウリング場を通りがかかるって...

「亜美！一人なの？一緒にやる？」

亜美ちゃんとか、亜美ちゃんとねえ...

「めぐ先輩と...。一緒にしてあげてもいいです！」

むっ…！

「あ、亜美ちゃん。無理しなくてもいいんだよ？通りがかったってことは用事があるんじゃないの？」

「見えてるよ、足元。貸し靴まで履いてやる気満々なんだよね。」

「た、たいした用事じゃないですよ！たまたま！ホントにたまたま表で梓を見かけて」

「知ってたみたいだね、今日のこと。」

「そうなんだ。でも用事があるならそっちが大事だよ。さ、梓ちゃん、舞ちゃん、投げよう！」

チラッ…。

「あらあ、顔真っ赤にしちゃってー！」

「めぐ先輩。亜美がかわいそうですよ」

「コクコク…」

やりすぎかな。

「まあ、人数が多いほうが楽しいだろうし。やろうか、亜美ちゃん」

「そ、そこまで言うなら仕方ないですね」

「ふふっ、みんな素直じゃないなあ。」

「めぐ先輩！亜美と勝負です！」

「なんかこんなことになる予感はしてたんだけど。」

「スコア勝負だよ。いいよ」

「こっちの方が燃えるかな。」

「勝った方が一日誠二先輩を好きに出来るというのはどうでしょう？」

「えっ！？」

「そ、そんなのダメだよ。まずは誠二くんに聞かないと」

「逃げるんですね」

むっ！

「ひ、人聞き悪いなあ。そういう問題じゃなくて、誠二くんを賭けるって事事態がナンセンスだよ。大体私にメリットないし」

「亜美に勝つ自信がないから…」

むむむっ！

「いつ、いいよ！やってあげるよ！絶対負けないからね！その代わり私が勝ったら誠二くんにちよっかい出すの止めてね！」

「うっ…。ま、まあいいですよ。仕方ありません」

「そこまで後輩に言われたら先輩としての面目がないもんね！」

「めぐ先輩…。亜美、ボウリングうまいですよ？」

「うっ…。」

「わ、私はあんまりしたことない…。」

「梓ちゃん見てて！私と誠二くんの愛の力を！」

「けっ！です！亜美だって誠二先輩を好きな気持ちは負けません！」

「負けられない！負けられないから！」

「ま、舞。私たちはこっちで投げようか」

「う、うん」

「そして勝負開始！」

「私から！…えいつ！」

「ゴロゴロ…。」

「ガコガコガコン。」

「七本倒れた！ま、まあまあじゃない？」

「次！」

「ゴロゴロ…。」

「カコツ。」

「い、一本しか倒れなかった。一フレーム八本か…。」

「ふふんっ…。」

「あ、亜美ちゃんに鼻で笑われた。そんなに自信あるのかな。」

「み、見せてもらおうじゃない。」

「亜美ちゃんが投げる。」

「か、構えからなんかうまそうに見えるな。」

「ゴロロー…。」

「ガコーン！」

「う、ウソ…。ストライク？」

「あっ！一本残ってる！」

「ちっ！……まあスペアは確実です！」
「うう……。」

「ま、まだまだこれから！」

「えいつ！」

「そりゃっ！」

「……………」

「二人とも本気だね」

「わ、わくわくする」

「ゴロロー。」

「ガッコーン！」

「きゃー！やったあ！ストライク！見た見た！？」

「くっ……」

「やった！やったね！私だってやれば出来るんだから！」

「めく先輩が一番楽しそう……」

「そ、そうだね」

「……………」

「まだ亜美が勝ってます！」

「あと三フレームで二十ピン差か……。」

「えいつ！」

「ゴロロー。」

「ガッコーン！」

「やった！またストライク！コッ掴んだかも！」

「負けません！」

「あう……。亜美ちゃんもストライク。このままだと負けちゃう……。」

「が、頑張れ私！」

「ガコガコガコン！」

「あっ！は、端っこ同士……」

「スペアも無理だ……。」

「亜美が勝ちます！いけー！」

……。

「あつ！誠二くん！」

「えっ！誠二先輩！？」

「ゴロー…カコツ…」

「ガーターだ。うふっ。」

「め、めぐ先輩！卑怯です！誠二先輩いないじゃないですか！」

「てへっ、見間違えちゃったあ」

「し、白々しい…」

「亜美ちゃんが怒りでわなわな震えてる。」

「せめてスペアを！」

「ふふっ。」

「あつ！」

「同じ手は通用しません！」

「もしも誠二くん！？」

「亜美ちゃんがピクツツとしたのがわかった。」

「ああつ！」

「連続ガーター！」

「まだまだだね、亜美ちゃん。これが大人の戦い方だよ。」

「ぐっ、一度ならず二度までもこんな姑息な手に…！もう通用しな

いですよ！」

「だろうね。ここからはフェアに行くよ。」

「最後で決まるんだ。お互いスペアも取ってないから純粋な十フレ

ームの勝負。」

「楽しそうだね、二人とも」

「う、うん。あ、相田先輩ずるい…」

「負けられない勝負みたいだからね」

「負けられない！！」

「えいっ！」

「ガッコーン！」

「えいっ！」

ガッコーン！

に、二連続ストライク！次もストライクならほぼ負けはない！
誠二くん…私に力を貸して…。

「誠二くん！」

（めぐー！）

ガッコーン！

ス、ストライク…！

「きゃー！やったやったー！」

「う、うっそー！最後の最後でターキー！？」

後は亜美ちゃん次第…。

「おもしろくなってきたね。舞」

「ど、どきどき…」

勝ったはず！

「あ、亜美だつてー！」

ガッコーン！

ス、ストライク…。

ガッコーン！

ま、また！？

九本で引き分け…ストライクなら負け…。

お願い…！

「亜美だつて！誠二せんぱーい！」

ガッコーン…！

・・・

「ス、スプリット…！？そ、そんな…」

は、八本？勝った？勝ったの！？

「きゃー！！勝った！勝ったよ誠二くん！」

「ぐっ…く…く…」

と、いうことは…。

「亜美ちゃん、もちろん覚えてるよね？ゲーム前のや・く・そ・く
！」

「な、何のことでしょう？」
むっ…。

「言ったよね？誠二くんにはちょっとかい出さないって。ねえ！梓ちゃん！舞ちゃん！」

ジロツ…にこっ。

「は、はい！ごめん亜美。このめぐ先輩には逆らえない…」

「コクコクコクコク…！」

うふふ…。これで誠二くんが迷惑することもなくなる。

私ってば誠二くんのためにも頑張ったんだ。今度頭撫でてもらう。

「亜美ちゃん？いいね？」

「や、約束は約束ですからね…」

ふっふーん。

よしよしい子。これからはかわいがってあげようっと。

「こ、近藤誠二くんは諦めます」

……………。

「…亜美ちゃん？」

近藤誠二くんって誰かなあ？

「な、なんですか？誰も誠二先輩のことなんて言っていなかったですよ。めぐ先輩が勝手にそう捉えていただけであって亜美が言ったのは近藤誠二くんのことですから！」

「こ、この子は…！！」

「そ、そうなんだ…。うふふふ…」

ひくひく…！！

「そ、そうですよ！あ…あはは…」

ど、どうしてくれようかなあ！

「こ、これは亜美が一本だね」

「あ、相田先輩ずるいこと、し、したから。こ、これくらいで、いい」

むっ、た、確かに負けてた勝負だったけど…。

「こ、今度、近藤誠二くんを紹介して欲しいなあ！」

「残念！遠距離なので！」

「……うふふ……」

「……あはは……」

「負けないからね、これから第二ラウンド開始だよ！」

「あ、あれ？二人ともあれ見てください！」

梓ちゃんが何かに気がついて指を差した。

「え？」

「なに？梓…あつ！たつ、倒れてる！引き分け！めぐ先輩！引き分けです！」

「ええっ！？」

二本残ってたはずの亜美ちゃんのピンが一本倒れてた…。

そんな…結局引き分けて…。

ん？引き分けならまあいいか。

「引き分けなら誠二くんを好きにするっていうのはなしだね」

「ま、まあそういうことですね。いささか納得出来ないこともあり

ましたが、最後のターキーは間違いなくめぐ先輩の力でした」

「亜美ちゃん…」

「めぐ先輩…」

ガシッ！

私たちは固い握手を交わした。

「舞。何か丸く収まったよ」

「つ、つまらないね」

なんにしる負けなくてよかった！。

それから亜美ちゃんも一緒に洋服を見たりショッピングをしたりしたんだ。プリクラも撮った。

なんだかんだで私が一番楽しんだのかな。たまには女の子同士でこういうのもいいかも。

誠二くんとは二人つきりで甘い時間を過ごすんだ。

このメイド服で！

(ああ、めぐー！かわいい！すごくかわいいよー！めぐー！
うふふふ……。

楽しみにしててね。誠二くん。

……

「せ、誠二くん。どうか？」

「ど、どうしたんだ？めぐ。そんな変な格好して……」

……。

あ、あれ？

誕生日

「お誕生日おめでとう。誠二くん。これ、手作りだから食べて？」
今日は誠二くんの誕生日。手作りケーキを作って来たんだ。誠二くんは好き嫌いが多いからチーズケーキ！

「めぐ、ありがとうな」

「うん！」

放課後、部活が終わった後の部室でお祝いしてる。

「ロウソクに火つけるね」

今年で十七歳だから十七本！

「ハッピーバースデートゥーユー」 ハッピーバースデートゥーユー
「ハッピーバースデーディア誠二くん ハッピーバースデートゥーユ

ー」

「ふーっ！」

「おめでとうー！！」

「ははっ、何か照れるな…。でも、ホントありがとう」

喜んでくれたみたい！

「はい、あーん」

食べさせてあげる。

「い、いいよ。恥ずかしいからさ」

ふふっ、顔真っ赤にさせてかわいい！

「いいからいいから」

「うん…あ、あーん」

パクッ。

「どう？おいしい？結構自信あるんだけどなあ」

「うん、うまい！おいしいよー！」

よかったあ！

「じゃあ、はい、あーん」

「あー、んっ!?!」

あつ、口の周りについちゃった。

「ごめんね、誠二くん」

口元についたケーキを拭って私が食べる。

「めぐ」

「なーに…んっ…」

不意打ちなキス。

「もうっ、誠二くん…」

チュツ。

「お返しだよ」

「なら、お返しのお返しだ」

ちゅっ〜。

「あっ…はっ…あっ…誠二くん…ダメだよ、こんなとこで…」

「誰もいないからさ…」

「少し…ただだからね？」

…あんっ…誠二くん…。

ガララッ！

「あっ！誠二せんぱーい！探しましたよ！お誕生日おめでとっ〜」

い…ま…す…」

あ、亜美ちゃん！

み、見られた！

「あ、亜美！何してるんだ！こんな時間まで！」

「そ、そそ、それはこっちのセリフです！お、お二人とも！こ、こ

ここ、ここはが、学校ですよ！？」

あわわわ…！

「あ、亜美ちゃん！こ、これはね…」

…い、言いわけが見つからない…。

「めぐ！虫は取れた！？」

く、苦しい言い訳だよ、誠二くん。

「う、うん！ありがとう！誠二くん！」

でも、これに乗っかるしか…。

「あ、明らかに、キキ、キスしてましたよね!？」
あうー…。

「そ、それに、めぐ先輩の制服、み、みみ、乱れ過ぎですよね!？」
む、虫に驚いちゃったんだな、ははは…」

…ダメ?

「騙されません!」

…だよね。

「亜美。今見た事を全て忘れるんだ」

「…イヤです。無理です。言いふらします」

そそ、それはマズイよ!

「亜美ちゃん。言いふらすのはちょっと…」

「誠二先輩とめぐ先輩が部室で、エ、エッチな事をしていたと理恵先輩たちに言います」

そ、それは一番ダメな人だ…!

「言わないでもいいですけど…」

「ホ、ホント!？」

「条件があります」

…こ、この子は!

「い、一応聞いてみようかな」

「誠二先輩」

や、やっぱり誠二くん絡み。

「なんだ?出来る範囲なら聞いてやる」

一日…、ううん、一時間なら誠二くんを貸してあげる。

「亜美にキスして下さい」

「そ、それはダメー!…」

そんなの許さない!

「亜美。それはさすがに無理だろ」

「そっだよ!ダメだよ!」

「じゃあ言うだけです」

うっ…。

「な、何か他のことにしようよ！そっだ！ケーキあげる！」

「ケーキ…？」

は、反応した？

「そ、そっだよお。私が作ったチーズケーキだよお」

「めぐ先輩が作ったんならいいりません！」

し、しまつた！余計なことを！

「どうするんですか？誠二先輩！」

「仕方ない…」

えっ！？えっ！？しちゃうの？ダメッ！ダメだよ！

「言えはいいじゃないか」

え？

「オレはめぐを裏切らない。何があつてもだ。みんなから何て罵られようともそれだけは絶対だ。ごめんな、めぐ」

誠二くん…。

「いいの！誠二くんと一緒になら何でも耐えられるよ！」

「めぐ…」

「誠二くん…」

ちゅっ…。

「なになっ！？亜美の目の前で！もも、もう亜美怒りましたからね！明日を楽しみにしてやがれです！」

亜美ちゃんは逃げるように部室から出て行った。

「ちよっとかわいそうかな？」

「弱みでオレを釣ろうとしたんだから、あれくらいは」

「でも、みんなに知られたら…」

「大丈夫。オレが守るからさ」

うん、誠二くんがいるなら大丈夫。

………

翌日。

「めぐ、亜美ちゃんから聞いたんだけど…」

「あっ…う、うん…」

亜美ちゃん、ホントに言っちゃったんだ。

「ホントみたいだね。でもみんな、ふくん、みたいな感じでしか聞いてなかったよ」

「え？紗耶香ちゃん、そうなの？」

もつと騒がれると思ってたけど。

「理恵先輩もあの二人ならそれくらいするでしょ。だって」

あ…はは…それは素直に受け入れていいのかな…。

「でも気をつけなきゃダメだよ。さすがに学校では…」

紗耶香ちゃんはそこまで言っただけ顔を赤らめちゃった。

「う、うん。気をつけるよ」

せめてキスくらいにしよう！

…そういう問題じゃないかな。

約一ヶ月後。

「誕生日おめでとう、めぐ。これ…」

「わぁ！ありがとう！」

今日は私の誕生日！

誠二くんからプレゼントもらったんだ。

「開けていい？」

何だろう？

あ…。

「わぁ、かわいいネックレス！ありがとう！誠二くん！」

「めぐに似合うかなって思ってたさ」

誠二くんがくれたネックレスはシルバーでハートが形作られていたんだ。

「つけてみるね」

さっそくつけてみることに。

「えへへ…似合う？」

今、制服は夏服でちょうどハートが胸元に隠れるくらい。誠二くんに見えるように少しだけ制服をめくって見せる。

「似合ってるよ。やっぱりそれにしてよかった」

「えへへ。ありがとう」

チュッ。

お礼のキスだよ。

「めぐ…。その…何ていうか…胸元が素敵だよ。ネックレスのせいかわからないけど…」

えっ…せ、誠二くん？

誠二くんが迫ってくる。ここはまた部室なんだけど…。

「あっ…んっ…だ、ダメだよ…。また亜美ちゃんが来るかもしれないし…」

「亜美はめぐにプレゼントなんか渡さないだろうし、大丈夫だよ。めぐがかわいすぎるのがいけないんだからな」

んっ…。

深い…深いキス…。

わ、私も、もう…。

「めぐせんぱーい！どこですかー！」

あ、あの声！梓ちゃんだ！

「んっ…せ、誠二くん。梓ちゃんが…」

「ああ、見つかったらマズイね」

ふう、止めてくれた。少し残念だけど…。

「いないなー。帰ったのかな？校門で待ってたんだけどなー」

梓ちゃんが探してる。出て行こうかな。

「あ、梓ちゃ…んっ…!？」

誠二くんに口を塞がれた。

(せ、誠二くん!?)

(しい〜…)

人差し指を口に当てて黙るように言う。そしてちょうど通路からは死角の位置にしゃがみこんだ。

な、何をする気なんだろ。

「……あっ……!」

私の胸元に誠二くんの手が…。

(ダ、ダメツ…誠二くん…)

(なんか…こついうシチュエーションって興奮するよね)

(ダメだよ…！んっ…)

口を誠二くんの唇で塞がれた。

ん…いいかも…。

！

「んー！んー！んー！」

バンバンバン！

誠二くんの背中を叩いた。

「いてて…どうしたんだよ、めぐ」

「ま、舞ちゃん…」

「え？…うわ！」

気がつくと舞ちゃんがドアの隙間からじい〜っと思てた。

「えっと…いつから見てたのかな？」

出来るだけの笑顔で。

「キ、キスするところからです」

ならギリギリセーフ！…だよな。

「の、覗き見とは趣味が悪いなあ。舞ちゃん」

「す、すいません。でも…お、おかまいなく続けて下さい」

へ？

「み、見てみたいです。ど、どんなこと、す、するのか」

あの…。

「見せられるわけないよ！」

「ひっ…！す、すいません！すいません！」

あー…怒鳴っちゃったな。

「めぐ、怯えてるじゃないか。舞ちゃん、この先は自分が好きな人

に教えてもらうんだよ」

「す、好きな人ですか」

「そうだよ。オレとめぐみたいに愛し合ってからさ」

う、うまいこと言ってる。

「じ、じゃあ、相田先輩。お、教えて下さい」

「ん？舞ちゃん。オレが言ってたことわからなかったかな？」

「だ、だって、私、相田先輩が好きなんです」

あっ……。

「そ、そういう好きじゃなくてさ、こう……一緒に居たいなあ、とか、抱き締めたいなあ、とかさ」

「わ、私、相田先輩と……キツ、キスしたいです。こ、これって、ち、違うんですか？」

「……………」

誠二くんが固まった。私の出番だな。

「ま、舞ちゃん。ほら、私と舞ちゃんじゃ子供作れないでしょ？だからダメなんだよ」

「め、めぐ？」

あれ？変なこと言ったかな？そんなに驚いて……。

「こ、子供ですか……」

「そうだよ。だって子供を作るにはさ、男と女が……」

あ、あれ？私、何言ってるんだろ？

「男と女が？」

あ、あれ？あれれ？

「あ、あのねっ……その……あ、愛し合っていないといけないから！私はもう誠二くんと愛し合ってるから、舞ちゃんも他の男の人にさ……」

「そ、そうなんですか……」

な、納得してくれたの？

「こ、子供が作れないと、あ、愛し合ったら、い、いけないんですね」

「な、中にはそうじゃない人もいるけど、普通はそうだよ」

何か話しがどんどん違う方向に……。

「な、なら、誠二先輩。お、教えてください」

「なっ！ど、どうしてそうなるの！？」

「あ、相田先輩が愛してるなら、わ、私も愛してます」

えー…それは違うよー…。

「ダメですか？」

「舞ちゃん。よく聞いてね。誠二くんは私の恋人なの。他の人の恋人にはそういうこと言ったらダメなんだよ」

「そ、そうですか…」

そんな残念そうな顔されても…。

「まあ、あれだ！舞ちゃんも男の好きな人を見つuckerんだよ！」

ナイス！誠二くん！

「…せ、誠二先輩が好きです。お、男なら…」

ふえ？

「それは私が誠二くんも好きだからでしょ？」

「そ、それもありますけど、せ、誠二先輩の、か、顔見てたら、ど、ドキドキするんです。お、同じ人、す、好きになったら、い、いけないんですか？」

そ、それ告白じゃないの！？

「あ、あのね。いけないってことはないんだけど、オレはめぐが好きだから舞ちゃんとは愛し合えないな」

「そ、そうですか。な、ならどうすればいいんですか？」

どうすればって…。む、難しいな。誠二くんは諦めてって言うのは簡単だけど…。人を好きになるのは人の自由だし…。舞ちゃんともライバル！？

「舞ちゃんはオレとキスしたい？」

なっ！？

「し、したいってわけではないんですけど…」

「ならさっきのオレとめぐを見てドキドキしてるだけだよ。めぐのことを好きっていうのはホントだと思っけど」

「そっなのかな。」

「あ、相田先輩とは、キ、キスしたいです」

も、戻った!

「…めぐ…許す」

「えっ?」

「してあげて」

「えっ!? 誠二くん本気!?!」

「女の子同士だし、少しだけ教えてあげれば納得するかもしれないし」

納得とかそういう問題じゃないだろうけど、この場が収まるなら…。

そもそも何でこんなことに…?

せ、誠二くんだ! 誠二くんが好きな人に教えてもらえなんて言うたから!

ま、まさか…。

誠二くんの方を見ると誠二くんは苦笑い。

私を使ってこの場を収めようと…!

「はは」

後でおしおきだからね!

「舞ちゃん、目を瞑って?」

「み、見たいです! し、瞬間を!」

……………。

「あー、もう! じゃいくよ!」

そして優しく舞ちゃんにキスしたんだ。

チュウ…。

あっ… 舞ちゃんの唇柔らかい…。

「こ、これが、キッ、キスなんですわね! ド、ドキドキしました! せ、先輩の顔が迫ってきてっ、あーっ! 私っ! どっ、どっしよっ…!」
興奮し過ぎだよ…。でも…。

「も、もう一回する?」

「い、いいんですか? じ、じゃあ目を瞑ります」

そして…チュウ…。

「せ、鮮明に、せ、先輩の唇を感じました。す、すごいです」

「ま、まだする？」

「めぐー。戻ってこーい」

はっ…！

あ、新しい自分に目覚めるところだった。

新しい私の誕生日になるとこだったな…。

吹奏楽コンクール

「もうこの部ともお別れですね」

「みゆきー。そんな寂しい事言わないでよー」

「……寂しい……」

「今年こそ上に行きましょう」

今年ももう明日、吹奏楽コンクールの日がやってくる。今年は三年生が多いからみんな地域コンクールの上の支部コンクールに行けることを期待してる。

「私たちが抜けたあとは…相田さん、しっかりと頑張ってくださいね」

「そんな…。河本先輩、もう終わりなんて言い方しないで下さいよ…寂しいです」

先輩たちと部活が出来るのもコンクールまで。去年もだったけど、やっぱり寂しい。別れが来るってわかってるの、心苦しいよね…。

「今日はここまでです。あとは明日に備えて休みましょう。みなさん、お疲れ様でした。明日、頑張りましょう」

明日に備えて今日はいつもより少し早く部活は終わったんだ。

そしていつものように誠二くんがバス停まで送ってくれる。

「明日だね」

「うん…。今年こそ…だな」

「うん！でもあんまり気負い過ぎても良い演奏出来ないから、力抜いてね。めぐ大先輩からのアドバイスだよ！」

「ははっ、頼りにしてるよ、めぐ」

「てへっ。…でも、先輩たち抜けちゃったら寂しいね」

「居たら居たでうるさいけどな。特に理恵先輩は」

「あはっ！そうだね」

ムードメーカーだったもんな。理恵先輩。

「だあれがうるさいってー？」

え？

「えっ！？うわっ！？理恵先輩！何でこっちに！？」

「バスを使う用事があるんです。誠二くん、よくも言ってくれたね」

び、びっくりしたなあ。いつからいたんだろう。

「り、理恵先輩がいなくなったら寂しいって話ですよ」

「じゃあ証明してみせて。あー！先輩寂しい！って私の胸に飛び込んで来て。さあ！」

理恵先輩が両手を広げて構えてる。

「理恵先輩！寂しい！」

ガバツ！

「……私の中で恵ちゃんのキャラが変わってきてるんだよね」

理恵先輩の胸に飛び込んだのは私。誠二くんにそんなことさせないんだから！

「この前も部室でいかがわしい事してたみたいだし……」

ドキッ！

「やっぱり部長として黙ってるわけには……」

ドキドキドキドキッ！

ひ、冷や汗が……。理恵先輩の胸の中で顔を上げれない……。

「舞ちゃんとの一件は聞いてるからね」

え？そつち？

「あ……はは」

いいのか悪いのか……。

「私にはそんな気はないからね」

「かつ、勘違いしないで下さいね！私は誠二くんだけを愛してますから……！」

「あーやだやだ！ちょっとくらい誠二くんのぬくもりを分けてよー

！」

またそつという事を……。

「そ、そんな事より、明日頑張りましょうね」

「……………」

あ、あれ？

「そうだね。私たち三年生にとって最後の演奏になるかもしれないから…しっかりしなくちゃね」

理恵先輩…。

「誠二くんも、恵ちゃんも…こんな部長でゴメンね？でも、楽しかったなあ」

ものすごく寂しい顔で今にも泣きそうだ！

「さ、寂しいこと言わないで下さい。理恵先輩が部長でよかったって思ってますよ？」

うん、楽しかった。だから私の本心。

「あ、ありがとう！誠二くん！」

え？

「うわっ！オレ何も言っていないでしょ！」

誠二くんに抱きついた…。

もう…！！！！！！

「離れて下さい！」

「あーん！私はあなたのそばでずっとー！」

そのセリフ言っちゃダメ！

「もう！油断も隙もない！真面目な話しだったのに！」

「私はいつだって真面目だよ？」

そ、そう真剣に言われても…。

「あつ、私わのバスに乗るからまた明日ねー！」

したいことして行っちゃった。

「ははっ、やっぱり騒がしいな。理恵先輩は」

「もうー、私にとっては天敵だよー」

「ああしてるけど冗談さ。明日は理恵先輩たちのためにも頑張ろう。

何かあの人に泣き顔は似合わない気がするしさ」

「そうだね。私もフルートの先輩たちのためにも」

それからバスが来て誠二くと別れた。

翌日。

「紗耶香ちゃん。おはよう」

「お、おお、おはよ！めぐ！」

紗耶香ちゃん、かなり緊張してるな。

「リラックスリラックスー」

「う、うん！」

朝、同じバスで学校に向かっている。

「な、なんかさ、去年と違って先輩たちと一年間やってきたから、今年こそやらなきゃって思っちゃうんだ」

「確かに、三年生の人数多くて期待されてるし…。プレッシャーは去年よりも大きいよね」

「め、めぐはさすがにソロコンにも出てただけあって落ち着いてるよね」

「そんなことないよ。緊張はいくらステージに立っても消えるものじゃないし。それに、私一人のステージじゃないから。迷惑かけられないと思うし」

「課題曲でめぐは大事なところあるもんね」

「うん…。でも、先輩たちが私に任せてくれたところだから。一番いい演奏してみせるよ！」

「強いなあ、めぐは」

それから学校に着いて楽器をトラックに積み込んで会場へ向かう。行きのバスの中では誠二さんの隣。

この、どこかに行くって雰囲気は好きだな。でも、今日は決戦の地に向かっているんだ。

誠二くんも緊張で震えてる。

「大丈夫だよ。誠二くん」

私はそつと誠二さんの膝に手を置いた。

「あ、ありがとう。めぐ」

「ううん、いつも通りにいいんだよ」

「めぐが言うなら心強いな」

「私だって、誠二くんがそばにいるから心強いよ」

「めーぐー！誠二とばかり話してないで私にもかまってよー！」

紗耶香ちゃん、もうあんまり緊張してないみたいだね。

「紗耶香、オレとめぐの邪魔をしないでくれ」

「それならあんたを黙らせるだけよ」

「め、めぐ。紗耶香が呼んでるぞ」

ふふっ、いい感じになってきたかな。

「めぐ先輩！私と舞もいますからね！」

あはは…。遠足じゃないんだから。

みんな良い感じに緊張がほぐれてきて会場に着いた。

今回のプログラムでは私たちの演奏順は早目にある。午前中には

もう終わる。すぐに準備をしないといけない。

「あ、相田先輩…！き、緊張してきました…！」

「め、めめめ、めぐ先輩！が、頑張つて下さい！」

私より今回は出ない後輩二人が緊張してるみたい。

「ありがとう。二人ともしっかり会場で見守つてね」

「は、はい…！」

さーて、気合い入れないとな。

みんなの期待に答えるんだ！

「相田さん。珍しいですね。力が入り過ぎてますよ」

あっ…。

「す、すみません。河本先輩」

「いいえ。私たちは最後になるかもしれませんが、気にしないで

いつものように演奏して下さいね。あなたは最高の奏者ですから

「まっ、気楽にいきましょう！」

「…愛理はもっと…緊張する…べき…」

「あははー…」

…最後なんてイヤだ。もう少しだけでも、この先輩たちと吹奏楽部で過ごしたい。

すう…はあ…。

…よし！

「めぐ、いよいよだな」

誠二くん…。なにより誠二くんと一緒なら、何でも出来る。近くにいるだけで力になる。

「うん。きつと大丈夫。私たちなら」

「そうだな。オレたちならいけるよ」

「みんな！そろそろよ！いつも通りに！みんなの音を響かせて！きつとそれは審査員の心に届くから！」

「…はい！」「」

『次のプログラムは柳ヶ浦高校です』

行こうっ！

コンクールはステージへの楽器搬入から時間がスタートする。制限時間が十二分間。けっこうバタバタなんだ。

みんな急いで席に着いて演奏の準備をする。もう緊張する暇もない。

会場の視線がステージに集まる。

でも、それも分からないくらいに集中する。

目線は本田先生の右手が掲げた指揮棒に。

そして、指揮棒が振り下ろされた。

課題曲

静かで時に盛大で華やかな、私の技術を生かす選曲。頑張るんだ。自信はある。

自由曲

軽快なリズムを誠二くんたちパーカッションが刻む。そして美香ちゃんのトランペットのリード。

どちらの曲も問題なく演奏出来た。そしていつも以上に素晴らしい演奏だったはず。

ステージから降りると梓ちゃんと舞ちゃんが駆け寄ってきた。

「め、めぐ先輩！感動しました！なんか…思いが伝わってきて…グスンッ…」

「か、感動でした」

「ふふ、ありがとう。いい演奏だったかな？来年は梓ちゃんと舞ちやんもステージに上がるんだから。来年は一緒に頑張ろうね」

「は、はい！」

よかった…。やっぱりすごい演奏だったんだ。

「相田さん。お疲れ様でした。素晴らしい演奏でした」

「さっすが恵ちゃんだったねー！」

「…ありがとう……」

先輩たち…。

「お疲れ様でした！」

きつと大丈夫！もう少しだけど、一緒にいれる！

「めぐ」

あつ…。

「誠二くん、お疲れ様。よかったよ」

「ははっ、さすがめぐだな。オレは自分のパートだけで精一杯だったのに」

「他の人の音を聞くのも大事だぞ！誠二くんっ」

「はいっ！以後気をつけます！……ははっ！」

「ふふ…誠二くん。時間あるみたいだし少し外に出ない？」

お昼をはさんでもまだ表彰式までは時間があるんだ。ご飯一緒に食べたいな。

「ああ、もちろん。ご飯でも食べようか」

「うん！」

それから近くのレストランに食事に来た。

「ボロネーゼ二つ」

誠二くんが注文する。

「支部コンクール、行けるといいな」

「うん。みんなの思いが音になってた。きつと大丈夫だよ」

ところで、今日は一つの計画を話そうと思ってるんだ。
誠二くんと…うふふ…。

「ね、ねえ誠二くん。こんな時に不謹慎なんだけど…」

「ん？」

「コンクール終わったらさ、う、家にお泊まりに来ない？」

「ええ…ええっ！めぐの家にお泊まり!？」

お、驚いてるなあー。

「う、うん。せっかくの夏休みなんだし。ほら、私の家って親い
いからさ」

「めぐの家にお泊まり…」

「む、無理ならいいんだよ？」

「い、いや、行く！絶対行くよ！」

ん…その顔…。やらしいこと考えてるな…。ニヤニヤしちゃって。
「今エッチなこと考えてたでしょ」

「そ、そんなことないよ！ただ、めぐと長い時間一緒に居れるのが
嬉しいなって！」

「ホントに？」

「そ、そう。ホント」

嘘。顔に書いてあるよ、誠二くん。でも、私も想像しちゃうと…
…ぶくくっ…！

おやすみのチュウとおはようのチュウなんかしちゃったりして…。
変な意じゃなくてすごく幸せだろうなあ。

そしそんなのが毎日…一緒に暮らせたら…。きつと毎日が楽しく
て、きつと毎日が幸せで。

あんなことや…こんなことも…ケンカだってするかもしれないけ
ど、仲直りする度に絆を深め合って…。

「めぐー。めーぐー」

えっ!？あっ…また妄想してた。

「そろそろ行くのか？」

い、いつの間にかご飯食べてしまってるし…。私ってすごいのか

も。

「あつ、うん」

へへへ…楽しみだなあ。お泊まり。

それよりも今はコンクールの結果だよな。

それから会場に戻って誠二さんと私はそれぞれのパートの人たちと合流した。

「めぐ先輩。おかえりなさい。あと少しで表彰みたいですよ」

戻って来ると、あと三校の演奏を残すだけだった。

「ど、どうなんでしょう？」

舞ちゃんが心配そうに聞いてくる。やっぱり一年生でも結果は気になるよね。間違いなく全員が力を一つにしているんだ。ライバルの亜美ちゃんだって。

「わからないよ。でも、きつと…」

後は待つしかないから。

そして残り三校の演奏が終わった。

『ただいまより、表彰にうつらせていただきます』

き、来た！

部長の理恵先輩が他の高校の代表の人とステージに立ってる。理恵先輩の表情は固い。あそこに立つのってすごく緊張するんだろうな。

『 高校、金賞』

「きゃああああああ！」

金賞を取った高校の会場で見えていた生徒は歓喜の声を上げる。

「めぐ先輩、あれって代表なんですか？」

「ううん。金賞を取った高校の中から四校が代表になれるんだよ」

『 高校、銀賞』

「きゃああああああ！」

「じゃあ、結構厳しいんじゃない？」

「…そうだね。だからこそ一生懸命頑張ってきたんだよ」

「……………」

数多くの中から四校だけ。それがどんなに厳しいことか…。

『柳ヶ浦高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

やった！とりあえずはクリア！

「きゃー！やった！やりましたね！めぐ先輩！」

「うん！」

「す、すごいですー！」

ここまでは…。でもまだ。

『豊ヶ峰高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

さすが代表常連校だな。

それからもどんどん表彰が続けられていく。

………

『 高校、金賞』

「きゃあああああああ！！」

これで全部の高校の表彰が終わったな。

『続きまして、支部コンクールへの代表校の発表に移らせていただきます』

『

いよいよだ…。今回は演奏順が早かったから呼ばれるなら最初の方…。

方…。

もし、私たちの後から演奏した高校が呼ばれたら、そこで今年の

夏は終わりなんだ。

理恵先輩、不安そう…。

ドキドキ…。

『柳ヶ浦高校、代表です。おめでとつございます』

！！

やっ…！

「やったあー！ー！ー！ー！」

へ？

ガヤガヤ…クスクス…。

理恵先輩がステージの上で万歳しながら叫んでた。

そして理恵先輩は恥ずかしそうに表彰状を受け取りに行ってた。

「めぐ先輩！私たちの学校ですよね！？すごいんですよね！？」

「クスツ…そうだよ！すごいことだよ！」

「か、感動です…」

よかった…ホントによかった…！

「相田さん。もうしばらく私たちにお付き合い下さいね」

河本先輩…。

「…はい！」

もう少し一緒に続けられるんだ！

「……………うつ……………うつ…」

大野先輩…。普段はおちゃらけて元気いっぱいなのに、やっぱり思い入れが強かったんだな。

「……………うれしい…」

た、田代先輩がうれしいなんて…。ちょっとびっくり。

「ホントに…よかったな…」

「めぐ先輩…」

「え？」

梓ちゃんがハンカチを渡してくれた。

…泣いてたんだ、私。

『豊ヶ峰高校、代表です。おめでとうございます』

これで四校全ての代表校が決まった。

………

「みんな！おめでとう！支部コンクールは二週間後よ！それまでまた一緒に頑張りましょうね！」

二週間後か…。あと最低二週間は一緒に頑張れるんだ。

「めぐ、よかったな。代表なれて…」

「うん！でもお泊まりが先に延びちゃったね」

「ははっ…お楽しみは後にとっておけてことかな」

ふふ…。

…それから二週間後、支部コンクールに臨んだ。結果は金賞だったけど、全国には行けなかった。でも、みんな満足そうだった。それからまた三年生の吹奏楽部送別会が八チャメチャに行われたんだ。

「理恵先輩！誠二くんを返して下さい！」

「ダメー！！」

お泊まり　そして…

「うん、わかった。明後日だね。……うん。じゃあね」

ふう…ギリギリセーフだったあ。

お父さんから電話があつて明後日に帰つて来るみたい。誠二くんがお泊まりに来るのは今日だから鉢合わせにはならないな…。

…ふふふ…楽しみだなあ。

そろそろバスが着くくらいだから迎えに行かないと。ついでに晩御飯の買い物もしないと。

好きな人にご飯作つてあげるのってワクワクするなあ。

それからバス停まで誠二くんを迎えに行ったんだ。

「ふうー、暑いなあ」

今はお昼過ぎで夏休みももう終盤を迎えてるところだから日射しも強くて暑い。バス停まではそんなに距離はないんだけど…。

バス停に着いて少し待つとバスがやってきた。

「あつ、あのバスかな」

一台のバスが走つて来る。

プシュー…。

…誠二くんはいないな…。

柳ヶ浦町からのバスじゃないみたい。

それからしばらく待つとまた一台のバスが走つて来る。

あれかな？

プシュー…。

あつ…。

「めぐ、待つててくれたんだ」

「誠二くん！」

今度は誠二くんがバスから降りてきた！

バスの中の冷気が少しひやっとした。

「暑かつただろ？」

「うづん。ねえ、今晚の夕食何食べたい？」

「何ってー、めぐが作ってくれるの？」

「そうだよ！何でも言ってみて！」

大体の料理は大丈夫！誠二くん好き嫌い多いからそんなに変なのは言わないだろうし。

「うーん…」

いきなり夕食のこと言われても困るかな？

「じゃあ、家に行く途中だし一緒にスーパーに寄ってそこで考えようか。そしたら食べたいの思いつくかもしれないよ？」

「そうだな。とりあえず行こうか」

それからいつも行ってるスーパーに向かった。

そして誠二くんと一緒に食材を見て回る。

こうしてると…」

「なんだかこうやってスーパーで食材なんか見てたら、一緒に暮らしてるみたいだね」

うふふ…。

「そうだなあ。一緒に暮らしてたら毎日こんな感じなのかな？」

そしたら私は幸せだなあ。

しばらく一緒に見て回って誠二くんのリクエストで唐揚げを作ることに。

それだけじゃそっけないから肉じゃがも…。ご飯に合うおかずが食べたいらしくて。

そして食材を買って私の家に向かう。

「めぐの家って近いの？」

「ここからはすぐだよ」

暑いから早く着きたいのかな。でもエアコンはつけっぱなしで出て来たから準備ばっちり！

しばらく歩くと私の家が見えてきた。

「あっ、誠二くん。あれが私の家だよ」

私は自分の家を指差した。

「え？」

え？つてなに？驚いてる？

「あ、あれがめぐの家？」

「そうだけど？」

変な事言つたかな？

「お、大きいね」

「そうかな？そんなに言う程大きくはないと思うけど」

誠二くんの家のはんの三倍くらい！

家の前に着くと誠二くんは呆けてた。

「ほえ〜…」

「暑いし、早く入ろうよ？」

「う、うん」

ガチャッ。

うーん、涼しいー！

「お邪魔します」

「えへっ、どうぞ。誠二くん」

とりあえず涼しいリビングに誠二くんを案内する。

誠二くんはじろじろ家の中を見回してた。そんなに珍しいものもないと思うけど。

食材を冷蔵庫に入れて…。

「誠二くん。私、部屋のエアコン入れてくるから待っててね」

「うん」

そして私は二階の部屋へ。

こゝこの部屋で誠二くと寝るんだ…。

ほわわ〜…。

い、いけない。エアコン入れて、少し片付けて…。

誠二くんは何してるかな？呼びに行こう。

そしてまだリビングへ移動。

ん？

誠二くん家族写真見てる。

「お母さん、美人でしょ？」
「うわっ、めぐ、驚かさないでくれよ。でも、優しそうだな」
「普段はね。音楽のことになれば厳しいよ」
「そう言ってたね」
「誠二くん、部屋に来る？」
「それから誠二くんを連れて自分の部屋に。」
「おお〜…」
「おお〜って何？」
「めぐは水色好きなんだな」
「私の部屋は水色が多い。水着も浴衣も水色だったし。」
「透き通るようで神秘的だから好きなんだ」
「特に物は置いてないんだ。机とテーブルとソファくらい。あとはテレビとコンポがあるけど。」
「今日はここで寝るんだよ。そのベッドと一緒にね」
「ベッドと一緒に…」
「ん、やらしい顔。」
「今、エッチなこと考えてたでしょ」
「そ、そんなことないよ！何も考えてないって」
「ふふ…からかつちゃおうかな。」
「えーっ、考えてないのお？」
「むむっ…」
「ふふ…。少しムツとしたかな？」
「え？」
「きゃっ！」
「誠二くんに押し倒されちゃった。」
「めぐ！」
「んっ…はっ…はっ…」
「んっ…激しいキス…」
「…はっ…めぐ…オレもっ…」
「まだダメ！」

ドンッ！

「残念！また後でね。ご飯の準備してくるから待っててね」
ふふ…もったいつけちゃおう。

「うっつ…」

かわいい！おあずけくらった子供みたい！後でね！

誠二くんを部屋に残してご飯の準備にキッチンに行った。

まずは下ごしらえから。

お米をといで、唐揚げのお肉をさばいて味を染み込ませて…。肉
じやがの野菜を刻んで、お味噌汁のダシをとって…。

誠二くん…。

部屋で変なことしてないかな？

見られてまずいものはないけど…。

様子見に行ってみよう。

そろーつと…。変な事してたらお仕置きしてあげるんだから！

音を忍ばせて部屋に…。

そろり…。

ん？何か見てる…。

…中学のアルバムか。私が塞ぎ込んでた時の写真…。

そんな私を変えてくれたのは…。

「そんな私を変えてくれたのは誠二くんなんだよ」

「め、めぐ！びっくりしたあ。ごめん、勝手に見ちゃって」

「いいよ。その写真、隣に写ってるの紗耶香ちゃんだよ」

「え？あつ、ホントだ。こんなに無邪気に笑ってるのに、今はあんなに邪気ばかり…。めぐはもうご飯の準備出来たの？」

「まだだよ。もう少しかかるかな。戻るけど、あんまりいろいろ見

ちちゃだよ？いろいろしたらお仕置きだからね」

「み、見ないよ！大丈夫！」

「あやしい…。」

「じゃあ戻るから。少し待っててね」

「そうやって部屋を一旦出るけど…。」

そろり…。

……………。

「誠二くん！」

「は、はい！」

やっぱり何か探そうとしてる！

「やっぱり一緒に下りてきておとなしくしてなさい！」

もう！油断出来ないんだから！

誠二くんを連れてリビングに戻る。

「テレビでも見てて」

目の届くところに居てもらわないと。

さーて、夕飯の準備しよつと。

……………

「……………」

おいしい料理作ってあげるからね

誠二くんのためにお料理。楽しいな。

同棲って毎日こんな感じなのかな？だとしたら何でも頑張れる気がするな。

……………

あとは唐揚げを揚げて、肉じゃがを煮込めば…。

ガバツ！

「きゃっ！」

な、なに！？

「へっへー」

誠二くんが後からいきなり抱きついてきた！

もう！いたずらっ子め！

「せ〜い〜じ〜く〜ん〜！」

「ぶぶっ、怒っても怖くないよ」

ムカツ！

「ご飯作ってあげないよ？」

「うっ…」「ごめん」

「素直に謝ったんなら許してあげる」

「もう出来そう？」

「もう少しかな。出来たらすぐ食べる？」

「まだ少し時間早いけど。」

「ただだこうかな」

「じゃあもう少し待っててね」

「さあ、仕上げなきゃ。」

誠二くんは料理が出来上がるまでテーブルについて待ってた。

.....

「お待たせー！」

白ご飯に唐揚げに肉じゃがにお味噌汁！

「す、すごいね…。これ全部作ったんだよね？」

「いつも一人でご飯作ってたんだからこれくらいは出来るよー！」

誠二くんの口に合えばいいんだけど…。

「じゃあ、さっそくいただきます」

「どうぞー！」

もぐもぐ…。

ど、どうかな？

「…うまいー！」

えっ！

「うまいよ、めぐ。ホントにー！」

「誠二くんのお口に合ったみたいでよかったあ」

ほっとしたなあ。

「めぐはいいお嫁さんになりそうだよね」

そ、それは…。

「せ、誠二くんは私みたいなお嫁さんなら、し、幸せ？」

「そりゃそうだよー！」

ゴクリ…。

「わ、私は誠二くんとなら…。」

け、結婚してもいい！

「え？なんだって？」

「な、何でもないよ！そくだ！お風呂の準備してくるね！」

わーーーーー！きゃーーーーー！

な、何言ってるんだろ！？私！

…で、でも私みたいなお嫁さんなら幸せって…と、遠まわしなプロポーズ？えへへ、だったらいいなあ…。

「フーン フンフーン」

ジャアーーーー…。

鼻歌混じりでお風呂の準備い

い、一緒にお風呂入ろうかな。…さすがに恥ずかしいかな。

とりあえずご飯食べよう。

戻ると誠二くんはほとんど食べ終わってて、私も誠二くんとお話ししながら夕食を終えたんだ。

「片付けはオレがやるから、今度はめぐがゆっくりしてよ」

「じゃあお言葉に甘えようかな。私はお風呂の様子見に行ってくるね」

やっぱり誠二くんは優しいな！

今日の恵はすごくご機嫌！

お風呂の様子を見て戻って来て、誠二くんの片付け風景を眺めた。もう外は少し薄暗くなってきた。

「ふうー…」

普段あんまり片付けとかしないよね。お疲れ様。

「誠二くんありがとう。お風呂はどうする？準備は出来てるよ」

「じゃあ借りようかな」

「うん！お先にどうぞ」

それから誠二くんをお風呂に案内してあげたんだ。

私は…。

着替えて…。

ふふふ…。

「誠二くん！湯加減はどう？」

「うーん！いい湯加減だよー！」

うふふふ…。

ガタンッ。

「めっ！めめめっ、めぐ！？」

「背中流してあげるね」

バスタオルを身体に巻いて浴室に突入ー！誠二くんはすごく驚いてる！

「いやっ、あの…」

「ふふ…このタオルの中が気になるの？」

「気になら…ないわけじゃないけど…」

「じゃあ…」

バサッ！

勢いよくタオルを剥ぎ取った。

「うわっ！」

…………。

「えへっ、残念でした」

タオルの下は水着でした！

「去年の夏に着てたのと同じだけど。今年は海に行けなかったからね」

「驚かすなよー。でも、嬉しいような残念なような…」

「ふふっ、背中流すよ」

誠二くんが前を隠して椅子に座る。

ゴシゴシ…。

ピトッ。

「うわっ、め、めぐ？」

誠二くんを背中から抱きしめた。

「誠二くんの背中、おっきいね」

……………」

「ずっと私のこと、この大きい背中で守ってたね」

誠二くん…。

！

「せ、誠二くん…！」

「い、いや、これは条件反射だよ！し、仕方ない！」

「真面目な話しをしたのに…」

誠二くんの前を隠してたタオルが…。

う…。

「もうっ！仕方ないなあ」

「うわっ、ちよっ、めぐっ!?!」

…

…

…

…

…

んっ…。

…

…

…

…

…

「めぐのせいだからな」

「そんなつもりなかったもん。エッチ…」

今は湯船に一緒につかってる。

とりあえずここでしちゃったんだ…。

「のぼせちゃうよ。出ようか」

「うん」

…

「ふう〜」

誠二くんは先に着替えてリビングに戻った。

髪を乾かして…寝間着に着替えて…。

リビングに戻ると誠二くんはソファでくつろいでた。

いいなあ、なんかこういうの。

「誠二くん、何か飲む？」

「うーん、コーヒー牛乳」

さすが誠二くん。ベタなところをついてくるな。買っておいでよ
かったよ。

「はい。コーヒー牛乳」

「あ、あるんだ」

ふふん、めぐを甘く見てもらったら困るな。

「いただきまーす」

誠二くんは左手を腰に当てて一気に飲み干した。

「ベタなことやってるね」

その一言で長々とコーヒー牛乳の魅力を語られるハメに。

「わ、わかったよ。誠二くん」

その後は一緒にテレビを見ていた。クイズ番組で一緒に考えたり、
ドラマを見てそれについて話したり、バラエティ番組で盛り上がり
たり…。

そんな何気ない日常的事がすごく幸せだったんだ。

「ふわあ〜あ…」

「ふふ、誠二くん、眠そうだね」

だいぶ夜も更けてきたしね。

「めぐは眠くないの？」

「こういうこと滅多にないから寝るのが勿体なくて。誠二くんとい
うやってお話ししたり、テレビを見たり、一緒にご飯食べてお風呂
に入って…何気ないことだけどすごく幸せなの」

「オレも同じこと考えてた」

…そっか。嬉しいな。

「なあ、めぐ」

「なーに？」

「まだ先になるけどさ、ちゃんと仕事とかするようになったら…そ
の…一緒に暮らそう」

！！

そ、そんな…。

「せ、誠二くん…！！………うっ………ひっ………グスンッ………」

「な、何か変な事言っただかな？」

「グスンッ…うん。違うの。すごく嬉しいの」

「まだ先のことだよ？」

「それでも…。私、こんなに幸せでいいのかな…。誠二くん、大好きだよ」

「…オレも大好きだよ」

「えへへ…寝ようか」

いつかこんな毎日がやってくるんだ。今日はもう誠二ちゃんと寝よう。

それから部屋のベッドに二人で潜り込んだ。

「今日はこうして寝ていい？」

誠二くんに寄り添って寝たいの。

「うん、いいよ」

えへへっ。誠二くんがこんなに近くに居て、すごく安心出来る。落ち着くな。

もう、わた…し…。

「…すう…すう…」

「…おやすみ、めぐ」

翌朝。

「んっ…ふあ…」

あっ…私、昨日すぐ寝ちゃったんだ。

隣では誠二くんがまだ寝てる。かわいい寝顔だな…。

チュッ。

おはようのチュウだよ。

誠二くんが起きる前に朝ご飯の準備しようかな。

そつとベッドから出てキッチンまで。

昨日の残りのご飯があるけど…私は朝からパン派だからパンで。
コンソメスープも作ってつと…。

「めぐ、おはよう」

あつ！

「おはよう誠二くん。もつと寝ててよかったんだよ」

「起きたらめぐがいなかったからさ…」

「探しに来たんだ！かわいい！顔洗っておいでよ。朝ご飯食べるよ
ね？もう出来るから」

それから誠二くんは顔を洗いに洗面所に向かった。

私も朝ごはんを仕上げよう。

……

「あつ、誠二くん。朝ごはん出来てるよ」

戻って来た！

「ありがとう。いつも一人でこんな生活してるの？」

「もう慣れっこだよ」

「でもやっぱり大変だろ。一緒に暮したら何でも一緒にしようね」

誠二くん…。

「うん！さつ、食べて？」

「いただきます」

食べ終わったらまた誠二くんが片付けをしてくれた。

それから誠二くんは先に帰る準備をしてリビングでお話ししてた
んだ。

…予想外だったんだ。

…ガチャツ。

！

不意に玄関が開く音が聞こえた。

「えっ！？う、うそ！？」

「なに？めぐ、どうしたの？」

何で！？どうして！？

「どどどどどじよう」

「ど、どうしたんだよ？そんなに慌てて間違いない。鍵開けて入ってきた…。」

「お、お父さんとお母さんだ…。」

「えっ！？めぐのお父様とお母様！？
なんで〜？」

「恵ー！いるのかー？」
「やっぱり…。誠二くんがいるのに…どうしよう。」

そんなことを考える暇もなくお父さんがリビングに現れた。

「恵ー！…ん？君は？」

あー…。

「はっ、初めまして！め、恵さんとお付き合いさせていただいてます！っ、椿誠二です！」

……………。

「な、何！？お付き合い！？」

お父さんの驚きよう…。こんなに驚いてるの初めて見る。

あうー…。

「あらあら、何の騒ぎかしら？あら、あなたは？」

お母さん…。

「あ、あの！椿誠二です！恵さんとお付き合いさせていただいてます！」

「あら、あなたが…。ふふっ、かわいいわね。めぐちゃんが羨ましいわ」

「っ、っごまでは何とか…。」

「恵、付き合ってるよというのは本当か？」

「う、うん…」

お願い！いろいろ聞かないで〜！

「ゴホンッ…。椿くん…だったかな。恵とはいつから？」

「は、半年くらいになります」

「は、半年…。それならもう…」

あーあーあー…。

「あなた！余計な詮索は無用ですよ！」
さすがお母さん！

「椿くん。めぐちゃんをいつもありがとうね。でもめぐちゃんは…
…。いいえ、何でもないわ」

え？なに？

「めぐ、何かあるの？」

「わ、わからないけど…」

なんだろう？なにか言いかけてた…。

「椿くん。今日はちよつと恵に大事な話があるんだがお引き取り
願えないかな？」

「えっ？は、はあ…」

大事な話し？誠二くんを返す程の話なの？

「めぐ。そういうことみたいだから…」

「あっ、う、うん」

それから誠二くんを玄関まで送りに。

「ごめんね。明日帰って来る予定だったんだけど…」

「仕方ないよ。仕方ないよ。めぐと過ごした一日はすごく幸せだったよ。またね」

「うん。またね…」

そして誠二くんは帰って行った。

はあ…。

夕方までは一緒に居る予定だったのに…。

「帰って来ていきなり何？お父さん」

くだらないことなら怒ってやる！

「恵。来年の春に私たちとフランスに来るんだ」

……………え？

「なに…それ？どういう…」

「フランスと一緒に行くんだ」

「何で？どうして？イヤ！イヤだよ！」

この言い方…当然旅行なんかじゃない！

「向こうで知り合った人に恵の事を話したら是非とも面倒を見たいとおっしゃってな」

それって…。

「日本を離れて勉強しろってこと？」

「そうだ」

「…どれくらい？学校は？」

「期間はわからないわ。でも、一年や二年で済まないのはわかるわよね？学校は…めぐちゃんには悪いけど辞めてもらうことになるわそんなの…。

「絶対イヤだよ！」

「それはさっきの椿くんがいるからか？」

「そ、それは…」

そう。

誠二くんと離れるなんて絶対にイヤ！！

「お母さんでいいじゃない！」

お母さんだってフルート奏者なんだから！

「私たちは各地を飛び回ってるのよ？あなたにはしっかりと勉強して一流のフルート奏者になつて欲しいの」

「よく考えるんだな。私たちは恵が何と言おうと連れて行くつもりだ」

「残り半年と少しよ。めぐちゃん、今を十分に楽しみなさい」

「話しはそれだけだ。私たちはまた明後日に発つ」

そんな…ひどいよ…。

「…うっ…ひっく…」

「めぐちゃん…」

つい昨日なんだよ…。

昨日、誠二くんが一緒に暮らそうって…。
なのに…。

「大っ嫌い！！」

ドタドタ！

…バタン！

私は自分の部屋に閉じこもった。

「…ひっ…ひっく…誠二くん…！」

（めぐ、一緒に暮らそう）

……

（私、こんなに幸せでいいのかな。　すごく幸せ）

（一緒に暮したら何でも一緒にしようね）

……

「…っ…あぁっ！…っ…あぁっ…っわぁー……」

ーん…！」

誠二くんと未来が見えたばかりなのに！

こんなひどいよ…！

どんな顔して誠二くんに会えばいいの？なんて言えばいいの？

教えて！

誰か教えてっ！

…紗耶香ちゃん！

……

紗耶香ちゃんとも…美香ちゃんとも…梓ちゃんや舞ちゃんとも…。

みんなと離れちゃう…。

何より誠二くん…。

イヤっ！考えたくない！

……

考えたくないよ…。

ワガママ

「めぐ、昨日なんだったの？」

フランスへ行くことを告げられた翌日、部活で誠二くんに出会った。メールが来たけど…返事出来なかった。

「男の子を連れ込んで！…って怒られちゃった！ゴメンね、お父さんが追い返しちゃって」

「そ、そうなんだ。大丈夫なの？」

「大丈夫だよ！お母さんは誠二くんのこと気に入ってるんだよ！」

「そっか。それなたいいんだけど」

…何で嘘ついちゃうんだろ。

言えない…。来年の春にはもう日本にいないのに。

言っちゃったら…。

(…：そうなんだ。じゃあ、一緒にいれないんだね。サヨナラ)

…怖い。

もしそんなことになったらなんて思うと。

誠二くんに限ってそんな事ないと思うけど…。わからない。行かないで…誠二くん…。私を一人にしないで？

「いけねっ！亜美を待たせてるんだっ！じゃあね、めぐ」

(じゃあね)

！

「せ、誠二くん！」

ガシッ！

「ど、どうしたの？」

「あっ、ご、ごめんなさい」

”じゃあね”って言葉が頭に響いて、思わず誠二くんの腕を掴んでしまっていた。

「どうしたの？なんか変だよ？」

「誠二くん、どこにも行かないでね？」

「何言ってるの？どこにも行かないよ。ホントにどうした？」

「ううん。何か急に不安になって…」

「変なの。オレはめぐから離れたりしないさ。じゃあまた後でね」
どこかに行っちゃうのは私の方なんだよな…。

……

「めぐ先輩元気ないですね。どうしたんですか？」

「ど、どうもしてないよ！」

分かつちゃうんだな。気をつけないと。

「ケ、ケンカですか？」

「違うよ。大丈夫！元気元気ー！」

先輩たちが抜けて私がこの二人の唯一の頼れる人になるんだから。しっかりしないと。

部活は先輩たちが抜けて新体制になってからももちろん私がパートリーダー。部長は美香ちゃん。

私が抜けたらフルートは梓ちゃんと舞ちゃんの二人だけになる。来年の春までに全部教えておかないと。

「さっ！練習練習！今日からは厳しくいくからねー！来年は二人が教える立場になるんだから」

「えー…ケンカの話し聞きたいのにー」

「だからケンカじゃないって！」

「い、いつも以上に、へ、変です」

い、いつも変なのかな？

「とにかく！練習あるのみ！」

「はい」

私がいなくなっても…頑張ってるね。二人とも。

……

「めぐ、帰ろうか」

「うん」

誠二くんバス停まで送ってもらおう毎日。当たり前な日常。

「夏休みの宿題が提出忘れて大変だよー」

「ちゃんとしないとダメだよー」

それが私の幸せなんだ。

そうだよ。それが幸せ。

そう少しの間だけでもこのまま普通に過ごしたい。

ブオオオオ…。

「めぐ、バス来たよ」

「……あつ……」

やっぱりダメだ…。 もっと一緒に居たい。 ……こんなに時間が惜しいなんて。

「めぐ？」

「…次のバスで帰るからもう少しお話ししよう？」

「え？まあいいけど」

残された時間を少しでも長く一緒に過ごしたい。

それからは帰り際、誠二さんと別れようとするといつも泣きそうになった。

二学期始まってすぐにあった体育祭でもずっと誠二くんの後を追ってた。 みんなが楽しそうだったのが少しだけ恨めしく思えちゃったんだ。 私にとっては最後の体育祭だったんだけど…。 みんなはまた来年もある。 そう考えたら何か悔しかった。

私って悪い子だな。

誠二くんに会う度にフランスに行くって言わなきゃと思う。 だけど怖い。

言っちゃったら終わっちゃう気がする。 言っちゃったら誠二くんが変わっちゃう気がする。

だけど辛い、

言っちゃったら楽になるような気がする。 言っちゃったらふきれるような気がする。

…けれど変わらないんだ。

私が言わなかったら…。

誠二くん、ごめんなさい。

私の一番のワガママを許して下さい。

誠二くんの笑顔が幸せなの。

その時が来るまで…。

変わらない二人でいさせて。

私のワガママなの…。

「めぐー」

「なーに？誠二くん」

「今日の宿題さ、少し手伝ってくれない？あれって難しいよな」

「もうー、仕方ないなあ。ちゃんとして授業聞いてたらわかるものだよー？」

「めぐー」

「めぐと一緒に居たいってことをわかってくれよー」

「そ、そんな事言っても誤魔化されないからね！」

何気ないことでも一つ一つの全てが愛おしい。

少しでも多くの思い出を…。

「今度はちよつと遠出したいね」

「たまにはいいかもな」

楽しい、幸せな時間を。

修学旅行

「誠二くん、お菓子」

「サンキュー、めぐ」

今日から二年生での一番のイベント、修学旅行なんだ。

予定はスキーと観光。

新幹線で移動してバスでスキー場まで移動する。今はそのバスの中。

隣はもちろん誠二くん。

この修学旅行では忘れられないような思い出を作りたいと思ってるんだ。

「めぐ、最近どうしたの？なんか…今まで以上に寂しがりっていうか…」

……………。

出来るだけ誠二くんのそばを離れたくなかったから、いつでもくっついてた。

「それだけ誠二くんのが好きなんだよ。一緒に居たいの」

「めぐ…？」

表情を隠しきれない時がある。つい表情を曇らせてします時があるんだ。

誠二くんは不思議そうに私の顔を覗いてくる。言葉とは逆の表情が出てしまってるんだから。

「相変わらず仲の良い事この上ないわね」

そう嫌味ったらしく誠二くんに言う紗耶香ちゃんにもまだ話さない。誰にも。いけないことだとわかってるんだけど、話して必要以上に優しくされたりしたら余計寂しくなるから。

悲劇のヒロイン気取りで私のわがまま。

しばらくバスが走るとスキー場に着いた。

今日はそのままスキー場に併設されているホテルに泊まる。スキ

「は明日の午前中からなんだ。
男子と女子の部屋はそれぞれ別館になる。寂しいけど仕方ないかな。」

「食事はみんな同じ時間にとるからその時はみんなと顔を合わせる。大浴場も一つだからその時にも。後は寝る前の時間。」

「今日は移動で大半の時間を使ったからもうすぐ夕食なんだ。」

「誠二くん大丈夫かな？好き嫌い多いからこういう時の食事って苦手なのかも。」

「クラス別で食事するんだけど、私の場所は誠二くんから遠い。美香ちゃんが近くににいるからお世話をしてくれるみたい。」

「ちよつとヤキモチ。」

「食事が終わると入浴時間。クラス別に時間が決められている。」

「あつ、誠二くん」

「ちょうど大浴場に向かう時に一緒になった。」

「誠二くん、後で少し会おうよ」

「うん、どこかい場所あるかな？」

「エントランスの方は自由に行き来出来るみたいだよ」

「わかった。じゃあ後でね」

「よかった。少しだけだけど嬉しいな。」

「ポチャン…。」

「ふう〜、いいお湯。温泉だったよね。」

「め〜ぐ〜」

「さ、紗耶香ちゃん？なに？」

「また胸おつきくなつたんじゃないのー？」

「えっ、ま、待って。その手つきは…。」

「えいっ！」

「きゃっ！やんっ！さ、紗耶香ちゃん、やめて！」

「うわー！ほわほわふわふわ！羨ましいー！えいっ！」

「あんっ、くっ、くすぐりたいよ」

「も、もうこれ以上は！」

「ダメー！これは誠二くんのなんだから！」
「えっ？」

「あっ！し、しまった！」

「胸が大きくなったのはまさか……」

「あう……。ぶくぶく……。恥ずかしい……」

「めぐが誠二の毒牙に……」

「も、もう出るね！」

「逃げろーっ！」

「もうっ！紗耶香ちゃんったら！」

着替えて誠二くんに会いに行こう。寝間着は学校のジャージ。少し恥ずかしいね。

もう誠二くん来てるかな。いつも待ち合わせは私より早いもんね。部屋に荷物を置いてエントランスに向かう。

誠二くんいるかな？あっ、いた！……あれ？紗耶香ちゃんも。いつの間……」

「あっ！めぐー！私にもかまってよー！」

「あは……」

「紗耶香ちゃんには悪いけど二人つきりになりたいな。」

「部屋は一緒なんだろう？いいじゃないか」

「うるさいわね！あんたばかりズルイのよ！」

「オレだっ一緒の部屋に泊まりたいよ」

「スケベ！黙りなさい！」

「なんだとー！」

「……………」

「紗耶香ちゃん、ちょっといいかな？」

「えっ、何ー？」

「向こうで、いい？」

「うん！いいよー！」

……話そう。紗耶香ちゃんにだけは。

「どうしたの？めぐ。誠二に聞かれたくない話し？」

「うん…あの…あのね…」

「なーにー?」

「私…フランスに行くんだ」

「フランス?へー、いーなー。冬休みに旅行?」

「……………」

「めぐ?」

「学校…辞めるの…。春からフランスで音楽の勉強するんだ…」

「……………え?な、何て?」

「私は…春までしか日本にいないの…」

「……………えー……………」

「さっ、紗耶香ちゃん!」

「ご、ごめん。めぐ、何?わけ分からないよ」

「お父さんとお母さんからフランスで勉強するように言われたんだ。学校は二年生までで…辞めて…」

「…そ、そんな…どうして…」

「…だから、誠二さんと少しでも長く一緒に居たいんだ。紗耶香ちゃんとは部屋でお話し出来るから…だからお願い」

「誠二…。わかった。部屋で待ってるね。もう少し聞かせて…
グスン…」

「紗耶香ちゃん…。ごめんね、ありがとう」

そして紗耶香ちゃんは部屋に戻って行った。

「ごめんね、紗耶香ちゃん。でも誠二さんと一緒に居たい。」

「ごめんね、誠二くん」

「ど、どうしたの?紗耶香泣いてなかった?」
うっ…。

「き、気のせいだよ。泣いてないよ?」

「うーん…」

「あっ、明日からのスキー、楽しみだね!」

「えっ、ああそうだね。めぐはちゃんと滑れるのかなあ?」

よかった…。話題変わってくれた。

「私は滑ったことあるもん！中学の時も修学旅行スキーだったからね。誠二くんこそどうかない？」

「むっ、すぐに滑れるようになるさ！」

そんな他愛のない話しをした。それが今の私にとっては最高の幸せなんだ。

.....

「もうそろそろ消灯時間だね」

もっ。。もっ。。もっ。。時間が欲しい。

「めぐ？」

「キスして？」

誠二くんは周りをキョロキョロ見渡してキスしてくれた。

「えへへ。。おやすみ！誠二くん」

「おやすみ。めぐ」

.....

部屋に戻ると。。。

「めぐ。。おかえり」

「紗耶香ちゃん。。」

「誠二には話してるの？」

「まだ。。私から話すから黙っててくれる？」

「うん。。でも。。」

「怖い。。今までの事が壊れちゃうのが」

「でも誠二はああしてるけど優しいから、きっと分かってくれると思うよ？」

「そう、誠二くんは優しいの。だからこそ。優しいからきつと笑顔を見せてくれると思うんだけど、それは気を使ってしまう本当の笑顔じゃないと思うんだ。。私は今が幸せなんだ」

「めぐ。。私、イヤだよ。めぐと離れたくない」

「私もイヤだよ。でも、お父さんとお母さんは厳しいから。。どうにもならないんだ」

「。。ひっ。。。。えぐっ。。。。。。めぐう。。。。」

紗耶香ちゃん…。

「ゴメンね…」

「…うっ…ひぐっ…めっ…めぐは…グスッ…悪く…ないよ…」
でも、私は少し気が楽になった。やっぱり話しを聞いてくれる人
って大事なんだな。

泣かせちゃって辛い思いさせちゃったけど、ありがとう。紗耶香
ちゃん。

なるべく楽しい話しをって思って、明日の話しをしながら夜は更
けていった。

修学旅行二日目。

朝からキレイな真っ白な雪が…降ってない…。

天候は晴れ。スキー場は人工の雪で覆いつくされていたんだ。

スキーウェアを来て靴を履いて滑る準備を整える。

「みんなインストラクターさんの言う事をよく聞いて！勝手な行動
は慎むように！」

忘れてなければ滑れるけどおとなしくしとかないとね。

うっ、でも早く滑りたいよー。

気持ちいいんだよなあ。

「めぐ！行こう！呼んでるよ！」

「あっ、ごめん！紗耶香ちゃん！」

紗耶香ちゃんが待っててくれた。

「中学の時にも一緒に滑ったよね！懐かしいなー。めぐったら全然
滑れなかったよな〜」

「さ、最後はちゃんと滑れたもん！」

「あははっ！そうだったかなあ？」

「そうだったもん！」

「そこ！早く！みんな待ってるよ！」

あっ、怒られちゃった。

「あちゃー、行こう！」

「うん！中学の時も怒られたよね」

「あはっ、そうだったっけ？」

「…楽しいな。いつまでもこんな時間が続けばいいのに…。」

「止まれなあああああ…！」

堀川くん！？

流星の如く流れて行く堀川くんが見えた。

ひ、久しぶりの登場だけど見なかったことにしよう。

「どんなところでバカやってるわね。あのバカは。どうせ誠二の作業でしょ」

誠二くん…うまくやれてるかな。

今すぐ近くに行きたいよ。

それからグループでしばらく基本的な練習をした。

「君たち二人は経験者みたいだね。少しだけなら滑って来ていいよ。中級コースまでだけどね」

えっ、いいの？

「やったね！めぐ！行こう！」

「うん！」

他のグループの人は何人が滑ってる人がいた。同じ経験者なのかな。

紗耶香ちゃんとリフトで上まで上る。

「よし！行くぞー！きゃっほー！」

ふふっ、紗耶香ちゃんは元気いいなあ。

さっ！私も滑ろう。

山の斜面を滑り始める。

あっ！あれ誠二くんだ！

みんな背中にゼッケンを貼ってあるからそれでわかる。帽子とゴーグルつけてるから顔はわからないけど。

一緒にいるのは…美香ちゃんだ。

むむむ…。

私が誠二くんのところまで来るといいう時に美香ちゃんは滑りだし

た。経験者みたい。

誠二くんは美香ちゃんが滑って行く様子をずっと眺めてた。

「誠二くん、美香ちゃんに見とれてる」

「めぐ！？ち、違うよ！かっこいいなあって思ってただけで」

それを見とれてるって言うんじゃないの？

まあいいけどー。

「もう滑れるようになった？」

「まだ腰が引けちゃうんだよな」

「後ろに重心置いたら逆に転んじゃうからね。怖がらないでやれば

大丈夫だよ」

「分かってるんだけどなー」

「練習して早く一緒に滑ろう！ほらっ、誠二くん、ハの字」

それから少し練習してグループに戻った。元々運動神経が良かった

誠二くんは、今日一日が終わる頃にはもう滑れるようになってた

んだ。

スキーが終わって、昨日と同じように夕食を済ませてお風呂に入

って、また誠二くんとエントランスでお話したんだ。

分かれ際にはまたキスをした。一緒に寝たら最高なのにな。

修学旅行三日目。

この日は雪が降ってて一面をキレイな銀世界に染めていた。

午前中はグループで滑って、午後からは自由に滑れる。

「誠二くん！上に行こう！」

誠二くんを誘ってリフトに乗る。

「うわぁー。今日は景色がすごくキレイだねー」

「オレたちが住んでるとこじゃまず見れない景色だしね」

「そうだね。ね、誠二くんはスキー楽しい？」

「ああ！すっごく楽しいよ！また来年の冬とかまためぐとスキーし

たいな」

あっ…。ヤブヘビだったかな。私は来年いないのに。知ったらど

んな顔するんだろっ。

「ねえ誠二くん。私が…その…ど、どこか…」

「ん？何？」

言えば楽になるかも知れないのに…。

「う、ううん！あっ！もう着くよ！私の滑りについて来れるかなー？」

「ふふふ…。オレの練習の成果を見せる時が来たみたいだな」

せっかくの修学旅行なんだし。今は楽しもう。

「じゃあ行こう！」

誠二くと並んで滑る。

あっ、誠二くん速い！すごいな、もう追い抜かれちゃったんだな。

「ま、待って！」

「ははっ、気持ちいいー！ついておいでー！」

誠二くんが行っちゃっ…。行かないで…私を置いて行かないで！

どこか…誠二くんが遠くに行ってしまうような感覚に襲われた。

せ、誠二くん！

あっ、止まった。

ズササッ。

「誠二くん！」

「なっ！おいおい、めぐ。どうしたんだよ。…泣いてるの？」

私は誠二くんの元にたどり着くと思いつきり抱きしめた。

「グスンッ…置いて行かないでよ…」

誠二くんがここにいることを確かめるように抱きしめていた。

「い、ごめん、めぐ。今度はゆっくり滑るからさ。泣かないでくれよ」

「うん……。えへっ、ゴメンね。誠二くんが早く行っちゃっから困らせたくなくて」

「な、なんだよー。悪い冗談よしてくれよー」

「あはははっ！行こっ！」

それから二人ですっど滑ってた。こんなこと…もう二度とないの

かな…。そんなのイヤだよ。

誠二くんは…行かないでって言うてくれるかな…。

夜は前日と同じよに過ごした。明日にはこのホテルを出るから少し早めに部屋に戻って荷物の整理をした。

修学旅行四日目。

この日は午前中にスキーをして午後からは次の観光場所に移動した。

観光は一応レポートの提出があるからきちんとしなさいといけない。みんな早々と済ませてお土産とかの買物目的みだけだね。

午後一杯を移動に費やしてそのままホテルへ。今度はエントランスに行けなかった代わりに宿舎は男女同じ。だから階段の踊り場で誠二くんと話してたんだけだ。

「午前中はこことこことここを回ってお昼からはデートだよ！」

「結構急がないとね。確か夕方にはホテルに戻らないとダメみたいだから」

えへへ…。

見知らぬ土地でのデートなんて楽しみだなあ。

明日のことを計画して部屋に二人とも戻った。もちろんおやすみのちゅーはしたよ！

修学旅行五日目。

「ううう、寒い！さっ、誠二くん！行こう！」

「気合い入ってるなあ。めぐ」

「時間は限られてるんだから！早く早く」

見る場所は三か所！

まずはバスで移動して…。

有名な金色で彩られたお寺！

「うわあ。すごい！」

「ホントだよな。写真なんかで見るとは全然違うよ」

誠二くんの言う通りだなー。歴史背景知ってたらもつと感動するんだらうなあ。

ぐるっとそのお寺を見て回る…と、何かこの場所に似合わない物が。

「誠二くん！これやろう！」

「んー？」よく当たる恋愛おみくじ”？」

ちよつと胡散臭いけど面白そうだしね！

それはお金を入れて名前を入力すると、機械からおみくじが出てくるようになってたんだ。

誠二くんが取って広げ、中身を読む。

「んー、なにになー」

『二人は今は幸せ絶頂期！周りからも羨ましがられるほど仲が良いでしょう。しかし、この先に大きな大きな困難が待ち構えています。この困難を、二人が互いを信用、信頼して乗り越えることが出来ればさらなる幸せが訪れることでしょう』

す、すごい！当たってる！

「ははっ！当たってるかもね。大きな困難だって。なんだらうな」

「…お互いを…信用…」

「めぐ？」

「えっ？ああ、誠二くんが浮気でもするんじゃないのー？」

「そっ、そんなことするわけないじゃん！」

「どうかなあー？」

「めぐっ！怒るぞ？」

「あははっ！ゴメンね。次行こう！」

お互いを信用して乗り越える…か。その後に待ってる幸せ？私たちの未来は明るいのかな？

その後はお城と街を一望出来るタワーに行ったんだ。

そのタワーの中で…。

「誠二くん。見つけちゃった。んふふ…」

「な、何を？」

私があまりに素敵な笑顔で言うから誠二くんが構えてた。

「ご当地プリクラ！ここでしか撮れない背景なんだよ！思い出&記念だね」

「あつ、プリクラね。だいぶオレのプリクラ経験値も上がって来たからね」

「じゃあ撮ろうね」

そしてプリクラ撮影！寄り添って撮ったり、ちゅープリも！一生の思い出だね！

「らくがきも。」めぐ&誠二参上！”なんてありがちな？

ホントにまた来れたらいいのにな。

それから観光名所巡りを終えて街に遊びに行った。

「うわあ。へーっ！…うわあ」

人が多いなー。私たち制服だから目立っちゃうな。誠二くんは少し恥ずかしそう。

あつ！

「誠二くん。これ買おうー」

「何を？あー、ご当地キーホルダーか」

「ここでしか売ってないんだよ！記念だよー。買おうよー。お揃いだよー」

誠二くんは興味なさそうだったけどお揃いで買ったんだ。

昼食も地元料理！誠二くんは苦手みただったけど、私が食べてあげた。デザートだって地元で評判のところにいったんだ。

なかなか満喫してた。

とにかくアーケードが大きくていろんな物に目移りしちゃったな。誠二くんも制服で歩くのに慣れてきたみたいで楽しんでるようだった。

「またプリクラあるよ！最新だよ！私たちの中にはないよ！」

「うんうん。撮ろうね」

そして二回目のプリクラ撮影！内容は変わらないんだけどね。

「はいっ。誠二くんの分。今まで撮ったのちゃんと持ってる？」

「ちゃんと大事に持ってるよ。めぐのやつを粗末にするわけないし」
「ふふ、ありがとう」

「それはそうと、そろそろホテルに向かわないとヤバい時間だよ」
もうそんな時間か…。この修学旅行ももう終わりなんだな…。寂
しい…。

「ちよつと急ごう！」

「あつ！ちよつと…！」

誠二くんが私の手を取って走り出した。
タッタッタッタツツ…。

「はあつ…はあつ…せい…じくん！…待って！」

「あつ」

よ、よかった。止まってくれた。

「ごめん、めぐ」

「…はあつ…はあつ…う、ううん…」

「だいぶ走ったから…少しゆっくり行こう。バス停は近くみたいだ
し」

急いでおかげでバス停に着いても時間は余ってた。

「近くに寄っていい？」

バス停で誠二くんの隣に座ってる。

「あ、いや、制服だし。みんな見てるよ？」

…もう二人の時間は終わりなんだよ？

こつなつたら…。

「ダメ？誠二くん」

必殺の上目使い。誠二くんがこれに弱いのは実証済みなんだ。

「うっ…」

ほらほら、誠二くん。

「制服だし…」

ダメなのかな…。

泣きそう…。

スッ…。

誠二くんは私の肩に腕を回して抱き寄せてくれた。

「…ありがとう」

「え？」

素直に感謝。私のわがまま聞いてくれたんだよね。

そして少し待ってたらバスが来てホテルに戻った。

荷物を部屋に置いてからみんな集まって夕食。それから入浴を済ませてまた階段の踊り場に。明日は帰るだけで荷物の整理があるから早目に部屋に戻る予定なんだ。

「もう終わっちゃうね。修学旅行」

「そうだなー。でも楽しかった」

「私も楽しかったなあ」

「また帰ったらいつもの毎日なんだな」

「いつもの…」

毎日か。この修学旅行の間、少しだけフランスに行く事を忘れられてた。帰ったら…またいつも考えちゃうんだろうな。

「めぐ、どうしたの？最近さ。悩み事？オレには言えないようなことなの？」

あつ…まただ…。

「修学旅行終わりって思ってたなら寂しくなっちゃって…」

「そうだね。寂しいな。でも今回めぐも居てすごく楽しかったしさ、また一緒に旅行しようよ」

一緒に…旅行…。楽しかった…すごく楽しかった…。私との先のこと考えてくれてる。

だけど…言わないで…誠二くん。

じゃないと私…。

「……………」

「めぐ？」

私…ダメだ…。

「…うっ…ひぐっ…せ…誠二くん…！」

「え？ど、どうしたの？めぐ」

泣いちゃったらダメだよ…私…。

でも堪え切れなかった。

「ご、ごめんね。今日はもう部屋に戻るね。おやすみなさい」

「ちよっ…めぐー！」

ゴメンね、誠二くん。

もう我慢出来なかった。

私は誠二くんから逃げるように部屋に戻って来た。部屋には誰もいなかった。

「はあ…」

やつちやったな…。誠二くんいろいろ聞いてくるかな。もう少し普通にしてたかったんだけどな。

誠二くん…。

今日撮ったプリクラを眺める。

もう何回も撮ったね。初めはあんなに照れくさそうだったのに、今はすっかり慣れちゃったね。前のと見比べればすぐわかるよ。

「めーぐー。何してるの？ん？プリクラ？今日撮ったの？げっ、キスしてるし…」

紗耶香ちゃんが部屋に戻ってきた。

「紗耶香ちゃん…。そうだよ。今日撮ったの。まだまだあるよ」

私は今まで撮ってきたプリクラを見せる。

「これは初デートの時のやつでね。あっ、これはまだ付き合う前のやつで…」

いろんなことがあったな…。最初は見せられなかったプリクラ。ファーストキスが残ったプリクラ…他にも…いろんな…。

「…そして…これは…繁華街…で…うっ…撮った…えぐっ…グスンッ…やつ…で…」

「めぐ…」

「紗耶香ちゃん！私…！私やつぱりイヤだ…！離れたくない！離れたくないよ…」

「…誠二には？」

「…まだ…。わがままだと分かってるけど、普通に過ごしたいの。誠二くんの自然な笑顔が見ていたい…」
「めぐ…。めぐも誠二も可愛そうだよ…」
また一日が終わっちゃう。少しずつでも、確実に日本を離れる日が近づいてるんだ…。

修学旅行最終日。

「昨日見たわよ。二人のプリクラ」

「なっ…！」

「えへへ…。ゴメンね、誠二くん」

「うっ…。めぐう…」

今はもう帰りのバスの中。

朝からは気まずかったけど誠二くんも昨日の事は聞かずに、紗耶香ちゃんが話しに入って来た事もあっていつも通りに戻ったんだ。

「まあ、あれね。いつでもお似合いのカップルでいることね」

紗耶香ちゃん…。

「な、何だよ紗耶香？昨日の夕食には頭のおかしくなるような物が入ってなかったぞ？」

あちゃー…。

「あんた一遍本気で思いつつつきりぶん殴るわよ！？」

「あは…ははは…」

「あははっ！誠二くん腰引けてるよ？」

「いや、だつて見た？今の顔」

「顔がどうかした？」

「い、いえ！紗耶香様は本日も見目麗しゅうございます」

「バカにしているわね！あんた絶対バカにしているわね！バスを降りたら覚悟しなさいよ！」

ふふふ…。

こんなのでいいんだ。

もう少しだけいいからこのまま過ごしたいな。

進路

「そう…春に…」

「すみません。年明けには両親が話しに伺いますので、詳しい事はその時に」

「分かったわ。担任としても、吹奏楽部の顧問としても…残念だわ」
「…ご迷惑おかけします」
「バタン…」

今日は進路相談の日。私は本田先生に学校を辞めることを話した。年末にお父さんとお母さんが帰って来るから詳しいことはその時私自身もいつまで居れるのかわからない。

自分で言うのもなんだけど、私は吹奏楽部でも主力だったから、すごく迷惑をかけてしまう。

誠二くんはどんな進路を考えているんだろう。自分がフランスに行くことばかりでちっとも気にしてなかった。

たとえ私がフランスに行かなかったとしても、進学や就職で離れることだつてあるんだよね。紗耶香ちゃんやみんなとも。

寂しいよね…。

「めぐ、帰ろうか」

部活が終わって誠二くんがいつものように送ってくれる。

「めぐ、進路ってどうするの？」

「えっ!？」

わ、私が聞かれちゃった。

「そんなに驚かなくても…」

「ご、ごめんね。私はまだ決まっていなかな」

「そっか。めぐは頭良いからまだ焦らなくても大丈夫だよな」

「そ、そっだよ。私頭良いし」

「……………」

あっ…。

「う、ごめんね」

誠二くんがじとーっとした目で見ていた。

「はぁー、どうするかなー」

まだ決まってるみたいだな。

「でも、めぐは楽団とかに入ったりするんじゃないの？」

「…うん。多分そうなるかな」

「じゃあ…めぐもめぐの親みたいにいるんなところを…？」

「…そう…かも…」

「そっか…。そうなると寂しいな…」

誠二くん…。

「私がいるんなところを飛び回るのはイヤ？」

「そりゃあ…寂しいしイヤだよ。でもめぐの大事な将来なんだし、

オレがいるいる言うもんじゃないだろうし」

「……私は…」

「ん？」

私は…！

「私は誠二くんに止めて欲しい！私がどっかに行っちゃっていう

なら、それを誠二くんに止めてもらいたい！」

「い、いきなりどうしたんだよ」

あっ…い、いけない…。

「ご、ごめんね。今日はここまででいいよ。またね」

私ったら…なんで…。

「あっ！おいっ！めぐー！」

私は逃げるように走り去った。

私のバカ…。

誠二くんは何も悪くないのに怒鳴っちゃったりして。誠二くんは

何も知らないのに。

「はぁー…」

どっしりよっし…。

「めーぐー！」

「あっ、紗耶香ちゃん」

「さっき誠二に会ったよ」

あっ…。

「誠二くん、何か言ってた？」

「わけ分からないって感じだったよ。でも怒ってたりはしてなかったから安心して」

そっか…。よかった…。あとでメールしよう。

「でも、もうそろそろ話さないといけないんじゃない？」

「うん……。ねえ、紗耶香ちゃんは進路どうするの？」

「私は遠くだけど大学に進学したいと思ってるよ」
遠く…。

「そんなに遠いの…？」

「あははっ！そんな顔しなくてもめぐ程じゃないって」

「……もうっ。紗耶香ちゃん！」

「ふふっ、離れても帰って来るのはここだし、どんなに離れてもめぐとは一生親友だよ！」

……そうだね。

「紗耶香ちゃん、大好きだよ」

「私も！向こうに行つてすぐ忘れちゃったりしたらめぐでも許さないからね！」

どんなに離れても…か。

誠二くんもそんなふうに思ってくれるかな。

どんなに離れても心は繋がってるって。

ねえ、誠二くん。

クリスマスプレゼント

「雪降るかなー？」

今日はクリスマス。

誠二くんがお泊まりに来るんだ。プレゼントも用意してる。

外は少し曇り空ですごく寒い。

…多分、今日が最後のお泊まりになるんだろうな。

夕食は近くのレストランを予約してるんだ。クリスマス限定のコース料理。少し背伸びした内容だけど特別な夜にしたかったから。

忘れられない一日にしたい。

今日の約束は夕方から。もうそろそろ誠二くんを乗せたバスが着く頃なんだ。

「うう、寒い！」

暑いのは我慢出来るけど寒いのは無理！十分に着込んで外に出たけど寒いものは寒いよね。

迎えに行くために寒空の中を歩いて行く。

所々にクリスマスのイルミネーションが飾られている。この雰囲気気って好きだな。

「綺麗だな…。でも…はーはーっ…。吐く息まで凍っちゃっよ。寒過ぎ」

あはは…一人で何してんのかな。

あっ、あのバスだよね。

ブロロロロロ…プシュー…。

「めぐ、寒かっただろ」

「平気だよ。着込んで来たから」

別に強がらなくてもいいのにね。

「嘘つけ。震えてるぞ、めぐ」

「あっ…」

そう言っって私の手を両手で包んでくれた。

「その手袋まだ使ってくれてたんだね」

私が去年あげた手袋。

「ボロボロになるまで使うよ。そしたらまた作ってくれよ」

「毎年あげようかな。でもそしたらいつぱいになっちゃうね」

「それだけ二人で一緒に居たってことだよ」

誠二くん…。

「ふふっ、行こう」

それから誠二くんと並んで歩いていく。片方の手は誠二くんのコートのポケットで手を繋いで…。

まだレストランを予約した時間まで少しあるんだけど…。

「荷物家に置きに行く？」

「あっ、そうしようかな。実はこの荷物持ってレストランに入るのって気が引けてたんだよね」

そしたらちようどいいくらいの時間かな。

荷物を置いてレストランに着く頃には辺りは暗くなっていた。小さい時には記憶はあるけど、最近はおしゃれなレストランに行った記憶はない。だから少しだけ緊張してる。

「こういって慣れてないから緊張するな」

どうやら誠二くんも同じみたい。似た者同士なのかな。

レストランの中はほとんどがカップルで賑わっていた。みんな大人で私たちは少し浮いた感じがする。

「うっ…」

誠二くんは前に出された料理を見て唸ってる。好き嫌が多い誠二くんは前菜とか食べれないもんね。

「もうっ、コース料理なんてかつこつけるから」

「うっ…めぐ」

「私もそんなに食べれないよ？」

そんなことを言いつつも食べてあげる私。甘いかな？

「そんなんじや子供に好き嫌いなく食べなさいって言えないね」

「パパは食べなくてもいいんだよって言うから大丈夫」

なにそれー。

「ダメだよおそんなの。それじゃ私がきちんと食べさせなきゃね」

「……めぐ……。それつてもしかしてオレとめぐの子供……？」

！

「えっ！？あつ、いや、その……」

そ、そうだよね。何を普通に話してたんだろ。私つたら……。

「ずっと一緒にいるなら自然にそうなるよね。めぐと別れるつもりなんてもちろんないし、死ぬまでだって一緒に居たいと思ってるよ」

誠二くん……！

「そ、それじゃ、け、結婚も？」

そういう……ことだよな？

「そうだな。もっと、自分に自信がついたなら……プロポーズしてもいいかな？」

ああ……！

「嬉しい……！」

私……幸せだ。

「……グスンツ……誠二くん、泣かせるの上手だよね」

「本当の気持ちだから……」

神様……ありがとう。こんな幸せをプレゼントしてくれて。

その後も誠二くんが食べれない物は私が食べて、逆に食べれる物はあげて食事を済ませたんだ。

「ううー……やっぱり寒い！でも、星きれいだね」

家を出た時には曇ってたのにな。今は晴れてて寒空の中で星がいつそう光を際立たせてる。

「ホントだ。なんか空に吸い込まれそうだな」

「なーんか、ロマンチックだね」

そんな話を話しながら家へと歩いて行く。

「自信がついたらって、具体的には？」

「そうだなー。ちゃんと自立して、少しでも余裕を持てるようになつたら……かな。分からないけど、自分に納得が出来たら」

「そっかー。ならまだまだずーっと先の話しだね」

「な、何だよー、その言い方。意外と出来る男なんだぞ?」
クスツツ…知ってるよ。

「頑張ってるね!誠二くん」

そんなこんなで家まで帰って来た。

「ちよつと待つてね。誠二くん」

私は先に家に入って誠二くんを出迎える。

「おかえり。誠二くん」

「めぐ…。へへっ、ただいま」

えへへ…。もし、ホントに一緒に暮らすことが出来たらならこつやつて毎日迎えてあげたい。

「お風呂の準備してくるね」

まだ家の中が暖まってないから早くお風呂で温まりたいな。

「お風呂お先にいいよ」

「じゃあ先に済ませて来ようかな」

そして誠二くんが先にお風呂に入って、続いて私が済ませた。誠

二くんはお決まりのコーヒー牛乳。

「部屋暖めて来るね」

私は自分の部屋を暖めに行く。

あつ…。

クリスマスプレゼントどうしようかな。今持って行くこうかな。

んー…寝る前に部屋で渡そう。

私は部屋のエアコンをつけて誠二くんのいるリビングに戻った。

「あつ、めぐ」

「お待たせ。もう少し時間かかるかな」

「めぐ、これ、クリスマスプレゼントだよ」

「えっ!あつ、ありがとう!」

誠二くんが待つてましたと小さな箱を取り出した。去年は一日付き合ってもらったんだよね。

「開けていい?」

「もちろん」

「なんだろう…。」

「あ…。」

「えへへっ、似合う?」

「ああ、似合ってるよ」

「誠二くんがくれたのはかわいいシンプルなシルバーリングだった。私はそれをはめて誠二くんに見せたんだ。」

「左手の薬指に…。だってサイズがぴったりなんだもん。」

「気に入ってくれた?」

「誠二くんがくれた物だもん。もちろんだよ。すごく嬉しい」

「実はさ…」

「え…!?!?」

「誠二くん…!」

「誠二くんが今まで見えなかった左手を差し出した。その薬指にも私と同じリングがはめられていたんだ。」

「へへっ、ペアリングなんだ。めぐが大好きなお揃いだよ」

「これヤバイよ…私泣きそう…。」

「嬉しい…」

「あと、指輪の裏を見てみて」

「裏?」

「誠二くんに言われたようにリングを外して裏を見ると、ローマ字で文字が彫ってあった。」

「め…めぐ…み…?」

「そうだよ。こっちは”SEIJI”って彫ってあるよ。オレたちだけのペアリングだよ」

「すごい…素敵…」

「本当に…嬉しい…」

「二人のエンゲージリングだよ」

「誠二くん…。」

「これが…これがあるなら例えどんなに離れても大丈夫だよね?」

「え？ああ！もちろんさ！」

「少し待ってて？」

私もプレゼントあげよう！

部屋に置いてあったプレゼントを取りに行った。

もう部屋は暖まっていた。

プレゼントを手にして急いでリビングに戻る。

「はい！誠二くん！私からもクリスマスプレゼントだよ！」

「ありがとう！開けていいかな？」

「うん！気に入ってくれるといいけど」

私が渡した小さな箱の包みを丁寧に開けた。

「これ…チョコレートだね！ありがとう！」

私があげたのはシルバーのクロスが下げられているチョコレート。

その横には小さなコンパクトもついてるんだ。

「開けてみて？」

そのコンパクトを開けてみるように言った。

「あっ…」

「寂しくなったらそれ見て私を思い出してね」

中には浸りのプリクラを貼っておいたんだ。誠二くん私の事をいつでも思い出してもらえるように。

「いつでもそばに居れば寂しくなんてないさ」

誠二くん…ごめんね…。

「誠二くん、大好きだよ！」

軽くキスをして、誠二くんを抱き締められたまま私の部屋に入った。

「誠二くん、しよ？」

部屋に入るなり私は誠二くんに激しくキスをした。

「ん！？……………はっ…めっ…めぐっ！」

いきなりで驚いたのか誠二くんがキスを止めた。

「めぐ、どうしたの？」

「イヤ…なの？」

「そんな、イヤなんてことは全然ないけど」

もう、こんな時間がいつとれるか分からない。もう来ないかもしれない。

「私のこと、何度でもいつぱい愛して…」

私のその言葉に誠二くんは黙って唇を重ねてきた。

誠二くん…。

…

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「はあっ…はあっ…めぐ、さすがにもう無理…」

「あっ…はあっ…ご、ごめんね。大丈夫？」

たくさん誠二くんと愛し合った。どれくらい時間が経ったのかもわからないし、何回したのかもわからない。

「もうすぐ両親が帰って来るの。今度は長く居るみたいで、こんな時間がいつとれるかわからなかったから」

「そうだったんだ…。今度はちゃんと挨拶しようかな」

「…うん…」

でも、誠二くんが私の両親に会った時は、別れの現実を知る時だったんだ。

別れの現実

「そうですか…。せめてこの学年まででも無理でしょうか？」

「そうですね。誠に勝手なことと承知しておりますが、こちらの都合がありますので」

「…わかりました。今日、生徒たちにお知らせするように致します」

「先生、よろしく願います。恵、私たちはこれで帰るからね」

「うん…」

今日は三学期の始業式。

そして、私がフランスに行くことをみんなに知らせる日。

結局、誠二くんには話してない。

朝からお父さんが先生に挨拶に来ていた。本田先生に詳細を話しに来たんだ。

「相田さん。朝のHRでいいかしら？」

「…はい」

「じゃあ、先生と一緒に教室に行きましょう」

そして教室に向かう。

もう私以外のクラスメートは教室にいるはずだ。

「私がみんなに話すから、相田さんはその後に挨拶してね」

「はい…」

「……相田さん」

「はい？」

廊下を歩きながら本田先生と話す。廊下はひんやりとしていて声が少し響いていた。

「最初はね、相田さんを見た時になんか暗い子だなんて思ってたんだよね。大丈夫なのかな？って」

一年生の時から本田先生にはお世話になってたもんね。

「吹奏楽部に入ってフルートを吹いていた時も、上手だったんだけど何か作られた音を出してるなって…」

「……………」

「でも、ある時に変わったよね。確か最初のコンクールの前くらい」
誠二くんが私を変えてくれたから。

「正直に感動したわ。これが本当の相田さんなんだなって。その時
くらいからよね。だんだん笑うようになってきて、明るくなって。
今じゃみんなと笑い合って…」

本田先生……。

「一年生の時からあなたの成長を見てきたわ。素敵な出会いがあっ
たものね。それに素敵な友達……」

「はい……。私、この高校に来て、本当によかったと思ってます」

「ありがとう。その言葉が私たち教師にとって最高の言葉なのよ。
だからこそ……本当に残念だわ」

「私も……まだまだみんなと一緒に……」

誠二くんと一緒に居たかった……。

「相田さん……。……着いたわよ。いい？」

誠二くん、どんな顔するんだろう。怒るかな。……怒るよね……嫌わ
れちゃうよね。私のわがままで今まで何も言わないで。嫌われても
……あとできちんと謝ろう。

「相田さん？」

あつ……。

「は、はい。大丈夫です」

ガララ……！

「みんなー！明けてましておめでとう！今年もよろしくね！」

私はまだ教室の外で待ってる。

先生ってすごいな。さっきまであんなにしんみりしてたのに、元
気に挨拶出来て……。

「おめでたいとこなんだけど、みんなには……非常に残念なお知らせ
があります。……相田さん」

行こう……。

ガララ……。

私は教室に入って教壇に立った。でも、誠二くんを見る事が出来なかった。

「残念だけど、この学年末で相田さんが学校を辞めることになりました。そしてご両親と共にフランスで音楽の勉強をすることになりました」

ついに……知られちゃったな。

「相田さん」

「あつ、はい。みんな突然でごめんなさい。今言われた通りに、学校を辞めてフランスに行くことになりました。この学年の最後まで居れるのかわからないけど、残り短い時間で少しでも多くの思い出を作りたいです」

誠二くん……どんな顔してるんだろう。怒ってるかな？睨んでるかな？……見れないな……。

あれ……紗耶香ちゃん？

何……見て……誠二くん……！

誠二くんは……泣いてた……。

クラスのみんながいろいろ声かけてくれてたけど、何も耳には入らなかった。

私……！

とんでもないことしてきちゃったんだ……！

自分のわがままで誠二くんを傷つけて……泣かせて……。

いっぱい……いっぱい……二人の先のこと話してくれてたのに……。

それなのに、私は自分だけ納得して、喜んで、無理矢理笑顔作って……。結局、普通にしていたいなんて……自分が普通じゃないんだから……。

私のバカ……バカ……バカ……！バカバカバカバカバカバカ！

逃げてただけじゃない……。

自分からも……誠二くんからも……。

……。

それから放課後までクラスの友達からの質問責めにあつて誠二くんとは話せなかった。

誠二くん嫌われてるかもしれない。恨んでるかもしれない。でも、謝るんだ、ちゃんと。

質問責めも終わった頃。

「めぐ」

誠二くん…。

「せ、誠二くん、ごめんな」

「帰ろう」

謝ろうとした私の言葉を首を横に振り、遮つての一言だった。

それから誠二くんの後をついて行くように学校を出て、少し広い空き地に入った。

謝るんだ…！

「誠二くん！ごめんなさ」

「ゴメンな」

今度は私が謝ろうとすると逆に誠二くんが謝ってきた。

「……え？」

突然のことに呆気にとられた。

「気付いてやれなくてゴメン。辛かったよな？オレが先の話する度に、少しだけ悲しい顔してた。いくらでも気付けたはずなんだ。

今まで一人で辛い思いさせてきたんだよな。ゴメンな」

ああ…！誠二くん…！

ど…どれだけ…。

「誠二…くん…！…ど…どれだけ…やさ…しいの…」

私は誠二くんの胸に額を押しつけて泣きながら話した。

「ごめんなさい！本当にごめんなさい！私のわがままなの！」

「うん…」

聞いてくれる…。

「怖かったの。話しちゃったら今までの幸せが壊れちゃいそうで。

誠二くんの普通の笑顔が見れなくなりそうで。心配させたくなかつ

た…。普通にしていたかったの」
「だけど…」。

「だけどそのせいで誠二くんを…傷…つけて…。私のわがままなの！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「もういいから…」

「誠二くんはそう言っつて優しく抱き締めてくれた。」

「誠二…くん…！」

優しい誠二くん。あつたかい。このぬくもり、離したくない。

「私、行きたくない。離れたくないよ」

「めぐ…フランスにはいつまで？」

「わからない…。一年や二年じゃない…多分もつと…」

「そう…か。でも、めぐの将来なんだから、大事にして欲しい…
と思っ…」

「私には…誠二くんが全てなの…。他の…何よりも」

「……………」

「そう、私には誠二くんが全て。ただの高校生のママゴトなんて思われるかもしれないけど、私にとっての幸せのカタチは誠二くんがないとそこにはない。」

「めぐ、両親はいつまで？」

「え…明後日にはまた飛ぶつて言っつてたけど…」

「なら、今から行こう！」

「…………え？」

「話しに行くんだ！二人で！めぐの将来は大事だ。だけど…オレだつてめぐと離れたくない！なんとかフランスに行かないでもいいように話してみよう！」

「で、でも…」

「やれることはやる！行こう！」

「あつ！」

誠二くんが私の手を引いてバス停に走り出した。

誠二くんなら…誠二くんなら何とかしてくれる気がする。確信は

ないけど、そんな気がしたんだ。だって、私のヒーローなんだから。

「あっ！バスが出る！」

大丈夫だよ。そのバスは行き先違うから。

「出るの待ってもらおうから！めぐはあとから来て！」

「ちよっ！誠二くん！待って！」

「そのバス！待ったあああ！！」

あっ、あ〜…。

必死で走って行ってバスを止めちゃった。

「めぐ！何してるの！？早く！」

「誠二くん……行き先違う……」

「え？……あっ！」

運転手さんが鋭い目つきで誠二くんを睨む。

「す、すいませんでしたあ！」

もっつ、私のヒーローは案外ドジなんだよね。

「うう〜、めぐ〜」

「私は待ってって言ったよ？」

誠二くんは半べそをかいて私を見ていた。

「……ぷっ……くくっ……」

「……ふふっ……ふふふふっ……」

「あっはははははっ！」

「あはははっ！誠二くんったらっ！おつかしー！」

こんな……笑い合えるんだ……。何もかも、私が勝手に思い込んでしまってたことなんだ。

それからバスが来て二人で乗り込んだ。

誠二くんはバスの中で少し震えてた。話すって言っても何を話せばいいかなんて二人ともわからなかったんだ。

ただ、日本に居たい。それだけを伝えることしか思い浮かばなかった。

そして、私たちは家の前に立っていた。

「誠二くん、いい？」

「お、おう」

結局、良い言葉なんて浮かばなかった。自分のことなんだけど、ただただ誠二くんが頼りだった。

ガチャツ…。

「ただいまー」

誠二くんと一緒にリビングに。お父さんはいつもリビングにいるから。

「恵、おかえり。…ん？君は…確か椿くんだったかな」

いつも通りにリビングのソファに座ってた。いつもそこでテレビを見てるか楽譜に目を通してる。

「はい！今日は、その、お話があっってお伺いしました」

「ふむ…。まあ、そこに掛けてくれ。母さん！コーヒを淹れてくれ」

私たちはテーブルを挟んで向かい側に二人で座った。

「それで？」

「はい、あの、めぐの…いえ、恵さんのことなんですけど…」

「恵のことは普段通りに呼ぶといい」

「あ…はい。めぐは…必ずフランスに行かないといけないんですか？日本じゃダメなんですか？」

「向こうには優秀な先生がいるんだよ。そこで恵には頑張ってもらいたいんだ」

「でも、めぐ自身が望んでいません」

誠二くんはお父さんから目を反らすことなく話していた。

「…これは、言わないつもりだったんだが…」

え？なに？

「私たちは世界中を飛び回っていた。それがフランスで落ち着きそうなんだよ。恵には今まで寂しい思いをさせてきた。だからそばに置いておきたいと思っている」

「えっ、それじゃ…」

もしかして…。

「正直に言おう。フランスへ行けば、おそらくはもう日本には戻って来ない。うまくいけば向こうですつと暮らすことになるだろう」「なにそれ！私そんなの聞いてない！」

「話すつもりはなかったよ。それこそ、恵は絶対に行かないと言うだろうから」

「それは…ひどいんじゃないですか？黙って連れて行くようなんで」

「今まで寂しい思いをさせてきた分までかわいがってやりたいんだ」

「そんなの今さらだよ！今まで散々一人にしろ！」

「幼い恵を連れまわすのは辛いだろうからね。友達も出来なかっただろうし。それに向こうじゃ恵の将来も安心なんだよ。私たちの楽団に入れる」

「そんなの…私は望んでない！」

「なら、恵は私たち家族よりも椿くんの方が大事だと言うのかい？」

！

「そ、それは…」

家族…か。

寂しかった。いつでも一緒に居たいと思ってた。だけど…。

私がそこで口籠るとお父さんは誠二くんに話し出した。

「椿くん。音楽は私たちの仕事で、これは家族の問題なんだ。わかっってはくれないだろうか？」

その言葉に誠二くんはうつむいてしまったんだ。

「もう…日本には二度と？」

「公演があるなら来るだろうね」

それだったら…。

「お父さん、日本で仕事は出来ないの？」

「計約があるんだ…大きいね」

「そう…なんだ…」

今まで以上にない契約なんだろうな…。

「コーヒーよ。お菓子もあるから」

そこでお母さんが来た。

「椿くん。私たちも好きでめぐちゃんを一人にしてたわけじゃないのよ。大事な一人娘なんだもの」

「……はい……」

「椿くんには感謝してるのよ。めぐちゃんは一時期寒さ込んだ。それを救ってくれたんでしょ？めぐちゃんに会った時はいつも話してくれてたわ」

「救ったなんて……」

「救ってくれたのよ……。でも……私たちもめぐちゃんが大事なのよ」

「…………」

「…………」

私も誠二くんも言葉が出て来なかった。

「せめて……」

「なんだい？」

誠二くん……？

「めぐが日本を離れるまで……会ってもいいですか？」

あっ……誠二くん……。

うつん、諦めたわけじゃないんだろうな。誠二くん優しいからきつと私たちの家族のことを考えて……。

「会うなどは言っていないよ。私たちは明後日にまた発つ。それからまた戻って来て一ヶ月の間に日本を離れる準備をする。そして三月半ば程に恵を連れて行く予定なんだ。それまでは自由にするといい」

「……はい……あの……今日は帰ります」

「えっ、あっ、誠二くん」

「送って行きなさい」

外は私たちの心とは正反対に雲一つない青空だった。でも、風が強くて肌突き刺さるような寒さだった。

「めぐ……ごめん。オレ何も言えなかった」

「誠二くん……」

「ゴメンね……」

「…謝らないで。…ありがとう」

誠二くんは頑張ってくれた。何とかしようとしてくれた。何も出来なかったのは私の方なんだよ…。

「めぐ…うっ…くっ…めぐっ…」

「あっ…せ、誠二くん…ふえ…うっ…グスンッ…誠二…くん…！」

私たちは周りの目も気にせず、その場に座り込んで、抱きしめ合っ
て泣いた。

肌に突き刺さる寒さも忘れて、ただ目の前に別れの現実が立ちふ
さがっていた。

「めぐ…オレは…」

「いつも通りにしていて？」

「え？」

「いつも通りの声を聞かせて。いつも通りの笑顔を見せて」
何気ない日常が恋しいから。

「めぐがそう言うなら…」

「悲しい顔はしないで、笑顔でいたい」

「…うん、わかった！…じゃあまた、学校でね」

「うん！またね！」

誠二くんは笑顔でそう言ってくれた。そしてバス停に向かって歩
き出した。

「誠二くん！」

歩みを止めて不思議そうにこっちに振り向いた。

「私、あなたに出会えてよかった！誠二くんを好きになってよかつ
た！」

「…オレも！めぐを好きになってよかった！」

「ふふっ…またね！誠二くん！大好きだよ！」

寂しい、悲しい。それは当たり前にある。私が日本に居るのもあ
と二ヶ月くらい。ずっと笑っていることなんて出来ないかもしれな
い。だけど、出来るだけ楽しく過ごしたい。

誠二くんとも、みんなとも。

友達

翌日。

昨日は始業式で部活はなかった。今日から部活は再開。そして私のことも今日、吹奏楽部員に知らされる。

「非常に残念なお知らせなんだけど、相田さんがこの春に学校を辞めてフランスで音楽の勉強をすることになりました」

「っえー！ー！ー！ー！」

そう驚いたのは梓ちゃん。特に私のことを慕ってくれてたから。舞ちゃんはすでに涙をボロボロ流し始めていた。

「みんなも寂しいでしょうけど、相田さんに負けないように頑張つてね。では相田さん」

それからみんなに挨拶をして練習に入った。ざわついてたけど、部活中なのもあって、みんなそれぞれの練習場所に散って行った。

そしてまず話しをしたのが私の後輩の二人。

「めぐ先輩！ホントなんですか！？ホントのホントに本当なんですか！？」

「そ、そうだよ。ゴメンね、いきなりで」

目に涙を溜めながら梓ちゃんが迫ってくる。

「あ、相田先輩……」

「舞ちゃんも、ゴメンね」

「う……うえ……」

「ま、舞ちゃん？」

「うわあー！ー！ー！ーん！ー！」

「ま……舞……う……うわあー！ー！ー！ーん！ー！」

あー！ー……。

「ふ、二人とも落ち着いて！ねっ？」

「うわあー！ー！ー！ーん！ー！」

「うええー！ー！ー！ーん！ー！」

「ほ、ほらっ！二人ともっ！」

いっこうに泣き止む様子はなかった。

そこで私は…。

「へっ、変な顔っ！」

「……………」

「……………」

どっ、どうだ！なかなか見れないよー。レアだよー。

「うわぁー……………」

「うええー……………」

はうっ！

け、けっこう頑張ったのに！

「ほ、ほら、飴だよー」

って、子供じゃないんだからね。

「おいしいね、舞」

「そ、そうだね。梓ちゃん」

こ…この子らは…。うぬぬぬ…！

「めぐ先輩、もうひとつ下さい」

「……………」

「あ、飴くらい、け、ケチケチしなくても…」

……………」

「むっきゃー！！なっ、何だね！君たちは！私がいなくなるのが悲しくて泣いてたんじゃないのかな！？そ、それを飴玉ひとつでコロッと態度を変えて！おまけにケチときたもんだ！」

私だっけ言う時は言うんだ！

「あ、飴玉だけに、コロッと……………」

「……………」

梓ちゃん…。笑えません。舞ちゃんも首を横に振ってため息すら

吐いてます。

「とーにかく！私は三月半ばまでしかいないんだから！もうフルートは二人だけになるんだよ！しっかりする！」

「む、無理ですよー、そんなの」

「あ、相田先輩がいなくなったら、な、何も出来ません」

「……違うよ、それは」

だって…。

「私は今まで二人を教えて来たけど、二人とももう私がいなくても自分たちでやっていける。そう確信してるよ。だから、私が安心して旅立てるようにしっかりとね、二人とも」

「うう…めぐせんぱーい！」

梓ちゃんが私の胸に飛び込んで来た。

私は頭を撫でてあげた。

「よしよし」

こんなに慕われてたなんて、私は幸せ者だなあ。

「さっ、頑張つて練習しよ！もうすぐ二人が新入生に教えるんだからね！」

「…はい！」

ふふ…すぐに笑顔になって…かわいいな。

「舞っ！飴玉ゲットだぜ！」

「ななっ！？」

いつの間に！

「で、でかしたよ。梓ちゃん」

うぬぬぬ…！

「二人ともっ！練習だっ！特訓だっ！いや、シゴキだっ！」

「ほらっ！逃げるー！舞ー！」

「に、逃げるー」

「待てー！ー！！」

逃がすかあ！！

「あははっ！あでっ！」

「捕まえた！ほらっ！」

まず逃げた梓ちゃんを捕まえた。舞ちゃんだつてすぐに…。
「……やっぱり、めぐ先輩がいなかつまらないですよ」

梓ちゃん…。

「わ、私もです」

舞ちゃんも現れて言った。

もしかしたら二人なりに楽しくしようとして…？

「ふふっ、ありがとう。こんな私なんかについてきてくれて。二人に出会えてよかったよ。…忘れないよ。絶対」

「わ、私も忘れません！」

「ファ、ファーストキスの相手ですから」

うぐっ…そ、それを言うか。

うーん…。

「今日はもう時間も少ないし、思い出話しに花咲かせようか！」

結局その後の時間はいろんな話しをしたんだ。三人で街に遊びに行ったことや、メイド服は着たのか、とか。コンクールや誠二くんのことも。

寂しい話しはなし！楽しい話しを繰り返してた。

多分、二人が成長して立派にフルートを演奏出来ることが、私がいた証なんだ。

「あらあら、相田さんはフルートを教える事が上手ですけど、サボる事を教えるのも上手ですね」

びくっ！

「い、いえ、サボってるわけじゃ…河本先輩！」

「うふふ…お邪魔しますね。あの、本田先生からお伺いしました」

「あつ、すいません。私の方から挨拶しに行かないといけないのに構いませんよ。それに…」

「恵ちゃん！なんで行っちゃうのー！？寂しいよー！」

「大野先輩！」

「…私も…いる…」

「田代先輩まで！あ、あの…すいません！」

突然の事で何故か謝っちゃった。

さっき本田先生から聞いたんだろう、急いで来た様子だった。コ

ンクールの後は校内でもあまり会うことはなかったけど、三人とも変わってなかった。

久しぶりだった。こうしてこの場にフルートのメンバーが全員集まるのは。季節も制服も衣替えて違うのに、コンクール前に戻った気がした。

「何謝ってるの？恵ちゃんは相変わらず変だなあ」

「それが相田さんの魅力かもしれないですね」

変なのが魅力って…。なら変なのに惹かれるみんなも変わってことだよ。いや、みんなが普通だから変なのに惹かれる？いやいや、それならやっぱり私が変わってこと…。

「…そんな事より…本当…？」

「あつ…はい…。三月半ばで日本を離れる予定です」

「寂しいよー、恵ちゃん」

「私たちが先に卒業ですよ」

「あつ、そっかー。でも、でもさ、卒業してここに遊びに来てもないんだよ？」

「…それは…寂しい…」

「そうですね…。でも、すごいじゃないですか。自分の好きな音楽に専念出来るんですから。夢のような話ですよ」

夢のよう…か。いつそ夢ならいいのにな。誠二さんと離れるから行きたくないなんて言ったら何て言うかな。きっとバカにされるんだろうな。

「でもー、椿くんとは？別れちゃうの？」

はうっ！！大野先輩…前々からピンポイントで急所を。きっと先輩の前世は暗殺者が占い師だね。しかも別れるとか…。

「誠二くんとは別れませんかよ。大体フランスと日本なんてただの距離の問題ですし。そりゃあ顔を見れないのは寂しいですけど、私たちは赤い糸で結ばれてるし、お互いを思う心だって強いし。どれだけ離れたって心は近くにあるっていうか、切っても切れない絆もありますし。ほら、このリングだって二人の愛の証です。エンゲージ

リングですから。二人はもう将来を約束し合ってるんですから別れるなんてありえないです。そう、同じ地球にいる限り、地球がなくならない限り別れないですよ。ないないないない、絶対ない！」

「わかった！わかったよ、私が悪かったよ」

「わかつてくれればいいんですけど、そもそも私と誠二くんが別れるっていう、その発想がどこから出てきたのが疑問に思うところであってですね、今までの私と誠二くんのことをよく思い出してくれたらわかることなんですけど……」

「おーい、誰か止めてー」

「やっぱり相田さんは変ですねー。恋は盲目とはごういごうことでしょうか」

「…みゆき…それ…違う…」

「……ぷぷつ…あつはははっ！やっぱり先輩たち最高！」

「…ふふふふつ……」

えっ？なにになに？なんの話し？

「私も先輩たちみたいになれるように頑張ります！」

「わ、私も！」

うん？うまくまとまった…かな？

それから六人で思い出話しとか先輩たちの将来の話して盛り上がった。結局、今日は練習しなかったな…。

明日からはまたビシビシいくからって部活は終わった。

「めーぐ、今終わり？」

「あつ、美香ちゃん。うん、そうだよ」

「ちよつと話さない？」

「うん」

美香ちゃんともいろいろあった。一時期は恋のライバルだったし。…まだ誠二くんのこと好きなのかな？

「すぐく、残念だよ。めぐのこと」

「うん…」

もし、まだ誠二くんのこと想ってるなら少し不安だな。

今でもたまに思ったりする。どうして誠二くんは私を選んだんだろうつて。

女の私から見ても美香ちゃんは可愛いし、優しくて成績優秀で、昔から誠二くんの近くに居たし。それに強い。私なんかと比べたら全然。

「何考えてるの？」

「えっ！？あ…その…」

「何となくだけどわかるな。今めぐが考えてたこと。私がめぐの立場でも同じこと考えてたと思う」

「美香ちゃんが？」

少しだけ意外。美香ちゃんはあるに不安や弱さは見せないから。あのときも、すごく辛かったはずなのに笑って祝福してくれた。

「でも安心して！誠二が他の子にちよつかい出さないか私が見てあげるから！もちろん私もなんにもしないよ！」

クスツ。やっぱり美香ちゃんは美香ちゃんなんだな。でも、一番不安なのは美香ちゃんのことなんだけどね。それは黙っておこう。

「でも…」

「え？」

「うっん、何でもない！…いつまでフランスにいるの？」

「もしかしたら…ずっと向こうに住むかもしれないの」

「そう…なんだ」

「だけど信じてる。また誠二くんと並んで歩けること。占いでね、二人には大きな困難があるって出たんだ。でも、それを乗り越えたら幸せが訪れるって。占いなんて信じないけど、こんな時くらいすがつてもいいかなって」

「めぐ…。お互い思い続けてたら、きつと」

「ありがとう。やっぱり美香ちゃんは優しいな」

「そんな…そんなことないんだよ…」

「???」

美香ちゃんは何か悲しそうな顔を見せた。

「じゃ、じゃあね。また遊ぼうね！」

美香ちゃんはそそくさと帰って行った。その様子の謎がわかったのはずーっとずっと先のことだったんだ。

それから誠二くんを待ってただけだ……。

「あれ、めぐ先輩。誠二先輩ですか？」

「あ、亜美ちゃん。そうだよ、誠二くんは？」

「何か本田先生に呼び出されてましたけど」

先生に……。なんだろう。

「それにしても遠いですね！フランス！」

美香ちゃんにはにんまりと笑って言った。どうせ私がいなくなっただけかなと思ってるんだろうな。

「誠二くんのことまだ狙ってるんなら無駄だからね！」

「そうですね？だって近くにいない人よりやっぱりそばに居る人がいいじゃないですかあ」

「た、確かにそうだけど、あ、亜美ちゃんには無理だよ」

「ま、今は無理でも時間をかけてゆっくりと亜美の元にいざなってあげますよ」

むむむ……。

「ま、まあ精々頑張るといいよ。無駄だと思うけどっ！」

「クスツ……やっぱりめぐ先輩は誠二先輩のこととなると必死ですね」

「何言ってるの。よ、余裕だよ」

あ、あれ？何か感じが違う……。

「亜美は……ライバルがいる方が燃えるんです。つまらないですよ、ライバルがいなくなるなんて」

「亜美ちゃん……。へへ……遠くに居たってライバルだよ。………ありがとう」

「な、何ですか！ありがとうって！べ、別に寂しいなんて思ってないんですからね！あーっ、よかったよかった！ライバルが減って！」
そう言いながら亜美ちゃんは何も言わずに帰って行った。

言ってることがさつきと逆だよ、亜美ちゃん。なんだかんだで優しい子なんだもんな。寂しがりやで。

「ほんと、素直じゃないよね。そんなところはめぐに似てるよね」
紗耶香ちゃん…。

「私はどちらかと言えば紗耶香ちゃんに似てると思うけどなあ」

「あんなにキヤピキヤピしてないし、私は思ってること言うし」

「クスツ…それもそうだね」

「……………」

「……………」

紗耶香ちゃん…。私の一番の友達。いつでも私を助けてくれた大事な友達。誠二くんとのことも応援してくれて、自分のことのように喜んでくれた。

「誠二は進路のことで呼び出されたよ、まだ決まってるからってねえめぐ、たまには一緒に帰らない？誠二にはメールしとけばいいよ」

「うーん…。そうだね！誠二くんには悪いけど、たまにはね」

誠二くんと付き合うようになってからは帰りのバスは違うバスになった。学校に来る時は一緒だからって誠二くんと居れる時間を譲ってくれた。

今思えば、私は紗耶香ちゃんに助けてもらってばかりで、何にもしてあげたことないんじゃないかな。

久しぶりに紗耶香ちゃんと二人で校門を出た。外はもう暗く、澄んだ冷たい空気がどこか気持ち良くて、冬の星座が綺麗に空を埋め尽くしていた。

「今日は星が綺麗だね」

「めぐがそんなこと言うって絵になるんだよね」

「ふふっ、なにそれー」

「でも、本当によく見えるね。冬の星ってさ、空気がスカツとしてるから光がそのまま降り注ぐって感じで好きだな。夏はジメジメしててなんとなく光が濁ってるみたい。だから冬の星が好きなんだ」

「へーっ、紗耶香ちゃんがそんなこと言うなんて意外だなあ」

「ほーらね、やっぱり私が言ってもダメなんだな」

「えっ…ははっ、ゴメンね」

「いーよー。好きなんだもん。……………フランスではどんな星が見えるんだろっね」

「あっ…」

不意打ちだなあ、紗耶香ちゃん。こうやって二人で歩いてたら前に戻ったみたいで、フランスのことなんて一瞬忘れちゃってた。

「どうなんだろうね…」

「……………」

「……………」

「めぐ…私たちはいつまででも友達だよな？」

「紗耶香ちゃん…。当たり前だよ。お互いに結婚したりして別々の家族持ったりしても、どんなに離れたって友達だよ」

「そうだよな！ゴメンね、変なこと聞いて。ただね、寂しいんだ、やっぱり。めぐと二人でこっちの学校に来て最初から友達だったのめぐだけだったし」

「うん…」

「そうだよな…。登校する時はいつも一緒だったし。」

「それに…こっ寂しいと思うのも二回目なんだ。前は何となく、めぐは私が守るんだって思ってたけど、誠二に出会って、誠二と付き合うようになった。ああ、行っちゃったなって…」

「紗耶香ちゃん…」

「子供を嫁にやる親の気持ちっていうのかな。嬉しいけど寂しい…。結局はさ、守ってたつもりだったんだけど、私がめぐにすぎってたのかなって。そう思った」

いつも寂しいとか冗談のように笑いながら言ってたけど、そうじゃなかったんだ。いつも誠二くんと一緒だったから紗耶香ちゃんは遠慮して、私に気を使ってくれて…。

「だけど、めぐが笑えるようになったのは誠二のおかげだから。私

はいつまでもめぐと誠二を応援していきたい」

紗耶香ちゃん…。

「……ありがとう……」

これくらいしか言えなかった。でも本当にそう思ったから。誠二くんと出会えたのだって、紗耶香ちゃんが柳ヶ浦高校に行こうって言うてくれたから。

「紗耶香ちゃん、ちょっと寄り道してかない？」

「いいけど、何するの？」

「プリクラ撮ろうよ！」

「ふふっ、めぐはプリクラ好きだもんね」

その日に撮ったプリクラは大事な思い出で宝物になった。日本に
いる間に紗耶香ちゃんと撮った最後のプリクラになったから。

中学の時に紗耶香ちゃんと出会ってなかったらどうなってたんだ
ろう。柳ヶ浦高校に通うことなんてなかったらどうだろうし、そうなれば
誠二くんとも。もしかしたら日本にはすでに居なかったかもしれないな。

紗耶香ちゃんとの出会いが私の人生を変えたって言っても過言じ
やなくらい。紗耶香ちゃんとの出会いそのものが私を守ってくれ
てたんだね。

気が強くてしっかり者で、私にだけ甘えてくれた紗耶香ちゃん。
そういう意味では私も紗耶香ちゃんの心の拠りどころだったのかな。
誠二くんや紗耶香ちゃんだけじゃない。みんなが居たから楽しか
ったんだ。多分、誰一人欠けてもダメだったんだ。

先生や先輩、後輩。クラスのみんな。嫌いな人なんかいなかった。
きっと柳ヶ浦高校でしか会えなかった、一期一会。

今までの思い出を大切にしたい。これからだって私の中の引き出
しが埋まってしまうくらいの思い出を…。

「お母さん、ただいま！私ね、高校でいっぱい素敵な友達が出来
たんだ！」

変わらない二人

あれから数日経った日、誠二さんと次のデートの話をしてた……
つまり。

「で、どうしようか。次の日曜日」

「ああ……」

「また街にでも行く？それとも遠出する？」

「ああ……」

「だけど誠二くんは上の空だった。考え込んでるみたいには……
してる。こんなときは間違いなく私とのことを考えてるんだよね。」

「誠二くん」

「……………」

「むう……。」

「誠二くん、誠二くん！」

「ん、ああ、何だっけ？」

「次の日曜日のことだよ。デート！もう……しっかり私のこと見てて
よ」

「ああ、ごめん。どうしようか」

「遊園地……」

「ん？」

「遊園地、行ったことないよね」

「えっ……遊園地……か」

「そっだよ、決定！遊園地に行く！変更なし！」

「ちょ、ちょっと待って」

「……ダメなの？」

「私は必殺の上目使いでお願いします。そしたら絶対にいいよって
言ってくれるんだ。」

「わかった、わかったよ。遊園地ね」

「ほらっ。」

「わーい！やったね！楽しみー！」

あれ？誠二くん……。はっはーん。

ぼーっとして、この呆け方は……。

「誠二くん、今私のことかわいって思ったでしょ」

「え？な、なんで……」

やっぱり。慌てて照れてる。

「顔に書いてた。誠二くんのことは何でもわかるよ！」

そう、わかっちゃうんだ……。

「……だからさ、辛い時は我慢しないで？」

「……めぐ……」

私がそう言つと誠二くんは私を強く抱き締めた。

「苦しいよ……」

甘えてくれたたっついていいんだよ。いつも通りにしててって言っても難しいよね。そう意識すればするほどに。

つー……。

誠二くん、泣いてる。

ギョッ……！

私も誠二くんを強く抱き締めた。

……

「ははっ、ごめん。もう大丈夫だよ」

「誠二くんの泣き虫」

「そんなこと言うなよー」

学校の帰り道のことだった。

家に帰ると、いつも通り一人なのに余計に寂しさを感じたんだ。

フランスに行ったらきつとお父さんとお母さんと居る時間が増えるんだろっけど、どこを探しても誠二くんはいないんだよね。

そんなことを思う度に日本への、学校への未練が沸々と込み上げてくる。

最初は柳ヶ浦高校に通うのは少し不安だった。今だってそう。フランスには誰も知ってる人がいない。やっていけるのかな……なんて。

誠二くんも連れて行きたいな。

そして日曜日。

天気は快晴。絶好の遊園地日和だった。遊園地までは遠いから電車で行くんだ。だから今日の待ち合わせは駅前。

「おはよう。いつも待たせてゴメンね」

「めぐ、おはよう。全然待ってないよ」

今日は少し遠出だから早目の時間に待ち合わせ。私も時間よりは早く来るのに、誠二くんはいつもそれより早く来てる。これもいつものことだったんだ。

「一つ早い電車で行こうか」

だからデートも少し早く始まる。

一つ早い電車で遊園地に。電車の中では今日行く遊園地のことを話してた。いつも通りの話し方で、いつも通りの笑顔で。

駅から遊園地行きのバスに乗って目的地に。

「まだ早いから人もそんなにいないね」

フリーパスを二人分買って園内に入った。

「誠二くん、人が少ないうちに人気のあるやつに行こうよ」

「うん、いいけど…それって…」

「これっ！」

私は入場の時にもらったパンフレットの園内地図の何か所を指差した。ここの遊園地の目玉の一つ、巨大なジェットコースターがあるところ。

何故か無口になってしまった誠二くんを連れてジェットコースターのところにやってきた。

「思った通り人はまだ少ないね。うふっ、楽しみだね」

「う、うん…」

少しだけ列が出来ていたけど、そう待つこともなく私たちの順番がやってきた。少し前に話題になってた程の大きいジェットコースター。すごく楽しみだな。

「だい……じ……ぶ……だ……じょう……ぶ……しな……い……しな……ない……」

座席に座るなり誠二くんはブツブツ呟き出した。周りの音もあつてよく聞き取れなかったけど……。

「誠二くん、始まるよ!」

「おち……い……お……ない……」

ガタンツ……!ガタ……ガタツ……ガタツ……。

私たちを乗せたジェットコースターはレールを走りだして、どんどん空が近づいてくる。

このジェットコースターの最大の特徴は初めの急降下。国内最高の高さから国内最高速で走るらしい。

私はジェットコースターとかの絶叫マシンが大好きなんだけど、さすがに今日一発目は緊張する。

レールの先が見えなくなつて空にそのまま上つて行くんじゃないかと錯覚しそうになる時に、逆に地面へと視線は向けられた。

ゴオオオオオオ!!

「ぎゃああああああああ!!」

「あっははははははは!!」

目も開けられないような風と無重力感を感じて、ジェットコースターはものすごいスピードで走りだした。

「たーのしいー!!」

「ぎゃああああああああ!!」

速い!高い!回るー!

自分の足元に空がある。どっちを向いてるのか分からない程に激しいものだった。

……

「せ、誠二くん大丈夫!?立てる?」

「げふう……」

走り終わって戻って来たジェットコースターの座席に座ったまま
誠二くんはぐったりしていた。

「さ、捕まってる」

「ご、ごめん…」

フラフラになった誠二くんを支えて園内のベンチに腰かけた。

「知らなかったな…。苦手なら言ってくればよかったのに」

「高いのが苦手なんだ。めぐは乗るの楽しみにしてたからさ」

「そんな…。私は二人で楽しみたいからさ、無理はしないで言うて
ね？」

「…うん」

「でも、まだまだ知らないことをあつたんだね…。もっと…」

もっと時間があればゆっくりでもお互いのことを知れたのに。そ
う思ったけど口に出して言うことはなかった。

「さっ、次っ、次行こう！」

誠二くんはそんな重苦しい空気を感じ取ったのかそう言って立ち
上がった。

「う、うん」

それからいろんなアトラクションをまわった。もちろんジェット
コースターも。最初に乗った程じゃないけれど、それでも誠二くん
は頑張ってた。私を楽しませようと一生懸命だったみたい。

「誠二くん、少し休憩してあそこに行かない？」

私はお化け屋敷を指差して言った。私ばかり楽しんでるんじゃ
なくてあれなら誠二くんも楽しめるよね。

「うん、いいよ」

ベンチに座ってジュースを飲んでソフトクリームを食べて、まっ
たりしてからお化け屋敷へ。

……

「うっ…ドキドキするね、誠二くん」

こう本格的なところは少し苦手かなあ。

誠二くと腕を組んで僅かな光を頼りに中を進んで行く。

「ゴオオオオオ！」

「きゃあああ！！！」

大きな効果音と一緒に上から骸骨が落ちて来た。

「めぐ、大丈夫だよ。作り物だからさ」

そんなことわかってるけどやっぱりびっくりしちゃうよ。

「ひゃっ！」

な、なに！？何かオシリ触った…？

「どうしたの？」

「んー…何でもないよ」

気のせいかな？

それからもいろんな物が飛び出て来てそのたびに誠二くんを抱きついていた。

「きゃっ！な、なに？誠二くん！？」

「さっきからどうしたんだよ、めぐ」

今度は腰の辺りを明らかに触った！

「うー…誠二くんなの？」

「何が？」

「違うの？」

絶対誠二くんだと思う。こないたずらするなんて。よし、今度は注意して…。

それからまた中を進んで行くと…。

「んっ！？」

ガシッ！

「やっぱり…。さっきから誠二くんだったんだね！」

「バ、バレたか。いや、あんまりにもかわいい反応だったからつい

…ね

「つい、じゃないよ！本当にびっくりしたんだからね！」

「い、いめんごめん。どうしたら許してくれる？」

「えー…」

どうしようかな、何かお返ししたいな。うーん……。

あつ、そつだ！

「じゃあそ…」

………

「ぎゃああああああー！」

「あつはははつ！誠二くんの顔おもしろーい！」

お仕置きに最初のジェットコースターに乗せたんだ。

「ううゝ…もうダメ。もう絶対乗らない」

「あつはははつ！あーつ、おつかしかつたー！」

「めぐ、こつちは必死で…」

「ふふつ、じゃあ次はね…」

実は次に乗るやつが一番楽しみにしてたかな。

園内地図を見て誠二くんを連れて行く。そしてやってきたのは大きい観覧車の前。

「この観覧車は日本一大きいんだって！」

「お、おお…デカイ…高い…」

「誠二くん、もしかして観覧車もダメなの？」

確かに高いけど激しい乗り物じゃないし、一つの空間だし…二人つきりだし…。

「ぜ、全然平気だよ！ほら、行こう」

今度は逆に誠二くんに手を引かれて受付に。強がってるけど、一生懸命なんだよね？

「行ってらっしゃいませ」

スタッフの人に見送られて観覧車に乗り込んだ。誠二くんとは向かい側に座ったんだ。こんな時って普通は隣に座るのかな？

でもホントに大きいな、この観覧車。一周するのにどれくらい時間がかかるんだろう。そんなことを思ってしまうくらい大きかった。

上がり出してから誠二くんは黙り込んでしまった。そして外を見ようとはしなくてうつむいたままだった。そして半分を過ぎてもう

すぐてっぺんという時。

「見て見て誠二くん！すっごく景色がキレイだよ！」

「あ、ああそうだね。すごく綺麗だ」

口ではそう言っても一度だって外は見えていなかった。せつかく二人っきりの空間なのに床ばかり見ちゃってる。でも仕方ないのかな。
「もうー……」

そう思いつつも私はどうにかしようとして誠二くんの隣に移動するために席を立った。

「うわわわ……め、めぐ！？揺れるって！」

「よいしょ」

「うわっ！ほらっ、傾く！」

「大丈夫。誠二くん、私を見て？」

「え？なに……ん……」

私はいきなり誠二くんにキスをした。

「……めぐ？」

「私が隣にいるから。私を見て？」

「……うん。ありがとう」

落ち着いてくれたかな。

「誠二くんの弱虫」

「だって落ちたら死ぬよ！？」

「クスツ、落ちないよ。もし落ちたとしても二人一緒なら……」

「めぐ……危ないぞ、その発言」

「た、例えばだよ！死にたくなんかないし……。あつ、誠二くん、見てっ！」

「えっ？……あつ……」

「綺麗だよね……」

「うん……」

遠くに見える水平線に夕陽が沈みかけていた。だんだんと消えて行く太陽の光がどことなく頼りなかった。一日の終わりが近づいていることをイヤでも感じてしまったから。

「もう一周しちゃうね」

「そうだね…。あーっ、恋しい地面がすぐそこに!」

「クスツ…もう…」

観覧車が一周して園内を見渡すと人の流れは出入り口に向かって
いた。今からまたアトラクションを回る時間はないのかな。遠くま
で来てるし早目に帰らないと…。向こうに着く頃は真っ暗だな。

「誠二くん」

「うん、そろそろ帰ろうか」

「うん…」

そして遊園地を出てバスで駅まで行き、電車に乗り込んだ。バス
の中でも電車を待っている間も今日のことを話してたんだ。

……

……

「めぐ、めぐ」

んっ…。あ、あれ？

「誠二くん…?」

「おはよう。もうすぐ着くよ」

あ……寝ちゃってたんだ。朝も早かったし久しぶりに思いつきり
遊んだもんな。

「めぐ、よだれ」

「えっ!?!や、やだっ」

「ははっ、かわいかったぞ。疲れたみたいだね。もう着くから」

「……いじわる。今どの辺?」

「あと二駅だよ」

「そっか…」

随分寝ちゃってたんだな。

「起こしてくれてよかったのに」

「朝早かったしね。めぐの寝顔はかわいいし」

「…そんなんじゃないんだ。もう二人で居る時間は貴重だから…。」

「もう着くんだね…。」

「えっ…うん…。」

「今日は楽しかったな。だから余計に…。」

「ねえ、誠二くん」

「ん？」

「このまま二人でどっか行っちゃおうか…。」

「めぐ…。ダメだよ、みんな…心配するから…。」

「…言ってみただけ…。」

「ははっ…ダメだな…私…。。でも、誠二くんと二人ならどこへ
だっで行けるよ。逃げ出したいよ。」

「駆け落ち…みたいなの…。」

「キイイイ…。」

「めぐ、着いたよ。行こう」

「……………」

「めぐ？」

「…イヤだ。帰りたくない。」

「私は座ったまま動かなかった。動きたくなかった。このまま…。」

「プルルルルルル…！」

「めぐっ…！」

「誠二くんは少し強引に私の手を引いて電車を降りた。」

「もうすぐで電車はまた発車するという時だった。」

「どうしたん…。」

「うっ…ひっ…えぐっ…。」

「私…また…！」

「めぐ…泣くなよ。めぐが泣いたらオレだって…。」

「わかってる…わかってるんだけど…。」

「駅のホームで誠二くんと泣いた。」

「また一日が終わってしまった。また二人で過ごせる時間が減って」

しまった。

電車の中で言った事。誠二くんが二人で逃げようって言ってくれたら、私は本当にそうしていたと思う。私たちはただの高校生。だけど、認められなくてもいいから二人で一緒に居たいと思った。

普通にしてほしいなんてやっぱ無理だったんだ。変わらない二人でなんていられなかった。そんなのただ目の前の現実から目を反らしてただけなのかもしれない。

もう二度と会えないなんてこれっぽっちも思っていない。お互いを忘れてしまうこともないと信じてる。

でも、先の見えない不安に少しだけ怖くなった。

これから二人ともどんどん大人になっていくんだ。どんどん変わっていく。

でも、お互いを想う心はずっと変わらないよね？

駅のホームで抱き合いながら、そんなことを考えていた。

旅立ちまで

あれからは結構慌たらしいものだった。

学校生活は普通だったけど、両親も帰って来て親戚のところ挨拶に行ったり、フランスに行く準備をしたりと何かと忙しかった。

それを大体は学校が休みの時に済ませていたから、誠二さんと会うのも学校でがほとんどだった。

そんな中で迎えた二月十四日のバレンタインデー。私が誠二さんに告白してからちょうど一年が経った。去年と同じ部室でチョコを渡すつもり、なんだけど。

「誠二くん、何かな？それ。詳しく説明してもらいたいな」

「こ、これは亜美から……」

明らかに本命だと分かるバレンタインチョコを持って誠二くんはやってきた。誰からかは聞かなくてもわかったけど。

「私というものがいながら……浮気者」

「い、いや、せっかく用意してきたのを受け取らないわけにはいかないしさ……」

誠二くんはうつろたえてた。

「ぶうー…私の手作りチョコあげないよ？」

「め、めぐー。あんまりいじめないでくれよー」

こんなやりとりだってもう出来ないんだ。日本を発つまでもう一ヶ月もない。何気ない日常を一つ一つ大事にしようと思ってた。

そう思いながら過ごしていると、本田先生が授業の一時間を使って私の送別会をしてくれた。日常の中にある非日常なことだった。クラスのみんなが一言ずつ言葉をくれた。「フランスに行っても元気で」とか「向こうでも頑張つてね」とかありきたりな言葉だったけど、それがもう二度と会わない人に向けて言う言葉みたいで寂しかった。

誠二くんだったらみんなの前で「オレたちの愛は永遠だよ」だって

！嬉しいけど恥ずかしくて泣きそうだったな。

紗耶香ちゃんが一番長く話してくれた。中学の時の出会いから今までのこと。そして最後に誠二さんと私を見て「頑張り」って言うてくれた。私にはその仕草がなんとなく心強かった。

あと、「寄せ書き」ももらったんだ。誠二くんはこれからの私たちのことを書いてくれてた。それが嬉しくて寂しくて複雑な気持ちで…。

吹奏楽部でも送別会をしてくれた。

三年生の先輩たちも顔を見せてくれて嬉しかった。そこで私はまた先輩たちと演奏したかったから無理言って一緒に演奏してもらったんだ。「今さら吹けないよ」なんて言ってたけど、さすがに今まで培ってきたものはしっかり残ってた。演奏したのは思い出の代表になれたコンクールの曲だった。

そして日は過ぎ、三年生の卒業式の日がおとずれた。

もちろん私は先輩たちを見送りに学校へ行った。

その時に大野先輩が最初のコンクールの前に私の楽譜をめちゃくちゃにしたことを告白した。私はそんなこと気にしてなかったけど、大野先輩は泣いて謝っていた。それがきっかけだったんだもんね、誠二さんと近づけたのは。誠二くんがいなかったらきっと大野先輩を許すことなんて出来なかったんだろうな。

私が見送りに来たはずなのに、河本先輩も大野先輩も田代先輩も私の心配をしていた。

あんなにおどけていた理恵先輩は最後までそんな感じだった。アリサ先輩も変わらなかった。

河本先輩は私のことを「羨ましい」って言っていた。音楽を続けたかったみたいだけど、両親の希望で音楽とは関係ない大学に進んだ。

そんな人たちから見れば私の環境は恵まれてるんだよね。

やっぱり私はまだ子供なのかな？

漠然とただ誠二さんと一緒に居たいなんて、現実を見ればただの

夢物語かもしれない。それでも私は誠二くんと一緒に居たい。それだけしかなかった。

出会いがあつて別れがある。そんなことはこの世の常。それがいつかはわからないんだよね。出会うと決めて出会ったわけじゃない。別れたくて別れたいんじゃない。だからこそ人との出会いに感動があるんだよね。

きっと先輩たちはこの学校でいろんな人と出会って、今日別れを迎えて、いろんなことを思い返しているんだろう。

「じゃあまたね」と学校をあとにする先輩たち。この「またね」って言葉がすごく頼りなく聞こえたんだ。でも、きっと私もそう言うんだろうと思った。ただの別れのあいさつじゃなくて本当にまた会うんだって意思を込めて。

その中で一人だけ違ったのが理恵先輩だった。遠くに就職が決まってる海外赴任もあるようだった。「またはないかもしれないけど、またね」だって。寂しそうな顔で言ってた。

みんながその言葉に「寂しい事言わないで」って言っていた。きっと理恵先輩はもう会えないって思ってたんだと思う。だけど、それでもどこか会えると信じてたから出た言葉なんだろうな。

そして、卒業式から数日が過ぎて日本を発つ二日前。

誠二くんが家まで会いに来てくれた。私が日本を離れる日は平日なんだ。だから誠二くんは学校がある。そう、最後……じゃないけど、最後にはならないはずの別れの言葉を言いに来たんだ。

「向こうに行ったらすぐ忘れた、なんて勘弁してくれよ?」

「誠二くんこそ。浮気したらダメだよ」

私は誠二くんを信じるだけなんだ。

「そういえば、まだ付き合いたして一年も経ってないんだよね」

「そうだね。だけど一年なんてあつという間さ。ずっと付き合っていくんだから」

「うん……。手紙、書くからね。写真も送るから」

「うん、オレも必ず返事書くから絶対送ってくれよ」

「電話…だつて…する…から…」

「めぐ……」

「イヤ…！イヤだ…！」

「せ…誠二くん…誠二くーん！」

私が泣きつくとき誠二くんは黙って抱き締めてくれた。私は声が枯れる程に泣いた。誠二くんも声を殺して泣いているのが体の震えでわかった。

ただただ泣き続けた。今日が最後なんだということを信じたくなかった。だけど頭ではわかっていたんだ。

この一瞬で今までの事が走馬灯のように頭をよぎった。

柳ヶ浦高校に入学して、誠二くんと初めて交わした言葉。その当時の私が覚えているはずなのに何故か鮮明に甦ったんだ。

大野先輩が起こした事件、誠二くんが掛けてくれた言葉。海や夏祭り、体育祭に文化祭。クリスマスデートに告白。初めてのキスに初めて一つになれたこと。誕生日にコンクール。修学旅行。そして今。

頭の中で全てが繋がったんだ。

そこで誠二くんが優しいキスをしてくれた。涙の味がしょっぱかった。

「……グスツ……ありがとう、誠二くん。もう大丈夫だよ」

「向こうにプリクラがあるかわからないけど、このチョーカーにも新しいやつ貼りたいな」

「うん…このペアリングも二人のエンゲージリングだね。どんなに離れたって……」

「大丈夫だ」

「…うん！へへっ…次に会う時はとびつきりいい女になってるからね！」

「ははっ、それ以上いい女になったら心配するって」

「誠二くんのためだもん」

「じゃあ楽しみにしておくよ」

「うん！」

「絶対手紙書いてくれよな。めぐから手紙来ないと返事出来ないんだから」

「うん。誠二くん…私、ずっとずっと誠二くんが大好きだから」

「オレも。いつまでも大好きだ」

「えへへ……」

「ははっ……」

「……」

「……」

「めぐ……そろそろ……」

「うん……」

「さよならは言わないから……またね」

「うん！またね！また会う時まで」

「ああ、また会う時まで！」

最後にキスをして笑顔で「またね」と交わした。誠二くんはそのまま振り返ることなく走り去って行った。

よかった…。もう笑っていられそうになかったから。お互いに最後に残ってるのは笑顔なんだよね。

それから二日後。

ついに日本を離れる日がやってきた。

飛び立つ飛行機は正午発。朝から準備をして早めに家を出て空港に向かう。何でもフランスの先生が日本の和菓子が好きらしく、空港で買い物するらしいんだ。

「お父さん、先生ってどんな人なの？」

「すごく優しい人だから安心しなさい」

でもやっぱり不安だな。フランス人なんですよ。コミュニケーション取れるのかな？

！！！！！

私…フランス語勉強してない…。

「お、お父さん、フランス語わからないよ」

「はっはっはっ、心配ない。すぐに話せるようになるから」

そんな樂觀的な…。

「お、お母さん」

「言葉なんか通じなくても大丈夫よ、めぐちゃん。大事なのはフィ
ーリングよ」

…ダメだ、この二人に頼っても。せめて挨拶くらいは出来るよう
にしとかないと。

空港に着いてから二人が買い物してる間に、小さなフランス語
会話本を買って読んでいた。その時に出発まであと二時間ほど残っ
ていた。

今頃、誠二くんは授業中だな。私のこと考えて泣いてたりして。

誠二くん泣き虫だからね。

「少し早く出過ぎたかな。もう買い物終わってしまったよ」

お父さんとお母さんが戻ってきた。

「どうするの？」

「少し何か食べるか」

それからカフェで軽い食事をとった。

「恵。忘れないうちに携帯の電源切っておきなさい」

「うん」

フランスではこの携帯使えるのかな？使えなかったらメールとか
出来ないよね。

それからしばらくフランス行きのロビーで待っていた。

あと一時間半。

今度この日本の地を踏むのはいつになるんだろ。本当に帰って来
れないのかな。

「めぐちゃん。今日はお見送りのお友達は来ないのかしら？」

「今日はみんな学校だよ。それに、もう会いたい人とは会ったし」

「あらそう？椿くんは来てくれないのかしら？」

「二日前に会ったってば」

「めぐちゃんのことを本当に大事に思ってるなら必ず来るわよ」
何を根拠にそんなこと…。」

「めぐ!!」

えっ!?

「せ、誠二くん!?!」

来た…。本当に来た…!

声をかけられて振り返ると息を切らして立っている誠二くんがいた。目の前に確実に居るのに一瞬信じられなかった。でも、耳に届いた声と目に映る姿は正真正銘誠二くんだった。

「誠二くん、どうして…」

「やっぱり最後まで見送りたくなって」

お母さん…。

お母さんの方を振り返るとにっこり笑って言った。

「めぐちゃん、私たちは先に行ってるから時間には遅れないようにね。あなた!」

「あ、ああ。恵、遅れないように」

お父さんとお母さんは誠二くんと話す時間をくれた。

「誠二くん、学校は?」

「早退してきた。むしろさせられた」

「え?あははっ、なにそれ!」

また誠二くんの前で笑えた。もういつこんなことがあるかわからなかったのに。

「ふふっ、再会は意外と早かったね」

「ははっ、そうだな」

誠二くんも笑ってくれてる。

「めぐ、オレ…。」

「なーに?」

「めぐが大好きだ!高校卒業したら仕事しながらでもフランス語勉強してめぐに会いに行くから!」

「誠二くん……。うん！でも大丈夫かなあ？誠二くん、おつむ弱いからなあ」

「なんだとー！」

「あははっ……！」

「でも……頑張って会いに行けたらその時は……」

「ん？」

「その時は結婚しよう！」

「えっ……誠二くん……。うん！絶対だよ？おばあちゃんになってからのウエディングドレスなんてイヤだからね！早くね！」

嬉しくて涙が出てきた。

大丈夫、きつと二人は大丈夫なんだ。

「約束だからね」

「約束だな」

それからベンチに座って話した。誠二くんはまた私に希望をくれたんだ。私もその約束のために頑張って行こうと思った。

「子供はたくさん欲しいな。頑張って小学生の時の将来の夢叶えてね」

「まだ覚えてたの？オレの人生の汚点を」

「でも、本当に叶ったらすごいことだよ？」

それから二人の将来のことをいろいろ話した。今度は辛くない。希望に満ち溢れてる話なんだ。

子供が男の子なら、女の子なら。誠二くんの好き嫌いのこと。住む家は？家事分担は？どこで結婚式をする？……なんて。

未来の話しが二人を繋ぐ希望だった。

「あはっははっ！うんっ！絶対そうだよ！あははっ……ははっ……もう……行かないと……かな」

時間が過ぎるのが早かった。これほど時間が過ぎるのを恨んだことはなかった。

「……うん」

「頑張つて、二人の夢叶えようね！」

「ああ！約束だ！」

「ふふっ、約束だね」

一生懸命笑顔を作っていたけれど、涙は止まらなかった。

そして笑顔でキスしたんだ。

「…えへっ…またね！誠二くん！」

「うん。めぐ、またね！」

そして私は搭乗口へと進み、誠二くんが見えなくなるまで手を振っていた。

……

ついに、本当に離ればなれになっちゃった。

誠二くん…。

元気でやっていけるかな。

紗耶香ちゃんもみんなもいるから大丈夫かな。

食べ物の好き嫌い治してくれたらいいな。

フランス語って難しいよ？

勉強頑張ってくれるかなあ。

向こうではフランス料理も勉強して誠二くんをびっくりさせちゃ

おう。

毎日おいしい料理を作っただげるんだ。

絶対に…。

「めぐちゃん、お別れは済んだの？」

「うん…。お母さん、フランス料理って難しいかな？私…誠二くんに作っただげるんだ」

「めぐちゃん……。本当に、椿くんのが大事だったのね…」

「…うっ…うえっ…」

「いいわよ…。今は思いつきり泣きなさい」

「うっ、うわぁー！ん！えっ、えぐっ…。あっ…ひっ…ひ

っ…ひっ…うわっはー！んっ！」

「よしよし…」

.....

飛行機の中では泣き疲れてずっと寝てたみたいだ。飛行時間は約十三時間あったらしいんだけど、ほとんど覚えていなかった。

夢の中では誠二さんと笑いながら、まだ見ぬ二人の子供を連れて街中を歩いていた。自分で言うのもなんだけど、絵に描いたような幸せそうな家族だった。

フランスと日本の時差は約八時間。

十二時に出発して十三時間も飛んだのにフランスはまだ夕方だった。

ここから私の新しい生活が始まるんだ。

誠二くんは…近くにもういない。

新しい生活

「ぐちゃん…めぐちゃん!」

「んっ……えっ…あれ?」

「起きて。着いたわよ」

「うん…」

いつの間にか寝ちゃってたんだ…。着いたってことはここはもうフランスなんだな。

飛行機を降りてロビーに行くとそこは日本の景色じゃなかった。

日本人はちらほら見るもののもう別世界だった。

「ここが…」

「これから私たちが暮らす国だよ」

周りの人が話している言葉がわからない。周りに書いてある文字も読めない。つくづく勉強してなかった自分を恨んだ。

やっていけるのかな、私。もうくじけそうだ。

「恵、疲れてると思うが今から移動するからね」

それからタクシーでしばらく走り、一軒の家の前にたどり着いた。

「ここが私たちが暮らす家だよ」

外観はシンプルな四角い家。両開きの玄関を開けて中に入ると、まずリビングでソファが並んでいた。ダイニングにはテーブルとイスが並べられていて小さな出窓がいくつか並んでいた。

部屋自体はそれほど広くなくて中央付近に螺旋階段が二階に続いていた。

階段を上るとお世辞にも広いとは言えない廊下に並んで部屋が二つ。突き当たりにもう一部屋あった。

並んだ部屋は寝室。ベッドがあってそれが部屋のほとんどを埋めていた。

奥の部屋にはテーブルと本棚があった。それに大きい出窓があった。白いカーテンがかけられている。昼間は柔らかい光が部屋を照ら

してくれそうだった。

家の中は全体的に白を基調としていて床は板張り。壁にはところどころ生木で補強がしてあった。二階の部屋は屋根裏部屋を思わせるように天井は三角になっていた。

照明は大体が白熱電球で部屋を暖かい光で満たしていた。

「恵は二階の一室を使いなさい。明日にはフルートの先生が見えられるから今日はゆっくり休むんだよ」

言われた通り二階の部屋に荷物を持って行く。まずはこの部屋を好きな水色に染めることから始めよう。物はそんなにいらぬし。

私は荷物を置いて、備え付けてあった木製の机に誠二くんとの写真を飾った。

「誠二くん……」

自然に呟いていた。

取り出した荷物は写真だけだった。

落ち着いたらすぐにでも手紙を書こう。今からどんな生活になるんだろうな。

飛行機の中で結構眠ってたはずなのに、その日はいつの間にか寝てしまっていた。

「ん……」

翌日、予想外に早く起きてしまった。昨日よく眠っていたせいだろうな。

そしていつもと違うベッドで目が覚めて改めて思った。日本じゃないんだなって。もう、誠二くんはいないんだなって。

当たり前のように学校に通って、当たり前のように友達に挨拶して……。そんな当たり前だった日常はもう来ないんだ。これからは一人で頑張っていけないといけない。

目が覚めて頭も冴えているのに、全く動く気がしなかった。昨日はカーテンも閉めずに寝たから、朝の光が部屋を明るく照らしていた。

ベッドに横になったまま窓の外をぼーっと眺める。時折、小鳥たちが飛んでいり姿が見えて少し羨ましくなった。

どれくらい外を眺めていたんだろう。外の光はだんだん眩しく感じる程に明るくなっていった。賑やかな声が外から聞こえて、街が動き出したことを感じる。

「めぐちゃーん！そろそろ起きなさい！」

お母さんが部屋のドアをノックした。

「……………」

なにか、声を出すのもおっくうだった。何もする気になれない。本当になにも。顔を洗うことだって、朝食を食べることだって、起き上がるのだって。

「めぐちゃーん！」

お母さんが部屋に入ってきた。それでも動く気になれなかった。

「もう、起きてるなら返事くらいしなさい」

「おはよう…」

「もうすぐ先生が来るからね。顔くらいは洗っておきなさい」

「うん…」

私は渋々顔を洗いに行く。水は冷たくて全身に身震いをした。

今はもうお昼くらいかな。誠二くんは部活が終わってもう家に着いたくらいかな。

よく寝てたおかげで時差ボケにはなっていないかった。

「恵。おはよう。髪の毛サボサだぞ」

お父さんのその言葉に少しイラッときた。

「わかってるよ！うるさいなあ」

私はもう一度洗面所に戻り髪の毛を整えた。自分でもわかった。早く慣れなきゃって。生活にじゃなくて、誠二くんがいないことに髪の毛を直してリビングに戻る。

「恵、今連絡があったよ。もうすぐ着くそうだ」

「うん…」

「慣れるのに時間がかかるだろうけど、しっかりやるんだよ」

わかってることをいちいち言われてイラツときてしまう。お父さんだから？こんな時期だから？

ドンツ、ドンツ。

不意に玄関をノックする音が聞こえた。

「いらつしゃったみあいだ。恵はそこで待ってなさい」

どうやらフルートの先生が来たみたい。

ちゃんと挨拶出来るかな？い、今になって緊張してきちゃった。

少し待っているとお父さんと話しながら男の人が入ってきた。

年齢はお父さんより少し年上に見える。髪の毛はショートの黒で背が高く、さすがに鼻も高い。スーツを身にまとってダンディーなおじさんって感じだった。

「恵、この方がお世話をしてくれる”ジャン・ド・バルル”さんだ」
お父さんが私に先生を紹介してくれた。

「ボ、ボボ、ボンジュール」

とにかく挨拶しなきゃと思っただけの精一杯の言葉。

「はっはっはっ、話しに聞いていた通りかわいらしいお嬢さんだ。

こんにちは、メグミ。私はジャン・ド・バルル。ジャンと呼んでくれたらいい」

「……ふえ？」

返ってきた言葉は流暢な日本語だった。当然、言葉なんかかわからないと思っていた私はあっけらかんとしてしまったんだ。

「驚かせたかな？僕は昔、日本に長く滞在していたことがあってね。しかし、君のお父さんには話していたはずなんだが…」

お父さん…。

「い、いや、はははっ、びっくりさせたくてな」

私はお父さんを睨んだ。

「こんにちは、ジャン。お元気だったかしら」

「いやあ、久しぶりだね。かわいいお嬢さんじゃないか」

「あーやだ。相変わらずお上手ね。私もまだまだいけるのかしら」
うん？

「も、もちろんメグミのことなんだけどね」

「分かってるわよー。ジャンたら冗談が下手になったのね」

な、なんだろう。日本じゃないからキャラが変わってるのかな。

「では僕は失礼するよ。今日はメグミの顔を見に来ただけだからね。明日にまた」

「わざわざすみません。恵のことはよろしく願います」
ぺこっ。

私もお辞儀をしてジャンを見送った。ジャンはお父さんの言葉につこり笑って帰って行った。

優しそうなおじさんだった。日本語も通じるし、何の心配もなさそうだった。

「どうだい恵。安心しただろう。どうだ、これからお父さんとフランスの街でも見に行かないか？」

「いい。まだ疲れてるから」

「そ、そうか。じゃあまだ休んでなさい」

「うん」

お父さんなりに気を使ってくれたのかもしれないけど、とても街を歩くとかそういう気分にはなれなかった。

フランスの地に立ち、新しい出会いがあつたものの、私の気持ちは日本に置き去りにされたままだった。

誠二くと笑い合って話すこと、みんなと笑い合って話すこと。

それが今でも目の前に起こりそうなの…そんなありえないことにも期待してしまっていた。

何気ない会話が愛しく思える。もう、次にいつ話せるかわからない。どんなに手を伸ばしても私の手が届く距離に誠二くんはいない。部屋に戻って机に伏せる。慣れない質感の机とイスの感触が現実の辛さを突きつける。

まだ写真以外は何も置いてない机。ぼんやりと写真を眺めていると、誠二くんの顔がぼやけているのがわかった。

泣いたってどうしようもない。そんなことわかってるのに涙はと

めどなく流れていた。顔を支えていた左腕の袖が濡れて冷たさを感じる。

そこでようやく涙は止まり、窓の外の見慣れない景色に目を向けた。

フランスでの家は大通りに面していて、人通りが多い。並木道の木の木の葉がちょうど窓の高さにあった。部屋の小さな出窓に乗り出し外を見る。日本とは違う道路、人、車、建物、全てが違った。

「帰りたい…」

ここでの生活もきつと楽しいことが待っているんだと思う。ただ…。

「めぐちゃーん」

お母さんが私を呼びながら部屋に入ってきた。

「夕食はまだ食材買ってないから外で食べましょう。何がいい？」

「…何でもいい」

私は部屋の入り口を振り向くことなく答えた。

「明日からレッスンだからね。元気出して」

それだけ言ってお母さんは部屋を出て行った。まだ荷物の中から出してもいないフルート。しばらく一人になりたかった。

それからもぼーっと外を眺めていた。

夕食は近くのレストラン。地元では有名なんだろうが、中は多くの人で賑わっていた。ダイニングバーのような店で、丸いテーブルを三人で囲んだ。日本人が珍しいのか周りの視線がこちらに向けられていて落ち着かなかった。

「うまい！なあ！恵！」

お父さんが料理を口に運んで同意を求めてくる。

「うん…」

料理は本当においしかった。少し豪華なパスタとステーキとサラダとパン。雑誌で紹介されるような洒落たフランス料理じゃないけれど絶品だったんだ。

誠二くんにはこのパスタは食べきれないな。ステーキの添え物も

私を食べるんだろっなあ。

そうだった、フランス料理勉強しなくちゃ。誠二くんが食べれるようにアレンジもしなくちゃね。でもやっぱりお肉料理かな。誠二くん香草とか大丈夫だったっけ？

「めぐちゃん、何にここにこしてるの？そんなにおいしい？」

「えっ！？あっ…うん、おいしい…」

気がつくときと誠二くんのこと…か。今頃誠二くんは夢の中かな。

……会いたいな…。

食事を終えて家に帰るとまた部屋に引きこもった。そしてまた写真を眺める。

「…っはぁー………」

明日からはレッスンが始まるんだよね。…憂鬱。いい人そうな先生だったけど、気分じゃないんだよね。そんな事言ったら怒られるんだろっな。

吹奏楽部のみんなは練習頑張ってるのかな？梓ちゃんと舞ちゃんは大丈夫かな？誠二くんだったって…。

私がいなくなっって…どうなったんだろっ。変わらずにやっていけるかな？…それはそれで寂しいかも。

昔は一人でフルート吹いてても楽しかったのに、今は全然だ…。みんながいらないからかな。

今からどれだけうまくなって周りの人に認められたとしても、そんなに嬉しくない。そんな気がする。これから変わっていくのかな？

…いろいろ考えてもどうしようもないか。なるようになる…かな。もう来ちゃったんだし。

でも…。

どうしても日本への未練は隠せない。

こうやって、ベッドの上で目を閉じると誠二くんの愛らしい笑顔が浮かんでくる。鮮明に、まるで目の前で私に微笑みかけているように。だけど、目を開けるとそこにはまだ見慣れない天井があった。するとまた寂しさが襲ってくる。

「誠二くん…！」

思わず毛布を握りしめてしまう。

二人の約束に向かって頑張ろうって思ってるのに、やっぱりあなたこそそばにいてくれないと…。

「何も…出来ないよ…」

誠二くんに会える日を夢見てその日は眠りについた。

翌日からジャンによるレッスンが始まることになる。

このジャンが後々私に転機をくれるきっかけを与えてくれるなんて、今は思いもなかった。

……

「おはようメグミ。昨日はゆっくり眠れたかな？」

「おはようございます。ジャン」

ジャン・ド・バルル

「さっそくだけど、何か聞かせてもらおうかな」

レッスンは二階の奥の部屋で行われる。ジャンはイスに逆に腰掛けて背もたれで頬杖をついていた。

「何かって……」

「何でもいい、メグミが好きな曲を吹いてごらん」

好きな曲か……。私のそれは誠二くんに最初に聞いてもらった曲。部室で聞かせて欲しいって言われて演奏した曲。

……。

私は言われた通りに好きな曲を演奏した。

誠二くん……。

「うん……悲しい音色だね。元々その曲は作曲者が恋人に贈った曲なんだよ。だからもっと明るく華やかなんだ」

わかってる。いつも通りに演奏したつもりなのに……。

「何か悲しいことがあったのかい？」

「……大切な人が……日本に居ます……」

「ボーイフレンドかい？」

「……そうです」

「……それは辛かっただろう。メグミの気持ちは音色に現れているよ。聞いている僕も悲しくなってくる」

「……すみません……私、まだ……」

「気にしなくていい。誰にだって辛い時はある。……そうだな……メグミ、少しいて来てくれないかい？」

「え？」

「今日のレッスンはもうおしまいだ。これから課外授業にしよう。外に出る準備をしておくれよ」

「えっ……でも……」

「メグミが支度をする間にお父さんには話しておくから。準備が出

来たら下りておいで」

そう言っただけでジャンは一階へと下りて行った。

何か強引だな。フランス人ってみんなこんな感じなのかな？

あんまり動きたくなかったけど、私は外に出る支度をして一階へと下りて行った。窓を開けるとまだ外は肌寒くて、コートを羽織ってちょうどいいくらいだった。

「おっ、メグミ。もう準備出来たのかい？じゃあさっそく出かけよう。なあと、そう時間はとらせないよ」

もう話しはつけていたみたいで玄関先でお父さんに見送られた。

「いつたいどこに？」

「着いてからのお楽しみだ。ここからだそう遠くない。道中この街の街並みでも眺めているといい」

なんていうか…すごく大人な感じだった。もちろんジャンは大人なんだけど、全てをわかってるような…そんな雰囲気を感じ出していった。

「少しはこの街を歩いたかい？」

「近くのレストランに行っただけです」

目的の場所まで車で移動してる。その道中での会話だった。

「この街はいいところだよ。日本ももちろんいいところだったけど、僕はこの街が一番好きだ」

「はあ……」

何が言いたいんだろ？

「メグミにもこの街を好きになって欲しいんだ」

好きになって…まだ来たばかりだし言葉もわからないし。街並みはきれいだから好きだけど

、旅行とかじゃなくてここに住むんだから変な気分。

「今日はこの街の一部を紹介するよ。ほら、見えて来た」

「えっ？……うわあ……！」

ジャンに連れられて向かっていた先はエッフェル塔だった。フランスの観光名所としてはあまりに有名な場所。

「こんなに近くにあったなんて」

「はははっ、どうだい？きれいだろう。ここからでも見えるけど中に入ってみるかい？」

「中に入れるんですか？」

「もちろん。展望台もあるし、レストランもあるんだよ」

「へーっ、そうなんだあ。行きたいです！」

「よしっ！それじゃあ行ってみよう！」

それからまた車を走らせてエッフェル塔の前にやってきた。

「東京タワーみたい」

「そうだね。東京タワーの方が少し高いんだよ。それとエッフェル塔には正面がないんだ」

「どこから見ても同じってことですか？」

「そうだよ」

空に向かって高くそびえ立っているエッフェル塔の周りにはきれいな公園があった。

ジャンが二人分の入場チケットを買って中に入った。そしてエレベーターで展望台まで上がったんだ。階段でも途中まで行けるみたいだけど、上を見てその長さに止めちゃった。

「うわあ……」

「すごいだろう？」

展望台から眺めるとこの街を一望出来た。下には先程通って来た公園が広がっていた。

「きれいに形取られてる」

「この辺一带はエッフェル塔も含めて世界遺産なんだ」

どんなに高いところでも日本は見えないよね。ははっ、私ったら何を…。

それにしても…。

「でも、何か危ないですね」

展望台は外にむき出しで軽く身を乗り出すと落ちてしまいそうだった。

「…実はね、自殺の名所でもあるんだ」

「えっ……」

「じ、自殺!？」

「う、嘘ですよね?」

「事実だよ。悲しいけどね」

「えーっ、聞きたくなかったな、そんな事。」

「でも、ここが街のシンボルで多くの人が訪れる場所であることも間違いないよ」

「それはそうだけど…」。

「気を悪くさせてしまったかな。すまなかった」

「私が顔を曇らせると、何を思ったかジャンは私に土下座して謝った。」

「なっ、なななっ、頭を上げて下さい!周りの人も見てますから!」

「んっ?これが日本での謝り方と聞いていたが…」

「そんなのごく一部の本当に悪いと思った時とかお願いする時くらいです!」

「むっ……そうか。すまない」

「もっっ。でも…」。

「ぷっ…あははっ!ジャンったら何年日本に居たんですか!そんなに日本語上手なのに!…あはっ、おっかしー!」

「久しぶりに声を上げて笑った気がした。最後に笑ったのは空港で誠二くんと話してた時だったのかな。」

「ジャンはきよとんとした表情で私を見ていた。」

「……ふっ、いいね。メグミは笑顔の方がかわいらしい。日本ではいつもそんなに笑ってたのかい?」

「あっははっ……はあっ……」

「日本では…誠二くんが居て紗耶香ちゃんが居てみんなが居て…」

「はいっ!」

「ははっ!いい顔だっ!そうだ、カメラを持つてるから写真を撮ってあげよう。そのまま笑って」

写真か。誠二くんへの手紙と一緒に入れようかな。私もカメラ買わなきゃ。

「はい、いくよー」

パシヤツ。

その写真がフランスに来て記念すべき最初の写真になった。

「何枚か撮ってしまおう」

そう言って次々に写真を撮っていくジャン。

パシヤツ。パシヤツ。パシヤツ。

「うん、いいねー。その表情。じゃあ、次はそこに腰掛けて」

パシヤツ。パシヤツ。

えっとー、ジャン？

「そう、次は壁に寄り掛かって」

パシヤツ。パシヤツ。

あの一、ジャン？

「日が暮れてきたから夕陽をバツクに」

「ジャン！何枚撮るんですか！」

「えっ、ああ、ははっ、すまない。最近写真が趣味でね。カメラも

いつも持ち歩いてるんだ」

「もう疲れましたよー」

「そ、そうなのかい。じゃあ最後に一枚だけいいかい？」

「最後ですよ？」

パシヤツ。

最後は夕陽をバツクに撮った。逆光で見えないんじゃないかと言ったら、逆にそこがポイントなんだそうなの。

「さ、帰りますよ」

撮影も終わったし、疲れたから帰るように急がす。

「わかった、わかったよ。帰るけどその前に一つそのかしこまった話し方はしなくていいよ」

「え？でも……」

「僕は気にしないし、普通に話してくれた方がいい。メグミは僕の

生徒になるけど、同時に友達だ。メグミ、ようこそ。フランスへ」
ジャンは両手を広げてそう言った。

「……クスツ。よろしく、ジャン」

「ああ、こちらからもよろしく。メグミ」

ジャン…か。まだなんとなくだけどうまくやっていけそうな気がする。

そして、翌日からまたジャンのレッスンが始まった。吹奏楽部であんなにちゃほやされてた私だけど、ジャンからすればまだまだみたいだった。

ジャンは優しく怒る事はなく、丁寧なレッスンだった。

それから数日後。

「メグミ、写真が出来たんだか…」

「えっ！見たい見たい！」

「み、見るのかい？」

ジャンは何故か出し渋りしていた。誠二くんの手紙書いて写真送らなきゃ！

「もったいぶらないで、見せて？」

なんだろう？自分が撮った写真を見られるのが恥ずかしいのかな？

「メグミが見たいなら仕方ないな。ほら…」

そして私は渡された写真を見た。

「うわあ。すごく綺麗に撮れてる！ジャンって写真撮るの上手なんだね！」

「うん、ま、まあね」

たくさん撮ってもらったから全部見るのに時間がかかるな。あつ、これ夕陽をバックに撮ったやつだ。これは座って撮ったやつで…これは…。

次々に写真を見ていく。

「あれ？ジャン、一番最初に撮った写真は？こっちに来て初めて撮った写真だよ。記念だし、手紙と一緒に日本に送りたいんだ」

「あ、ああ、あれかい？あんまり写りが良くなかったんだよ。持っ
てはいるけど…」

「見せて？写りが悪くても記念の写真なんだし」

「や、やっぱりそうなるかい？じゃあ…」

そして懐から一枚の写真を取り出して私にくれた。

「ああ、そうそう、この写し……ひっ！なっ！なななっ、何これ
！？」

「うーん…まあ、その…写っちゃってるね」

「ダッ、ダメダメダメダメ！捨ててっ！いらぬい！」

その写真には私の背後にいくつもの腕が写っていて、まるで手招
きをしているようだった。俗に言う心霊写真というやつ。

「ははは…でも記念の写真なんだろう？」

「いつ、いいいつ、いらぬい！そんなの記念にしたくない！」

「そ、そこまで嫌がらないでもいいじゃないか。まあ、確かに気味
は悪いが」

「気味が悪いってもんじゃないよ！な、なに！？誘われてる！？私、
あの世に誘われちゃってるよー！！」

「メ、メグミ！落ち着いて！」

「あーん！助けてよー！誠二くん！」

「誠二くん！？メグミっ！僕はジャンだ！ほらっ！しっかり見て！」

「誠二くんーん！！」

「……まいったな……」

それからというもの、ジャンは私をなだめるのに必死だったらし
い。当の本人はよく覚えてないんだけど。誠二くんの名前を呼びな
がら助けを求めていたらしい。

結局、その日のレッスンはそこで終わっちゃった。

「お、落ち着いたかい？」

「うん…グスッ…ごめんなさい…」

「いや、やっぱり見せるべきじゃなかったみたいだな」

「ううん…。まあ、一つの記念になった…のかな…」

初撮りで心霊写真。……っというかあの写真強烈だったなあ。自殺する人多いって言ってたし…。

ぞわわわ…！

ううう、寒気が…。

「誠二くんっていうのは日本にいるボーイフレンドかい？」

「えっ？あつ……そう…」

「どんな人なんだい？」

「誠二くん…。誠二くんは優しい人。私を救ってくれたヒーローなんだ」

「ヒーロー……日本で言うところのサムライなんだね」

「うん、ちよつと違うかな。日本に対してなんか偏った知識を持つてるよね、ジャンは」

「そ、そうかい？それじゃメグミに教わっていくとしよう。それでその誠二くんは何から救ってくれたんだい？」

「……私、前いじめられてたんだ。だからあんまり人と関わりを持たないようにしてた。仲が良かった友達以外とは話さなかったんだ。いじめの原因がフルートだったから、目立たないようにもしてた」

「それで？」

「ある事件が起きて、その時に誠二くんが言ってくれたの。ありのままの自分でいろつて、私を守るからつて。それから私はだんだん素の自分でいれるようになってきて、同時に誠二くんにも惹かれていったんだ。……懐かしいな……」

「そうだ、手紙…書かないとな。」

「メグミは本当にその彼が好きだったんだね。今のメグミはすごく優しい顔をしている」

「えへっ、そうなんだ。誠二くんのこと大好きなんだ。だから……まだ辛い」

「……すまない。軽々しく聞くことじゃなかったかな」

「ううん、いいの。いつまでもこのままじゃダメだつて分かってるから。また会う約束だつてしたから、大丈夫。きつと……」

ね、誠二くん。

「そうか。きつと彼をそう思ってるだろう。メグミなら大丈夫だと」「えっ……あっ……そっか！そうだよ！ありがとう、ジャン！」「誠二くんならきつとそう思ってくれてる。私、頑張るよ、大丈夫！だから、誠二くんも大丈夫、だよ！」

「とんでもない。メグミをさっきみたいならかな表情にさせてくれる彼だ。きつと素晴らしい人物なんだろう。僕も会ってみたいよ」「いつか……きつと紹介する」

二人の約束を果たす時には……きつと。

「楽しみにしておくよ。それじゃあ今日はこれで帰るとしよう。また明日に」

「うん。さようなら、ジャン。……あっ！写真もらってもいいの？」

「ああ、もちろん。また撮らせておくれよ」

「幽霊がいないような場所だね」

「はははっ……」

乾いた笑いを残してジャンは帰って行った。

ジャン…か。

私は彼に出会えてよかったと思う。まだ何もわかってはいないんだらうけど、なんとなく誠二くんに似てた。

優しいところや少しだけとぼけたところ。いつでも私の味方をしてくれそうで、そして守ってくれそうだった。

なににせよ、ジャンとの出会いがこのフランスで過ごすことこの不安を減らしてくれたんだ。

まだこの先、どんなことがこの地に待っているのかわからない。めまぐるしく動く日常か平穏な日々か。

全然予想は出来なかったけれど、私は前を見て進んで行くこと思った。もちろん誠二くんを忘れて…なんてことじゃない。誠二くんとの約束を胸に、その日を夢見て。

「めぐちゃーん！ご飯よー！」

「はーい！今行くー！」

少しでも強く生きて行こうと思った。いつかまた誠二くんに会った時に笑顔で会えるように。

「ねー、お母さん」

「なに？」

「私、カメラ欲しいんだ」

「カメラね。ジャンにいいお店紹介してもらいなさいな。それくらい買ってあげるから」

「やった！じゃあ明日ね！」

「えっ……もう、しょうがないわね」

こっちの思い出も全て誠二くんに伝えるんだ。

誠二くんへ…

誠二くんへ。

この手紙を書いているのは夜の十時。誠二くんはまだ夢の中かな。私の夢見てる？

誠二くん、元気にしてますか？

誠二くんと離れ離れになってもう二週間。

私の方はけっこう新しいこともあってあつという間だったけど、誠二くんはどうだったかな？

最初はね、何もやる気になれなかった。部屋に閉じこもって動く気にもなれないくらい。誠二くんとの写真を眺めて時間が過ぎていったんだ。

それからフルートの先生のジャンっていう人に出会ったんだ。優しく教えてくれてるよ。私の腕もこっちはまだまだみたい。そのジャンって先生がなんとなく誠二くんに似てるんだ。優しく、守ってくれそう。

でも心配しないでね？

素敵なおじさんって感じだから恋愛対象じゃないよ。

なんとか頑張っていけるかなって、今のところは思ってる。

そうそう、近くに少し有名なレストランがあって、その料理がすごくおいしいんだ。

でも誠二くんには苦手なものがたくさんかな。フランス料理も勉強して誠二くんにふるまうからね。乞うご期待！ちゃんと誠二くん用にアレンジするから心配しないでね。

吹奏楽部はどう？

新入部員はたくさん入部してくれたかな？

最後のコンクールに一緒に出れないことが少し残念だな。

梓ちゃんと舞ちゃんは元気？しっかりとやってくれてる？それだけが心配…。

亜美ちゃんのことも！私が居ないことを良い事にいろいろされてない？誠二くんのごことは…信じてるから大丈夫だろうけど。

紗耶香ちゃんも元気？紗耶香ちゃん良い子だからずっと仲良くしてあげてね？私の親友だから、ね。

先生や他の人たちにもよろしく伝えてね。

この前、カメラ買ったんだ。撮ってもらったのも自分で撮った写真も送るね。他の人に見せたらいけないのもあるからね。えへっ。

これからもいっぱい撮っていっぱい送るね！それはもう寂しさを感じさせないくらい。

でも、寂しいよね。

ねえ誠二くん。

会いたいよ。

誠二くんに触れたい。誠二くんの笑顔が見たい。誠二くんの声が聞きたい。

誠二くんに会いたい。

「うっ……誠二くん……」

少ない言葉かもしれないけど、想いは綴ったつもりだった。この手紙に想いを乗せて…。

届くといいな、私の想い。

一緒の生活

「う……う……。ふわぁ……」

もう朝か……

朝日が眩しい……。太陽はことと日本でも変わらない。それだけでも誠二くんと同じ世界で生きていることを実感出来た。

「今日はあつたかいなあ」

日射しが当たる状態で外を眺めると気持ちよくなって、ついうとうとしてしまう。

「すう……すう……。っ！いけない……起きなきゃ……。でも……気持ちいい……すう……すう……」

(はははっ、めぐー！何してんだー？こっちだよー！)

(あっ！待ってよー、誠二くん！)

(はははっ、ほらっ、手をかして)

「……え……えへへ……誠二くん……むにゃ……」

「恵ー！朝だぞー！」

びくっ……！

「……」

お父さん……お父さんだな、私と誠二くんの戯れの邪魔をしたのは心地よい眠りを妨げられて一気に不機嫌になった私はリビングへ下りて行く。

「あっ、おはよう、恵」

「……ムスッ」

「どうした？やけに不機嫌じゃないか」

「お父さんのせいだからね！」

「なっ……！と、父さんが何をしたと言うんだい？」

「いい夢見てたのに……」

「なんだ、夢の話しか。父さんはてつきり恵の寝顔をこっそり見ていたことかと……」

えっ……。

「……気持ち悪い」

「ななっ！恵っ！父親に向かって気持ち悪いなんて……！」

「あなた！めぐちゃんだってもう大人なんだから。あなたが悪いわよ」

「むう……」

「ベーーーーっ！」

「めぐちゃんも、お父さんにもう少し優しくしましょうね」

「はい……」

でもなんか不思議な感じだな。こうやって毎日のようにお父さんとお母さんと話すなんて。今までずっと一人が多かったから。

ピリリリリ……！

「ん？ジャンからか」

ジャンがお父さんに電話？何だろう？

「……はい、わかりました。……いや、お気になさらずに、それじゃ」

「お父さん、何？」

「ああ、ジャンが今日急用が出来て来れないらしい。その連絡だよ」「そうなんだ」

ん……今日はお休みか。何しよう。友達もいないし外もわからないし……。

「めぐちゃん、お母さんとお買い物にでも行きましょつか？」

「お母さんと……うん！」

「じゃあ私も一緒に行くかな」

「……」

「そ、そうだ！今日は用事があるんだっ！いやあ、たまには恵と買い物もいいと思ってたんだが残念だ！非常に残念だ！」

「……」

「……………」

「うん、残念だ、全く残念だ……………」

そう呟きながらリビングをあとにするお父さんの背中はとても寂しそうだった。

「めぐちゃん、誘って来てあげなさい」

「そうだね、ちよつとだけ可愛そうだね」

「しょうがないな」。

ガチャツ。

「お父さん、今日の用事は大事な用事なの？」

「い、いや、それ程大事な用でもないが……………」

「なら一緒に買い物行こうよ」

「な……………」

何をそんなに驚いているのかな？お父さん。

「は……………」し、仕方ないなあ。用事はまた今度でいいか」

「いいんだよ、別に。用事済ませて」

「い、いや。さあ行こう！」

素直じゃないなあ。…私もか。用事があるって聞いた時、少し残念だったもんね。

「準備するから少し待っててね」

「あ、ああ！待つぞ！父さんはいつまででも待ってるぞ！」

「……………」それ、変だよ？」

とにもかくにも外出の準備をして家の外に出た。

「うーん、いいお天気ねー！めぐちゃん」

「うん！気持ちいいー！」

「いやあ、こんな日は体を動かしたくなるなあ！」

「私、運動苦手……………」

「さ、さあ買い物だ！まずはどこに行くんだ？」

「どこに……………。どこに？」

「めぐちゃん、ショッピングモールが少し歩いたところにあるからお洋服でも見ましようか？お散歩がてらに歩きましょう」

「うんー！」

そして歩いてそのショッピングモールに向かう。

えへへ……。お母さんとお買い物なんてどれくらいぶりだろ？やっぱりいいな、こういうの。

でも、隣が誠二くんだったら手を繋いで歩いて行くんだろ？

「めぐちゃん」

「あつ……」

お母さんがバッグを持っていない左手を差し出した。

「えへへ……」

私は右手に持っていたバッグを左手に持ち替えてお母さんの手を握った。

「大きくなったわね、めぐちゃん。この間まで私を見上げてたくらいなのに。……ごめんね」

「お母さん……。私、立派になったでしょ？」

「ええ、そうね。うふふ」

お母さんはそう言うてにっこり笑った。

「あ……ゴホンッ」

お父さんがわざとらしく後ろで咳払いをした。

「なに？お父さん」

「その……、バッグ重いだろ？持ってあげようか？」

「いいよ、別に。物はそんなに入ってるないし」

「そ、そうか。でも家族なんだからー、遠慮はいらないんだぞ？」

バッグくらい自分で持てるよ……。

「コソコソ……めぐちゃん、お父さんも手を繋ぎたいのよ」

「コソコソ……えーっ、恥ずかしいよー」

お父さんは手荷物を持ってないから、確かにバッグをお父さんに渡せばそうすることも出来た。

「コソコソ……いいじゃないの。親孝行だと思って」

「コソコソ……お母さんがそう言うなら……」

えっとー……。

「お父さん、やっぱりバッグ持ってきてくれる？」

「おっ、おお！いいともいいとも！ほらほら、貸しなさい。
そしてー……。」

「……………」

「……………」

「じ、じゃあ行こう！」

「えっ……！……しゅん……………」

そんなあからさまに落ち込まないでも……。

お父さんはガツクリ肩を落として負のオーラを漂わせていた。

「ほらっ！お父さん、行くよ？」

私は空いた左手を差し出した。

「お……おお……。」

お父さんは恐る恐る私の左手を握った。

「今、お父さんの夢が一つ叶ったよ。」

そんな…手を繋いだくらいで。

……そうか。そういえばこんなことなかったのかな。私が覚えて
いる限りでは。家族三人で手を繋いで街中を歩いたことなんて。

そうなんだ……。多分…私もそう。今までの空白の時間を埋め合
せようとしてるんだ。そう思っしてしてるんじゃないかって、自然なこと
なんだ。

私も小さい時に思い描いてた絵。それがフランスの街角に描かれ
たんだ。そう、寂しかったのは私だけじゃないんだ。

「うふふ…ほら、二人とも行くわよ？」

「うん！」

そして三人で手を繋ぎ方を並べて歩いて行く。

……

……

「ねえ、お父さん、お母さん」

「ん？」

「何かおかしくない？」

「どうしたの？」

「だって……」

私はもうお母さんと身長変わらないし、周りから見れば大人が三
人手を繋いで横に広がって歩いてるんだもん。

「私が小さい子供ならわかるんだけど……。両手握ってたら歩きに
くいし」

絶対周りの人に迷惑だと思っな。よけて行ってくれてるし。

「ねえ、みんなわざわざよけてるよ？迷惑じゃないかな？」

「じゃあ、こうすればいいのよ」

お母さんが前で、私が真ん中、お父さんが後で縦一列並び。

私は右手が前で左手が後。

「……いや、やめようよ」

「うふふ…大人になったわね、めぐちゃん。このまま何も言われな
かったらどうしようかと思ってたわ」

…確信犯か。

「父さんはこのままでもいいぞお！」

「……三人だから邪魔になるんだよ。というわけで、お母さん、行
こう！」

二人なら邪魔にならないよね！

お父さんの手を離してお母さんと二人で歩いて行く。

「あうう…恵い〜」

お父さんが何か言ってたけど気にせずにショッピングモールに向
かって歩いた。

お母さんと話しながらしばらく歩くときれいな大きい建物が見え
てきた。

「あそこ？」

「そうよー。めぐちゃんに似合うお洋服があるといいわねー」

「お母さん選んでね！」

「そうね、久しぶりにめぐちゃんを仕立てるのも楽しみね」

それからその中に入った。フランス語は少しだけ話せるようにな

ったけど、まだ文字が読めない。

「お母さん、まずどこから行くの？」

建物は六階建てで、一階が化粧品と子供服。二階がメンズフロア。三階と四階がレディースで五階が雑貨、六階がレストランになっていた。

「三階から行きましょうか」

「うん！」

「父さんは二階を少し見て回るよ」

そういえばお父さん居たんだっけ。

それからお母さんと三階のフロアへ。ショップの数はどれくらいだろう。二十くらいかな？

「めぐちゃん、そこに寄りましょう」

「うん！」

まず入ったのは全体的にかわいい感じの服がたくさん並んでるお店。

中に入るとすぐにスタッフの人が寄って来て話しかけて来たけど、何を言ってるのかわからなかった。お母さんが話して向こうに行ってしまうだけ。

「お母さん、何て？」

「妹さんのお探しですかっ！めぐちゃん、お母さんそんなに若く見られちゃうのかしら？」

「あ……うん、若いと思うよ。それで？」

「ああ、見るだけですって言ったのよ」

私が妹っていうことは否定しなかったんだね。

それからお母さんはここにこしながら服を選んでいた。

「めぐちゃん、これなんかどうかしら？」

「うーん、ちよつと子供っぽいかな」

「えーっ、そう？このフリフリがかわいいのに」

そのフリフリが子供っぽいんだよ。なんかもっとう、大人っぽいのがいいなあ。

「お母さん、他のところ見に行こうよ」

「ちよつと待つて。ああ、これなんか…。試着してみない？」

「えーっ…」

またお母さんが手に取ったのは似たような服だし…。ピンクのワンピース。もちろん全体的にフリフリフリ…。

「いいからいいからあ。ねっ、めぐちゃん」

「着るだけだよ？」

すごい期待の眼差しを向けられていたので着てみることに。

お母さんがスタッフの人に話して試着室に案内された。

……

うわあー…。

こんなの自分でも見た事ないや。あんまり可愛すぎるよ、これは。ホントに大人が着る服なの？

シャツ。

「お母さん、着てみたけど…」

「きゃーっ！めぐちゃんかわいいわあっ！お人形さんみたいよ！」

むっ…。

「それっ！そりあえずそれにしましょうよ！」

「ほ、本当に!？」

「お花の髪飾りも付けてえ…」

「しょ、小学生じゃないんだから…」

「いいのっ！買いましょ！」

ま、まあお母さんが喜んでるんらしいか。

お母さんが支払いを済ませて次の店に。今度はかつこいい大人の女の人が着るような服が並んでいた。

「私はこんなのがいいなあ」

「まだめぐちゃんには早いんじゃない？」

「そっ、そんなことないよ！もう立派な大人だもん！」

このスラツとしたパンツに薄手のジャケット。そういえば誠二くんがこういう格好よくしてたなあ。

……ん？またお母さんがスタッフの人と何か話してる。

「めぐちゃん」

「なに？」

「これなんかオススメらしいわよ？」

「そうやって渡された服は黒で大きく胸元が開いている服だった。

「めぐちゃんは胸が大きいからすごくよく似合うらしいわよ」

「そうなんだ。でも、ちよつと大胆過ぎじゃないかな？」

「そう？堂々と着こなせがカッコいいわよー？」

「カッコいい…。」

「…着てみる」

「にっつ。」

私がそう言うとお母さんはにっこり笑った。

そして着替えると…。」

「うん！よく似合う！」

「そ、そう？何か羽織ればいいかな…。」

結局その服も買ってまた次の店に。それから行く店ごとに必ず一着は買ってた。

「お母さん、いいの？こんなに買って」

「いいのよ。今まで行けなかった分買い込みましょう」

「今までの埋め合わせのつもり、なのかな？」

「お母さん、私気にしてないよ？今まで寂しかった時もあったけど今は一緒に暮らしてるんだし」

「……………ふふっ、そうね。ちよつと張り切り過ぎちゃったかしら。

「また来ましようね」

「うん！…ところでお父さんは？」

「どこかで休んでるんじゃないかしら？私たちの買い物が増えるにつれてわかってるはずだからね。見に行ってみましょう」

「とりあえずお父さんを探しにメンズフロアに下りた。

「いるかなー？」

しばらくそのフロアでお父さんを探してみる。

・・・
・・・
・・・

探してもいなかった。お母さんの言う通りどこかで休んでるのかな？

「……あつ……。」

これなんか誠二くん似合いそう。

私はふと目についたジャケットの前で立ち止まった。

「お父さんには少し若過ぎじゃないかしら？」

私が眺めていたらお母さんがそう言ってきた。

「お父さんにじゃなくて……」

そこまで言つて口を閉じた。

「……買つ？」

お母さんが軽いため息をつきながら笑つて言った。

「えっ……でも……」

「そのジャケット代はめぐちゃんが働いた時にちょうだいね」

「……うんっ！」

お母さん……。何でもお見通しなのかな。これを誠二くんにとってい
と。

「日本に送ることも出来るみたいよ？」

「……うん。私が出た時に手渡すよ」

「クスッ。きつと喜んでくれるでしょうね」

「うん……」

いつ誠二くんの手渡せるかわからないジャケットが入った紙袋を
持って少しだけぼーっとしていた。

このジャケットを着ている誠二くんを思い浮かべてたんだ。

「めぐちゃん、行きましよう？お父さんは階段のベンチにいるらしいわ」

「あつ、うん」

いつの間に連絡したか分からないほどぼーっとしてたんだ……。

こんな家族で過ごす時間も楽しい。今までなかったし、お母さん大好きだから。

でも…やっぱり一番隣に居て欲しいと思うのは誠二くんなんだ。私はお父さんとお母さんに少し罪悪感を覚えて、お父さんの元に向かった。

「おっ、もう買い物は終わったのか？」

「まだまだよ。ねー、めぐちゃん」

えっ！まだ買うの！？行く先々で買って荷物も両手で持てないくらいなのに。

「はい、あなた」

「むっ……ハイ……」

お母さんが荷物を差し出すとお父さんが渋々それを手にした。

「めぐちゃんも、重いでしょ？」

「うーん……」

さ、さすがに二人分はきついんじゃないかな？

「恵のはいくらでも持ってあげるぞー。ほら、貸しなさい」

「う、うん」

私も荷物をお父さんに渡す。

「ほら、それも」

「…これはいいよ」

誠二くんに渡すジャケット以外を。

「遠慮なんかしなくていいんだぞ？」

「めぐちゃんがいつって言うてるじゃない。それよりお昼にしましよ」

お母さんが私にウインクしながら助け舟を出してくれた。本当にお母さんは私のことをわかってくれてるんだなって思った。

そして六階のレストランで食事を済ませた。お寿司を食べたんだ。握っているのは日本人だった。メニューは日本では見られないものもいくつかあったけど。

「この色も似合うかしら？うーん、ピンクとゴールドも……」

今度は一階の化粧品売り場。お母さんが私の化粧品を選んでは。

「今持つてるだけでいいよー」

「ダメよー。もっとちゃんとしたの持つておかないと。お化粧品も上手になつて、うーんと綺麗になつて、椿くんをびっくりさせちゃいなさいよ」

.....。

「ど、どれがいいかな？」

「今、目についたのはねえ.....」

お母さんがいろいろ選んでくれた。私自身そんなに化粧が得意な方じゃなかったから助かったんだ。スタッフの人にも化粧の仕方を教わつたり、こんな時はこんな色がいい、なんてアドバイスを受けた。もちろんお母さんの通訳ありだけどね。

.....

「勉強になつたよ。お母さん」

「うんっ！」

いくつか化粧品を買い込んで化粧品売り場をあとにした。

また、お父さんが休んでいるという階段のベンチに向かう途中……。「めぐちゃんが小さい時にねえ、ここで洋服を買ったことがあるの」

一階の子供服売り場を通り過ぎている時にお母さんが不意に話し出した。

「へえ。じゃあ私、ここに来るの二回目なんだ？」

「そうね。覚えてないだろうけど。今ではもう一緒に化粧品まで見るようになったものね。早いわぁ。次は嫁入り道具かしらね？椿くんの」

「そ、そんな.....。気が早いよ.....」

「あら、結婚する気満々なのね」

カアアア.....！

「も、もうっ！お母さんの意地悪っ！..」

「あらあら、そんなに怒らなくてもいいじゃない。素敵な人だと思
うわよ?.....そうね.....」

???

「お母さん?」

「ん?ああ、ごめんね。さ、お父さんが待ってるわ」

「あ、うん」

何だろう?..。お母さんは少しだけ悲しそうな、遠くを見る表情を
した。

それからはもうこれ以上荷物が増えたら持てないからと家に帰っ
た。

帰り道には、お父さんが泣きそうなくらいにゼーゼー言いながら
荷物を運んでた。

私は誠二くんに渡すはずのジャケットを大事に抱えて帰った。

「あ、ーっ、父さんはもうダメだ。後は頼むよ」

家に着くなりお父さんは倒れ込んでしまったんだ。両手にたくさ
ん荷物を抱え込んでたから無理もないかな。

「ありがとう。お父さん」

「め、恵...。お父さんをいたわる良い子に育って.....」

目を潤ませて言ってたけど、ここまで荷物を運ばせたことは何と
も思っていないのかな?

後は自分でやるからと、荷物を少しずつ部屋に持って行く。

「ふうっ」

結構大変だったー。お父さんはこんなのを一人で運んで来たんだ

...。きつかっただろうな。

そうだなあ...

「お父さん、マッサージしてあげようか?」

少しでも疲れが取れるかなって思って。気持ちばかりの親孝行か
な。

「いいのか?恵も疲れてるだろう?..」

「いいからいいから」

まずは肩もみから始めて、腕や腰なんかもマッサージしてあげていく。

「恵、どうだ？ジャンとは」

「うん、いい先生だし、教えるのも上手だしうまくやれてるよ」

「そうか、よかった」

「楽団は？」

「近いうちに予定はないよ。まあ、いつ予定が入るかわからないが、しばらくはゆっくり過ごせるだろう」

「そっか」

お父さんとこう話すこともあんまりないな…。

「……恵……まだ、怒ってるか？」

「え？」

「こつちに連れて来たことだよ」

……………。

「ううん。大丈夫」

「ふむ……。正直にいいんだぞ？」

「……怒ってる」

「むっ……そ、そうか……」

「……とは違うかな。確かに日本を離れたことは残念に思ってるよ。でも、お父さんとお母さんと暮らすことが出来てよかったとも思ってる」

本音…かな。でももし、日本に帰る事が出来るなら…私は……ううん、わからないや。

誠二くんに会いたい。だけど家族も大事。結局答えは出ないし、誠二くんを待つことしか出来ないんだ。

「うむ……」

お父さんは困ったような、それで少しだけ照れているような顔をしてた。

「それに、怒ってたらお父さんとしゃべってあげないんだから。マッサージだってしてないし」

「そうか…。そうだな」

そう言って微笑んだお父さんの横顔は、私が小さい時に私を抱きかかえてくれていた時の優しい顔だった。

それから、「ありがとう」とお父さんはソファに腰を落ち着かせた。

「たまには母さんとフルートアンサンブルでもしてみたらどうだ？」
私はその言葉にすぐさま夕飯の支度をしていたお母さんの元に急いだ。後で夕飯の支度を手伝うからと、半ば強引に二階の練習部屋に連れて行った。

「もうっ、困った子ねえ」

そう言いながらも、どことなくうれしそうだったお母さんは、何をしてくれるの？と私を急かした。

何でもいいよと、私は適当に楽譜を取り出して目の前に広げた。

「なら、やりながら今日は私がレッスンしてあげるわ。どれだけ上達したか楽しみだわ」

口元を少しつり上げてニヤリと笑ったお母さんに少し寒気を感じて一気に緊張が高まった。ある意味コンクールのステージより緊張するシチュエーションだった。審査員はお母さん、なんて想像しただけで震えてしまいそう。

「や、優しくしてね？」

お母さんはニコツと微笑むだけだった。顔は笑っているものの私に変な汗をかいてきた。

とりあえず目の前に広げた楽譜の曲を演奏し終える。

「めぐちゃん。なーにー？楽譜通りにするだけじゃないの！もつとこの曲から感じられる作曲者の気持ち表現しないとダメじゃない！それに指使いが遅い！」

ひっ、ひええええ…。

「ブレスの取り方もおかしい！もう一度基本的なことから叩き込まないとダメみたいね。ジャンにも厳しく言っておかないと」

ジャン…ごめんなさい…。

いくつかの曲を演奏してその度にダメだしを受けてしまった。大好きなお母さんだけどちよつと堪えたな。

「そ、そろそろ夕飯の支度しないといけないんじゃない？」

「あら、もうそんな時間？仕方ないわね。また今度見てあげるわ」
も、もうしばらくは遠慮願います！

それからお母さんはまた人が変わったように優しくなて、一緒に夕飯の支度をしたんだ。

そして家族三人で食卓を囲む。

何気ない家族の食卓なんだけど、あまり記憶にない目の前の光景はフランスに来てから当たり前の光景になりつつあった。

違和感はない。周りから見ればは幸せそうな家族に見えると思う。

当然、私は幸せだったんだろう。いつかこうなればと昔から望んでいたカタチだったから。ただ一つを除いて。

家族が一緒の生活。それが当たり前になって嬉しく感じるのと同じに、少しだけ怖くなった。

これから先、誠二くんとの約束を忘れていくんじゃないかって。

人生の目標、希望。いつか一緒になって二人で歩んで行きたい。

そう心に強く誓った自分がすでに過去の自分になっている気がした。

今の居心地が悪くなかったから。

一人

「めぐ、ごめん。オレ、美香と付き合い始めたんだ」

「えっ!?!う、嘘だよな!?!嘘って言つてよ!誠二くんっ!」

「やっぱり近くに居る人がいいからさ。ごめん、さよなら」

「まっ、待つて!行かないでっ!いつまでも隣に居てくれるって言ったじゃない!」

「……離れて行ったのはどっちだよ」

!!!!

ガバツ!

「誠二くんっ!……はあ……ゆ、夢か……よかった……」

ああ……なんて夢見ちゃったんだろ。

……リアル。

実際にありそうな夢なんだもん。

あゝ……汗ぐっしょり。最悪な目覚めだなあ。

今何時……まだまだ早いよ。シャワーでも浴びようかな。汗流さないよ。

……あれ?

「お父さん、早いね。どうしたの?」

いつもはまだ寝てる時間なのにバタバタと家の中を駆け回っていた。

「忘れてたっ!」

「え?」

「来週に予定されていた公演が今週に変更だったんだ!リハーサルもしなきゃならんの!ああああっ!」

しばらく家に居たものだから日付や曜日感覚がなくなってるんだ。でも、お仕事なんだから忘れてちゃダメだよ、お父さん。

「というわけで、一週間くらい家を留守にするから、めぐちゃんよ

ろしくね。何も公演の話しを聞いてなかったお母さんでした」

あつ、お母さん…怒ってる。絶対ものすごく怒ってる。…お父さん、後でひどいんだろうな。

「行ってらっしゃい」

私はにこやかにお父さんとお母さんを見送った。お父さんは半べそだったけど「自業自得だよ」って言ってあげたんだ。

……もう少し寝よう。

さっきのような夢だけは勘弁して欲しいよ。

・

・

・

・

ガバツ！

い、今…何時？

………マズイ。

次に目が覚めた時にはもうお昼過ぎ。

ジャンは？もう来てるはずなんだけど…玄関のカギは閉めたもんな。

ん？

着信あり…。

これだけ言えば怖い映画思い出すよね。あの時だけは携帯捨てようと思ったよ。

いやいやそれより…ジャンから？

ブルブル…。

『あ、もしもし。メグミかい？ちょっと三日ほど遠出しなくちゃならなくなっちゃったんだ。いやあ、急な話で本当にすまない。自分で練習しておいておくれよ』

「あつ…うん。行ってらっしゃい」

プツツ…。

……一人だ。

うーん……一人だな。
何しよう。

もちろん練習はするけど。この前お母さんに怒られたばかりだし。

外に出るのも一人じゃ怖いしな。でもご飯の材料くらいは買いに行かなくちゃ。

……掃除しよう。

とりあえず何もすることがなかったから家の掃除をすることにした。

・
・
・
・
・
・

……終わった。

うん、完璧。ピカピカ。誰も非の打ちどころがないはず。

次は……

お買い物、食材買いに行こう！

そして近くのスーパーにお買い物に行くことにしたんだけど、その道中……

「（お嬢さん。一人？一緒に遊ぼう！）」

急にナイスガイな男の人から声を掛けられた。もちろん流暢なフランス語で言ってる意味が聞き取れない。

「ボ、ボンジュール？」

「（ボンジュール！いいんだね。さあ、行こう）」

「えっ？えっ！？」

急に腕を掴まれて連れて行かれようとしたもんだから私はびっくりしたよ。

「（誰か！助けて！）」

「（えっ！何言ってるの！？）」

「！！！！」

「！！！！」
ざわざわ……。

大声で叫んだから人が周りに集まって来た。
た、助かった。

「……………！！」

さつき声を掛けて来た男の人は半泣きで逃げて行った。よかった。
あ。襲われた時のフランス語テキスト読んでおいて。

「！！？」

「……………？」

「えっ、えーと、わっ、わからない！ノー！ノー！」

周りに集まって来た人たちが何か話しかけてるけどわからない。
きつと、大丈夫？とか聞いてるんだと思うんだけど……。

「ご、ごめんなさいー！！」

どんどん波のように話しかけてくるから少しパニックになって逃げちゃった。助けてくれたのに、ごめんなさい。

なんとなく言葉は聞き取れるようになってきてるんだけど、はつきりとはわからないし、口に出して話せないんだよね。

とにかく危機を脱した私は買い物済ませて家に帰ってきた。

今日は買ってきたパン。それにパスタとスープを作るつもりなんだ。

「あっ……………」

家に着いてポストを見ると一通の封書が入っていた。

これ……………国際郵便だ。じゃあまさか……。

差し出し人を見るとやっぱり誠二くんからの郵便だった！

私は今まであった騒動や料理の支度の手際を考えていた事全てを忘れて、郵便を握りしめて部屋に急いだ。

急いで、でも丁寧に封筒を開ける。その時に少しだけ指先が震えていた事を覚えている。

……………。

中を開けると一枚のプリクラ。それと手紙。

クスツ…頑張ったね。

プリクラは誠二くんが一人で写ってた。あれだけ苦手だったプリクラを一人でなんて、誠二くんなりの気持ちかな。

手紙を開くと、今はもう少し懐かしい誠二くんの字が散りばめられていた。ゆっくりとそれを呼んでいく。

・
・
・
・
・
・

「ああ……誠二くん……」

自然について出た名前。

内容は空港で別れた後の事や私が手紙で聞いたことへの答え。それに近況報告。

誠二くんも最初は何にも手付かずの状態だったらしい。でも、みんなのおかげで立ち直れたって。

よかったな……。でも少し羨ましい。

部活のみんなは元気らしい。パークスには二人、フルートにも二人入部したみたい。梓ちゃんと舞ちゃんも立派にやってるようだね。亜美ちゃんは相変わらず、か。紗耶香ちゃんも元気みたいでよかった。私の写真を一枚取られちゃったんだって。まだまだ送るから心配しなくてもいいよ。

そして、最後に”会いたい”の言葉。

たったそれだけの言葉でも二人は繋がってるんだって思えた。

私は、久しぶりに…泣いた。

今は一人だ…。声を出して泣いた。手紙を握りしめて、プリクラを見て、泣いた。ただただ泣き崩れた。

涙も枯れて落ち着いた頃、外はもう夕焼け空で夕陽が街と家の中を赤く染めていた。

「…何してるかなあ？」

思い描いてみる。誠二くん笑顔。私に見せてくれる照れくさそうな顔。少しだけ怒った顔。前はあんなに近くにいたのに今じゃ遠い。

一人ぼっちだ…。

私は弱くなつたのかな。こんなに寂しさを感じることもなんてなかったのに。

「ご飯の準備しなくちゃ」

このままだと動きたくなくなると思って声に出して言ってみる。

今日は一人分のご飯だけ。誰かのために作るのだったら楽しいのに、自分の分だけだとどうでもよくなつてきちゃうな。

…イヤになっちゃう。

久しぶりに一人になって、自分の周りの人にどれだけ助けられるのかって実感出来る。

ただ居てくれるだけでもいいんだ。それだけで支えられて。人は一人じゃ生きられない、なんてよく言うけど、それは至極当然のことなんだな。

ご飯を作って一人で食べる。

「んっ、我ながらうまく出来た！」

これはぜひ誠二くんにも味わってもらわないとな。

バスタブにもお湯は貯めないでシャワーだけで済ませる。

テレビ見ても内容わからないから早々に自分の部屋へ。

「つままないな…」

日本で一人で居た時は何をしてたんだろう。家のことやって、宿題やって勉強して…。勉強！？

まさか誠二くんに学力追い抜かれるなんて…ないよね。結構差はあったし…。でも少なくとも高校一年間の内容が…。いや、それはそれで誠二くんが頑張ったことで嬉しいんだけど、何か悔しくもあつたりして…。

フランス語の勉強でもしようかな。今度会った時にはフランスの待ちをエスコート出来るくらいにはなっておきたいし。

…なんて、先の事考えてることが少し楽しい。少しだけでも日本に帰りたいな。でも自分のお金なんてないし…。

会えないことを考えるとまた余計に会いたくなる。ないものねだり。

えーい！こんな時は寝るんだ！そうだ！寝ちゃおうっ！よーし！寝るぞー！

メグミー、ダイブ・イン・ベッド！

・

・

・

・

・

小鳥のさえずりが聞こえる…。

「もう朝か…いいかげんに寝よう…」

やっぱりね、あれこれ考えちゃって。楽しい事もそうでないことも。

眠れなかった…。

でもね、もう明るいし今から寝たら昼夜逆転しちゃう。徹夜かなあ…。

うん…そうしよう。

とりあえず顔を洗って、朝ごはんの準備して…っ。

「うゝあゝ…きついなあ。頭ぼーっとする…」

いざベッドから出ようとしたらフラフラした。

ダメだ、食欲ないや。

…誠二くんにもた手紙書かなきゃ。

誠二くんへ…。

手紙ありがとう

「……………はっ！」

ね、寝ちゃってた、いけないいけない。

昨日は寝ようと一生懸命だったのに今度は起きてようと一生懸命だ。

あつ、手紙…。

なんだこれ？

「昨日の？デート楽しかったよ？野菜食べれるようになってびっくり……………」

私はいったい何を書いたの？

これ…夢の話しか、多分。字が歪んでるし。

重症だなー、私。

気を取り直して書かなきゃ。

・

・

・

・

・

よし！書いた！

あとは封筒に写真と一緒に入れて…。

…ね、寝間着姿の写真とか喜ぶかな…。

寝る前にお風呂済ませた後に撮ろう。

えへへ…。

さーて！フルート練習しよう！

その後、ジャンが帰って来るまで一人の時間を過ごした。ジャンが帰って来てから昼間は寂しくなかったけど、夜が来るとどつと疲れと寂しさが押し寄せて来た。

誠二くんからの手紙を何度も読み返す夜だった。消えた思い出なんて何一つなかった。一人の夜には誠二くんを思い浮かべて過ごす。

お父さんとお母さんが帰って来て、久しぶりの外食だった。仕事の話しを聞かされていた。私がそれに携わることになるのもそう遠くないだろう。

フランスに来て初めて一人で過ごした数日は寂しくて…でも思い出に浸れる時間でもあったんだ。

そして、季節は流れた。

時は流れ

フランスの気候は一年を通して温度差が激しくなく過ごしやすい。季節も日本と同じように流れていく。

夏

私の生活はそう大きく変わらなかった。

飴はよく降るけど、日本の梅雨のようにジメジメとする時はあまりなくて、雨がイヤだなあなんて思わなかった。

変わった事といえば髪を切ったんだ。腰の辺りまで伸ばしていたストレートヘアを肩くらいにまで短くした。そして髪色も明るくしたんだ。

少し大人っぽくなったねってお母さんに言われた。そうするように勧めたのがお母さんだけけど。

フランス語もだいぶ話せるようになってきたよ。ジャンがレッスンの合間に少しずつ教えてくれてる。その代わりに私は日本の事を教えてあげてる。ジャンが日本に居たのはずいぶん前のことみたいだから今の日本のことを話してるんだ。ジャンはとても興味深そうに聞いていた。

誠二くんとの手紙のやり取りも数回。今のところ月に一、二通やり取りをしている。

吹奏楽コンクールは残念ながら金賞のみの結果だったみたい。でも、それでも十分な勲章だよ。みんな頑張ったんだね。

毎日はジャンによるレッスン、家事の繰り返し。学校に通うわけでもなかったから友達と呼べる人もいなかった。

ジャン以外に知り合った人といえば、お父さんがたまに連れて来る同じ楽団の人だけだった。

若い人も居たけれど、それでも私とは年が離れてたし、言葉がある程度わかるようになったとはいえコミュニケーションがよく取れる程でもなかった。

なんとなくつまらない毎日を過ごしていたような気がする。

そして、季節が移り変わり変わり秋にさしかかったくらい、ジャンからソロコンクールの話しを受けた。

もちろんフルートの勉強で来てるわけで、そういうのには積極的に参加をしなければならぬと思ってた。

それと同時に誠二くんからの体育祭や文化祭の内容の手紙が来て、日本を思い出して懐かしく思う時もあった。

体育祭はもうメチャクチャで、でもそれなりに楽しい思い出が作れたみたい。なんでも紗耶香ちゃんが”純白の女王”なんて呼ばれるようになったとか。

誠二くんはひどい目に遭ったらしいけど、私はやっぱりその場に居たかったという気持ちは否めなかった。

そして、ソロコンクールは結果を言えば三位。自分でも驚く程の結果だった。

やっぱりコンクールのレベルは高く、会場に居るだけでも気押される程だった。

コンクールに出ることを誠二くん知らせてたらお守りが送られて来たんだ。学業祈願なんて、真面目に送ってくれたのは誠二くんらしい。

応援してくれてる。

気持ちが伝わってきて嬉しかった。

コンクール当日、家を出てから会場が出るまでそのお守りを握りしめていたことを覚えてる。誠二くんの気持ちがここにあるんだ、そう思うだけでも気持ちが楽になる気がした。

お父さんもお母さんもジャンも、コンクールの結果には大喜びしてくれた。その日は盛大にお祝いしてくれたんだ。

ここまでレッスンしてくれたジャンに感謝。そして誠二くんにも、それからジャンのレッスンは続いた。コンクールでの反省をしてさらなる上を目指す。

でも、でもただ、やっぱり心にぽっかり空いている穴は埋まらな

かった。どれだけいい結果を残せたとしても、誠二くんに祝ってもらいたい、その思いがあった。

コンクールで結果を残せた事は自分の自信につながった。だけど。

それと同時に自分の中に埋められない気持ちがあることがはつきりわかった。

私はやっぱり誠二くんがそばに居てくれないとダメなんだ。もちろん会いたい気持ちはいつでもあった。でも、会いたいじゃなくてそばに居たい。いつでもどんな喜びも悲しみも誠二くんと分かち合いたい。その気持ちが大きくなってきていた。

皮肉にも、コンクールの結果は私これからも頑張ろうという気持ちよりも、日本に帰りたい、その気持ちを甦らせるものになってしまったんだ。

日が経つにつれて、どんどんその気持ちが大きくなっていった。

誠二くんが私の中でどれ程大きい存在だったか…。

その気持ちが膨らみ続けて、自分の中でどうしようもないわだかまりが消えぬ毎日を通り越す中、季節は冬を迎えた。

フランスは、世界はクリスマススムードになり、私も誠二くんへのプレゼントを用意していた。

いつか話していた手編みの手袋なんだ。一緒に居た証の手袋。毎年作ってプレゼントするんだ。

今年も来年もずっとずっと先まで。

クリスマス そして…

「メグミ、ここのところ元気がないじゃないか。どうしたんだい？
コンクールも良い結果が残せたんだし。次は優勝出来るさ」

コンクールが終わり冬になって、時折窓の外は雪化粧で街が白く染められる時もあった。

フルートを持つ手がかじかみ震えていた。もう寒い季節、ジャンがもどかしさを吐き出すように私に尋ねてきた。

「うっん、そんなんじゃないんだ」

寒い季節ほど、隣に誰かが居て欲しいなんて思う時はない。もちろん誰でもいいわけじゃない。

私は手のひらに、ハーっつと息を吹きかけながら答えた。

「うーん…力になれる事なら協力するよ。まあ、僕に出来ることなんて限られてるけどさ」

「…じゃあ…日本に連れてって…」

「え？なんだい？」

「…クスツ…なーんでもない！ねえ、ジャンは誰かにクリスマスプレゼントあげるの？

力になれるわけ…ないよね。

「ははっ、何を言ってるんだい？クリスマスはサンタクロースからプレゼントをもらう日じゃないか。今年も楽しみだ」

「……………え？」

えーと…よくわからなかったな。聞き間違いかな？

「えーと…ジャン何歳だっけ？」

「今年で四十六歳だよ？」

うん、だよな。前に聞いたことある。

「えーと、それで…サンタクロースから…プレゼント…もらってる…の？」

私は一言一言を自分で確認しながら尋ねた。

「はーっはっはっ！何を不思議そうに聞いてくるんだい！冗談だよ、冗談」

「じよっ……！……そ、そうだよね！まさか本気にしてるわけないよ。冗談に付き合っただけだし」

何か負けた気がしたからつい……ね。

「ククツ……まあそれはいいとしてメグミの方こそどうなんだい？」

意地悪そうに含み笑いをしてジャンが聞き返してきた。

「私？私は誠二くんを送るよ、手袋。今作つてるところなんだ」

「お手製か。それは喜ぶだろう」

「まあ、去年も手袋だったんだけどね。毎年あげるんだ！。贈った手袋の数だけ二人が歩んできた証なんだ」

「なるほど……。さしずめ、その誠二くんに会いたくてたまらないから元気がない……と……」

うわぁ……。

「ど、どうしてわかったの？」

「どこか遠い目をしていたからね。……そうだ。メグミ、この曲をやってみてくれないかい？」

ジャンはそう言っただけで楽譜を取り出した。

一通り目を通したけれど初見でも吹けそうな曲だった。

「この曲はしってるかい？」

「うっん。初見だけど……やってみる」

私は楽譜をなぞるように演奏していった。曲の感じは譜面を見るだけでなんとなくわかった。どこかもの悲しい、でも最後はまるで別の曲になったかと思うくらいに変化する曲だった。

演奏し終わるとジャンは拍手を浴びせた。

「何ていう曲？曲名が書いてないけど……」

そう、まず疑問に感じていたのは曲名が書かれていなかったこと。

そしてフルート一本で作られていたこと。

「そうだね、メグミならどうい曲名を想像する？」

「え？」

…。
そうだな…最初は静かな悲しい曲だけど、最後は明るく華やかに
…。
「難しいな」

「うん、ゆっくり考えてみるといいよ。実はその曲は発表されてないんだ。だからメグミが曲名をつけるんだよ」

「ふーん…。嫌いじゃないけどな、この曲。作曲者は？」

「さあ…そのうち会えるかもしれないよ」

ジャンはそう軽く微笑んで楽譜を棚にしまった。私に楽譜をプレゼントするという。それがどんな意味なのかその時はわからなかった。

結局、その時にしまった楽譜はそのまましばらく開く時はなかった。

昼間はジャンによるレッスン、夜は手袋を編む時間に使っていた。クリスマスにきちんと届くように、早めに作り上げて誠二くんに送った。もちろん手紙も添えてね。

覚えてるかなあ、手袋のこと。七年過ぎれば一週間日替わりで使えるね。

クリスマス。

今日はいつもより遅めの起床。最近の天気では珍しく快晴だった。雪は降りそうにないな。

「めぐちゃーん、荷物が届いてるわよー」

あっ！きつと誠二くんだ！

お母さんが一階から叫んだ。

呼ばれて一階に下りて行くと、A4サイズくらいの荷物が届いていた。

差出人は…やっぱり誠二くん！

「何かしらね？」

お母さんが興味深そうに聞いてくる。

「後で見せてあげる！」

私は荷物を受け取って自分の部屋に急いだ。少しだけ一人で浸りたかったんだ。

自分の部屋に入るなり丁寧に包装を開けた。

中には小さな箱と一本のビデオテープが入っていた。

「ビデオテープ？」

思わず疑問を口にしてしまった。

ビデオテープの中を見るより先に小さな箱に目を向ける。箱の中身はシルバーのかわいいネックレスだった。

「うふふ…。これつけた私を想像して選んでくれたのかなあ？」

さっそくつけて鏡で見してみる。チェーンの長さは短めにしてあって少し胸元が開いた服なら見える。

少しの間、ネックレスをつけた自分に見惚れていたんだ。

それからビデオテープを手に取った。

何が映っているのか少し楽しみにしながらビデオデッキに入れて再生ボタンを押す。

そして画面に目を向けると……。

ザーーーーー……。

「……………」

しばらくそのまま眺めていた。

ザーーーーー……。

何も変わらない…。うん、おかしいよね、これ。

試しに一度止めて巻き戻しを試してみる。

キュルルルル……。

長い…。

ははっ、誠二くんってば最初に戻してなかったんだな。誠二くんも少しおっちょこちょいだもんね。

巻き戻しが終わってから改めて再生ボタンを押した。

そして、画面に映っていたのは…。

…ん？なにこれ？…部屋？何か見覚えがある…。

「これって……もしかして……」

見覚えがある部屋は懐かしくて……私もそこに居たことがある。間違いはない。誠二くんの部屋だ。だとしたら……。

「ちゃんと撮れてるかな……？」

誠二くん……！

目の前に飛び込んできたのは誠二くんだった。画面を通してだけ確かに誠二くんだった。

『えーっと……その……めぐ、久しぶり！……って、やっぱり恥ずかしいな……』

右手を上げて「久しぶり」って言った後、頭を恥ずかしそうにかいている誠二くんがかわいかった。

「久しぶりっ」

私も合わせて返事をする。ちよつとだけ、誠二くと話しているみたいだった。

『なんか、ちよつと変わったことしよつかなくて思ってた。ビデオレターってやつ、かな』

まだ少し照れてる。私も照れちゃうな。動いてる誠二くんを見るのはいつ以来なんだろう。

『元気、してるか？』

「クスッ……元気だよ」

『もう日本語忘れたなんて言うなよ？』

「あははっ！さすがにそれはないよーっ！」

『オレのことも……』

「それは、もつとありえないかな……」

『なーんて、冗談だよ』

「むむっ、こしゃくな」

『もうプレゼントつけてくれたかな？ネックレスは前もあげたから最初は違つのにしよつと思ってたんだけど、目についた時に絶対めぐに似合うなってそれにしたんだ』

「ばっちり〜！さすが誠二くんだね！」

……楽しかった。

だんだん本当に話してるみたいに思えてきて。

『めぐは手袋送ってくれたかな？ちゃんと前にもらったのも大事に使ってるよ』

「覚えててくれてたんだ」

『コンクール、すごいね。紗耶香も奈美先生もすごく喜んでたぞ』
「ふふっ、ありがとう」

『嬉しいんだけど……めぐがさらに遠いところに行っちゃったみたいで少し寂しいな』

「誠二くん……」

『あっ、やっぱり今のなし！めぐが頑張った成果だ！よくやったぞ！』
「うん……」

そっか…そんな事思わせてたんだ。ごめんね…。

『そうそう体育祭ひどかつたんだよ、紗耶香のやつがさ』

この前の手紙に書いてたことか。

『みんなの目の前でボコボコにしゃがってさ…。…まあ、オレに非がないわけでもないんだけど』

「そっだよなー」

『でもわざとじゃないんだしさっ！さすがにあの時は全身血の気がひいて殺されると思ったね』

やっぱり、雰囲気伝わって来る。手紙じゃなんとなくしかわからなかったことも今ならわかる。身振り手振りや声のトーンで。

会って、話したい…！

『文化祭の吹奏楽部の公演も、後輩のみんな頑張ってたて安心したよ。梓ちゃんと舞ちゃんも成長したぞ』

「なんたって私の教え子だからねっ！」

『なんだかんだで今年も楽しかったんだ』

「そっか…」

『…だけども』

「え？」

『やっぱりめぐが居ないと心の底から楽しめないんだ。いつも、ここにめぐが居たらな……なんて思うよ』

「あっ……」

『オレはめぐと比べたらずいぶん楽なんだと思う。みんなに助けられてさ……。一人じゃない』

「……………」

『それでも、やっぱりめぐがいないとダメなんだよ。会いたくてたまらないよ』

私も……。

『めぐ、会いたいよ……うっ……うっ……うっ……』

「せ、誠二くん……!」

誠二くんが涙を流した。つられて出たものなのか、私も涙が溢れてくる。

『……ははっ、ゴメンゴメン。……でも……会いたいなあ……』

「私も……!私も会いたい!」

『また泣いちゃいそうだからこの辺で……。たまにはこういうのもいいだろ?また送るよ』

「まっ、待って!消さないで!」

『じゃあまたな、めぐ。大好きだよ』

プツ……ザーーーー……。。

「あっ………」

思わずテレビ画面に向かって手を伸ばしていた。画面の中の誠二くんにすぎるように。

「メグミ!。入るよ!」

えっ!?!?

不意に声がかかり部屋のドアが開かれた。

「ジャン……」

「メリークリスマス!メグミ!……おっと……タイミングが悪かったかな?」

「えっ、あっ、グスンッ……ううん。大丈夫だよ」

「泣いてるのかい？」

「……ちよつとね」

「どうしたんだい？」

「誠二くんがね、ビデオレターを送ってきてくれたの。それ見てたら泣けてきちゃって」

「メグミの自慢のボーイフレンドか。よかつたら僕にも見せてくれないかい？」

「……いいよ。紹介するって言ったしね」

それからビデオテープを巻き戻してジャンと一緒に眺める。

「……ちゃんと撮れてるかな？」

画面に誠二くんが映った。

「この人が誠二くん。私の大好きな人」

「うん、なかなかハンサムじゃないか」

「でしょ？実際はもつとかつこいいんだよ」

「ほう……」

それからまたしばらく眺める。

『そうそう、体育祭ひどかつたんだよ。紗耶香のやつがさ』

「紗耶香ちゃんっていうのは私の親友なの。誠二くんと同じで私を守ってくれたんだ」

「誠二くんと仲が悪いのかい？」

「え？ああ、違うよ。なんていうのかな、コミュニケーションの取り方が少し激しいだけだよ」

うん、少しだけだよね？

『梓ちゃんと舞ちゃんも成長したぞ』

「私の後輩の子たち。二人とも全くの最初から私が教えててね。フルートの上級生が私しかいなかったから私が抜けた後が少し心配だったんだ」

「メグミが教えてたのなら大丈夫だろう」

「……だといいけどね」

ジャンと話しながらも私はずっと画面だけを見ていた。

『なんだかんだで今年も楽しかったんだ。……………だけども…』

『やっぱりめぐが居ないと心の底から楽しめないんだ。いつも、ここにめぐが居たらな……………なんて思うよ』

「……………」

『めぐ、会いたいよ……………うっ……………うっ……………』

ツ……………。

私はずっと膝を抱えて見ていた。また涙が溢れてくる。

『ははっ、ゴメンゴメン』

私も、今さらだけどゴメンね。誠二くん。

『じゃあまたね。大好きだよ』

プツ……………ザ……………。

「……………これでおしまい」

「いい人そうだ。まさに相思相愛なんだね」

「少しだけ不安だったけど、今を見て気持ちは嘘じゃないってわかるんだ」

「会いたいかい？」

「それはもうすごく。今すぐにでも会って抱き締めたい。」私も大好きだよ”って言いたい」

「そうか」

「でも、待つしかないんだ。誠二くんが頑張ってくれてる。誠二くんを信じて待つことしか……………」

「……………そうかな？」

「え？」

「メグミは何かしたのかい？一緒に居れるように」

「私……………」

私は……………ただ、お父さんとお母さんに言われるままに……………。厳しいから絶対なんだって……………。でも、家族を選んだんだ。私は自分で決めたんだ。

今は？

「こんなにも帰りたいと思ってる。思ってるだけ……なんだ。」

「メグミはどうしてここに居るんだい？」

「それは……音楽の勉強をするためだし、家族が居るから」

「メグミは、音楽の勉強を続けていつてどうするんだい？ いや、どうなりたいんだい？」

「……………」

私はその質問に答えることが出来なかった。フランスに来たのも音楽を頑張っつていこうっつて思っつてたからじゃない。家族が居るからそれだけだった。

そう、私はあの時、誠二くんより家族を選んだんだ。

「ここには音楽家になりたいと思っつてる人がたくさんいる。その中でメグミは三位になったんだ。すごい事じゃないか。続けて行けばきつとご両親のように活躍出来るだろう」

「でも、私は……」

私はそこで言葉を詰まらせた。失礼だと思っつたから。先のコンクールで私より一生懸命頑張っつて来た人なんてたくさんいたはずだから。

「そうになりたいとは思わない……かい？」

ジャンのその言葉に少し驚いた。私はジャンが私が立派に成長することを望んでいると思っつていたから。

「コクリ……」

私は頷きだけで返事をした。その後のジャンの反応が少し怖かったから。

「メグミ……」

少し間が空いてジャンが静かに話し出す。

「僕は本人が望まないのにやれという強要はしない。メグミがここで音楽を続けていこうという気があるのなら全力でサポートするけどね」

「音楽は……好き」

「……うん」

「だけど、今はそれ以上に誠二くんのそばに居たい。誠二くんは私の全てだから。誠二くんがそばに居れば何でも頑張れると思う」

「何でも、か……………なるほど、わかったよ」

スッ…。

「ジャン？」

ジャンは立ち上がりコートを羽織った。

「実はメグミのレッスンは一年契約でしているんだ。僕はそこまでしようと思うよ。だから、三月までだね。それまでは僕が持っているものを全て教えよう。少し用事を思い出したから今日は失礼するよ」

「あつ……………ジャン……………」

「あとはメグミ、キミ自身が出来ることをやるんだ」

「私が…」

「普通に見ればメグミは恵まれた環境にいる。だけど、僕はメグミの気持ちを否定したりはしないよ。きっと僕は音楽家の先生としては失格なんだろうね」

「そんな…！」

「おっと、ここまでだ。また明日に」

そう断ち切ってジャンは部屋を出て行った。

私に出来ること……………か。

待つ事だけだった。今までは。そうじゃない、これからはそうじゃないんだよね。

でも、ただ日本に帰りたいたいって言ったところですね受け入れてもらえるはずがない。それもまた事実なんだ。

一体どうすれば……………。

しばらく考えてみたけれど何も思いつかないまま、私はまたビデオを再生していた。

ただ画面の中の誠二くんを眺めて時間は過ぎていった。

翌日からジャンは今までと変わらずにレッスンを続けてくれた。

クリスマスのことには触れずいつも通りに。それが良かったのはわからないけれど、私も変わらずに過ごしていた。

変わったのは年が明けてから数日経ったとき。

未だにお父さんとお母さんに自分の気持ちを話せないでいた私は、フルートの練習をしていた。

ある日の午後だった。

ジャンが来れないとのことだったので一人で練習をしていたんだ。その時にふと、ジャンからもらった無題の曲の楽譜のことを思い出した。

フルートだけで作られた曲。

なんとなくだけれど、その日はその曲をやりたくなった。始めと終わりで曲調が全然違う曲。

タイトルを…つけると言われていたんだっけ。その事を考えながら演奏していたんだ。

その時、部屋のドアが開いた。

「めぐちゃん、お隣さんからお菓子ですって」

「あっ、お母さん。うわぁ、マドレーヌか。おいしそう」

「今の曲…」

「ああ、今の？ジャンから楽譜もらったんだよ。良い曲なんだけどタイトルがついてないんだって。私につけるって」

「その曲の名前は”転生”…よ」

「え？お母さん知ってるの？発表されてないって言ってたけど…」
お母さんは微笑んで答えた。でもその微笑みは少し寂しそうだった。

「その曲を作った人はね、昔、愛し合ってる人がいて、ある事情で離れなくちゃならなくなったの」

お母さんは懐かしむように話していく。

「国を離れて、遠いところからお互いを想っていたわ。でも長い時間経つうちに連絡も取れなくなってしまったの」

「……寂しいね」

「そうね。でもその後、その国で出会った同じ故郷の人と結ばれて幸せになったのよ。その時の心情を書いた曲よ」

「だから、”転生”……」

「そう、気持ちの生まれ変わりね」

「でも、やっぱり寂しいよ」

「めぐちゃん……」

「だってお互い愛し合ってたんでしょ？私はそんなのイヤだな。なんとなく私と誠二くんに似てるけど、私は気持ちが変わったりしないよ」

「そうよね……」

お母さんはまた寂しい顔をした。そしてまた口を開いた。

「でも、幸せになったのよ？」

「本当に？その人にとって気持ちの生まれ変わりが幸せだったの？」

私は納得出来なかった。つい、自分の立場に置き換えてしまっていたから。少しだけムキになって話していた。

「そうとは言っていないわ。ただ、少なくとも今は幸せよ。だって、そのおかげでめぐちゃんって子を授かったんだもの」

……………

「……え？今、なんて？」

お母さんはそれにまた微笑みだけで答えた。

私は頭の中を整理した。今の言葉の意味を。

「じゃあ……今の話して……」

「冷たい女だって思うかしら？」

「えっ……あう……」

「クスクス……少し意地悪だったかしら。そう、その曲を書いたのはお母さんよ。どうしてジャンがそれを持っていたのかはわからないけどね」

私は驚きを隠せなかった。お母さんも私と同じ体験をしていたんだ。

「その曲はね、お父さんと結婚する少し前に書いたものなのよ。悲

しい別れからも幸せになりましたっていうね。そういえばジャンに話したことがあったかしら」

「そうなんだ…」

「今でも忘れてないわよ？どこで何してるかなんてわからないけれど、元気でやってくれてたらいいわねえ」

お母さんが遠い目をして話す。

「会いたいと思う？」

「そうね、会って謝りたいわ。私も彼を置いて行った方だから」

「お、お母さん……私は……」

そこまで出かかっている言葉が詰まる。今が話すチャンスなんだってわかってるのに。

「どんなに思い通じ合っていたとしても、理想と現実が違うものよ」

「あっ……」

私が何を言おうとしているのかわかっているかのように、厳しい目でお母さんは言った。

「それでも人は、理想を追いかけるのよね……」

「えっ？」

今度は優しい顔で、ため息混じりにそう言った。

「昔話しはこれでおしまい。めぐちゃん、お父さんが許してくれるかどうかね」

「おかあ…さん？」

「めぐちゃんが自分で決めてちゃんと頑張れるのなら、お母さんは応援しようと思うわ」

「……ありがとう」

そしてその翌日。

私はお父さんに思いを伝えた。

あなたのそばですっと

三月一日。

よく晴れた空が広がっていた。

今日は母校、柳ヶ浦高校の卒業式。

今、私は日本に居る。

そして、誠二くんの帰りを待っていた。

そうだ、まずはあの時のことを話さないかね。

お母さんが応援してくれると言ってくれた翌日、私はお父さんに日本に帰って誠二くんの近くで暮らしたい事を伝えた。

もちろん私は一人娘だったし、猛反対されたんだ。

お母さんは私の味方をしてくれて、「めぐちゃんの好きなようにさせましようよ」なんて言ってくれた。

理由は、やっぱり昔に自分が悲しい思いをしたことと、学校に通っていればもう卒業なんだから、親の都合には合わせないことだつて。

その反面、しっかりと自立してやれということだった。自立の話しになって「音楽は辞めて働くのか？」と聞かれた。

そのつもりだし、そうするしかないと思ってた。でも働くことがどんなに大変なことなのかは想像も出来なかった。

ただ、やるしかない。誠二くんのそばに居れるなら。それだけだった。

そんな時、全く予想不可能なことが起きたんだ。そして、それを起こしたのはジャン。

お父さんには「考えが甘い！」と何度も言われ、「音楽を辞めることは許さない」とも言われた。

私も抵抗していた。「やってみなくちゃわからない！」それしか言えなかったけど。

そんな言い争いをしていた時、ジャンが現れた。そして、一つの封筒を渡されたんだ。

ジャンに一年契約でレッスンを打ち切ると言われて、私は愛想をつかされたとばかり思ってた。でもそれは、大きな間違いだったんだ。

ジャンがくれた封筒の中身は紹介状だった。日本のある交響楽団の理事へ宛てていた。

ジャンは「昔、個人的に貸しがあつてね」と、意地悪そうに笑いながら話した。その楽団に入れるように手筈を整えているということだった。

「メグミは立派に成長したよ。きっとそこでもやっつけていけるだろう。遅くなつたが僕からのクリスマスプレゼントだ」

ジャンからの最高のプレゼントだった。

結局、それが引き金となり三対一でお父さんが渋々折れた。

お父さんは「やはりこうなつたか…」と、ため息を吐きながら呟いた。

そして渡されたものが一つ。見覚えがある鍵。日本で住んでいた家の鍵だ。

「このために残しておいたわけじゃないからな」と、恥ずかしそうに言つたお父さんが少しかわいかった。日本には何も残さないと聞いていたから少し驚いたけれど。

お母さんを見るとウインクでガッツポーズだ。今までの緊張感が幻のように消えてしまった。

ジャンはただ誠二くんのそばに居れるように紹介状を書いてくれたわけではなく、私の音楽活動のためにも精神的にそちらの方がいいと判断したからのようだ。私のさらなる飛躍のためにも。

ジャンには感謝の気持ちでいっぱいだった。

世の中には素敵な出会いがたくさんあるっていうことを身に染みて感じていた。

レッスンは予定通り三月までやる予定だったんだけど、私のわが

ままで卒業式までには帰りたいと話した。ジャンは笑ってその申し出を受け入れてくれた。

フランスを発つ数日前に誠二くんからの手紙が届いた。就職が決まったと報告の手紙だった。私の街と反対側の街、黒岩町にある楽器店のスタッフらしい。

一応音楽関係の仕事だった。私のことを考えて……と、淡い期待をしていた。あとで聞くと、その通りだったことが誠二くんらしい。

フランスに名残惜しさを感じて空港に立つ。

出発前に誠二くんに渡せとお父さんから手紙を渡された。必ず渡せと念を押された。少しだけ内容が気になって怖かったな。

「お父さん、お母さん。恵はきつと立派な大人になってみせます。娘の最大のわがままを許してくれて、ありがとう」

二人とも優しい笑顔で返してくれた。

「ジャンには感謝してもし尽くせません。本当にお世話になりました。ジャンから教わったことは全て私の糧となりました。また、会いに来ます」

ジャンは以外と涙脆かった。泣きながら「メグミ、メグミ」と抱き締めてきたんだ。私も感極まって涙が溢れた。

出発の時間までフランスでの思い出を四人で話していた。次から次に話しが出て来て、話題は尽きることがなかった。

あつという間に出発の時間が来て搭乗口に向かう。

「辛くなったらいつでも帰ってらっしゃい」

その言葉がとても心強く感じた。私には二つの故郷が出来たんだ。今、私は愛する人がいる一つの故郷へ向かおうとしている。

自分で幸せを掴み取るんだ。

そう心に強く思い、私はフランスを発った。

そして今。

一年前まで何度か通ったことのある道を歩いている。

誠二くんの通学路だ。

何も連絡はしてなかった。驚かせてあげようと思っていたから。きつとびっくりするんだらうな。

誠二くんが一人で帰って来るかわからない。卒業式だもん、寄り道だっしてしてくるかもしれない。でもなんとなくだけど、誠二くんはこの道を一人で真つすぐ帰って来る。そんな気がしていたんだ。

その時間に合わせて、まずは誠二くんの家に向かった。一步一步を懐かしく思つて。日本の地を歩いていることを実感しながら。軒並み並ぶ瓦の屋根が日本を思わせる。

そして誠二くんの家を一目見て、そこから柳ヶ浦高校への道を歩き出した。

その間にも、この道で話したことなんか頭の中に甦ってくる。少しずつ、制服を着て二人で並んで歩いていた頃の私に戻ってきていた。

そのまま少し歩いて、公園が目止まった。何度か誠二くんと寄り道したことがある公園。

何かに引き寄せられるかのようになり、自然に私の足はそこに向かって歩き出していた。

私たちはやっぱり繋がってるんだ。

そう…自惚れてしまいそうだったな…。

私はついにたどり着いた。

愛する人の元に。

時間を考えれば公園が唯一の寄り道だったんだらう。

卒業証書が入った筒を傍らに抱え、公園で青く澄んだ空を見上げる誠二くんがいた。

一瞬、頭の中が真っ白になってその場にぼーっと立ち尽くしていたんだ。

ずっと会いたかった。

そう思ったことはもう数え切れないほど。

私は笑っていた。

多分、笑っていたんだ。

「んー……っ!!やるぞー……っ!!」

両手を大きく広げ、大空に向かって誠二くんが叫んだ。

それをどんな意味でやったのかは考えなくてもわかったんだ。あのビデオレターを見れば誠二くんの気持ちはわかるから。

「ふふふ……人が見てたらどうするの？」

自然に話すように言葉が出ていた。昔に戻ったように、自然に話していた。

誠二くんは不意にかかった声に驚いてこちらを見た。

そして、一年ぶりに二人の目が合ったんだ。

「あっ……」

「卒業、おめでとう。誠二くん」

…長かった。

「少し、痩せたんじゃない？」

やっと話せた。

「……会いたかったよ」

「めぐっ!!」

「えへへ……。ただいま」

誠二くんは目を丸くして驚いた顔をしたあと、荷物は全て投げ出してこちらに向かって駆け出していた。

誠二くんが駆け寄ってくる。だけど、その一瞬の時間がとても長く感じた。

今はもう、手を伸ばせば届く距離。

「めぐっ!本当にめぐなんだな!？」

「ひどいなあ。もう私の顔忘れたの？」

誠二くんを抱き締められる。ずっと恋しかったこのめぐもり。やっぱり暖かい。

「めぐだっ!間違いなくめぐだ!」

「あっ……。そうだよ、誠二くんの彼女だよ」

私の顔を確かめたあと、もう一度強く抱き締めた。

「めぐ……」

「誠二くん……」

「そしてもう一度……」。

「会いたかった。めぐを思わない日なんてなかった。何をすることも、めぐが居ないと何か足りないんだ」

「うん……」

「また会えた。」

「当たり前だった日常を何度も夢見てた。」

「私も会いたかった。誠二くんと同じだよ。最初は何も出来なかった。誠二くんのが浮かんで……。誠二くんがいないとダメだったの」

「オレ……不安だった。また会えるのか。本当に会えるのか」

「私も……！」

「お互いに抱き締める力が強まる。」

「めぐ、いつまでここに？」

「……そっか。また行っちゃうって思ってるんだ。そんなに不安にならなくていいんだよ。」

「えへへ……。私、誠二くんに何て言った？」

「え？何て？卒業おめでとう？」

「うーん……。そのあと……！」

「痩せ……。ただいま？」

「そっ、ただいま！帰って来たの！」

「わかるかなあ？」

「え？……うん、帰って来たからここにいるんだよな？……え？」

「あははっ！わけわからないって顔してるね」

「え？……え？またフランスに戻るんだろ？」

「誠二くんは……」。

「……誠二くんは、行って欲しくない？」

「オレは……もうめぐと離れたくない。やっと会えたんだ。そばに」

居て欲しい」

……ふふ……。

「えへっ……じゃあそうする！」

「……………ふえ？」

「私ね、頑張ってたつもりだよ。フルートの先生も優しくて、向こうに着いたばかりの時もすごく親切にしてくれた。お父さんとお母さんも家に居る時間は長くて、今まで一人だった分まで十分に甘えられた。でも、でもね……私には誠二くんが居ないとダメだったの。だから、お父さんとお母さんに話して帰って来たんだ。けどね、何となくこうなることはわかってたみたいなんだ。日本を離れる時、何も残してないように聞いてたんだけど、家は残してあったんだ。もし、私が帰って来た時のために」

「でも……めぐの将来が……」

「私はお父さんやお母さんのように有名になることは望んでないよ。それよりも誠二くんのそばに居たいんだ。ただ、楽団には所属するんだけどね。活動は国内だけらしいから長く家を空けることはないよ」

「じゃあ、音楽は……」

「続けて行くよ！日本で」

「よかったあ。めぐから音楽取ったら天然しか残らないからな」

「ひどおい！そんなことないもん！」

「ははっ、冗談だよ」

「もうっ。……ふふふっ、あははっ！」

また笑い合えた。戻って来たんだ。

誠二くんのところに。

「でもさ、よく許してくれたなあ」

「実はね、お母さんが味方になってくれたんだ」

「え？そうなの？」

「昔、私たちと同じ経験をしていたみたいだね。私と誠二くんみたいな境遇で離れ離れになって、そのうち連絡も取れなくなって……」。

今はお父さんと出会って幸せになってるけど、その時はすごく後悔したんだって。今だから笑って話せるって話してくれたけど。だから…」

「そうだったんだ……」

「今までビツクリさせたくて内緒にしてたんだ。ゴメンね？あつ、そうだ。これ、お父さんから誠二くんへの手紙」

「手紙？」

「忘れないうちに渡しておかないとね。」

「うん。まあ、なんとなく中身は想像出来るけど…」

「お父さんのことだからなあ。きつと余計な事いろいろ書いてるんだろうな。」

「あ、あとで読もうかな」

「うん、そうして。内容は気にしないでいいからね」

「あ、ああ。そう、オレさ、手紙にも書いたけど、めぐみたい立派じゃないけど就職決まったんだ。それで、一生懸命頑張ってお金貯めてめぐに会いに行こうと思ってた。でも、その必要なくなっちゃったんだな」

「そんなことないよ。約束は…約束だよ？」

「約束…か。」

「自分に自信がついたらその時は……」

「うん…私、誠二くんのこと信じて待ってるから」

「今までだってそう。誠二くんのことを信じてたからやってこれたんだ。」

「これからだって…」。

「今まで寂しかった。せめて夢でも会えないかなって思ってた。めぐとの約束があったから耐えられた。みんなにも助けてもらった。でも、もうこれからはめぐが居るんだよな？」

「そうだよ。私はもうどこにも行かないよ」

「戻って来たんだ。私の居場所に。」

「めぐ」

「ん？」

「おかえり」

誠二くん……。

「えへへ、ただいま」

もう離れない。

この笑顔から。

「ねえ誠二くん。就職先つてさ、隣町の黒岩町なんだよね？」

「そうだけど？」

帰ることが決まって、誠二くんからの手紙で就職が決まったことを知った時から考えていたことがあった。

それも、一つの夢。

「じ、じゃあさ、私の家に来ない？」

「ん、まあ、仕事の帰りには寄れると思うけど」

「ホント！？ つじやなくつて、よ、よかつたら一緒に住まないかなあ、なんて。ほら、一人だと広すぎるし、誠二くんも仕事通えるよね？」

「えっ……ええええ！？」

「そんなに驚かなくても……」

「だ、だつてさ……。い、いいの？」

「そしてらずつと一緒に居られるよ！」

「ふっ、ふつつか者ですがよろしく願います！」

「あははっ！なにそれー。私の真似？」

「い、いやいや、だつて。そんなの嬉し過ぎるよ！」

「今まで離れてた分まで、ずつと一緒に居よう？」

誠二くん……。

「めぐ……。オレたち、これからずつと一緒にだよな？」

「うん！もうどこにも行かない！誠二くんのそばにいるよ！」

「オレも……。もう二度と離さない！めぐ、大好きだ！」

「私も！誠二くん大好き！」

やっと会えた。

一度離れていたからこそわかる。

誠二くんという存在の大きさ。

今まで寂しかった分。

辛かった分。

会えて嬉しかった。

ただいま…。

誠二くん。

私のわがままでたくさん辛い思いをさせちゃったね。

これからケンカだつてするかもしれない。

辛いこともあるかもしれない。

だけど。

会えない辛さに比べたら。

そばに居てくれる。

その幸せの方が大きい。

遠回りしちゃったね。

でも、これからは。

あなたのそばですつと。

幸せを噛みしめ続けるから。

あなたに会えてよかった。

どうか。

幸せにしてね。

ううん。

二人で幸せになろうね。

誠二くん。

完

あなたのそばですつと（後書き）

前作から読んで頂いた方も、今作から読んで頂いた方も、最後まで目を通していただきありがとうございます。

前作から読んで頂いていることを前提として書いていたために、やや不親切な部分があったことをここにお詫び申し上げます。

一応、柳ヶ浦高校の三年間の誠二とめぐの恋物語はここで幕を閉じることになります。

主人公を変えての同じ物語。あの時の誠二は、あの時のめぐは、読み比べて頂けるとより深い物語になるんじゃないかなって勝手に思い込んでます。すいません。

さて、三部作ということでしたが、今回は再び出会った誠二とめぐのその後を少しだけ書かせていただこうと思っております。

『あなたのそばですつと』、『あなたのそばですつと』、*re ve r se*』があつてこそ次の作品だと思しますので、どうぞ次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576m/>

あなたのそばですっと～reverse～

2010年10月8日12時22分発行